

熊本県文化財調査報告書第194集

石の本遺跡群

第54回国民体育大会秋季主会場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査



2001.3

熊本県教育委員会

Copyright by Board of Education of Kumamoto Prefectural Office

石の本遺跡群

—熊本市平山町所在の縄文時代遺跡—



2001.3

熊本県教育委員会



PL. 1 遺跡遠景 1



PL. 2 遺跡遠景 2



PL. 3
36区遺物集中区



PL. 4
36区焼土坑 1 内遺物出土状況



PL. 5
36区焼土坑 1 完掘状況



PL. 6 36区出土遺物



PL. 7 16・36区出土遺物

序 文

本書は、第54回国民体育大会秋季主会場整備事業に先行して行った、熊本市平山町に所在する石の本遺跡群の発掘調査報告書第3冊目です。

遺跡は、託麻三山の一つである小山山の東麓に位置しています。この調査では、後期旧石器時代を始め、縄文時代から中世・近世にかけての各時代の遺構・遺物が大量に発見されました。ことに本書に報告している縄文時代早期の遺構、玦状耳飾の検出は、県内の縄文時代前半の生活を窺い知るうえで欠く事の出来ない資料と考えられます。

この報告書が、地域の歴史を学ぶ県民の皆様を始め多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心とご理解をより深めていただく一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査の円滑な実施に御理解と御協力をいただきました地元の託麻地区の方々、国体推進局、県土木部都市計画課、熊本土木事務所、総勢200余名の現場作業に参加して下さったの方々、並びに関係各機関に対して厚くお礼申し上げます。

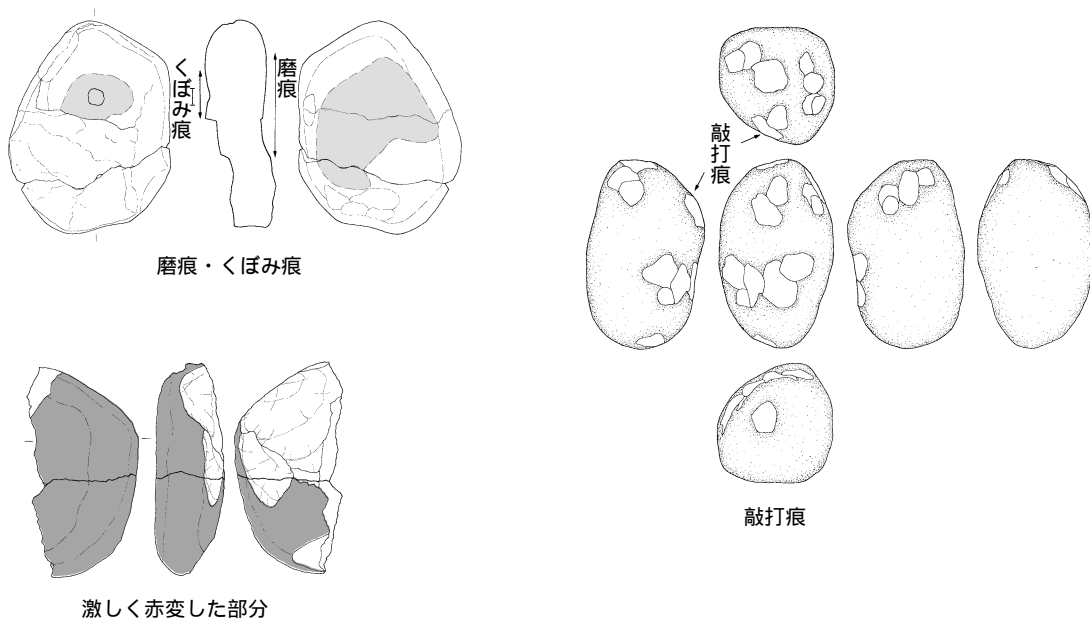
平成13年3月31日

熊本県教育長 田 中 力 男

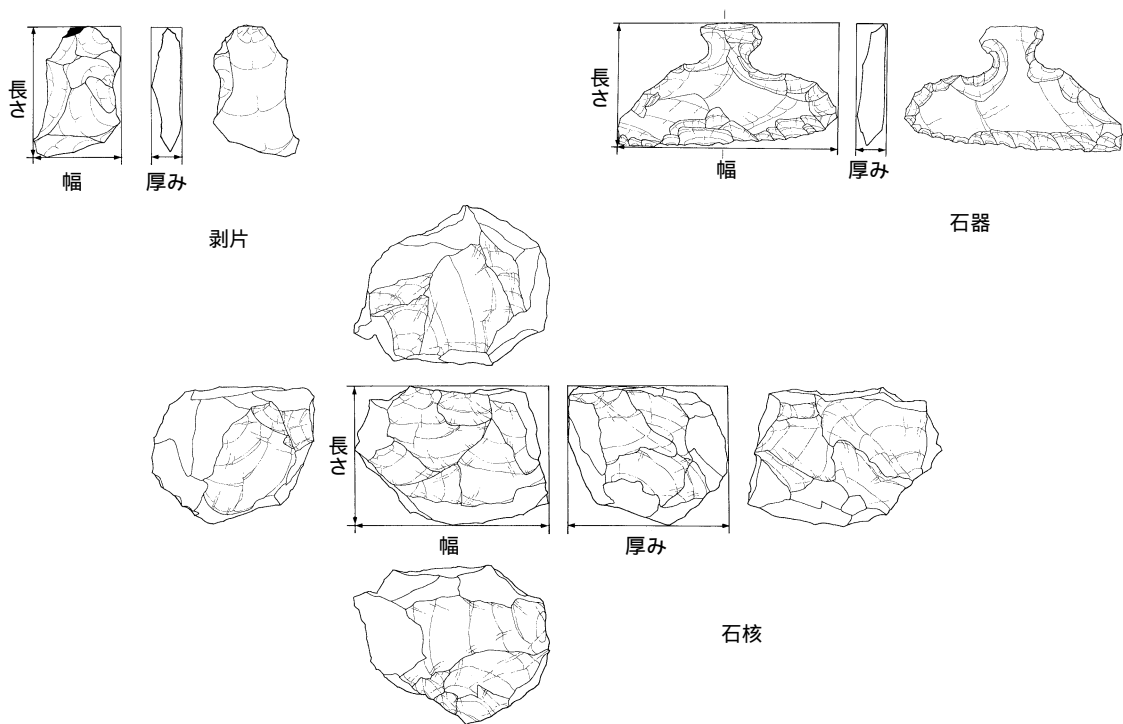
例 言

- 1 本書は、熊本県熊本市平山町字石の本等に所在している石の本遺跡群の調査報告書である。
- 2 遺跡名については、熊本市及び県の遺跡地図では「平山石の本遺跡」となっているが、実際は幾つかの字にまたがっており、また調査面積が広く複数の文化層が分散して存在し、ひとつの遺跡として捉え難いこと、調査開始当時から一貫して「石の本遺跡」という名称を用いており、大幅な名称の変更は混乱を招きかねないこと、さらに旧石器・縄文の各時代において複数の遺跡が確認されたことから、本書では敢えて「石の本遺跡群」という名称を用いている。
- 3 調査は、第54回国民体育大会秋季主会場整備事業（熊本県民総合運動公園拡張整備）に伴う事前調査として、熊本県土木部の依頼を受けて熊本県教育庁文化課が実施したもので、平成6年度から平成9年度までの4年間を費やした。
- 4 調査期間が複数年にわたっているため、石の本遺跡群の調査報告書は時代や調査区毎に分冊して刊行するものとする。各報告書の構成は以下のとおり

石の本遺跡群	弥生・古墳時代の調査成果（平成6～9年度）	既刊
石の本遺跡群	8区の旧石器時代の調査成果（平成6年度）	既刊
石の本遺跡群	旧石器時代・縄文時代早期・及び古代～近世までの調査成果（平成6～9年度）	本書
石の本遺跡群	54区・55区の旧石器時代の調査成果（平成8、9年度）	未刊
石の本遺跡群	縄文時代後～晩期の調査成果（平成6、7年度）	未刊
- 5 本書の執筆は、4章を（株）古環境研究所に委託し、それ以外を池田朋生が行った。
- 6 測量図、遺物取上作業の一部は、（株）埋蔵文化財サポートシステム熊本支店に委託した。
- 7 本書で用いている調査区位置図は、熊本土木事務所から提供された平面図を加筆・転用した。
- 8 遺物の実測は、中村幸弘、田中智宏、原口美希、前田佳代子、福島敬子、松本裕子、貞苅美津子、山田友子、渡辺いわ子が行い、池田が加筆・修正を行った。製図は原口美希、河原京子、佐藤淳子、濱崎清子が行い、各観察表は原口美希、森崎潔子が作成した。
- 9 遺構の写真撮影は各調査区担当者が行った。遺物の写真撮影は池田が行った。
- 10 本書に掲載した資料は、熊本県文化財収蔵庫で保管している。
- 11 本書の編集は、熊本県教育庁文化課で行い、池田が担当した。



礫の表現法



石器の計測方法

凡 例

- 1 調査区の割付けは、国土調査法施行令第2条及び別表1に規定する平面直角座標第一系における座標値 (X, Y) = (-18700, -19000) を起点とし、遺跡独自の座標値 (石の本座標値) を4級基準点を基に設定して行っている。なお座標値 (X, Y) と石の本座標値 (x, y) とは下記の計算式で変換される。

$$x = X + 18700$$

$$y = Y + 19000$$
- 2 本書で使用している方位は、座標軸を基準とした北を指している。
- 3 現地での土層図の実測は、20分の1の縮尺で行った。遺構中の攪乱坑は1点破線で表現し、遺構ラインを攪乱坑やトレンチ坑が切っている場合は点線で表現した。また炭化物はそのまま図示した。
- 4 遺物の実測は原寸で行い、報告書に掲載した実測図の縮尺は石器のうち敲石を3分の1、その他の石器を2分の1で統一した。
- 5 出土遺物の観察表については、実測図掲載資料には図版番号と注記番号をつけ、各頁に掲載している。さらに掲載分・未掲載分の資料を含めた全出土資料の観察表を巻末の出土遺物観察表に掲載している。
- 6 石器の欠損部分は黒く塗りつぶしてある。
- 7 石器観察表の計測は下記の方法による。単位はcm・gである。

本文目次

口絵 (カラー)	39・40区.....20
序文	50区.....32
例言・凡例	17区.....34
第1章 調査の契機と経過.....1	36区.....50
第2章 立地と構造.....2	5区.....80
第3章 調査とその成果.....8	13区.....84
第1節 調査方法.....8	その他包含層遺物.....96
第2節 基本層序.....9	第3項 中世・近世・近代の調査成果...104
第3節 調査結果の概要.....10	第4章 自然科学分析.....109
第4節 各調査区の成果.....11	第5章 考察・まとめ.....137
第1項 旧石器時代の調査成果.....11	第1節 36区 層検出の遺跡.....137
38区南.....11	第2節 石の本遺跡群の変遷.....144
39区.....12	第3節 石の本遺跡群周辺の層位.....153
50区.....12	観察表.....157
22区.....12	写真図版
20区.....13	8区付編.....1
その他調査区内遺物.....13	あとがき
第2項 縄文時代の調査成果.....20	報告書抄録

挿図目次

Fig. 1 縄文時代周辺関連遺跡分布図.....3	Fig. 25 17区土層図.....37
Fig. 2 石の本遺跡群調査区位置図及び割付図.....8	Fig. 26 17区炉穴実測図.....38
Fig. 3 38区南位置図及び出土遺物実測図.....14	Fig. 27 17区5号集石遺構実測図.....39
Fig. 4 38区南トレンチ土層図.....14	Fig. 28 17区SX - 08土坑実測図及び出土 類土器実測図...40
Fig. 5 22区 層地形図.....14	Fig. 29 17区出土 類土器実測図(1).....41
Fig. 6 22区出土後期旧石器時代石器実測図...15	Fig. 30 17区出土 類土器実測図(2).....42
Fig. 7 後期旧石器時代石器実測図(1).....16	Fig. 31 13・17区出土 類土器実測図.....43
Fig. 8 後期旧石器時代石器実測図(2).....17	Fig. 32 17区縄文時代早期土器出土分布図.....44
Fig. 9 40区 層遺構配置図.....18	Fig. 33 17区 類土器 (57) 出土状況図.....45
Fig. 10 39区 層遺構配置図.....19	Fig. 34 17区出土石器実測図(1).....46
Fig. 11 39区集石遺構実測図(1).....21	Fig. 35 17区出土石器実測図(2).....47
Fig. 12 39区集石遺構実測図(2).....22	Fig. 36 17区石器等量線図.....48
Fig. 13 39区集石遺構実測図(3).....23	Fig. 37 17区礫群等量線図.....49
Fig. 14 39区集石遺構実測図(4).....24	Fig. 38 36区 層遺構配置図.....51
Fig. 15 39区集石遺構実測図(5).....25	Fig. 39 36区土層図.....52
Fig. 16 40区SX - 01集石遺構実測図.....25	Fig. 40 36区 層出土遺物分布図.....53
Fig. 17 39・40区出土 類土器実測図.....27	Fig. 41 36区集石実測図(1).....54
Fig. 18 40区出土 類土器実測図.....28	Fig. 42 36区集石実測図(2).....55
Fig. 19 39・40区出土石器実測図(1).....29	Fig. 43 36区集石実測図(3).....56
Fig. 20 39・40区出土石器実測図(2).....30	Fig. 44 36区集石実測図(4).....57
Fig. 21 50区 層遺構配置図.....31	Fig. 45 36区集石実測図(5).....58
Fig. 22 50区集石遺構実測図.....33	Fig. 46 36区 層集石分布図.....59
Fig. 23 50区出土石器実測図.....34	Fig. 47 36区焼土坑 1 実測図.....60
Fig. 24 17区 層遺構配置図.....35	Fig. 48 焼土坑 1 床面出土 類土器実測図.....60

Fig.49	36区焼土坑 2 実測図	61	Fig.77	13区出土 類土器及び11区出土石器実測図	94
Fig.50	36区出土 類土器実測図	62	Fig.78	13区出土石器実測図	95
Fig.51	36区 類土器出土分布図	63	Fig.79	・ 類土器実測図	97
Fig.52	36区出土 類土器実測図(1)	64	Fig.80	・ 類土器実測図	98
Fig.53	36区出土 類土器実測図(2)	65	Fig.81	類土器実測図	99
Fig.54	36区 層 類土器出土分布図	66	Fig.82	・ 類土器実測図	100
Fig.55	36区 層 類土器個別別出土状況図	67	Fig.83	・ 類土器実測図	101
Fig.56	36区出土石器実測図(1)	69	Fig.84	・ ・ XI類土器実測図	102
Fig.57	36区出土石器実測図(2)	70	Fig.85	XII類土器及び塊状耳飾り・勾玉実測図	103
Fig.58	36区出土石器実測図(3)	71	Fig.86	41・42区 層遺構配置図及び 42区SX - 50近世墓実測図	105
Fig.59	36区出土石器実測図(4)	72	Fig.87	41区SX - 01地下式墳実測図	106
Fig.60	36区出土石器実測図(5)	73	Fig.88	54区近代溝配置図	107
Fig.61	36区出土石器実測図(6)	74	Fig.89	54区近代溝土層図	108
Fig.62	36区出土石器実測図(7)	75	Fig.90	36区 層角礫出土分布図	139
Fig.63	36区出土石器実測図(8)	76	Fig.91	36区 層主要遺構・遺物分布図(1)	140
Fig.64	36区出土石器実測図(9)	77	Fig.92	36区 層主要遺構・遺物分布図(2)	141
Fig.65	5区 層遺構配置図	79	Fig.93	石の本遺跡群 層地形推定図	143
Fig.66	5区土層柱状図及びSX - 01土坑実測図	80	Fig.94	17区周辺 層地形図	145
Fig.67	5区出土 類土器実測図(1)	81	Fig.95	類土器出土範囲図	146
Fig.68	5区出土 類土器実測図(2)	82	Fig.96	類土器出土範囲図	147
Fig.69	10・11・13区 層遺構配置図	85	Fig.97	類土器出土範囲図	148
Fig.70	13区土層図及びSX - 01土坑実測図	86	Fig.98	類土器出土範囲図	149
Fig.71	13区遺構実測図(1)	87	Fig.99	類土器出土範囲図	150
Fig.72	13区遺構実測図(2)	88	Fig.100	・ 類土器出土範囲図	151
Fig.73	11・13区出土 類土器実測図(1)	89	Fig.101	縄文時代後期後半～晩期前半遺構範囲図	152
Fig.74	11・13区出土 類土器実測図(2)	90	Fig.102	対比土層柱状図	154
Fig.75	10・11・13区出土 類土器実測図(1)	91			
Fig.76	10・11・13区出土 類土器実測図(2)	93			

付 表 目 次

Tab. 1	石の本遺跡群周辺遺跡一覧(1)	4	Tab.12	36区集石観察表(1)	163
Tab. 2	石の本遺跡群周辺遺跡一覧(2)	5	Tab.13	36区集石観察表(2)	164
Tab. 3	石の本遺跡群周辺遺跡一覧(3)	6	Tab.14	36区集石観察表(3)	165
Tab. 4	石の本遺跡群周辺遺跡一覧(4)	7	Tab.15	36区集石観察表(4)	166
Tab. 5	焼土坑 1 内出土遺物一覧	60	Tab.16	17区観察表(1)	167
Tab. 6	土器観察表(1)	157	Tab.17	17区観察表(2)	168
Tab. 7	土器観察表(2)	158	Tab.18	17区観察表(3)	169
Tab. 8	土器観察表(3)	159	Tab.19	36区観察表(1)	170
Tab. 9	石器観察表(1)	160	Tab.20	36区観察表(2)	171
Tab.10	石器観察表(2)	161	Tab.21	36区観察表(3)	172
Tab.11	遺構観察表	162	Tab.22	36区観察表(4)	173

写 真 目 次

PL. 1	遺跡遠景 1		PL. 4	36区焼土坑 1 内遺物出土状況	
PL. 2	遺跡遠景 2		PL. 5	36区焼土坑 1 完掘状況	
PL. 3	36区遺物集中区		PL. 6	36区出土遺物	

PL.7	16・36区出土遺物	PL.43	旧石器 2
PL.8	遺跡遠景 3	PL.44	旧石器 3
PL.9	遺跡遠景 4	PL.45	40区 類土器 1
PL.10	20区遺物出土状況	PL.46	40区 類土器 2
PL.11	22区東壁 1 (北から)	PL.47	39・40区石器
PL.12	22区東壁 2 (北から)	PL.48	39区集石
PL.13	50区遺物出土状況	PL.49	17区 類土器
PL.14	50区東壁 (北 南)	PL.50	17区石器
PL.15	安山岩露頭状況 1	PL.51	50・17区石器
PL.16	安山岩露頭状況 2	PL.52	17区集石
PL.17	30区土層遠景 1	PL.53	36区 類土器 1
PL.18	30区土層遠景 2	PL.54	36区 類土器 2
PL.19	39区調査区遠景	PL.55	36区石器
PL.20	39区調査区近景	PL.56	36区集石 1
PL.21	39区北側セクション	PL.57	36区集石 2
PL.22	39区集石遺構検出状況	PL.58	5区焼成粘土塊
PL.23	39区SX - 26検出状況	PL.59	10・11・13区 類土器
PL.24	39区SX - 26	PL.60	類土器底部
PL.25	36区調査区遠景	PL.61	11・13区 類土器
PL.26	36区調査区近景	PL.62	11・13区石器
PL.27	36区遺構検出状況	PL.63	11区 類土器
PL.28	36区焼土坑 1 検出状況	PL.64	11・13区 類土器
PL.29	36区焼土坑 1 完掘状況	PL.65	10・11・13・32区 類土器
PL.30	36区東壁セクション	PL.66	13区 類土器
PL.31	17区調査区遠景	PL.67	類土器 1
PL.32	17区調査区近景 1	PL.68	類土器 2
PL.33	17区調査区近景 2	PL.69	類土器 3
PL.34	17区SX - 04	PL.70	17区 類土器
PL.35	17区SX - 05断面	PL.71	67区 類土器
PL.36	17区SX - 05完掘状況	PL.72	・ 類土器
PL.37	5区調査区遠景	PL.73	類土器 1
PL.38	5区調査区近景	PL.74	類土器 2
PL.39	5区SX - 01	PL.75	・ 類土器
PL.40	36・5・13・17区土器	PL.76	類土器 1
PL.41	36・25・30区土器	PL.77	類土器 2
PL.42	旧石器 1	PL.78	XI・XII類土

8区付論 挿図目次

Fig. 1	8区出土石器実測図(1)	2	Fig. 6	8区出土石器実測図(6)	7
Fig. 2	8区出土石器実測図(2)	3	Fig. 7	8区出土石器実測図(7)	8
Fig. 3	8区出土石器実測図(3)	4	Fig. 8	8区出土石器実測図(8)	9
Fig. 4	8区出土石器実測図(4)	5	Fig. 9	8区出土石器実測図(9).....	10
Fig. 5	8区出土石器実測図(5)	6	Fig.10	8区出土石器実測図(10).....	11

8区付論 付表目次

Tab. 1	8区石器観察表	12
--------	---------------	----

第1章 調査の契機と経過

調査に至る経緯は石の本遺跡群 ・ を参照されたい。

当初、2ヵ年で行う予定であったが、7年度までに用地買収が完了しなかった所があり、54・55区を中心に旧石器時代や古墳時代の遺構・遺物が非常に多く出土したため、調査が続けられた。最終的には、平成9年度で調査が終了した。平成8年度からは報告書作成のための整理作業も進めており平成10年度から報告書を分割して刊行していくことになった。

石の本遺跡調査実施表

年度 (平成)	試掘 調査	発掘調査 面積 (㎡)	調査区	主要な遺構	主要な遺物	整理・報 告書作成	備 考
5					縄文土器片		遺跡確認 調査体制備
6		38,996	1～24 58, 64	旧石器(8区) 縄文時代住居跡	台形石器・削器 埋甕		新規採用 職員4名
7		69,295	25～71	縄文時代住居跡 古墳	埋甕・玦状耳飾 土師器高杯		新規採用 職員3名
8		21,566	51～62 47	縄文時代焼土 古墳時代住居跡	押型文土器 土師器・須恵器		調査組織 縮小
9		5,792	54～56	旧石器時代集石遺構	局部磨製石斧		
年度 (平成)	整理担当	調査区	刊 行 報 告 書	報告した時代	整 理 内 容	中心的な作業	
10	廣田 池田 中村	全域	石の本遺跡群 石の本遺跡群	弥生・古墳 旧石器	水洗い 注記 報告書	8区 1区・54区の 古墳時代	
11	廣田 池田 中村	全域	石の本遺跡群	縄文早期	報告書	54・55区 縄文早期 縄文後～晩期	
12	廣田 中村	54・55区 全域	石の本遺跡群 石の本遺跡群	旧石器 縄文晩期	報告書	54・55区 縄文後～晩期	

調 査 組 織

石の本遺跡群 ・ 参照

専門調査員 賀川光夫 (大分県考古学会長)、三島格 (肥後考古学会長)、橘昌信 (別府大学文学部教授)、戸沢充則 (明治大学文学部教授)、甲元真之 (熊本大学文学部教授)、松藤和人 (同志社大学文学部助教授)、佐藤宏之 (東京都埋蔵文化財センター主任研究員)、長谷義隆 (熊本大学理学部教授)、綿貫俊一 (大分県教育委員会) (順不同・敬称略)

調査協力者 坪井清足 (財団法人大阪府文化財調査研究センター理事長)、清田純一 (城南町教育委員会)、小畑弘巳 (熊本大学文学部助教授)、萩原博文 (平戸市教育委員会)、村上恭通 (愛媛大学文学部助教授)、高木恭二 (宇土市教育委員会)、清水和 (財団法人大阪市文化財協会)、上敷領久 (国分市教育委員会)、須藤隆志 (佐久市教育委員会)、堤隆 (御代田町教育委員会)、宮井栄一、金子直行、塩野博 (埼玉県埋蔵文化財調査事業団)、高橋信武 (大分県教育委員会)、水ノ江和同 (福岡県九州国立博物館対策室)、古門雅孝 (長崎県教育委員会)、今田秀樹 (天瀬町教育委員会)、栗畑光博 (都城市教育委員会)、黒川忠弘 (鹿児島県教育委員会)、犬飼徹夫、福岡大学文学部考古学研究室、熊本大学考古学研究室、愛媛大学考古学研究室、九州旧石器文化研究会、福岡旧石器文化研究会、熊本市教育委員会、菊陽町教育委員会 (順不同・敬称略)

第2章 立地と構造

石の本遺跡群の自然環境は、石の本遺跡群 ・ を参照されたい。ここでは本報告に関連する周辺遺跡について触れる。

熊本市周辺の縄文時代遺跡の調査例は質・量ともに多く、県内を代表する密集地域で、学史上著名な遺跡も数多い。菊池郡泗水町三万田東原遺跡に続く、県内2番目の住居跡の本格的な調査例となった、熊本市健軍上ノ原遺跡（報告書刊行としては最初）をはじめ、上南部遺跡、庵ノ前遺跡など縄文の集落を考えるうえで貴重な遺跡もよく知られているところである。また、同市鳥居原、北久根山、太郎迫、上益城郡益城町の各遺跡など、標式遺跡も数多い。

Fig. 1 は、石の本遺跡群周辺の縄文時代の遺跡を掲載している。阿蘇外輪山から熊本平野へ流れる白川流域には、遺物包含層からの出土例を含め、281遺跡存在する。

遺跡の多くは、縄文時代後期～晩期の磨消縄文土器様式・黒色磨研土器様式の時期である。集落遺跡・貝塚・遺物包含層ともにこの時期に該当する遺跡が最も多い。土偶・埴輪といった熊本の縄文文化を特徴づける各種の遺構・遺物を伴っている。この時期の遺構が検出されている遺跡は、託麻台地にその多くが存在する。特に白川の河岸段丘上など河川流域に遺跡が集中するといった傾向は認められない。台地のかなり奥まったところにもその分布がみられる。但し熊本平野は、元々地下水資源の豊富なところであり、台地の奥でも泉の湧くところが多く存在する。白川は支流がほとんど存在しない、断層の上を流れる河川と考えられている。白川左岸の託麻台地下の地下水脈の流れは、白川よりもさらに南の緑川に向かって流れている。

一方、縄文時代後期～晩期を除く他の時期の状況を見ると、縄文時代早期を除いて、その生活を示す様相は具体性に乏しい。理由の一つは遺跡数そのものが少ないということ、さらに検出された遺跡でも遺物包含層のみの遺跡が多く、遺構を伴わないことである。特に縄文時代前期・中期、晩期の刻目突帯文土器様式の時期は、県下でも事例が少ない。縄文時代前期の遺構が検出された遺跡としては、託麻台地末端の沖積層の調査例で、熊本市国分寺遺跡の曾畑式期の墓坑など数少ない。縄文時代中期の遺構が検出された遺跡は白川流域周辺では皆無と言ってよく、縄文時代晩期の刻目突帯文期の遺構は、熊本市五丁中原遺跡の住居跡など、少数である。

石の本遺跡群の周辺で縄文時代早期の遺跡では、県内で最初の住居跡の報告となった庵ノ前遺跡をはじめ、大型配石遺構、炉穴を検出した菊池郡大津町瀬田裏遺跡などが知られる。最近の調査では、庵ノ前遺跡が存在する龍田山麓に炉穴・集石遺構など早期の遺跡が検出されている。庵ノ前遺跡・瀬田裏遺跡に代表されるように、縄文時代早期の遺跡は丘陵上よりやや標高の高い、山麓で多く検出されている。しかしながら、上益城郡嘉島町櫛島遺跡のように、沖積地に程近い低丘陵上でも遺跡の存在が確認されている。

石の本遺跡群で検出された、方形に近い焼土坑や集石遺構・炉穴は、これまでの熊本県下の縄文時代早期の遺跡で、特徴づける資料として報告されている。

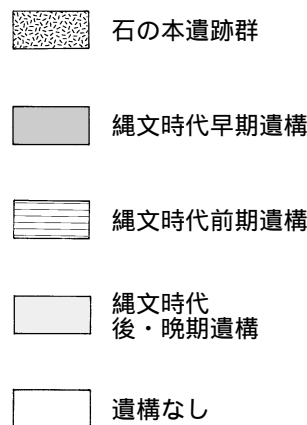


Fig. 1 の説明

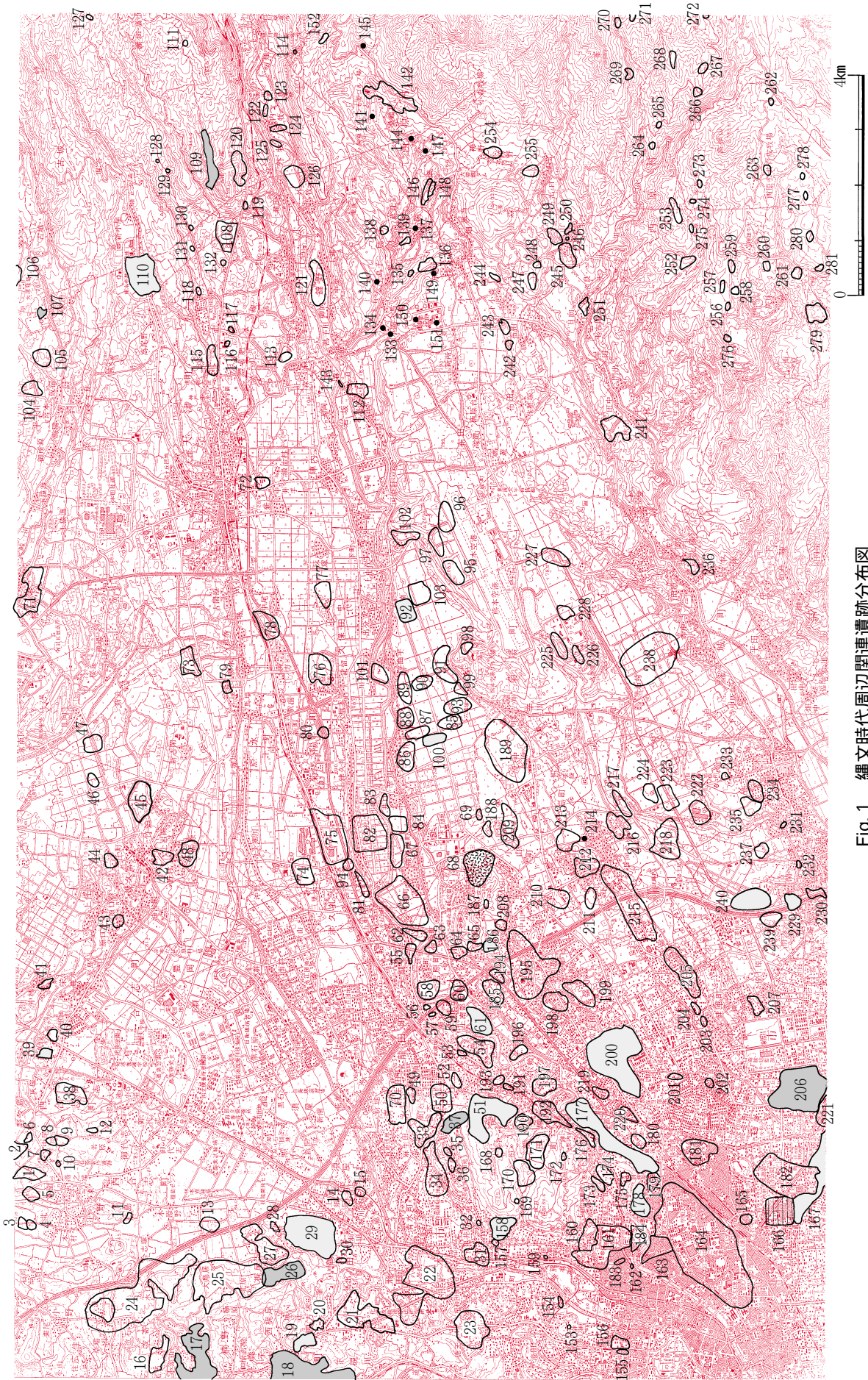


Fig. 1 縄文時代周辺関連遺跡分布図

番号	遺跡名	所在地	時代	種別	備考
1	沖田	野々島 沖田	縄文・他	包蔵地	丸木舟、御領式・野辺田式・土師器・石器
2	黒松岡原	合生 黒松	縄文	集落	表面に土器細片散布・石斧出土
3	アミダメ	野々島 古閑・前田	縄文～古代	包蔵地	
4	延寿寺	野々島 古閑	縄文～古代	包蔵地	
5	巡畑	野々島 巡畑	縄文～古代	包蔵地	
6	中尾	野々島 天神島・中尾原	縄文～古墳	包蔵地	縄文・弥生・古墳期土器片
7	八反畑	野々島 八反畑	縄文～弥生	包蔵地	縄文～弥生土器、中央小校庭
8	枇杷田	野々島 中原・枇杷田	縄文	包蔵地	縄文早期
9	西合志中学校敷地	野々島 東原	縄文・古墳	包蔵地	御領式土器・古式勾玉・野辺田式・須恵器
10	二子山石器製作	野々島 天神免	縄文	包蔵地	石器各種・原石
11	丸の内	野々島 丸の内	縄文	包蔵地	
12	中野	野々島 中野	縄文	包蔵地	
13	木原野A・B	野々島 木原野	縄文	包蔵地	石鏃
14	梨の木	須屋 梨の木	縄文	包蔵地	
15	向島	須屋 向島	縄文	包蔵地	
16	宝出原	改寄町	縄文～中世	包蔵地	
17	小糸山遺跡群	小糸山町居屋敷	縄文～中世	包蔵地	縄文後期土器、縄目丘痕土器など、西南戦争官軍墓地
18	硯川遺跡群	硯川・下硯川町	縄文～平安	包蔵地	板碑(大永4年銘)、窯跡(平安期?) 2基以上
19	四方寄	四方寄町	縄文	包蔵地	縄文後晩大集落、調査あり
20	四方寄御馬下	四方寄町御馬下	縄文	包蔵地	
21	飛田遺跡群	飛田町塔の木など	縄文～古墳	包蔵地	葉山古墳調査報告書あり
22	清水町遺跡群	清水町山室など	縄文～古墳	包蔵地	植山墓群、山室墓群・土師器、八景水谷縄文前後晩・甕棺
23	徳王	徳王町ほか	縄文～平安	包蔵地	縄文後期、弥生内行花文鏡出土
24	立石遺跡群	改寄町	縄文～平安	包蔵地	
25	大鳥居遺跡群	大鳥居町	縄文～中世	包蔵地	
26	梶尾遺跡群	梶尾町中尾原	弥生	包蔵地	弥生中期～後期の土器、大明神甕棺群
27	梶尾古閑原・古屋敷	梶尾町古閑原など	縄～中世	包蔵地	
28	梶尾立野	梶尾町立野	縄～中世	包蔵地	
29	鶴羽田(鶴ノ原・垣ノ外)	鶴羽田町	縄文～古墳	包蔵地	縄文後晩期土器、先端を失った銅戈工事中に出土
30	山際畑	鶴羽田町	縄～中世	包蔵地	
31	亀井遺跡群	清水町亀井	縄文～中世	包蔵地	城は現光照寺内、板碑天文2年銘
32	万石昭和団地前	清水町万石	縄～中世	包蔵地	
33	榆木	清水町榆の木	縄文・弥生	包蔵地	縄文早・前・後・晩、甕棺群
34	岩倉山中腹	清水町兎谷	縄～中世	包蔵地	
35	岩倉山山頂	清水町兎谷	縄～中世	包蔵地	
36	岩倉山	清水町兎谷			
37	庵ノ前	清水町兎谷	旧石器・縄文	包蔵地	早期住居跡3基、県報告書あり
38	笹山	御代志(通称大池)	縄文	包蔵地	縄文条痕文土器・石匙出土
39	小合志原	合生 辻久保・小合志原	縄文	包蔵地	縄文後期
40	辻久保	合生 辻久保	縄文	包蔵地	縄文後期
41	中林	栄(通称中林)	縄文	包蔵地	御領式土器
42	野付	福原 野付	縄文・他	包蔵地	押型文、黒髪式甕棺
43	小園	豊岡 小園	縄文～弥生	包蔵地	御領式、石器・弥生土器
44	御手洗	幾久富 御手洗	縄文・他	包蔵地	縄文後期・土師器・御手洗式
45	桑鶴	竹迫 福原	縄文・弥生	包蔵地	昭50年圃場整備、盛土で残す
46	八久保	竹迫(通称八久保)	縄文	包蔵地	阿高式・御領式
47	竹迫宇土	竹迫 宇土	縄文	包蔵地	三万田式
48	御領	竹迫 福原	縄文・他	包蔵地	土偶・御領式土器
49	楠	龍田町	縄～中世	包蔵地	
50	堂ノ前遺跡群	清水町榆木・堂の前	旧～中世	包蔵地	
51	迫ノ上遺跡群	龍田町陣内など	縄文～平安	包蔵地	堂の前窯跡は平安期か?
52	菅鶴	清水町榆木一町鶴	縄～中世	包蔵地	
53	吉ノ平	龍田町上立田	縄～中世	包蔵地	
54	竹ノ後・芭蕉遺跡群	竜田町上立田竹の後	縄文～平安	包蔵地	竹の後縄文後期土器・合口甕棺・土偶
55	弓削前畑	龍田町弓削小坂屋敷	縄～中世	包蔵地	
56	弓削平ノ下A	龍田町弓削平の下	縄～中世	包蔵地	
57	弓削平ノ下B	龍田町弓削平の下	縄～中世	包蔵地	
58	吉原	吉原町殿田	縄文～平安	包蔵地	縄文後晩期(南福寺・中津)、弥生後期、奈良平安在銘土器
59	片彦瀬	龍田町弓削片彦瀬	縄文	包蔵地	
60	北上遺跡群	石原町平	縄文・古代	包蔵地	縄文晩期土器、布目瓦
61	上南部	上南部町村下	縄文	包蔵地	縄文前期・後期・晩期・後晩期集落発掘調査、市報告書あり
62	法王鶴	龍田町	縄文・弥生	包蔵地	
63	石原町	石原町	縄～中世	包蔵地	
64	石原瀬々井	石原町瀬々井	縄文	包蔵地	縄文晩期
65	神園桜井	長嶺町	縄～中世	包蔵地	
66	託麻弓削遺跡群	弓削町	縄文	包蔵地	縄文前期・後期・晩期
67	鹿帰瀬	鹿帰瀬町西原	縄文・弥生	包蔵地	県調査あり
68	平山石ノ本	平山町	旧石器～縄文	集落	国体会場、県調査報告書あり
69	御船塚東	平山町	縄文～古代	包蔵地	
70	麻生田	麻生田町	縄文～平安	包蔵地	
71	杉水上ノ原矢鉾	杉水 上ノ原・矢鉾	縄文・弥生	埋葬	甕棺墓、支石墓、縄文、弥生土器・土師・須恵
72	大津	大津 大津	縄文	包蔵地	大石鏃・石槍・土師器片少数、大津高校グラウンド
73	原水大人足	原水 大人足	縄文～古代	包蔵地	

Tab. 1 石の本遺跡群周辺遺跡一覧(1)

番号	遺跡名	所在地	時代	種別	備考
74	上沖野	原水 上沖野	縄文	包蔵地	
75	駄飼代	津久礼 駄飼代	縄文	包蔵地	
76	久保田中原	久保田 中原	縄文・弥生	包蔵地	
77	楠ノ木	久保田 楠ノ木	縄文・古代	包蔵地	越 白磁
78	南方上	原水 南方上	縄文～中世	包蔵地	
79	柳水	原水 柳水	縄文～中世	包蔵地	
80	原水南上原	原水 上原	縄文～中世	包蔵地	
81	今石	津久礼 今石	縄文～中世	包蔵地	
82	津久礼六地藏	津久礼 梅木	縄文・弥生	包蔵地	
83	井口下鶴	辛川 下鶴	縄文・弥生	包蔵地	
84	久保	辛川 久保	縄文・弥生	包蔵地	
85	上山立窪	辛川 上山立窪	縄文	包蔵地	
86	中屋敷	辛川 中屋敷	縄文	包蔵地	
87	東弁指	辛川 東弁指	縄文	包蔵地	
88	池ノ窪	辛川 池ノ窪	縄文	包蔵地	
89	辛川東原	辛川 東原ほか	縄文・古墳	包蔵地	
90	曲手中原	曲手 中原	縄文～古代	包蔵地	
91	狸坂 A B C	曲手 部田	縄文	包蔵地	縄文後期遺物散布
92	六地藏	馬場楠	縄文	包蔵地	
93	塚原	辛川 塚原	縄文～古墳	包蔵地	
94	広街道	津久礼	縄文早期	包蔵地	
95	豊秋	戸次	縄文	包蔵地	
96	坂の下		縄文～中世	包蔵地	
97	中原	戸次	縄文	包蔵地	
98	山ノ上	戸次	縄文	包蔵地	
99	部田	曲手 部田	縄文	包蔵地	縄文後期
100	上中原	辛川	縄文	包蔵地	縄文後期
101	西鶴	曲手	縄文・弥生	包蔵地	
102	年の神	戸次	縄文	包蔵地	
103	水溜	戸次	縄文	包蔵地	
104	ナギナタ	平川 (通称ナギナタ)	縄文	包蔵地	条痕文、御領式・野辺田式
105	水の山	矢護川 水ノ山	縄文	包蔵地	押型文、御領式・黒髪式・野辺田式、支石墓
106	真木	真木	縄文	包蔵地	銅戈2本、国立博物館買上げ
107	中後迫	中後迫	縄文	包蔵地	押型文、塞の神式
108	瀬田雨留尾	瀬田	縄文～古墳	包蔵地	寺跡・(屋敷跡)
109	瀬田裏	瀬田 長袖ほか	縄文・古墳	包蔵地	
110	八窪	高尾野 高尾野	古墳	包蔵地	野辺田式土器包含
111	瀬田裏 E 地点	瀬田 瀬田裏	縄文	包蔵地	
112	岩坂	岩坂	縄文	包蔵地	押型文土器
113	森	森 榎迫	縄文	包蔵地	御領式
114	岩戸神社岩かげ	外牧 畑鶴	縄文	包蔵地	岩陰遺跡
115	吹田 A	吹田	縄文	包蔵地	土器片、石鏃など
116	吹田 B	吹田	縄文	包蔵地	土器片、石鏃など
117	吹田 C	吹田	縄文	包蔵地	土器片、石鏃など
118	吹田 D	吹田	縄文	包蔵地	土器片、石鏃など
119	瀬田裏 A	瀬田	縄文	包蔵地	土器片、石鏃など
120	瀬田裏 B	瀬田	縄文	包蔵地	土器片、石鏃など
121	錦野	錦野 上掲	縄文～古墳	包蔵地	集落 県調査
122	大鶴 A	外牧 大鶴	縄文	包蔵地	集落 県調査
123	大鶴 B	外牧 大鶴	縄文	包蔵地	集落 県調査
124	前畑	外牧 前畑	縄文	包蔵地	内牧遺跡 A
125	内牧 B	外牧	縄文	包蔵地	
126	外牧	外牧	縄文・弥生	包蔵地	集落 県調査
127	瀬田裏 H	瀬田	縄文	包蔵地	土器
128	瀬田裏 G	瀬田	縄文・古代	包蔵地	土器片、石鏃など
129	瀬田裏 F	瀬田	縄文・古代	包蔵地	土器
130	瀬田裏 D	瀬田	縄文	包蔵地	土器片、石鏃など
131	瀬田裏 C	瀬田	縄文	包蔵地	土器片、石鏃など
132	吹田 E	吹田	縄文	包蔵地	土器片、石鏃など
133	小園	鳥子 持矢倉	縄文～古代	包蔵地	石器、須恵器
134	皆元	鳥子 皆元	縄文	包蔵地	縄文晩期土器・石器
135	襟の平	鳥子 襟の平	縄文・弥生	包蔵地	縄文後晩期土器・弥生土器・土師器
136	桃の木原	鳥子 桃の木原	縄文	包蔵地	縄文早・晩期土器、土師器
137	古閑	鳥子 古閑	縄文	包蔵地	縄文早・晩期土器、土師器
138	葛目	鳥子 上葛目	縄文・弥生	包蔵地	縄文早期・弥生後期土器、土師器
139	古閑向	鳥子 古閑向	縄文	包蔵地	
140	鳥子陣の上	鳥子 陣ノ上	縄文	包蔵地	
141	桑鶴古屋敷	小森 桑鶴	縄文～古墳	包蔵地	縄文・弥生・古墳期土器出土
142	桑鶴扇坂の口 (桑鶴古池サン)	小森 桑鶴	縄文・弥生	包蔵地	縄文・弥生
143	日南為	鳥子 日南為	縄文～古代	包蔵地	
144	桑鶴土橋	小森 桑鶴土橋	縄文・弥生	包蔵地	縄文・弥生土器、土師器
145	丸林	小森 桑鶴	縄文～古代	包蔵地	

Tab. 2 石の本遺跡群周辺遺跡一覧(2)

番号	遺跡名	所在地	時代	種別	備考
146	後迫	小森 後迫	縄文・弥生	包蔵地	縄文早期・弥生後期、土師器
147	揺が池西側台地	小森 桑鶴	縄文・弥生	包蔵地	縄文後晩期・弥生後晩期土器
148	先ノ原	小森 大切畑藪	縄文～中世	包蔵地	
149	風森	小森	縄文～中世	包蔵地	
150	新所車上の原	小森	縄文～中世	包蔵地	
151	涼み塚	小森	縄文～中世	包蔵地	
152	扇ノ坂 A	桑鶴	旧石器～縄文	包蔵地	土器片・剥片・石核採集
153	舟場	清水町津浦	縄文～中世	包蔵地	
154	打越貝塚	清水町打越	縄文	包蔵地	北久根山式 貝塚
155	京町 2 丁目	京町 2 丁目	縄文～近世	包蔵地	
156	伝大道寺遺跡群	京町 2 丁目	縄文～近世	包蔵地	伝大道寺跡を含む
157	古閑前	清水町亀井	縄文～中世	包蔵地	旧石器
158	清水町谷口	清水町万石	旧石器～平安	包蔵地	県調査あり
159	室園	清水町室園	縄文～中世	包蔵地	
160	小峰	黒髪町小峰	縄文～平安	包蔵地	
161	黒髪町遺跡群	黒髪町坪井	縄文～中世	包蔵地	一帯に甕棺墓群
162	子飼	子飼町	縄文～中世	包蔵地	
163	大江白川	大江 1 丁目	縄文～平安	包蔵地	甕棺
164	大江遺跡群	大江 3 丁目	縄文～明治	包蔵地	
165	西水前寺町	水前寺 1 丁目	縄文～中世	包蔵地	
166	国分寺跡	出水 1 丁目	縄文～中世	包蔵地	県・市による多数の調査あり
167	江津湖遺跡群	神水町、画図町ほか	縄文～中世	包蔵地	
168	天拝山	清水町楡木	旧石器～弥生	包蔵地	石槍、須玖式甕棺群
169	万石乗越	清水町万石	縄～古代	包蔵地	
170	万石茶山	清水町万石	縄文・弥生	包蔵地	夜臼式土器
171	秣野	龍田町上立田	縄文～平安	包蔵地	
172	宇留毛浦山市営墓地	黒髪町 7 丁目	縄文～平安	墓地	
173	カプト山	黒髪町宇留毛字甲山	縄文	包蔵地	早期、轟 B、北久根山、黒川、山の寺
174	宇留毛 A	黒髪町 6 丁目	縄文	包蔵地	
175	宇留毛 B	黒髪町 6 丁目	縄文～平安	包蔵地	
176	竜田口	龍田町女瀬、黒髪 7 丁目	縄文～平安	包蔵地	
177	新南部遺跡群	新南部町	旧石器～平安	包蔵地	県北バイパス調査、市マンション調査、田辺昭三調査などあり
178	渡鹿遺跡群	渡鹿 5 丁目	縄文・弥生	包蔵地	渡鹿貝塚阿高・鐘ヶ崎式、北原須玖式甕棺、板碑形遺像天文16年銘
179	辻	渡鹿 7 丁目	縄文～平安	包蔵地	縄文後晩期、へら描き土器・墨書土器
180	新南部西原	新南部町	縄文～平安	集落	
181	帯山遺跡群	帯山 1 丁目	縄文～平安	包蔵地	布目瓦、曾畑、阿高、竹崎
182	神水	神水本町・出水 2 丁目	縄文～平安	包蔵地	県・市調査、報告書あり
183	七軒町	七軒町	縄文～中世	包蔵地	
184	上河原	黒髪町	縄文～古代	包蔵地	
185	供合松ノ上	上南部町	縄～中世	包蔵地	
186	神園田淵屋敷	小山町、長嶺町	平安～中世	包蔵地	
187	小山上の山	小山町	縄～中世	包蔵地	
188	御船塚山	平山町	縄～古代	包蔵地	
189	中原道明	小山町	縄文	包蔵地	縄文早期、後晩期
190	陳内上ノ園遺跡群	龍田町上立田	縄文～古墳	包蔵地	御手洗 A 式、押型文、須玖式甕棺、方形周溝墓
191	三の宮（牧鶴宮脇）	龍田町上立田	縄文	包蔵地	
192	竜田陳内遺跡群	龍田町陳内	旧石器～中世	包蔵地	曾畑式土器、県報告あり
193	堂前畠	龍田町	縄文～平安	包蔵地	
194	神園	長嶺町上西原	縄文～平安	包蔵地	
195	長嶺遺跡群	長嶺町	縄文～平安	包蔵地	石神碑天文18年銘
196	王田	上南部町王田	縄文～平安	包蔵地	黒髪式合口甕棺
197	下南部	下南部町下山	縄文～古墳	包蔵地	須玖式甕棺
198	南小迫	御領町	縄文～平安	包蔵地	
199	八反田遺跡群	長嶺町八反田	縄文・中世	包蔵地	縄文後晩期、土偶
200	乾原・迎八反田	長嶺町乾原・迎八反田	縄文～平安	包蔵地	乾原縄文後晩期中心、迎八反田縄文早期中心
201	保田窪東一本松		縄文～平安	包蔵地	
202	三郎塚	健軍町	縄文～平安	包蔵地	
203	新外 A	健軍町小峰	縄文	包蔵地	
204	新外 B	健軍町小峰	縄文～平安	包蔵地	
205	小嶺	健軍町小峰	縄文～平安	包蔵地	
206	健軍神社周辺遺跡群	健軍 2 丁目	旧石器～中世	包蔵地	上の原縄文後期炭化米出土、市報告書あり
207	佐土原	健軍町佐土原	縄文～平安	包蔵地	
208	中山	小山町	縄文～平安	包蔵地	
209	御船塚	小山町御船塚	縄文・中世	包蔵地	
210	上黒迫	戸島町	縄文・中世	包蔵地	二岡中学校校庭
211	戸島京塚	戸島町	縄文～中世	包蔵地	
212	戸島北向（戸島西）	戸島町	縄文・中世	包蔵地	
213	戸島東	戸島町日向	縄文	包蔵地	
214	戸島経塚跡	戸島町日向	縄文・中世	包蔵地	経塚一字一石埋納
215	葉山遺跡群	戸島町葉山	旧石器・縄文	包蔵地	
216	戸島桑鶴	戸島町	縄文～平安	包蔵地	
217	下佐土原	戸島町	縄文～平安	包蔵地	
218	日向棧敷尾	戸島町日向	縄文	包蔵地	

Tab. 3 石の本遺跡群周辺遺跡一覧(3)

番号	遺跡名	所在地	時代	種別	備考
219	市営託麻団地	新南部託麻団地	縄文	包蔵地	押型文、御領式
220	西原	新南部	縄文	包蔵地	押型文
221	江津湖東岸	新生1丁目、健軍4丁目	縄文～平安	包蔵地	
222	小久保	上小久保 下小久保	縄文～中世	包蔵地	
223	宮園B	木山 遠見塚ほか	縄文・弥生	包蔵地	縄文～、弥生中期土器
224	遠見塚	木山 遠見塚	縄文～古代	包蔵地	
225	上面ノ平	田原 上面ノ平	縄文～中世	包蔵地	
226	上石岸原	田原 上石岸原	縄文～中世	包蔵地	
227	高遊	小谷 高遊	縄文～中世	包蔵地	
228	中石岸原	小谷 中石岸原	縄文～古墳	包蔵地	縄文・弥生・古墳
229	古閑	古閑 宅地	縄文・弥生	包蔵地	縄文・弥生、土師器外の遺物包含
230	福富	古閑 石井川ほか	縄文・弥生	包蔵地	縄文・弥生、土師器外の遺物包含、瓦片
231	駿河原	馬水 駿河原	縄文・弥生	包蔵地	
232	惣領	惣領 高木	縄文～古代	包蔵地	
233	下辻	木山 下辻	縄文～中世	包蔵地	
234	辻	宮原 辻	縄文～中世	包蔵地	
235	宗曾利	安永 宗曾利	縄文～中世	包蔵地	
236	上陳古墳	上陳 辻	縄文	包蔵地	箱式石棺、縄文土器
237	大辻	馬水 大辻	縄文～平安	包蔵地	
238	寺中	寺中	縄文～平安	包蔵地	
239	古閑	広崎 梨木	縄文～弥生	包蔵地	
240	古閑北	古閑 崎久保・横道	縄文～弥生	包蔵地	
241	秋田上原	河原 秋田原	縄文～中世	包蔵地	
242	北原・東原	布田 北原・東原	縄文・弥生	包蔵地	縄文土器・弥生土器
243	べつじ	小森 西原	縄文・弥生	包蔵地	縄文早期土器・弥生中期土器・土師器
244	下小森	小森 葉山	縄文	包蔵地	
245	宮山遺跡群	宮山 西原・広瀬	縄文～古代	包蔵地	縄文早前後晩・弥生中後・土師・須恵
246	なこやしき	宮山 宮山	縄文	包蔵地	縄文晩期土器
247	下高下	宮山 下高下	縄文	包蔵地	縄文中後晩期土器
248	將軍塚	宮山 下高下	縄文	包蔵地	縄文後晩期土器・石鏃
249	千人塚	宮山 下高下	縄文	包蔵地	石器・石匙・石槍
250	宮山本村	宮山 西原	縄文・弥生	包蔵地	縄文早期土器・弥生土器
251	多々良	宮山 多々良ほか	縄文	包蔵地	石器・石包丁・縄文早期土器
252	河原第16	河原 大野	縄文	包蔵地	縄文中期
253	河原第17	河原 大野	縄文	包蔵地	縄文～
254	袴野	小森 袴ノ霍	縄文・弥生	包蔵地	縄文前期、弥生土器
255	出の口	宮山 出の口霍	縄文	包蔵地	縄文早期土器・石匙
256	河原第11	河原 大野	旧石器～縄文	包蔵地	土器片、剥片・石核採集
257	河原第12	河原 大野	旧石器～縄文	包蔵地	土器片、剥片・石核採集
258	河原第13	河原 大野	旧石器～縄文	包蔵地	土器片、剥片・石核採集
259	河原第14	河原 大野	旧石器～縄文	包蔵地	熊本大学調査、西原F地点
260	河原第15	河原 大野	旧石器～縄文	包蔵地	土器片、剥片・石核採集
261	吉無田高原第8	河原	旧石器～縄文	包蔵地	土器片、剥片・石核採集
262	冠ヶ岳第4	宮山 医王寺向	旧石器～縄文	包蔵地	土器片、剥片・石核採集
263	冠ヶ岳第5	宮山 医王寺向	旧石器～縄文	包蔵地	土器片、剥片・石核採集
264	冠ヶ岳第6	宮山 医王寺向	旧石器～縄文	包蔵地	土器片、剥片・石核採集
265	冠ヶ岳第7	宮山 医王寺向	旧石器～縄文	包蔵地	土器片、剥片・石核採集
266	冠ヶ岳第8	宮山 医王寺向	旧石器～縄文	包蔵地	土器片、剥片・石核採集
267	冠ヶ岳第9	宮山 医王寺向	旧石器～縄文	包蔵地	土器片、剥片・石核採集
268	冠ヶ岳第10	宮山 医王寺向	旧石器～縄文	包蔵地	土器片、剥片・石核採集
269	冠ヶ岳第11	宮山 医王寺向	旧石器～縄文	包蔵地	土器片、剥片・石核採集
270	冠ヶ岳第12	宮山 医王寺向	旧石器～縄文	包蔵地	土器片、剥片・石核採集
271	冠ヶ岳第13	宮山 医王寺向	旧石器～縄文	包蔵地	土器片、剥片・石核採集
272	冠ヶ岳第14	宮山 医王寺向	旧石器～縄文	包蔵地	土器片、剥片・石核採集
273	河原第20	河原 大野	旧石器～縄文	包蔵地	土器片、剥片・石核採集
274	河原第21	河原 大野	旧石器～縄文	包蔵地	土器片、剥片・石核採集
275	河原第22	河原 大野	旧石器～縄文	包蔵地	土器片、剥片・石核採集
276	河原第23	河原 大野	旧石器～縄文	包蔵地	土器片、剥片・石核採集
277	河原第24	河原 大野	旧石器～縄文	包蔵地	土器片、剥片・石核採集
278	河原第25	河原 大野	旧石器～縄文	包蔵地	土器片、剥片・石核採集
279	小池原	田代 南小池	縄文・弥生	包蔵地	縄文早期・晩期土器、弥生土器
280	吉無田高原第4	田代 天神原	旧石器～縄文	包蔵地	石核、剥片など
281	吉無田高原第8	田代 天神原	旧石器～縄文	包蔵地	剥片

Tab. 4 石の本遺跡群周辺遺跡一覧(4)

第3章 調査とその成果

第1節 調査方法

遺跡群の一部は平山石の本遺跡で縄文時代の遺物散布地として知られていた。なお、各調査区の調査工程は石の本遺跡群（平成10年度刊行）をあわせて参照されたい。

調査は概ね、平成6年度に字山一の口、平成7年度に字鏑崎並びに平成8・9年度に字石の本の範囲の調査区において進められた。

各調査区内には10m×10mのグリッドを設定し、国土座標軸を利用したグリッド法による調査を行った。

調査は、概ね層を重機による掘削の後、縄文晩期以後の包含層である層の調査、包含層の掘削を行い、縄文時代早期～後期までの層まで計2面にわたって遺構検出を行っている。層以下、旧石器時代の調査は、トレンチによる確認後、随時拡張を行った。遺物の取上げには光波測量器を用いて、石器・受熱礫・炭化物を取り上げた。縄文時代早期の調査の場合は、地形測量は層中の遺構検出面で行い、20cm間隔で等高線を記録した。

自然科学分析として、縄文時代早期の遺構から検出された炭化材には炭素年代測定と樹種同定を行っている。また、基本層序層から層までの各層は、アカホヤ火山灰、始良Tn火山灰をはじめ、未検出のローカルテフラの分析も行い、肉眼観察による安易な同定は一切行っていない。また、周辺地域による同一層の把握とローカルテフラの降灰範囲、時期等を推定するため、主に阿蘇方面を重点的に露頭によるテフラの検出・分析を実施した。



Fig. 2 石の本遺跡群調査区位置図及び割付図

第2節 基本層序

石の本遺跡群で確認された層序は概ね下図の遺跡群基本層序に集約される。調査区によって各層位が削平・再堆積・水性堆積が認められる場合、その都度層位比較を行い細分している。以下の層序説明は、石の本遺跡群に共通する基本層序である。

層 (表土) 耕作土。調査前は主に畑地として利用。

層 (黒褐色土) クロボク土。水はけの良い、粘性に乏しい土壌。阿蘇外輪山周辺から熊本平野の台地上で広く認められる。この層まで中・近世の遺物を含む。

層 (黄褐色土) 所謂アカホヤ火山灰を含む再堆積土。本遺跡群で最も多くの遺構・遺物が確認される。地点を異にして縄文時代前期・中期・晩期・弥生時代の遺構・遺物が検出され、このうち縄文晩期の遺構・遺物が多数を占める。

層 (黒褐色粘質土) 通称クロニガ。粘性に富んだ締りのある土。縄文早期の遺構・遺物が検出されている。

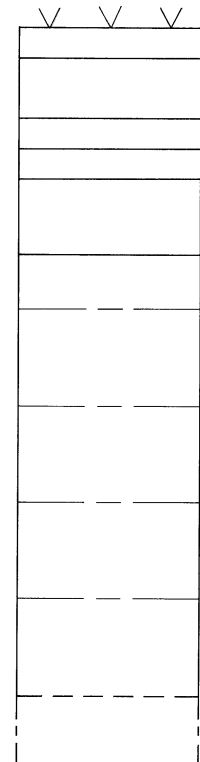
層 (暗褐色土) 通称ニガシロ。層同様、粘性に富んだ締りのある土。調査区によって3～7枚の層に細分される。所謂始良T_n火山灰を含む層の他、噴出起源未確認のテフラが確認されている層が存在する調査区もある。これら鍵層の前後に旧石器時代の文化層が1～3層にかけて確認されている。地元では、層に相当する土を指してニガ土と呼ばれたりもする。

層 (赤褐色粘質土) 明るい赤味を帯びたローム層。この層の比較的上層において旧石器時代の文化層が確認されている。下層は無遺物層である。以前本県の文化財調査報告書において鳥栖ロームと呼称されていた層と同一層であろう。風堆積土(レス)という理解をしている。鳥栖ローム・八女粘土は本来阿蘇4火砕流堆積物の一部であり、この層から旧石器時代の文化層が検出されていることを考えるならば、例えば鳥栖ロームであったとしても、再堆積土となろう。

層 (石の本軽石) 最大で拇指大程度の軽石を主体とした火山性噴出物層。本遺跡群の石器群の相対年代はこの層が上限となる。管見する限りでは初の検出であり、今後噴出起源・降灰範囲・年代特定を進める必要がある。無遺物層。

層 (黄褐色粘質土) 明るい黄味を帯びたローム層。小礫を多く含み、下層では託麻砂礫層に伴う巨石を覆っている。従来八女粘土と呼称されていた層であろう。この層の下層に託麻砂礫層が存在することから考えても、阿蘇火砕流堆積物の一部である八女粘土の一次堆積層そのものである可能性は低い。無遺物層。

層 (託麻砂礫層) 石の本遺跡群のFig. 1に示すように、立野の火口瀬を基点として大津・益城・菊陽・熊本市の託麻台地一帯に広がる。形成年代は、上限は阿蘇4の噴火以後始良T_n火山灰降灰前と特定されていないが、本遺跡群でのデータからさらに年代特定が可能である。最大で10mを超える巨石から1m前後のものまでの大小様々な円礫・角礫が混在している。肉眼観察にとどまるが安山岩質の岩が多数を占めている。部分的に石器の石材として利用できる良質のものも含まれる。尚、本遺跡群内では確認できていないが、阿蘇4起源の火砕流堆積物層はこのさらに下層とのデータがある。



石の本遺跡群
基本土層柱状図

第3節 調査結果の概要

石の本遺跡群の調査の成果は、旧石器時代から近世までの各時代に渡っている。石の本遺跡群全域に渡って、遺構が検出された主要各時代を概括的に見ていくと、後期旧石器時代AT下位、後期旧石器時代AT上位、縄文時代早期、縄文時代後晩期、古墳時代の各時代が上げられ、生活跡が比較的顕著に見られる。また、その他の時代でも一部遺構が確認されているが、全域までは確認されていない。

主要な遺物包含層は基本層序 Ⅰ層に認められ、遺跡全体で広く見られる。

基本層序 Ⅰ層のクロボク層には、古代～近世までの生活面を一部調査区で含みながらも、縄文時代後晩期以降の遺物が混在する。

Ⅰ層のアカホヤ火山灰の再堆積土を含む黄褐色土層には、縄文時代前期～後晩期の遺物が包含される。Ⅰ層下面～Ⅱ層上面にかけては、本遺跡群の主要な成果として上げられる縄文時代後晩期の遺構検出面が見られる。この時期の遺構として、埋蔵が多数検出されている。詳細は後の報告書に委ねるが、合わせ口の埋蔵のうち、伏せ甕側の底部部分（遺構の上面）が若干削られているものが見受けられることから、縄文時代後晩期の生活面は一部削平されていると考えられる。同様の面において、前～中期の時期と思われる遺構が検出されている調査区も存在するが、縄文時代後晩期以降に少なからず削平を受けており、生活面は認められない。従って、縄文時代前期～中期の生活面の様相、遺構の性格更には詳細な時期についても推測の域を出るものではない。

Ⅱ層の黒褐色粘質土、熊本の地方の言葉で「クロニガ」と称される土層中には、主に縄文時代早期の遺物が包含されている。検出される遺構・遺物のレベル差から、縄文時代早期の生活面がⅡ層中で複数見受けられる。阿蘇外輪山周辺から大分県大野川流域にかけては、同一層が柔らかい土質となり、Ⅱ層のクロボク層と似た土質となる。地域によっては幾重にも堆積したクロボク層が確認できる。土層の条件が良ければ、同一層が細分され幾つかの生活面ごとに遺構が検出できるであろう。石の本遺跡群内では、同一地点で分層を行いさらに複数の生活面を検出することまでは出来なかった。しかし、地点を異にしながらも、Ⅱ層が細分できるなかで、検出層位も、出土した土器型式も異なる生活面を検出することができた。

続くⅢ層（同じく熊本の地方の言葉で「ニガシロ」と一括して呼称される。）は、複数の火山灰、層序が凝縮されたように硬く引き締まり、土層に亀裂が多く入る。肉眼観察による分層は可能ではあるが、よほど堆積の厚い地点でなければ、物理的にこのニガシロ層を分層して発掘することは困難である。肉眼観察による分層は良くて3～4枚程度の線引きが出来る程度である。実際は、層中に始良T_n火山灰や阿蘇噴出起源のローカルテフラが分析によって検出でき、条件がよければさらに詳細な分層が可能である。54区・55区ではこの分層と層位別の発掘が可能になった稀有な例である。この調査区は、他の調査区に比べニガシロの堆積が裕に1mは超えている。更に、比較的柔らかい土質、暗色帯の土層の複数堆積、肉眼でも或る程度確認することが出来る明瞭なテフラの堆積も手伝い、Ⅲ層のなかで細分された層ごとに生活面を検出できている。この地域一帯の編年上の基準になるべき成果が得られている。

Ⅳ層は、Ⅲ層との漸移層、比較的柔らかい粘質土層、前述したⅢ層のニガシロのように固く引き締まったローム層に分層できる。このうち遺跡が確認されたのは、比較的柔らかい粘質土層までである。Ⅳ層のより下層の本格的な全域調査は行っておらず、部分的にトレンチを入れたのみの結果である。硬く引き締まったロームそのものが更に細分できるのかも不明であり、この層より下での遺跡の存在は、石の本遺跡群の調査では確認できなかった。但し、従来言われていた鳥栖ロームと呼ばれた阿蘇火砕流の一次堆積物では無いとの確認が得ることができたことから、今後は容易に無遺物層とは決定できないであろう。

第4節 各調査区の成果

次に、得られた調査成果を各調査区で概観して行く。前述したように検出された時代は、旧石器時代から近世までの各時代に渡っている。その中で、石の本遺跡群を特徴付ける生活跡が検出された時代は、後期旧石器時代始良Tn火山灰（以下、ATと略す）下位、後期旧石器時代AT上位、縄文時代早期、縄文時代後晩期、古墳時代である。

後期旧石器時代のうちAT下位の遺跡が認められた調査区は、8・22・38南・39・54・55区の計6調査区である。このうち55区はAT下位の時期が2時期検出されている。54・55区の旧石器時代の調査成果は、石の本遺跡群を参照されたい。

後期旧石器時代のうちAT上位の遺物は、遺跡群全体で表面採取されたものや、遺構の埋土に混じって検出されることが多く、地点も散漫である。層位的に明確に検出された調査区は54区・22区である。54区については同じく石の本遺跡群を参照されたい。

縄文時代早期の包含層は石の本遺跡群全域で認められ、出土遺物も決して少なくない。生活跡が検出できた調査区は、17・36・39・40・50区の5調査区である。

縄文時代前期、中期の各時代は全体として散漫ながら、局地的に遺物が集中して検出される調査区がある（5・10・11・13区の各区、38区南など）。明確な遺構は検出できていない。

縄文時代後期、晩期の生活跡は42区周辺、15区周辺に集中して見られる。遺構・遺物量は最も多く、調査の大部分はこの時期の調査に充てられた。詳細は次年度の報告を参照されたい。

弥生時代の遺構は1区でかろうじて検出された住居跡1基のみである。包含層中の遺物の検出もほとんど見られない。古墳時代の遺構は54・55区に集落跡が検出され、遺物の出土地点も限定されている。詳細は石の本遺跡群を参照されたい。

中世は41区で地下式墳とみられる土坑を1基、近世は42区にて墓坑が、近代は54・55区で字境とみられる溝状遺構が各々検出されている。

本書はこのうち、縄文時代早期、後期旧石器時代の一部を中心に調査成果を報告していく。

第1項 旧石器時代の調査成果

層位的に検出された旧石器時代の遺跡4調査区の遺物、および他の時代の包含層中または表面採取により得られた遺物を記載している。基本層序では、**層**に相当する。概ね **層**の上面でAT火山灰が検出されており、AT降灰以降の旧石器時代の土層堆積は、一部地域をのぞいてその堆積は薄い。いわゆるソフトローム・ハードロームと呼ばれている層は限りなく薄い堆積の中にあるか、削平されて消滅していると考えられる。

38区南 (Fig. 3・4)

層以下へのトレンチ調査時に、**b層**中から遺物を1点検出している。10mグリットごとに5m×5mのトレンチを設定し、遺跡の拡がりを調査した。結果、検出された石器1点以外では、当該期の遺構・遺物は検出されていない。地形は南西方向に緩やかに下る斜面上である。土層は、**層**が4つに細分することが出来る。ここでは **b層**から始良Tn火山灰が検出されており、AT上位である **a層**が比較的良好に堆積している。**c層**は暗色帯とも呼べる、肉眼観察でもっとも黒色の強い土層である。**d層**は **層**との漸移層と考えられ、ロームに似た黄色の強い土層である。これらの層からの遺構・遺物の検出は無い。

1 台形様石器：安山岩製の台形様石器である。使用された石材は、石の本遺跡群で特徴的に使用されて

いる多孔質の安山岩である。横長の不定形剥片を素材にして、素材の打面部である表面左側面、素材の末端である表面右側面の両側面に粗雑な調整を施している。打面のカットを、急角度の調整によって意識的に行っており、調整としての意図が明確に伺える。

39区 (Fig. 8)

38区南よりさらに南側の調査区に位置する。38区と同様に、b層中から遺物を1点検出している。石器が検出された周囲に拡張を試み、トレンチにより周辺を掘削したものの、炭化物やその他関連遺物は検出できなかった。

24：剥片の末端に主要剥離面側から二次加工を施した剥片である。38区南と同様に、多孔質安山岩を使用している。多面体の石核から急角度の打角で剥離されたもの。この種の石材に特徴的な、一次加工の際の衝撃による破砕痕（折れ面）は見られない。

50区

層序は、層がa層のクロボク層、b層の層との漸移層に分かれる他は、層が3枚に分層される。a層にAT火山灰が確認される。b層が暗色帯と呼ばれる黒褐色土層である。c層は層との漸移層。層は発掘調査時では細分されていない。

遺物は、38区南・39区と同じくb層中で石器が検出されている。約20㎡ほどの拡がりのなかに、10点出土している。遺構・炭化物等の検出はされていない。使用されている石器の石材は全て多孔質安山岩である。本報告書では掲載できていない。二次加工が施された石器は1点もなく、全て剥片・碎片である。そのほとんどが、長さ2cmを超えない小ぶりなもので、5cmをこえる剥片は1点も存在しない。敲石・台石・石核も検出されなかった。

22区 (Fig. 5・6)

小山中に最も近い、西端の調査区である。調査区は南西方向に下る斜面に位置する。この斜面は、小山中と石の本遺跡群を隔てる谷の一部と考えられる（第5章参照）。山沿いの開発区域は、試掘調査時土石流が起因と考えられる厚い堆積が認められている。本調査区はそうした谷の落ち際に位置しているものと考えられる。同様な地形が28・23・22・12・8区で認められ、谷は山際にそって、南西方向に形成されている。土層は、8区・50区で確認された層序と変わるところはない。旧石器時代の遺物が検出された層は、a層からb層にかけてである。出土状況は、ATが含まれるa層のやや下面からb層の暗色帯にかけてである。出土した遺物は、石器6点で全て図示している。炭化物やその他の遺構は検出されなかった。

2 スクレイパー：幅広い横長剥片を使用したスクレイパー。黒褐色の緻密なチャート製の石材を使用している。表面左端部に比較的細かな刃部作出が見られる。

3 二次加工剥片：スクレイパーと同質の黒褐色の緻密なチャートを使用している。剥片の末端と主要剥離面側に細かな剥離痕が認められるが、小剥離痕状の使用痕の可能性もある。両側面に主要剥離面側から、各々1回づつ剥離が施されているが、剥離の規模から石核とは考えにくい。楔形石器の可能性もある。

4 調整剥片：3 二次加工剥片と接合する。その大きさから、何らかの目的剥片よりは、調整剥片と考えられる。使用痕は認められない。

5 石核：白色のガラス質の強いチャートを使用している。作業面と打面を頻繁に転移しながら剥片剥離を行っている。

6 剥片：5 石核に接合する剥片。使用痕、二次加工ともに認められない。

7 剥片：6 剥片と同じく、5 石核と接合する厚みのある幅広い剥片。打面部は折れている。左側縁に主要剥離面側からの二次加工が施されている。

22区は、石の本遺跡群のある字鐔崎、字山一の口（調査区1～50区、67・68区）のなかで、唯一層中からの遺物が検出された調査区である。このエリア（白川の段丘から南側に伸びる丘陵上）では、層のニガシロ層は概ね3枚に分層できる。丘陵上でも小さな谷の斜面にあたる（8区・38区南）では、それ以外の亜層が認められる場合もあるが、概ね、a（AT包含層）・b（暗色帯）・c（層ロームとの漸移層）で捉えられる。基本層序で述べたように、硬く脆い土質と、ひび割れの多さ、樹根等の攪乱層が入り他の時代の遺物が混入するなどの条件から、この層を層位的に発掘することは困難を極める。仮に出来たとしても、粉々に砕けたように土がはがれ、石器が廃土に紛れてしまう。このことが、熊本市周辺で層位的に旧石器時代の遺跡の調査例が少ない最大の要因であろう。仮に検出できたとしても、出土層位を確実に確かめることは難しい。出土直後に遺物が浮いてしまい、正確な記録を取り難い。出土地点、出土層位について、細かな検討に耐えられないであろう。こうした層中で石器を検出できたことは、調査担当者の不断の努力であり、この事例を重視し調査の精度を高める指針となる。

20区 (Fig. 7)

22区の東側に近接している。この調査区は層まで削平が激しく、攪乱坑が多数存在した。a層の上面で石器を検出しているが、同一レベルで石鏃も検出しており、型式学的な検討によってしか、石器を抽出できない。立地は南側に伸びる丘陵の頂点に位置しており、出土している遺物からも良好な遺跡であったことが想定できる。図示した9点はそうして取り上げられた遺物から抜き出したものであり、9・10・12・13の4点の石器は、8のナイフ形石器と同質の黒曜石であること、縄文時代の石器と明らかにわかる石鏃などのなかに黒曜石製が認められなかったことを根拠に、あくまで参考資料として図示したものである。

8 ナイフ形石器：黒曜石製の二側縁加工のナイフ形石器である。刃部に相当する部分は、表面の稜上調整の際、主要剥離面側に衝撃が抜けて基部のみが残ったものと考えられる。石質は西北九州で広く見られる良質のものである。

9 剥片：西北九州産の黒曜石を使用している。

10 剥片：16 台形石器と同質の光沢が無く、不純物の入らない黒曜石を使用している。

11 ナイフ形石器：緑色チャート製の切出し型のナイフ形石器。

12・13 剥片：西北九州産の黒曜石を使用している。何らかの調整剥片か。

14 ナイフ形石器：緻密なサヌカイト質安山岩によって製作された、切出し型ナイフ形石器。

15 台形石器：光沢がなく不純物の入らない良質の黒曜石を使用している。いわゆる枝去木型の台形石器。

16 台形様石器：多孔質安山岩を使用している。粗雑な調整を、素材の打面側に施して除去し、厚みを調整している。

その他調査区内遺物 (Fig. 7・8)

22区の報告で述べたように、旧石器時代の遺物の多くは、縄文時代の遺物包含層から見つかる。このことは、旧石器時代に相当する土層は、堆積作用によって、a層中に集積して薄く堆積しているのではなく、なんらかの作用によってその大部分が削平されている可能性も想定できる。

17 ナイフ形石器は、28区の層中から出土している。西北九州産の黒曜石製。20区からの流れ込んだ遺物であろう。19 台形石器は、緑色のチャートで作られている。～層中で検出されたもので、形式的には、下益城郡松橋町曲野遺跡出土の台形石器に近い。出土した地点は8区の北側に近接した11区。

25 使用痕剥片、26 石核などは、緑色のチャート製。ごく普遍的にみられるこの石材は、54区AT上位で最も多用されているもので、緑川の河原で採取できるものと同種であろう。

第4節 各調査区の成果

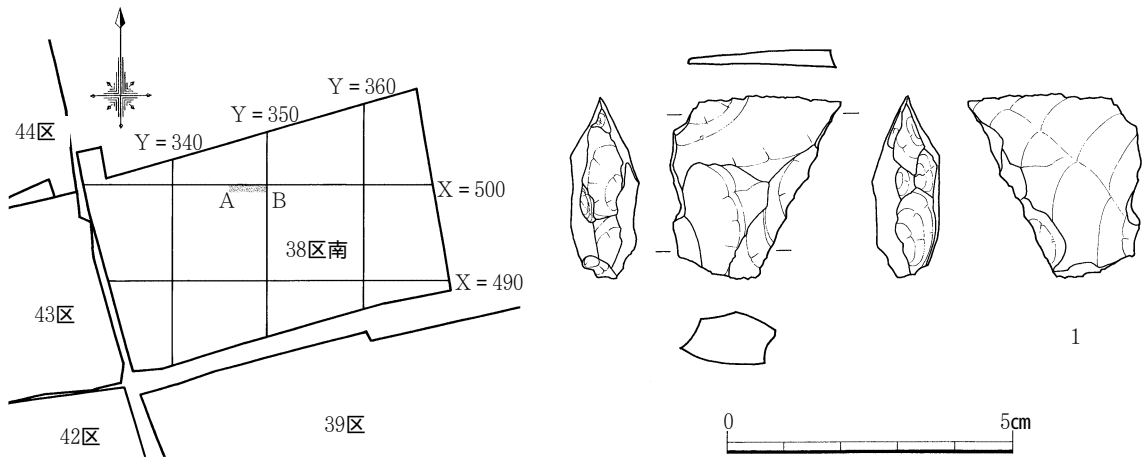


Fig. 3 38区南位置図 S : 1 / 800 及び出土遺物実測図

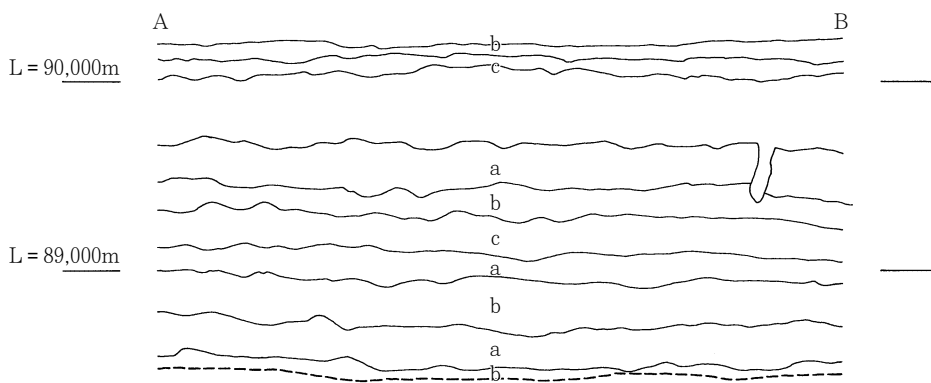


Fig. 4 38区南トレンチ土層図 S : 1 / 20

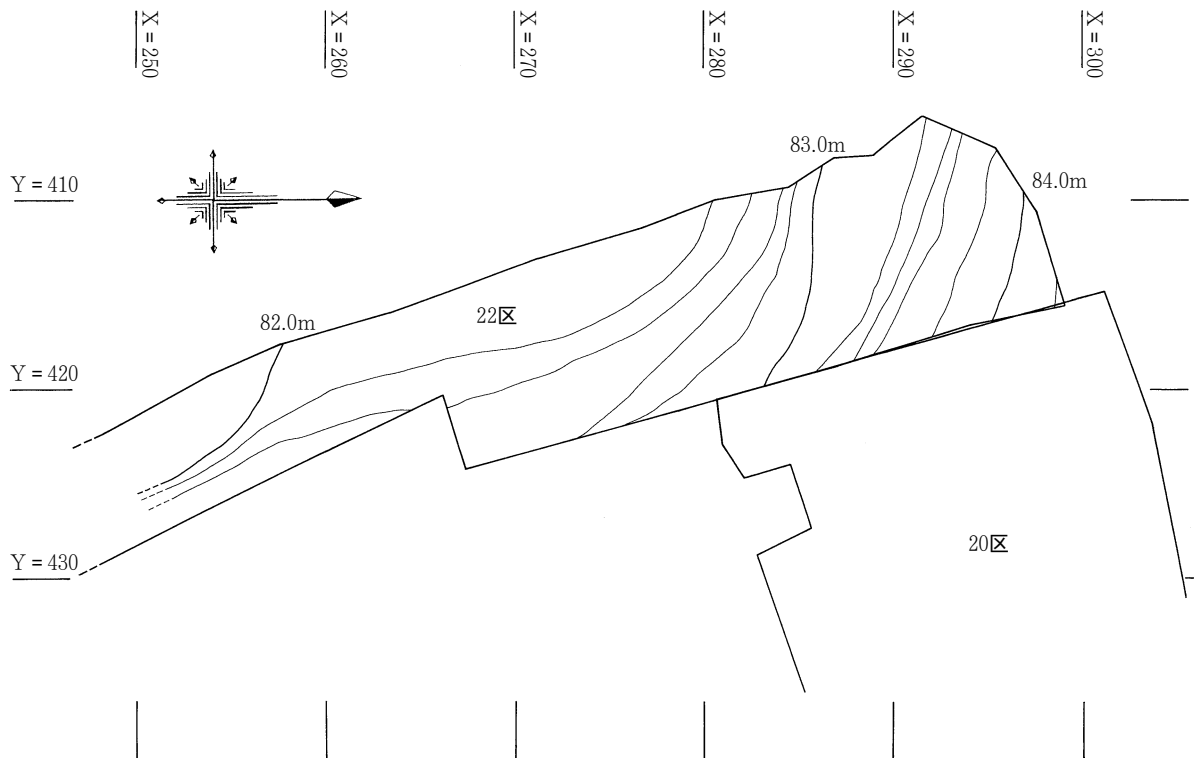


Fig. 5 22区 層地形図 S : 1 / 400

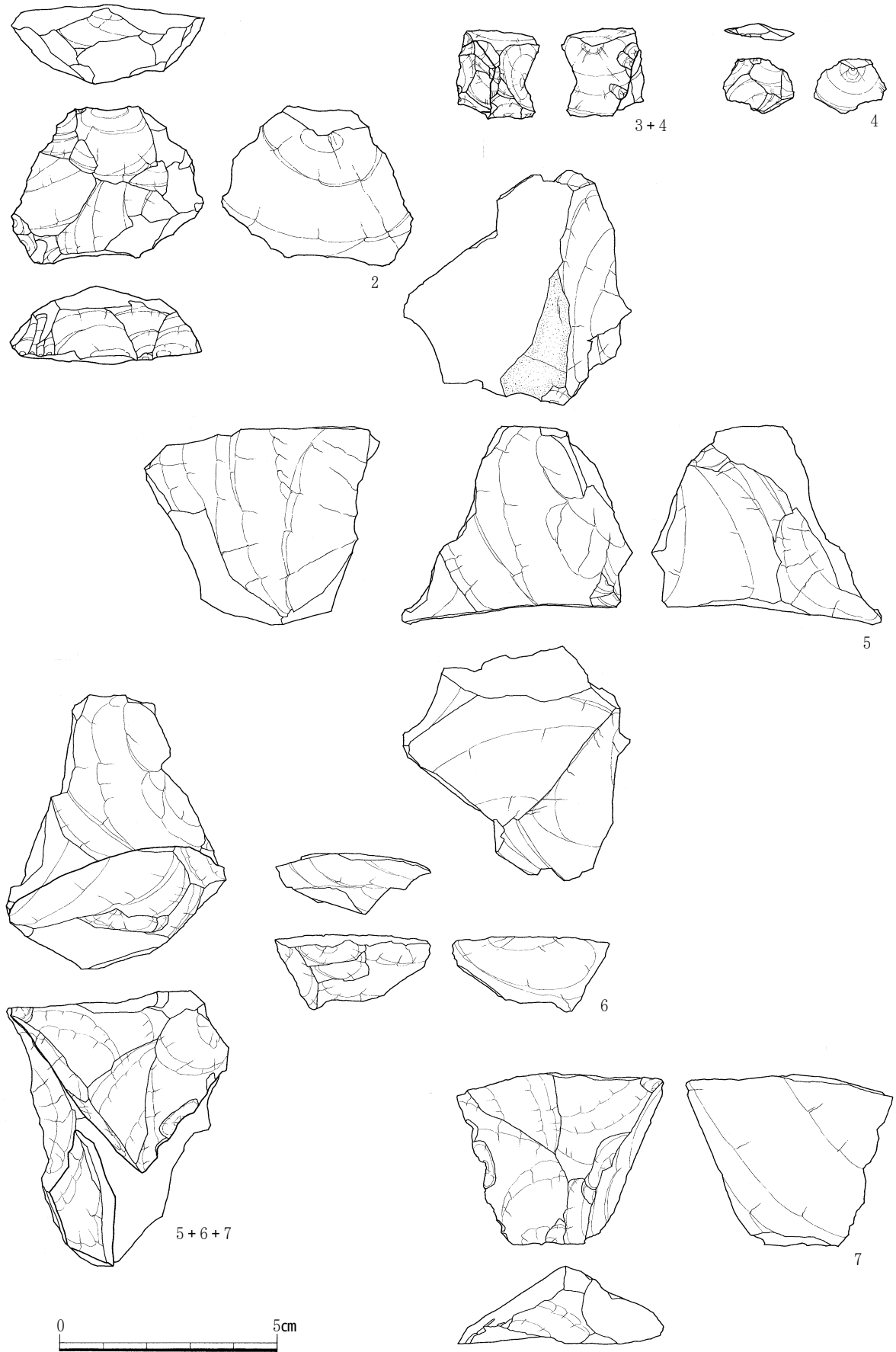


Fig. 6 22区出土後期旧石器時代石器実測図

第4節 各調査区の成果

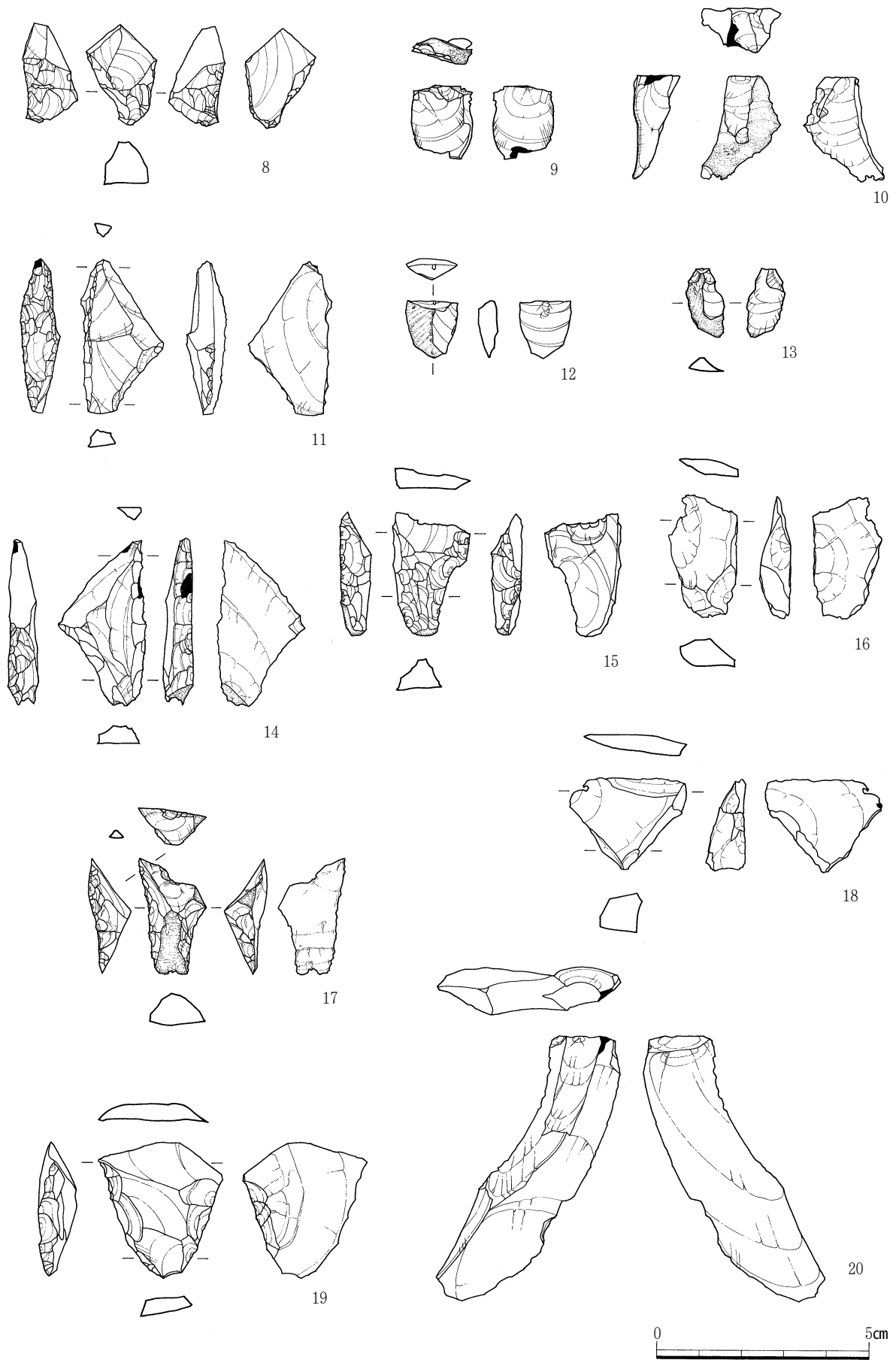


Fig. 7 後期旧石器時代石器実測図(1)

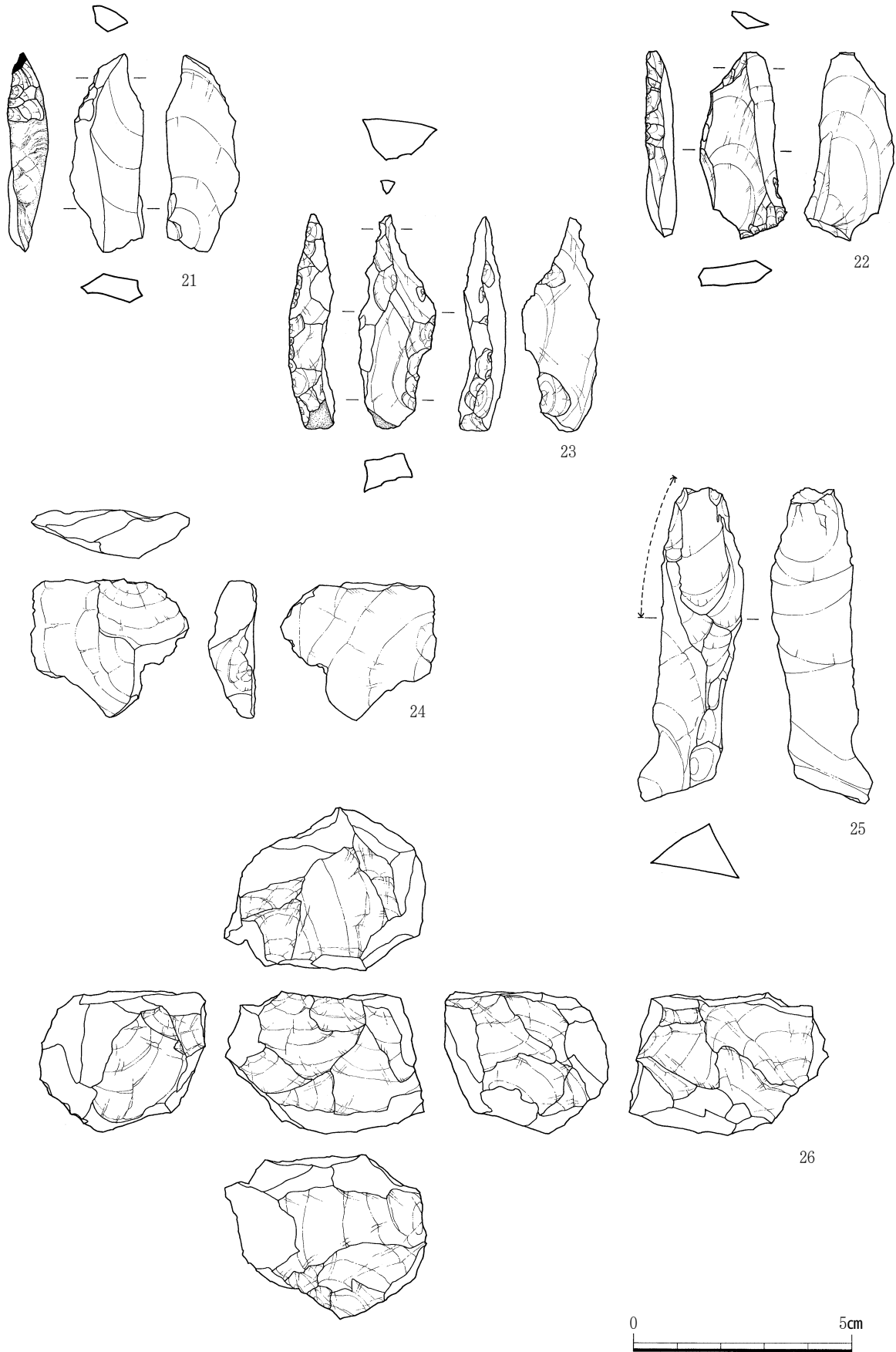


Fig. 8 後期旧石器時代石器実測図(2)

第4節 各調査区の成果

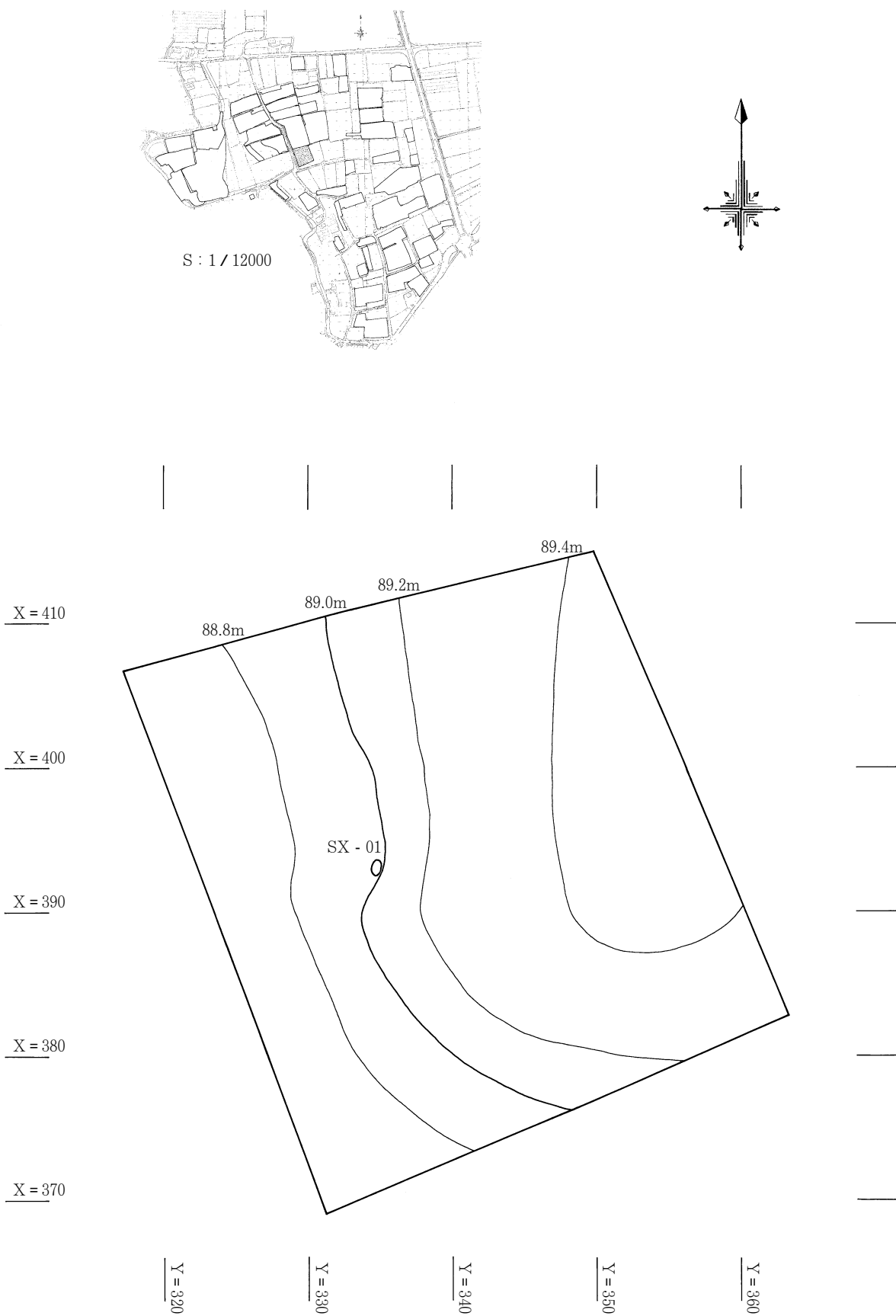


Fig. 9 40区 層遺構配置図 S : 1 / 400

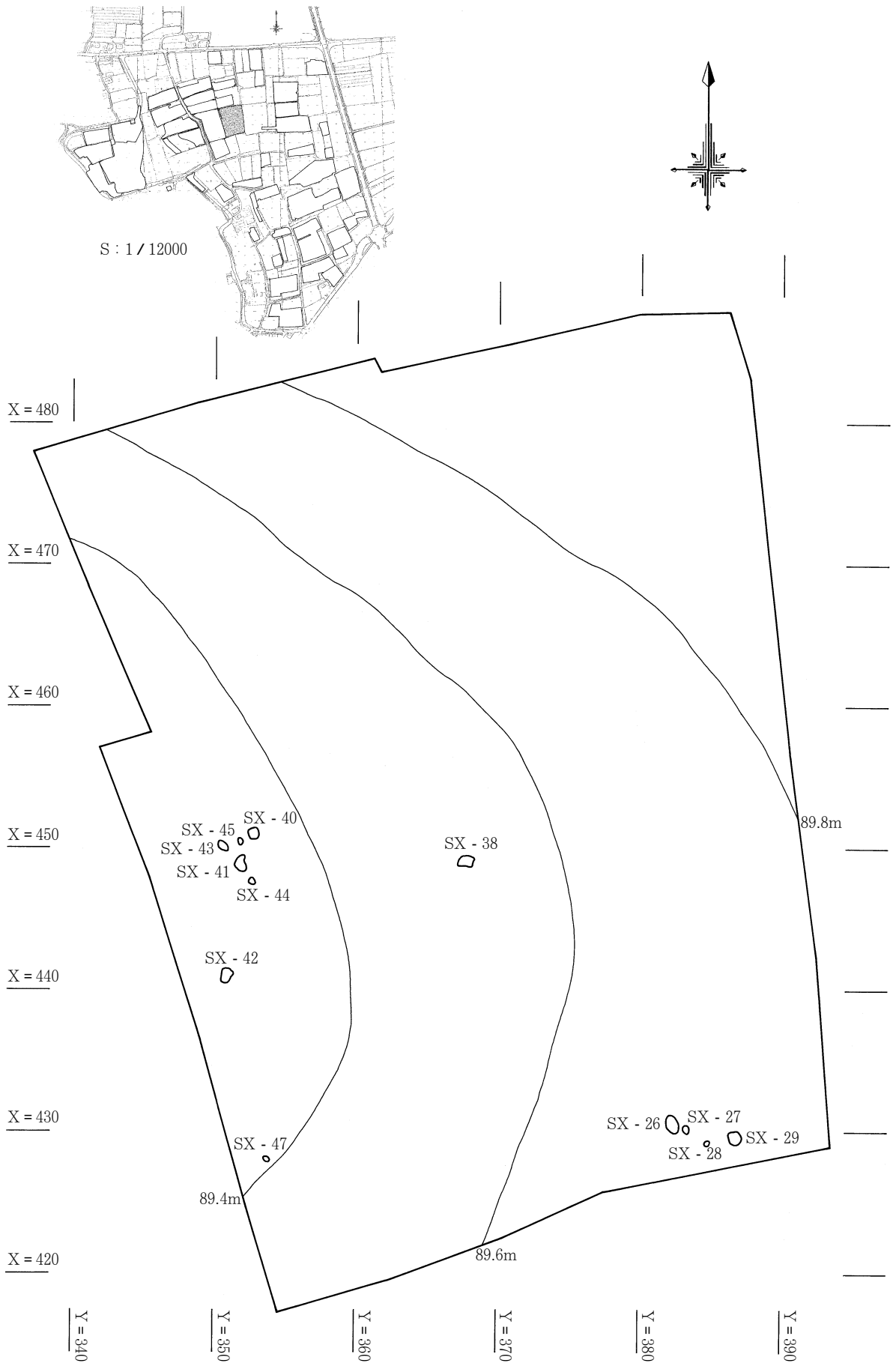


Fig.10 39区 層遺構配置図 S : 1 / 400

第2項 縄文時代の調査成果

縄文時代の遺物包含層は、削平された一部地域を除いて、ほぼ石の本遺跡群全域で認められる。検出される縄文時代の遺構の主要な時期は、Ⅰ層中に含まれる縄文時代後期～晩期の黒色磨研土器様式の時期であり、安山岩製の扁平打製石斧等、石器・土器共に遺物を大量に伴う。これらの調査成果は別の報告書に掲載する。

今回、報告するのは、縄文時代早期～後期前半にかけての調査成果である。基本層序で言うと、ⅠからⅡ層にかけ検出された遺構・遺物が対象である。掲載している地形図は、Ⅰ層中の縄文時代早期に相当する面である。生活面が削平されているところは、等高線を図示していない。また、5区はⅠ層中の地形図である。

縄文時代早期の遺構は、Ⅰ層上面で検出される場合と、Ⅰ層中～下層で検出される場合がある。遺物包含層は、地点によってⅠ層の下部からⅡ層で確認されている。

各調査区は、その地形特有の土層堆積が見られるところがある。こうした調査区は、隣接する調査区と土層の対比をその都度行い、基本層序中の分層を行っている。そうした調査区には土層柱状図を別に示している。基本層序はローマ数字で、基本層序中の細分された土層はアルファベットの小文字で表記している。また、基本層序中に対比できない土層にはアラビア数字等で付記し、土層図を掲載している。

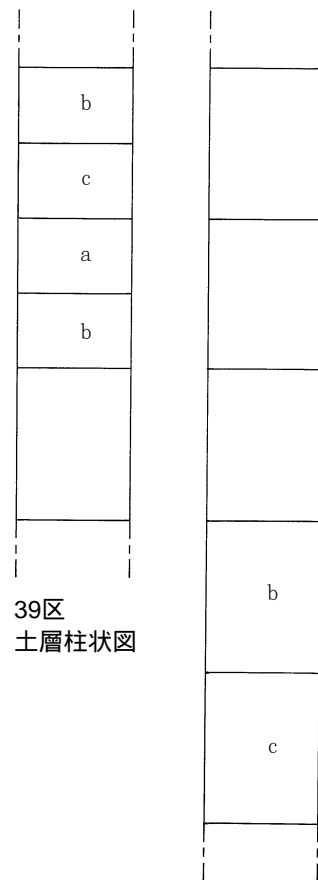
これらの遺跡の時期を、検出された土器群から概観するために大きく分類すると、Ⅰ類～Ⅲ類までの13類に分類できる。Ⅰ類の型式不明・その他の土器を除けば、石の本遺跡群の縄文時代早期から後期前半は、概ねこの12期に分けて理解できる。但し、前述したように黒色磨研土器様式の各時期は、この分類には含まれていない。土器分類については、その他包含層遺物の段で説明している。各分類の土器が出土した調査区は、第5章 考察・まとめに掲載している。

基本層序Ⅰ層中で遺構が検出された調査区は17区・36区・39・40区・50区の5調査区である。39区・40区は、地形・検出面・遺構の様相から、同一の遺跡として捉え一括して報告している。また、5区・13区はⅠ層中で検出された遺構である。Ⅰ層検出の遺構は、縄文時代後～晩期の住居跡をはじめ数多く認められるが、この二つの調査区の遺構はⅠ層上面が削平されているため、時期不明である。

39・40区 (Fig. 9～20)

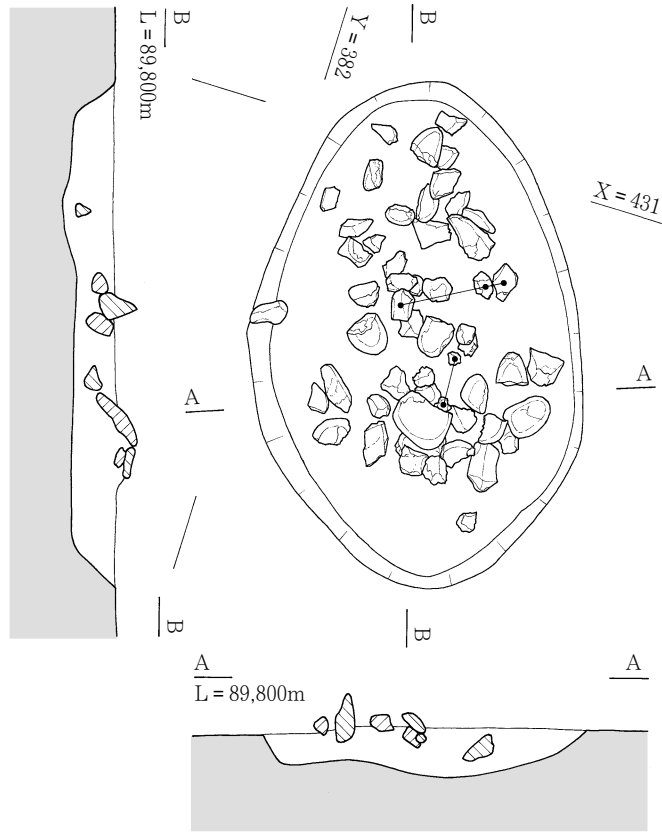
標高、89～90m付近の南西方向に下る丘陵上に立地している。北側の白川の河岸段丘から伸びる丘陵の一部であろう。土層の堆積は基本層序に準ずるが、39区でⅠ層が細分されて観察できる。a層は、いわゆるクロボク層そのものである。b層は、Ⅰ層との漸移層と見られ、やや褐色を帯びた色調である。土質はクロボク層と変わりはない。a層は、アカホヤ火山灰の二次堆積土が40区はⅠ層上面まで削平が進んでおり、40区の土層柱状図のⅠ層は39区のb層に相当する。また40区の東側、89.4mを超える範囲では、表土の直下からⅠ層の土が露出し早期の生活面も一部削平を受けていた。

両調査区とも、縄文時代後～晩期の遺構が上層で確認されている。早期の時期と判断されるⅠ層を若干掘り込んだ下層で遺構が検出されている。立地としては調査区内を通る丘陵のやや落ち際で見られる。

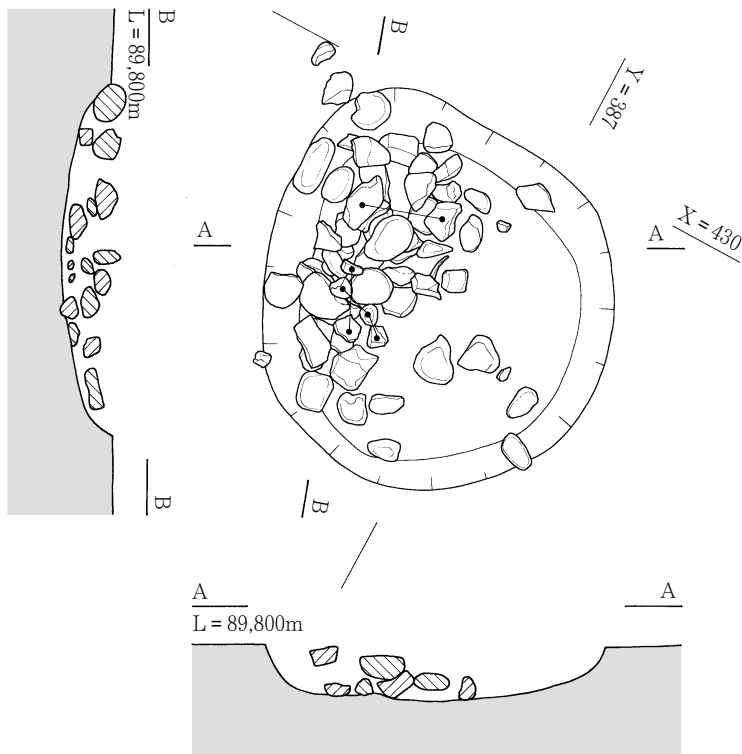


39区
土層柱状図

40区土層柱状図



SX - 26



SX - 29

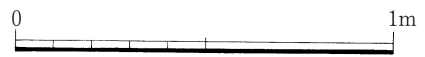


Fig.11 39区集石遺構実測図(1)

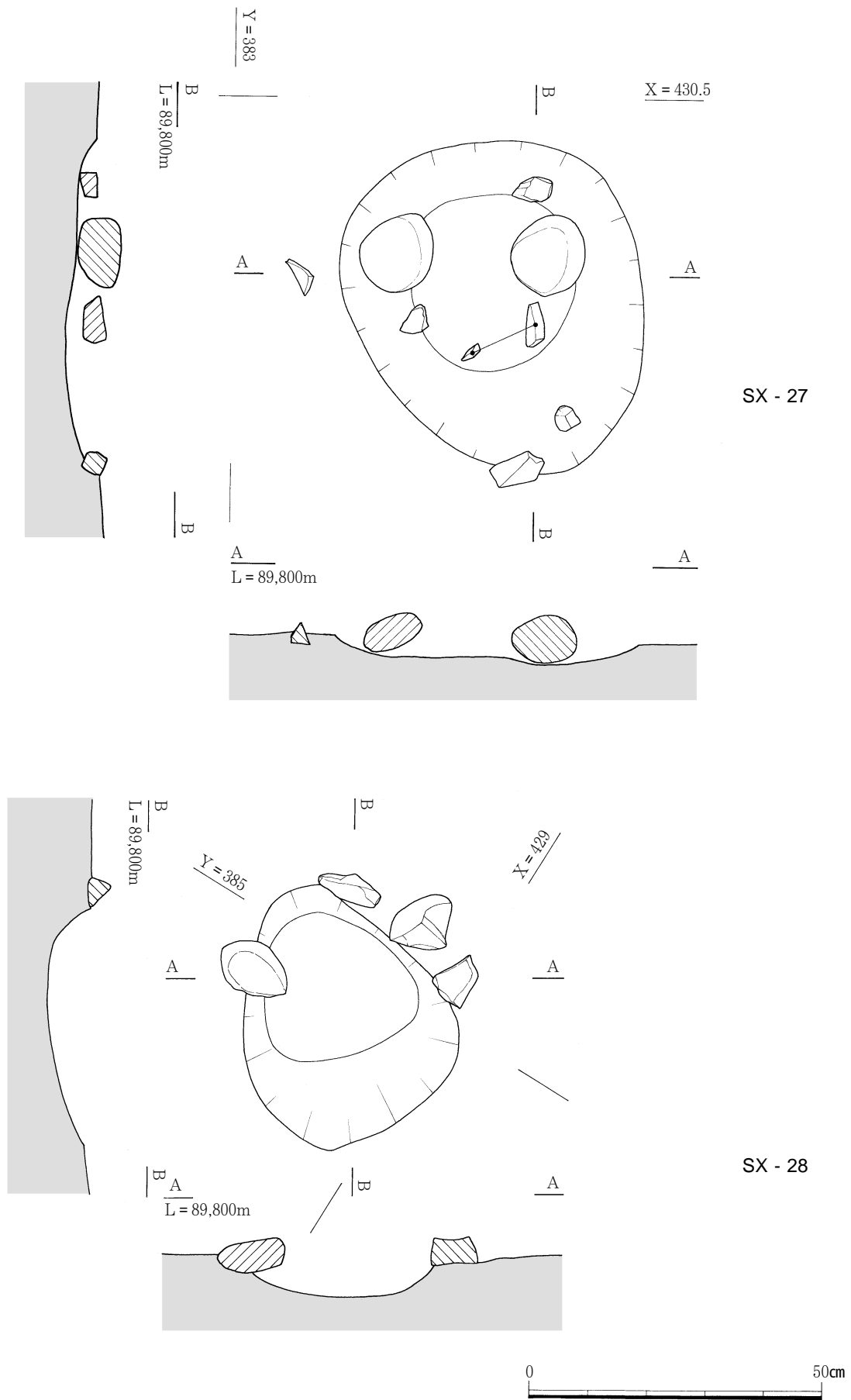


Fig.12 39区集石遺構実測図(2)

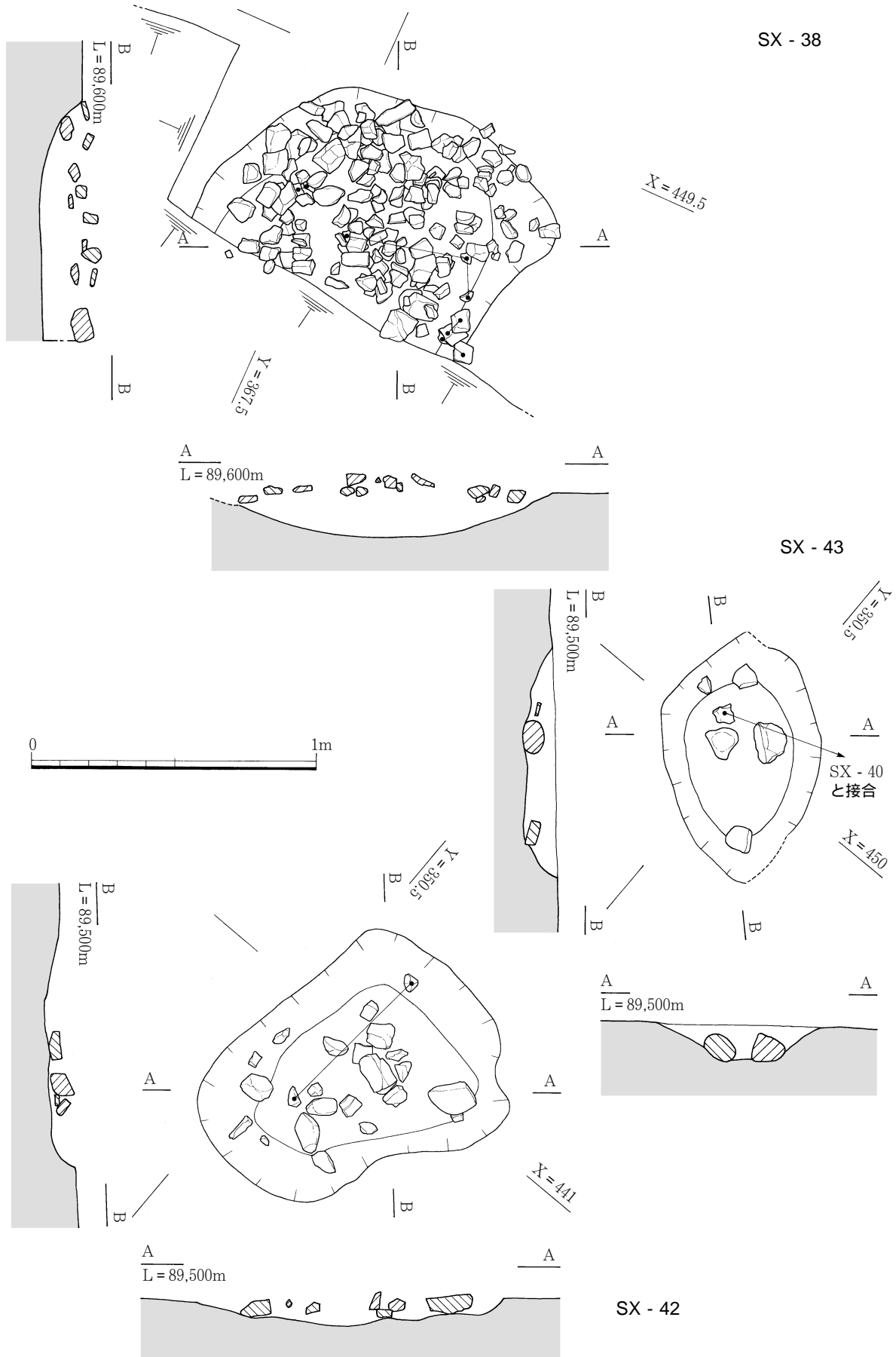


Fig.13 39区集石遺構実測図(3)

第4節 各調査区の成果

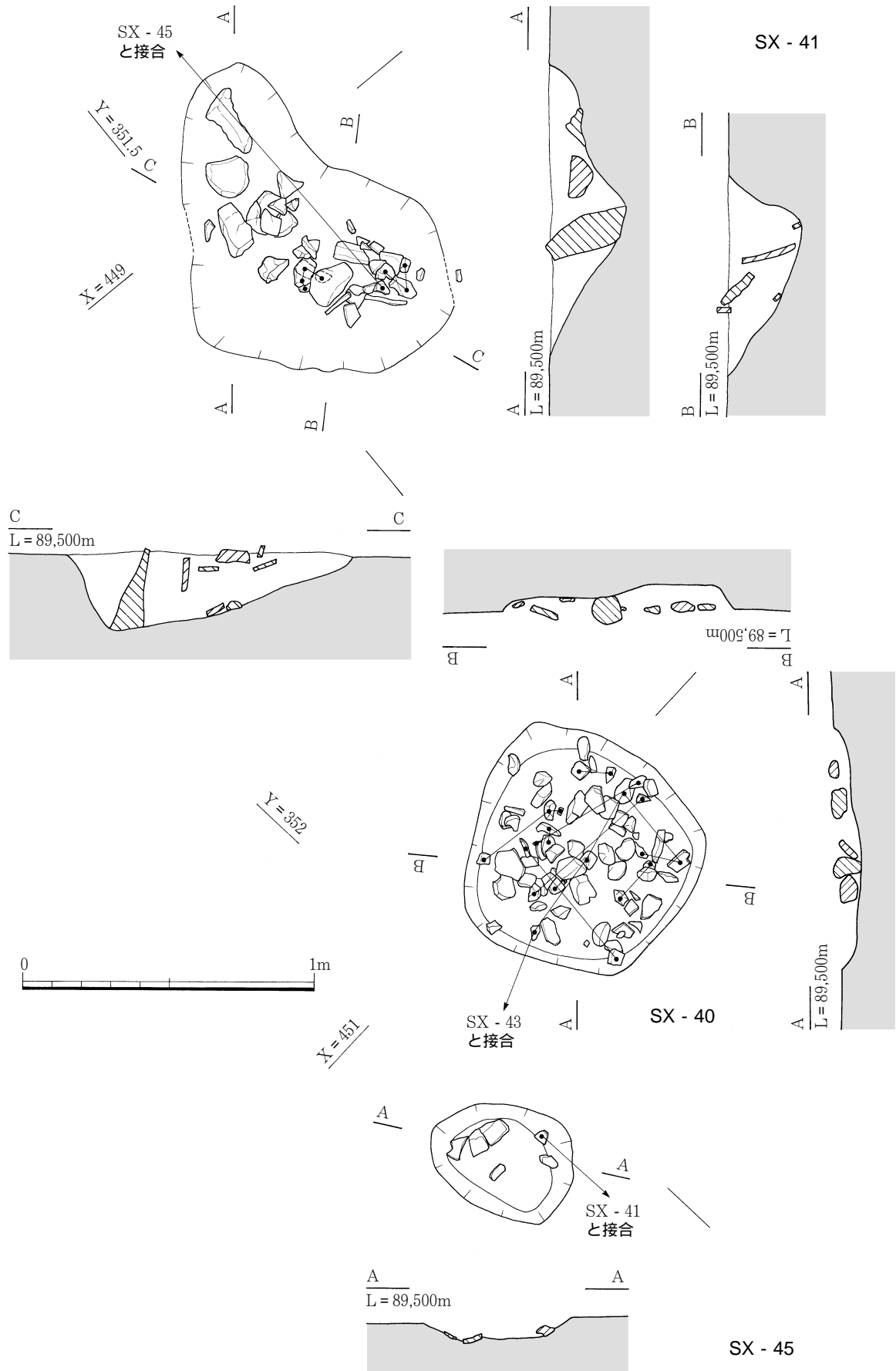


Fig.14 39区集石遺構実測図(4)

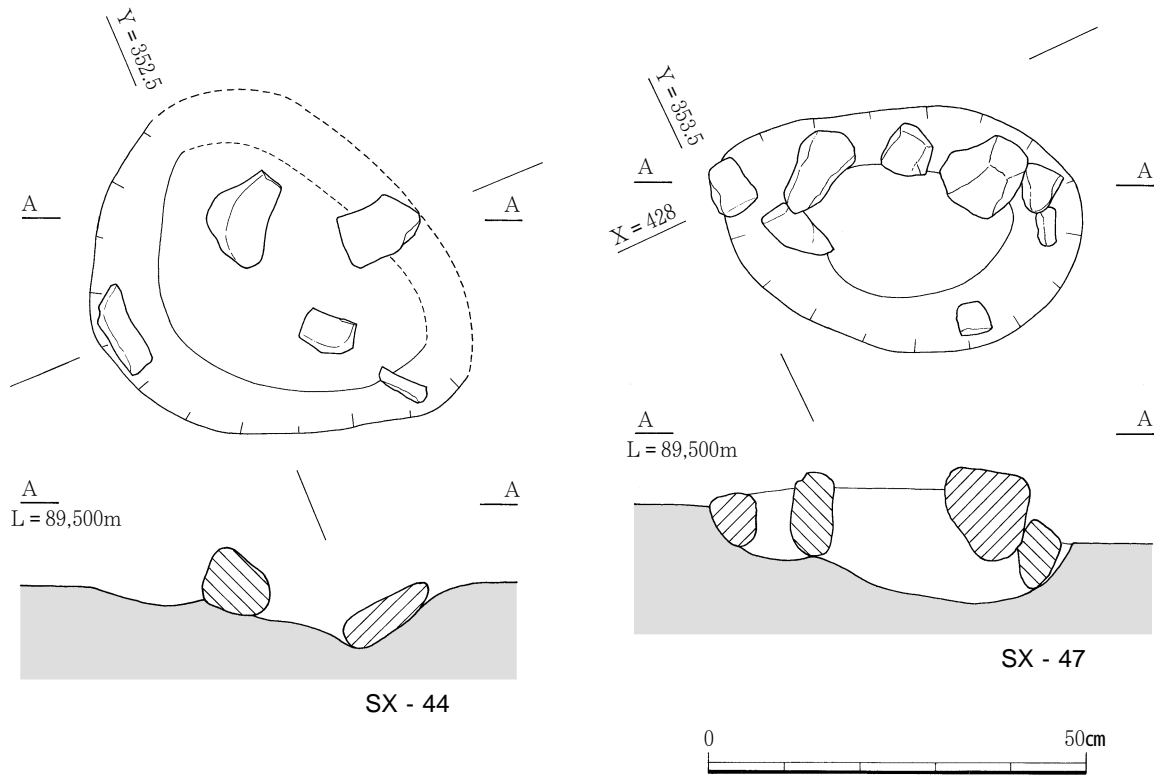


Fig.15 39区集石遺構実測図(5)

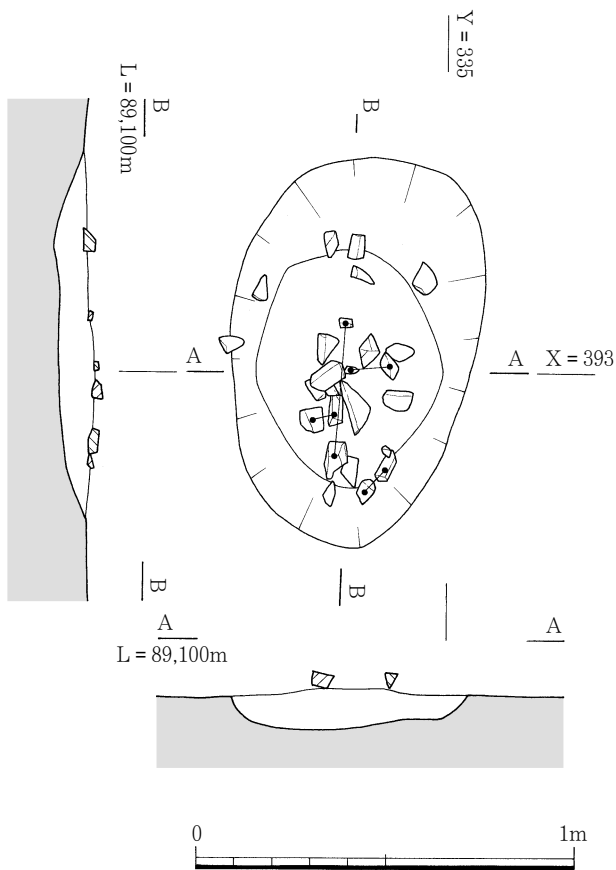


Fig.16 40区SX - 01集石遺構実測図

この丘陵は38区南の方向から伸びて40区の北東側を巡り、南西方向へ湾曲している。さらに39区のほぼ中央を巡り、20区の方へ下っている。20区は前述したとおり攪乱を受けていた。丘陵の頂部にあたる部分は旧耕作面によりほとんど削平されており、層ないし層が露出している部分もある。斜面の遺構だけが耕作による削平時に残され、丘陵の頂部にまで広がっていたか否かは不明である。39区の東側は工事の設計により掘削が及ばなかったため未調査であるが、遺跡の中心はこの東側と考えられる。北西側に隣接する41区・42区は谷部にあたり、遺物・遺構ともに検出されていない。43区の北端で集石遺構の一部が検出されたが、周囲は攪乱孔が多く入っており、層位が全

く不明である。仮に早期の集石遺構であったとしても、南側には伸びず、やはり丘陵頂部にむかって広がるようである。さらに北側の44区は全面にわたって攪乱をうけており実態はわからない。38区北・38区南では層中からは当該期の遺構・遺物の拡がりは認められなかったため、ここまでは広がっていない。同様に、東側の30区・26区・21区でも検出されていない。以上の調査結果から、43区から39区・40区へ「く」の字状伸びる丘陵上から西側斜面にかけて遺跡が広がっていると判断でき、39区・40区は一連の遺跡である。時期は、検出された土器から概ね押型文の時期と考えられる。

検出された遺構は、層の中程で検出されている。全て縄文時代早期の集石遺構である。遺物は層の下部から出土し始め、層中にもっとも多く含まれる。40区で1基、39区で12基を数える。集石遺構は、全て10cmから20cm程度の掘り込みが見られる。遺構内の礫は、円礫・角礫様々に多数混在している、直径1m前後のもの、ごく少数の礫から構成されている直径50cm前後のものが見られる。SX - 26・SX - 29・SX - 38など、大型で構成する礫の多い集石遺構の埋土は、橙色の焼土交じりの暗褐色土が混在している。それ以外の遺構の埋土には焼土交じりの橙色の土壌は含まれていない。

構成された礫は、現地での取り上げの際、磨石・敲石などの可能性がある円礫のみを選択して持ち帰っている。

持ち帰られた円礫は、接合作業を行い礫同士の接合関係を調べた。最初に遺構内で接合作業を試みた後、遺構間接合も行った。周辺の遺構外からは目立った円礫・角礫の検出はほとんどなく、掘り込みにもみ集中していたので周辺の遺物との接合関係は得られていない。

結果、一つの遺構内で構成する円礫同士で接合した例は8基を数えた。礫が割れる程の利用を想定できる。また、遺構間で接合した事例は39区のSX - 40とSX - 43、SX - 41とSX - 45の2例が得られ、一つの遺構が破棄された後、別の遺構で礫を再利用していることが確認できた。

持ち帰られた円礫にしか観察できていないが、これらの礫の表面が熱により激しく赤色に変化しているものはほとんどみられず、部分的に薄赤く変化しているものが少数みられる程度である。円礫を観察すると、敲打痕・擦痕などの使用痕跡はほとんどみられない。敲打によって衝撃で割れたとは考えにくい。しかしながらこれら円礫の割れ方は、厚さ5cmを超え直径10cm前後のものであり、物理的に割るにはかなりの労力を要すると思われる。にもかかわらず、そのほとんどが2分されている。表面が薄く剥落したように割れているものはみられない。割れ面にも僅かながら赤変しているものも見られ、割れた後にも熱を受けていたと考えられる。熱を受けたことで円礫が割れた可能性はあるが、石の表面が直接火を受けて焼けて赤くなったとは考えにくい。実際に熱を激しく受けても、赤く焼けるとは限らず、またそれが肉眼で解るには限界があるのかもしれない。若しくは直接火を受けず、蒸し焼き状に熱を受けたりした場合も想定できる。何れにせよ、何パターンかの実例をもとに解釈を進める必要があるだろう。

類土器（押型文系土器様式）：遺構周辺で検出された遺物のうち、土器はそのほとんどが押型文である(27～35)。一部に撚糸文・縄文(36～41)も見受けられるが、量は少ない。復元によって、完形品は得られなかった。押型文には格子目・楕円・山形押型文で構成され、撚糸文も含めて口縁部内面に施文帯が見受けられる。内面施文は、原体条痕文・押型文のほか、撚糸文による施文も見られる。外面の施文方向は横位に施されたものがほとんどであるが、撚糸文には縦方向の施文も見られ(38・40)、出土した土器に時期差が認められる。但し、それ以外の早期の土器型式は全く出土していない。検出された押型文土器のピークは、層の中程の遺構検出面とほぼ同一面である。

出土した石器のうち、磨石・敲石は、遺構内の円礫の一部見られる他、周辺ではほとんど出ていない。台石の存在も、大型の角礫を現地から持ち帰っていないので断定できないが、やはり確認されていない。僅か

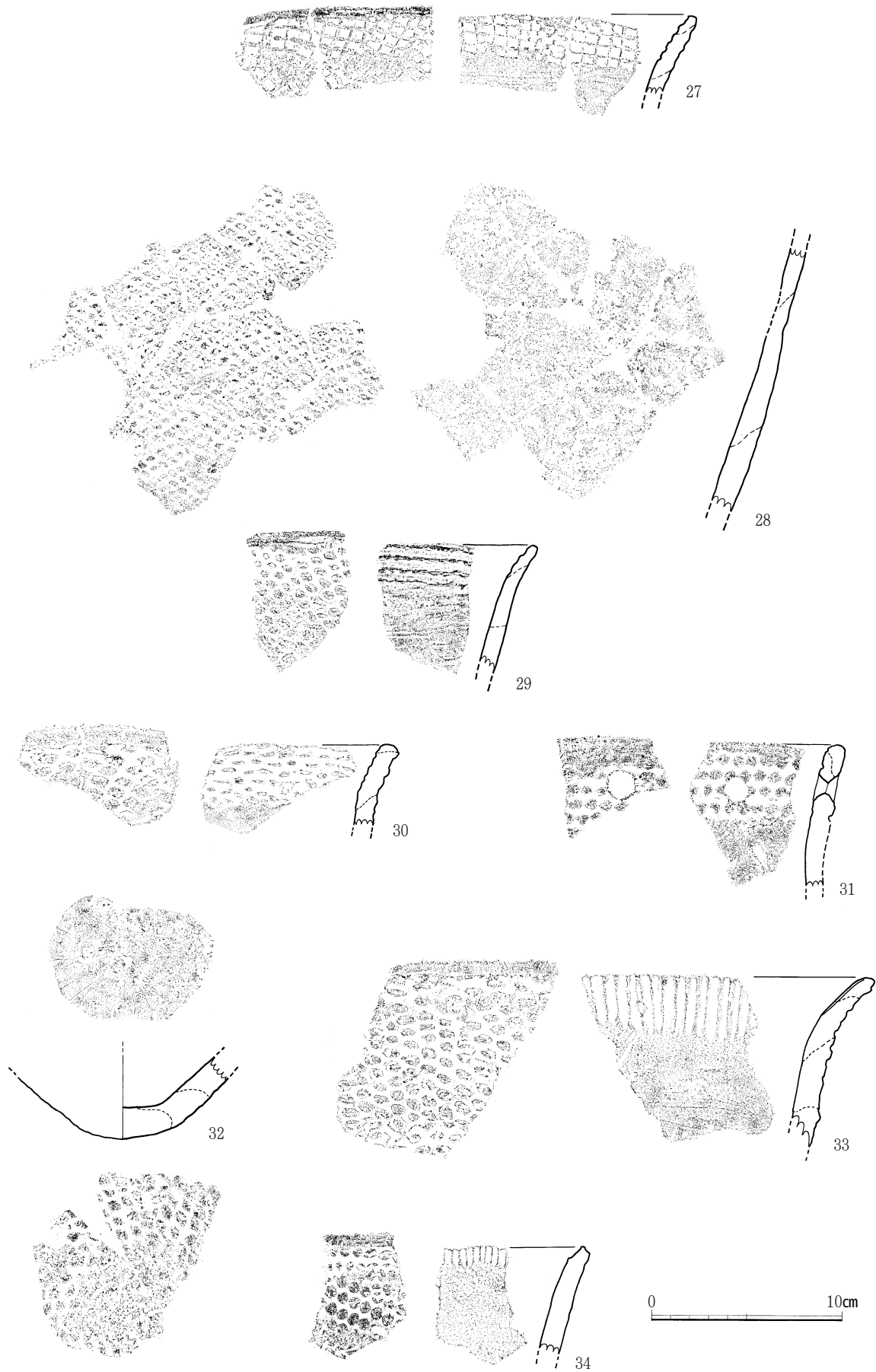


Fig.17 39・40区出土 類土器実測図

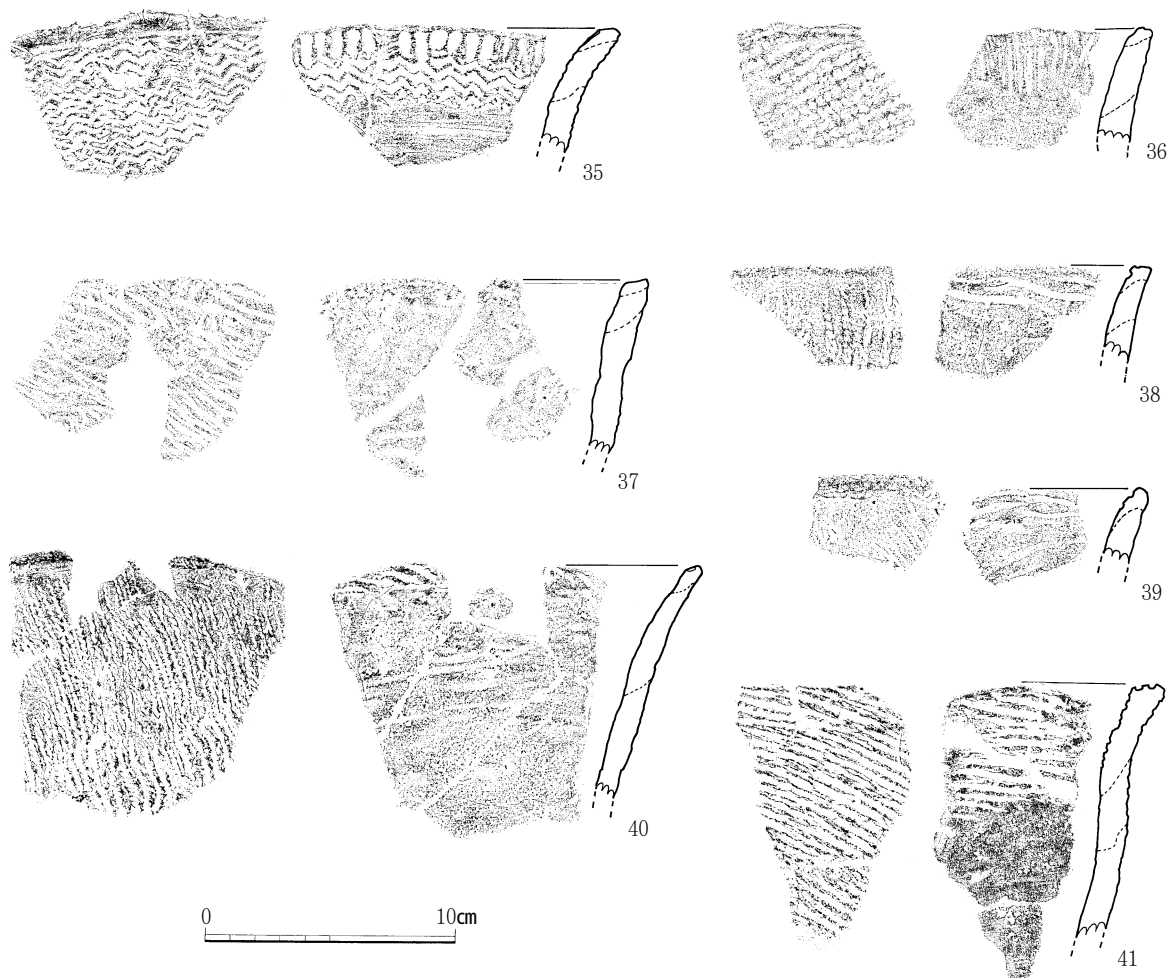


Fig.18 40区出土 類土器実測図

に小型の敲打痕を持つ敲石（50）が見られる。

検出された石器のうち石鏃は黒曜石製（45）チャート製（49）の他は、サヌカイト質の安山岩製が主体を占める。ほぼ三角形を呈する脚部のない、薄手のものと、太い脚部が作り出された比較的大型のものが見られる。

このほか、石の本遺跡群の旧石器時代でもその使用が特徴的な、多孔質安山岩の類を使用した石器（51・53）も確認できる。このうちの51は、かなり大型の転礫から剥離された大ぶりの剥片である。風化が激しく、表面は粉を吹いたようになり柔らかくなってしまっている。8区 層の旧石器時代の遺跡で検出された石器の石質分類で言えば、2番目出土量の多かったB類（石の本遺跡群 参照）に相当する。

53は、石核を転用し、両面加工を施したチョッピングツール状の石器である。同じく8区 層の旧石器時代の遺跡で検出された石器の石質分類に従うならば、最も出土量の多いA類に相当する。

52は、緻密な良質の安山岩製の二次加工剥片である。表面側の上下両側面に小剥離痕状の刃部作出を施している。石匙的な使用が考えられる石器であろう。

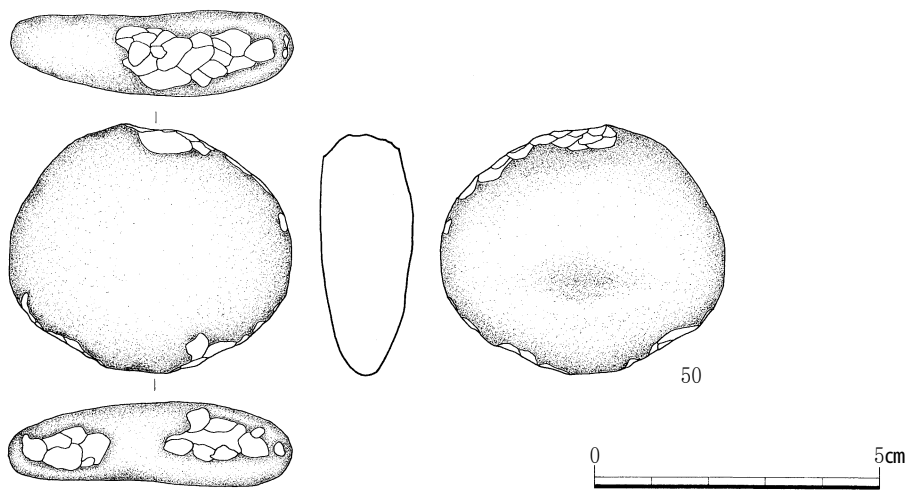
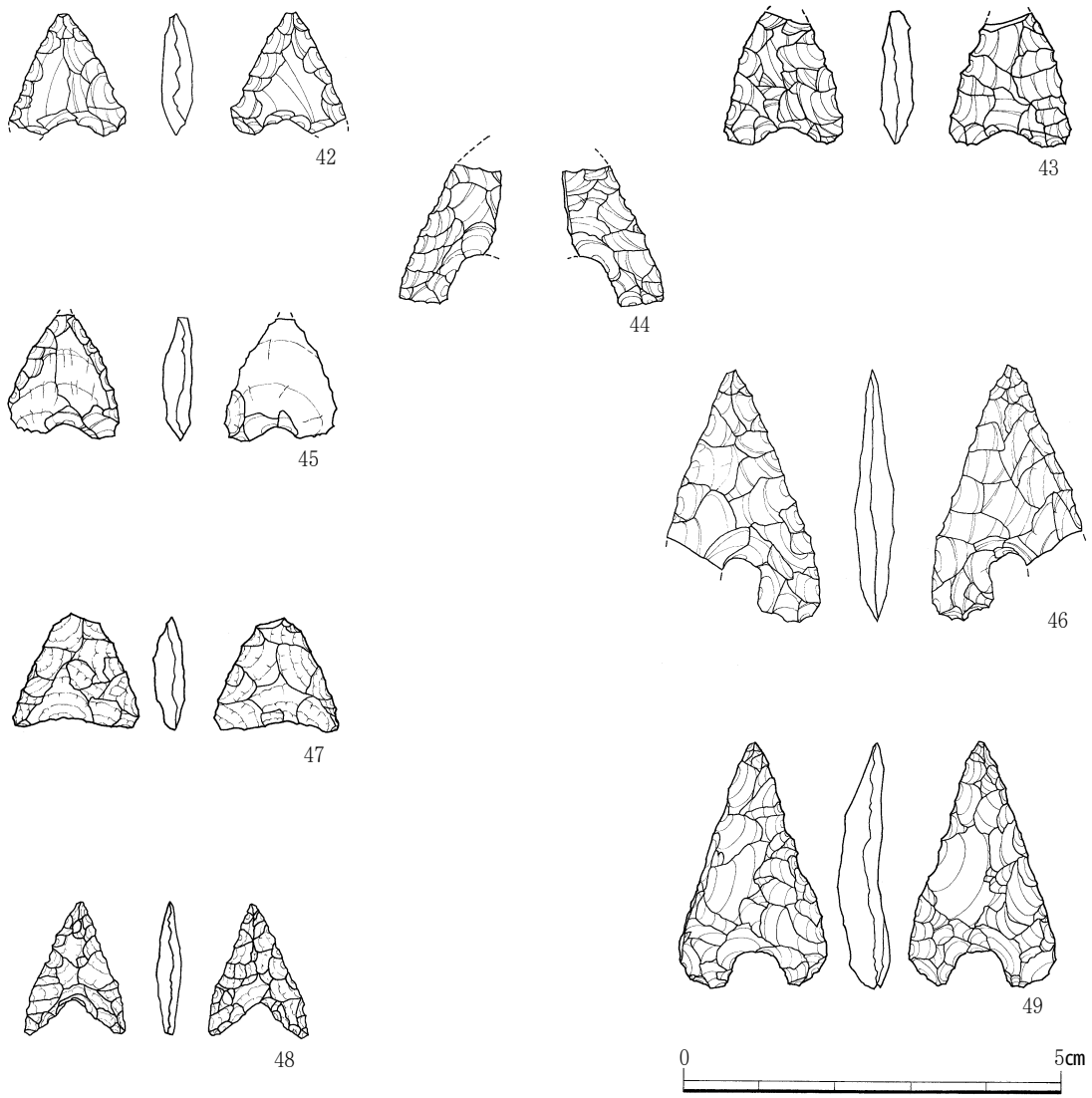


Fig.19 39・40区出土石器実測図(1)

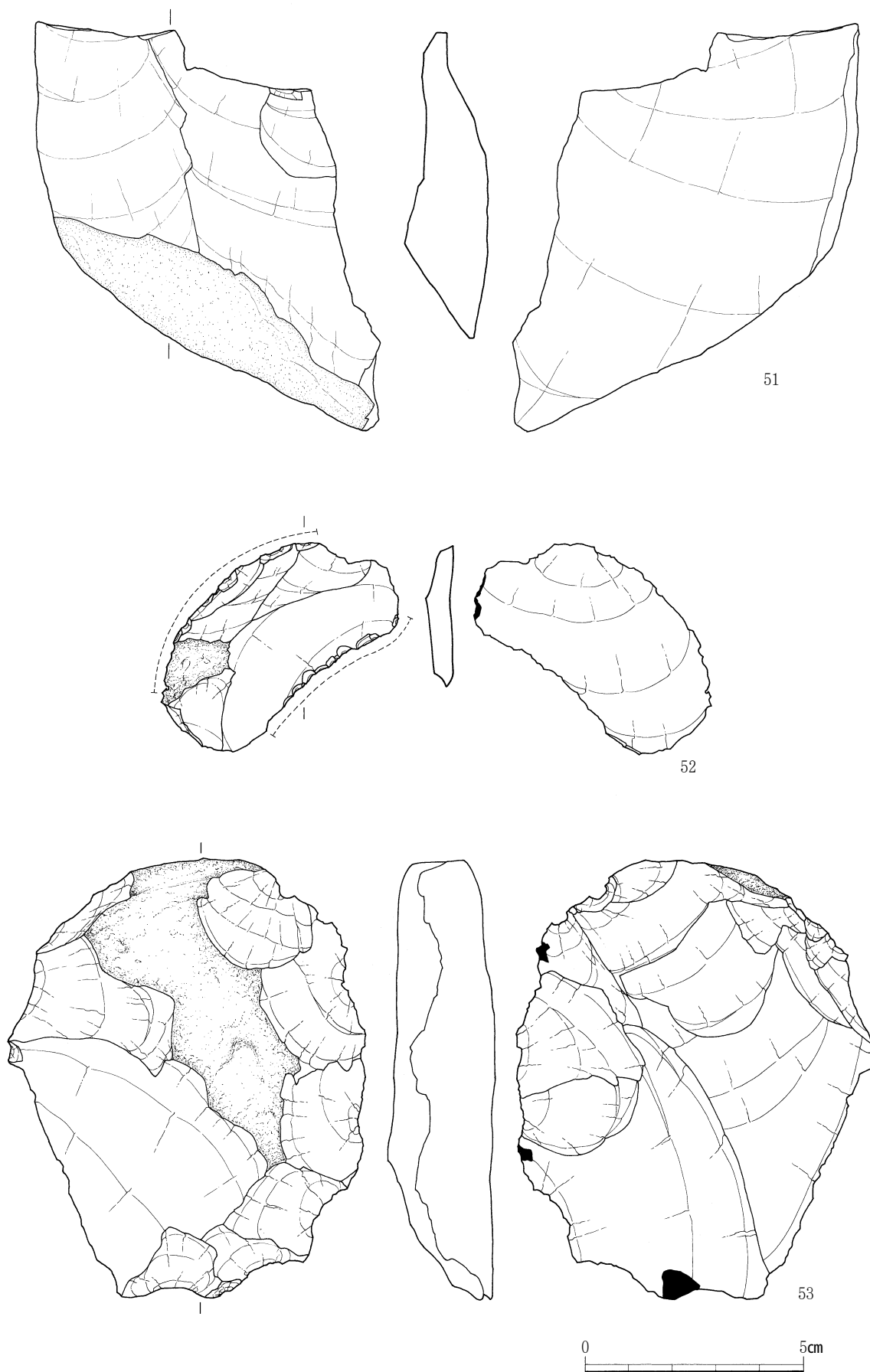


Fig.20 39・40区出土石器実測図(2)

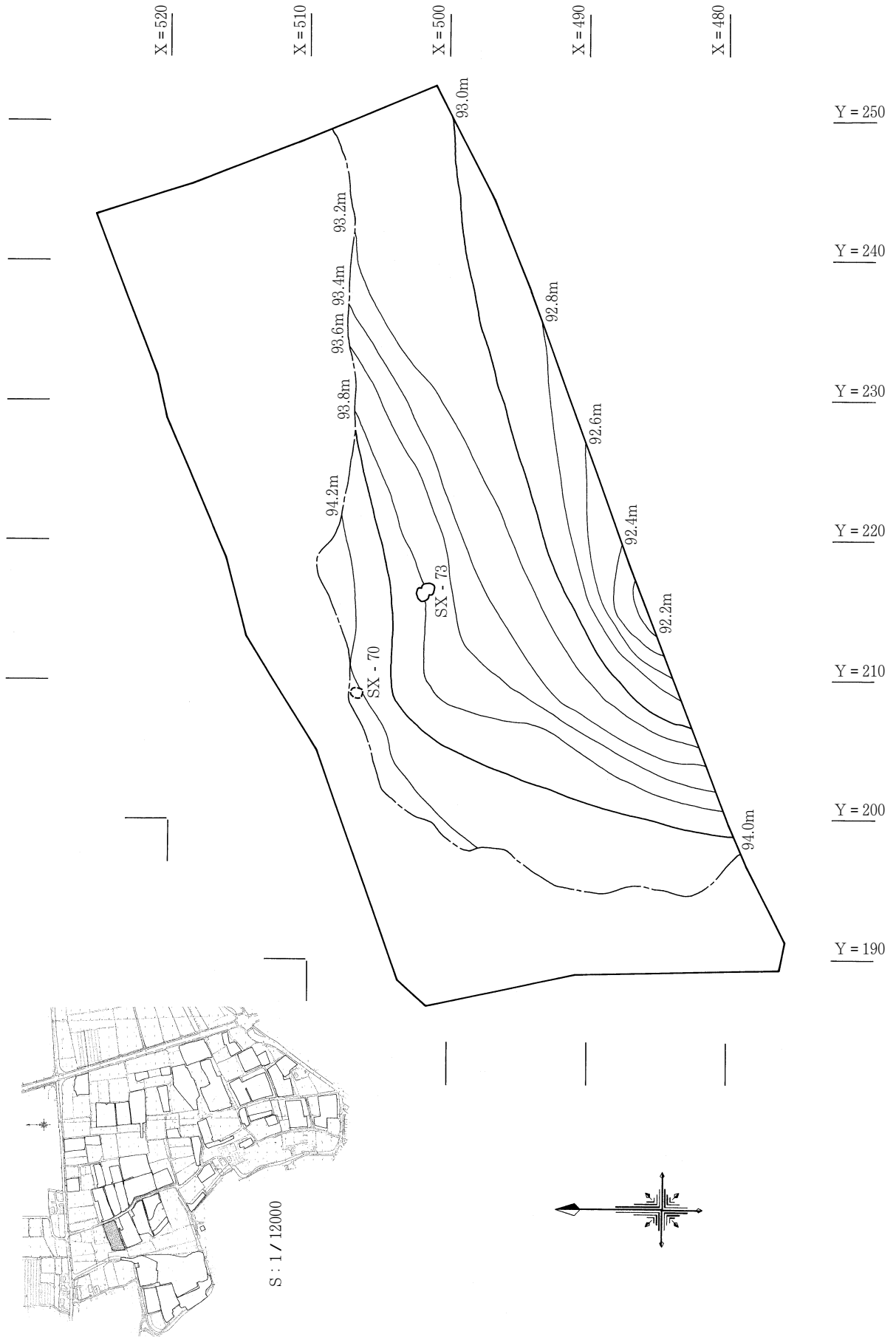


Fig.21 50区 層遺構配置図 S : 1 / 400

50区 (Fig.21~23)

標高約93~94m付近の南側に下る斜面に立地している。小山山の東側山腹にある52・53・54・55・56区の各調査区(字石の本の範囲)を除けば、最も標高の高いところにあり、石の本遺跡群の中では、一番白川よりの河岸段丘の最上部にあたる。調査区北側の大部分は既に削平され、層のローム層以下、さらに下の層までが露出している。

50区のすぐ北西側の調査区で確認調査を行った際、表土下からすぐに阿蘇の未溶結凝灰岩が検出されていた。このことから、小山山の丘陵の一部が河岸段丘に沿うように、東に向かって53区の北側から50区の西側にまで伸びていたと推察している。53区の北側は、発掘調査時安山岩質の巨石群(石の本という地名の由来である字石(アザナシ)があった所、石の本遺跡群 参照)が露出していたあたりで、層の託麻砂礫層の一部までが露出していたと考えられる。

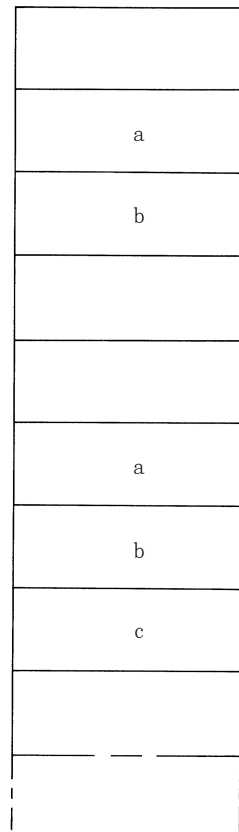
また、調査区のほぼ中央から南にむけて下る小さな谷は、さらに南下し49区・46区・47区を巡って、小山山の山裾の谷へ合流するものと考えられる。

検出された遺構は、層をやや掘り下げた下面で検出されている。集石遺構と考えられるSX-70・SX-73の2基が検出されている。詳細な時期は不明であるが、縄文時代早期であることは間違いのないであろう。この集石遺構を含む、同時期の遺跡の広がりを得られた調査成果から描いてみることにする。

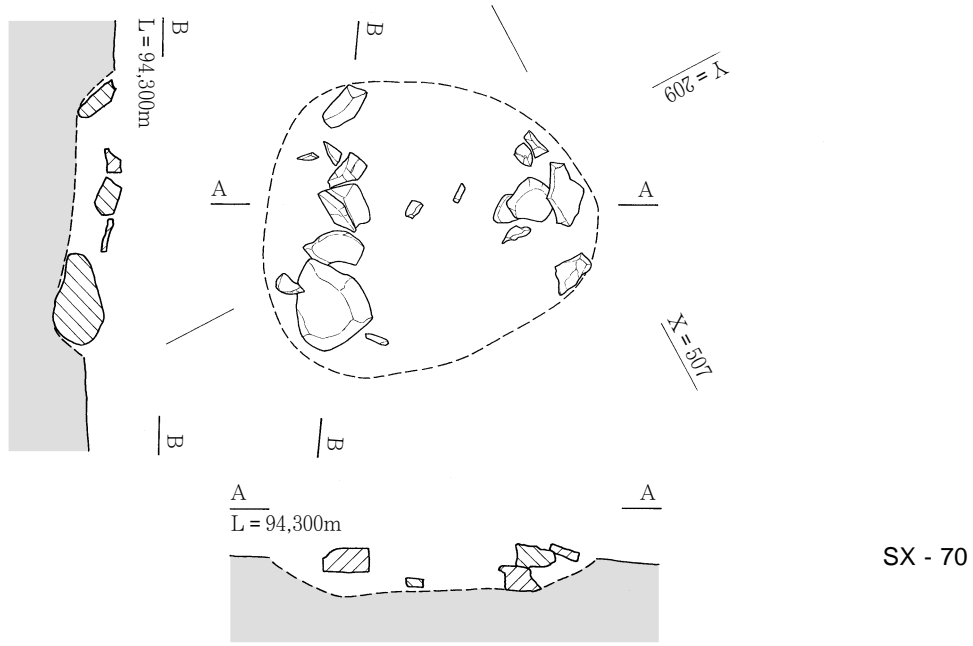
まず、本来丘陵斜面であった調査区の西側の53区は、上層が削平された現在でも比高差5m以上あり、かなりの急斜面であったと思われる。包含層の中には、層中の縄文時代早期の遺物は全く含まれていない。推測の域を出ないが、以上のことから53区から50区の斜面では当該期の遺跡は拡がらないと考えられる。一方、南側の49区・47区では層中からの遺構・遺物は検出されていない。但し、層の遺物包含層には押型文系の土器がふくまれており、東の字石の本側の調査区、若しくは本調査区の遺物が流れ込んだものと見られる。また、西側の近接した調査区である45区・44区では、遺構・遺物ともに検出されておらず、遺跡の拡がりは確認できない。

以上のことから、唯一遺跡の拡がりが推定できるとすれば、白川よりの河岸段丘の最上部となる50区の北側から北東方向にかけての丘陵上である。しかしながらこの北側の一帯は、確認調査の時点で表土層のすぐ下層が層以下のローム層であることが判明しており、広範囲にわたって畑の耕作により削平を受けていたことが判っている。発掘調査時の状況では、遺跡の境である北側の道路面とほぼ同じレベルまでカットされていた。その範囲は50区・45区・38区北の各調査区の北側から、36区の調査区西側にまで及んでいる。37区も全面にわたって削平を受けていたが、この範囲だけ一段高くなっており、層の下面がかるうじて残存していた。但し、37区では縄文時代早期の遺構・遺物ともに検出されていない。従って、50区に残存する遺跡の拡がりは、調査区北東側のごく限られた範囲(45区以西)ということになる。

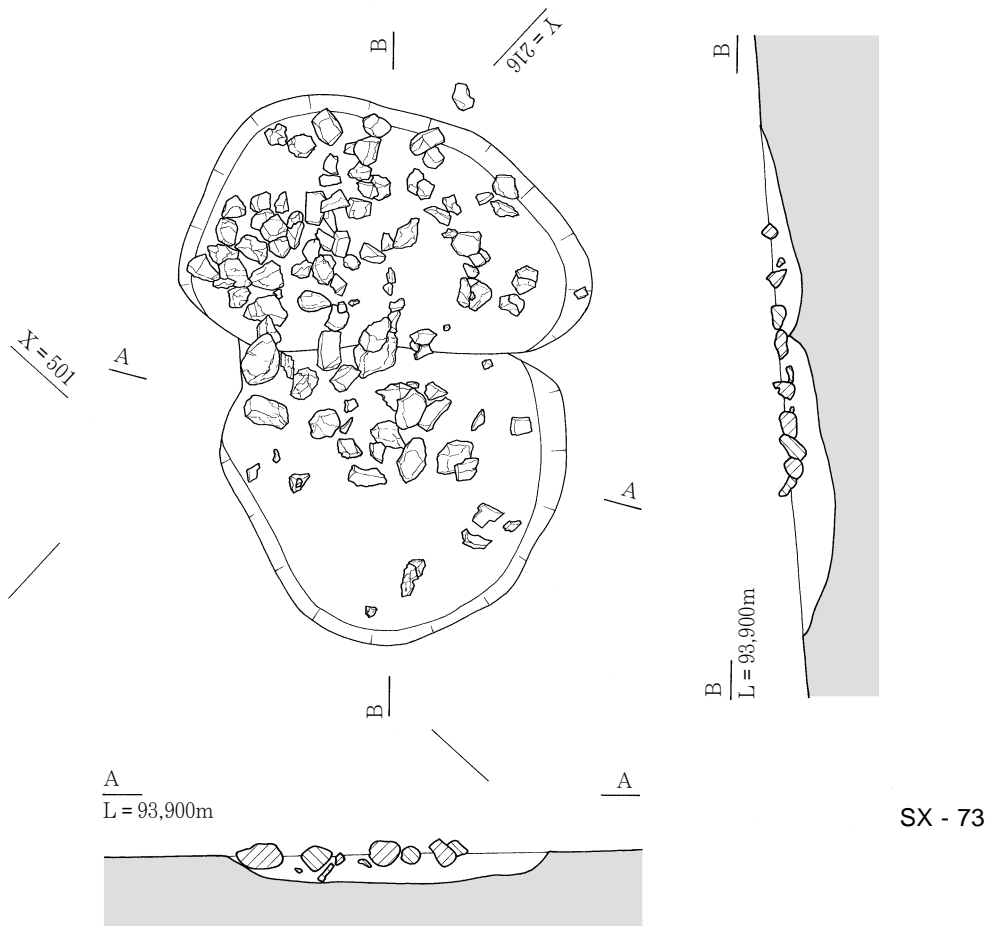
集石遺構は、こうした南西側に下る斜面上に築かれていたと考えられる。集石遺構を構成する礫は、39・40区の調査の時と同様に、現地で選別され円礫のみを取り上げるよう試みられている。角礫・円礫が混在する状況であったが、円礫の中には磨石として利用されたものが含まれていた。ここでも破碎した円礫同士で接合資料が得られるか試みている。結果は円礫同士の接合資料はここでは得られなかった。また遺構間でも同じく接合資料は得られていない。遺構



50区土層柱状図



SX - 70



SX - 73

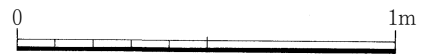


Fig.22 50区集石遺構実測図

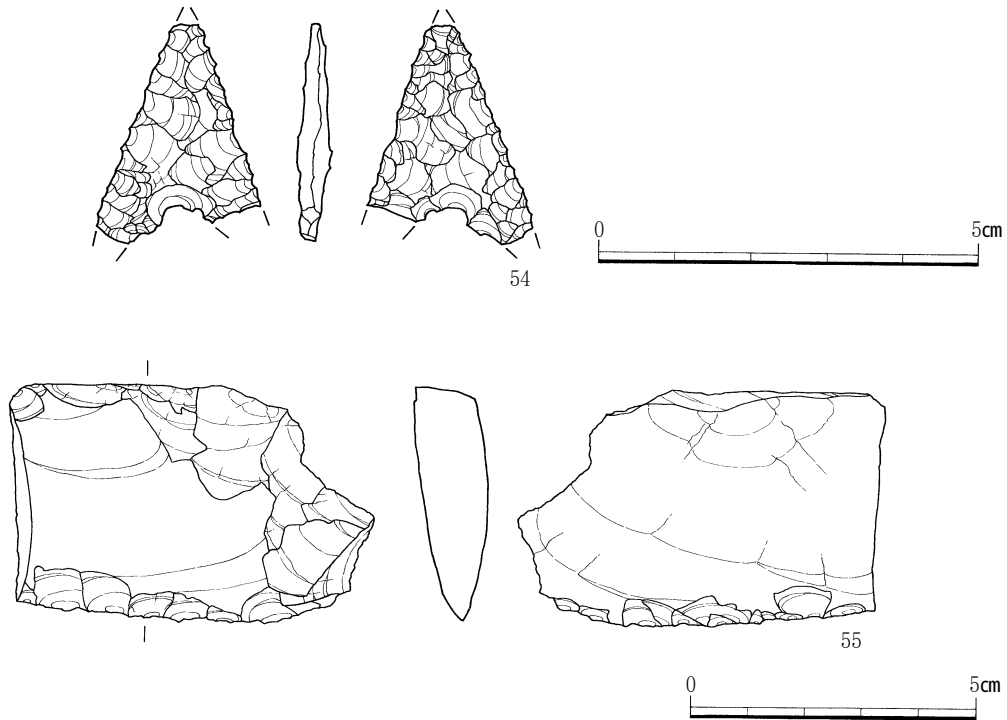


Fig.23 50区出土石器実測図

の埋土は暗褐色土で、焼土等の粒子は含まれていなかった。SX - 73は、掘り込みを二つ持っており、本来は2基の集石遺構と考えられる。角礫を対象に接合作業を行っていないので推定になるが、礫の同一個体が破碎された状況が考えられる。円礫には熱によって赤く変化したもの、炭化物が付着していたものは見受けられなかった。遺構の周辺では角礫など、礫が点在していたがそれほど多くは無い。使用されたものも含まれるかもしれないが、53区からの自然礫の崩落も考えられる。本調査区の 層中からは石器が検出されていないので、詳細な時期の比較は不可能ではあるが、規模・構成される礫の性格から39・40区の押型文土器様式に伴う集石遺構に酷似している。

石器は、磨石以外では僅かながら出土している。54は黒曜石製の石鏃、55はサヌカイト質の安山岩製の二次加工剥片である。剥片の縁辺に両面加工を施し石匙としての機能を持っている。

17区 (Fig.24~37)

17区は、河岸段丘から南へ下る埋没谷が調査区のほぼ中心に入っている。この埋没谷は、31区・32区を通り、25区南・16区・17区をさらに南下して13区・9区の各調査区のほぼ中央を巡り、やや南西方向に向きをかえて8区の東端から5区の中央を下ることが発掘調査によって判明している。

また、17区のすぐ西側には「鏢山」と呼ばれる、標高約85mほどの小高い丘が存在する。丘自体はすでに削平を受け、山頂付近では基盤層と見られる岩盤が露出しており、発掘調査対象外の地点である。20区・22区・64区はこの丘の山裾にあたり、崩落した基盤の岩の一部が 層から 層にかけて散見できる。

特に17区東側への崩落が激しい。調査区の中央をほぼ南北に走る埋没谷にむかう東側斜面のほぼ全域にわたって、岩盤から薄く剥がれるように崩落し、粉々になった角礫が覆っていた。この岩盤から崩落した角礫はさほど大きなものではなく、拳大から人頭大程度にまで崩れてしまっている。

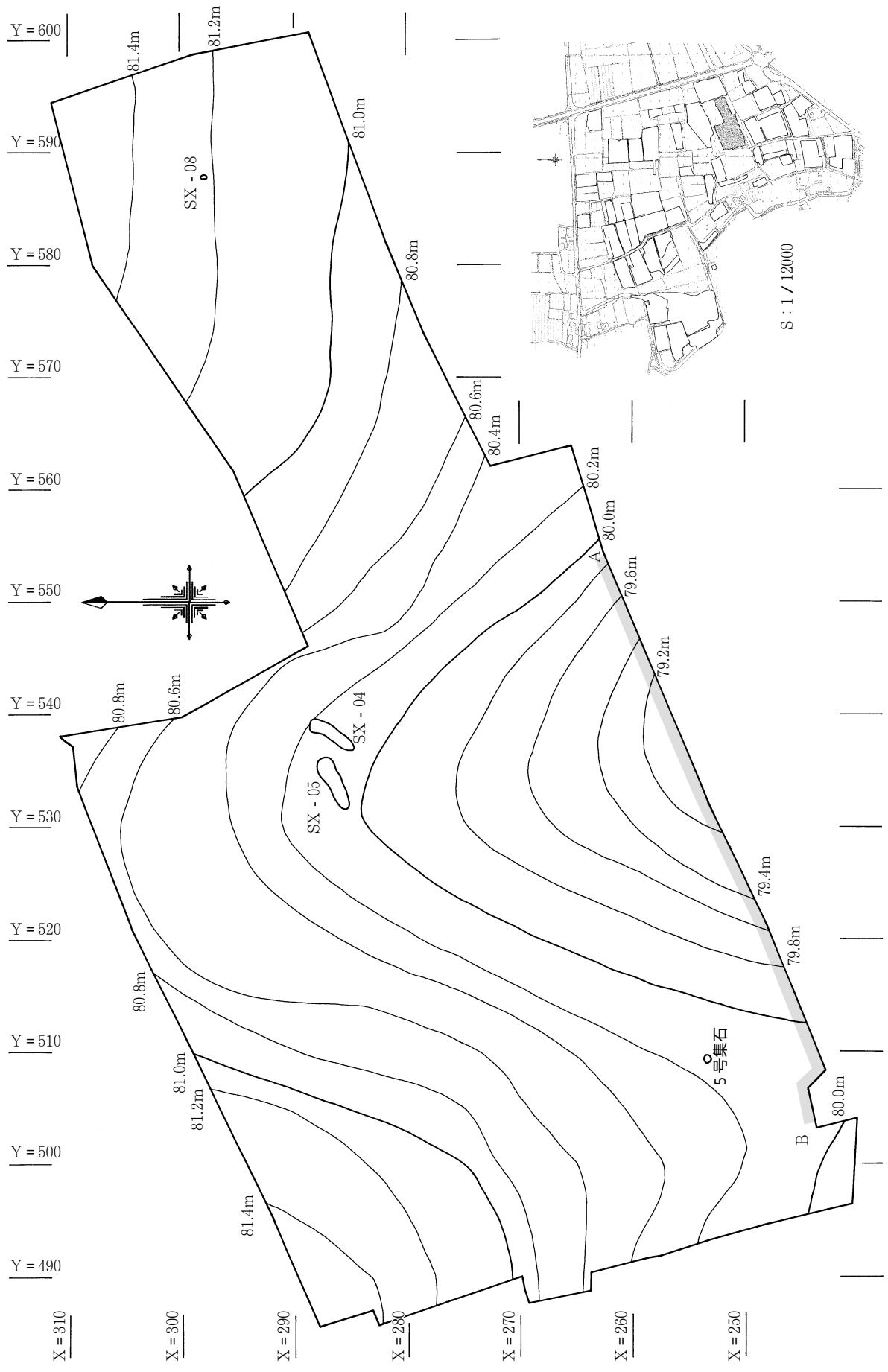


Fig.24 17区 層遺構配置図 S : 1 / 500

「鏝山」自体は、39・40区で認められた、白川の河岸段丘から伸びる丘陵の一部の末端に位置する。この丘陵は、「鏝山」のさらに南へ伸びており、11区・8区の各調査区を下っている。本来の「鏝山」の形は、南北に細く伸びた形状であったと考えられる。

基本層序は、層がクロボク層の a層と、層との漸移層である b層に分けられる。層・層は基本的に1枚の土層として捉えられるが、調査区中央の埋没谷付近では、層・層が各々2枚に分層することができた。埋没谷付近の層は引き締まる土質ながら、色調から層との漸移層と考えられる a層と、アカホヤの二次堆積土がまとまって見られ色調が最も明るい橙色の b層に分かれる。また、層はこの b層との漸移層である a層、層本来の土質であるクロニガの土質が確認できる b層に分かれる。層は、ニガシロ層の堆積が薄く、始良 Tn火山灰が含まれている a層と、層との漸移層である b層の2つに分層して確認できる。暗色帯は b層の上部に存在すると思われるが、肉眼観察では不明である。

鏝山から流れ込んだ角礫は、層から層にかけて多く流れ込んできていた。その多くは拳大から人頭大の大きさで、節理が多く入る赤褐色の礫である。層中にはこの角礫は基本的に混入していなかった。

また、層中には大量の円礫も伴って検出されていた。この円礫は場所によって密度が異なり、折り重なっている部分も認められた。集石遺構の可能性も考えられたが、落ち込み等は見られなかった。円礫中で擦痕・敲打痕がみられたものは、磨石・敲石として抽出している。この礫群の出土状況は、Fig.36・37に概況を示した。a層若しくは層上面からは縄文後～晩期の土器のほか、早期の土器も一部混在して出土している。早期の土器の一部は、13区で検出された層中の早期の土器とも接合しており、かなり流れ込んでいる。

b層若しくは層下面からは、比較的まとまって早期の土器が検出されているが、後～晩期の土器も一部混在していた。

層上面で縄文時代後～晩期の遺構を検出した後、層を掘削し、層下面の礫を除去した。その後、縄文時代早期の土層と考えていた、層上面で遺構検出を行っている。この面で検出された遺構は、集石遺構1基、炉穴2基、土坑1基である。集石遺構と見られた遺構は、前述の礫群のなかにも多数みられた。しかしながら掘り込みを持たず層中で検出されたものであったため、遺物包含層中の遺物として扱い、遺構とは判断しなかった。最終的に層上面(a層)から掘り込みが確認された5号集石(Fig.27)のみを縄文時代早期の集石遺構と捉えるに至った。同様に、SX-04・SX-05・SX-08についても、層上面(a層)からの掘り込みを確認している。またこの面では、類土器の集中が別地点で認められた(Fig.32・33)ほか、黒曜石の碎片が集中する地点もあった。

SX-04、SX-05は、埋没谷の中央に位置しており、上層の礫群とは分布域が異なる。

SX-05(Fig.26)層を全て除去した直後に遺構として確認できた。既に焼土と見られる赤色粒や炭化物が散見されたところから、上部構造が削平され底面が残っている状態と考えられる。検出時、炭化物を多量に含んだ暗褐色土が見られた。炭化物の多くは、北東端のやや幅の広い部分と、南西端のやや深い掘り込みに集中して認められた。この特に集中して炭化物が認められたところは、3～5cm角の炭化材が残っていた。遺構の中央で掘り込みが浅い部分には、焼土が特に集中していた。

埋土1層：暗褐色土、多量の焼土、炭化物を含む、粘性の低い土質。

埋土2a層：褐色土、やや粘性を帯びた土質に少量の焼土、炭化物を含む。

埋土2b層：黒褐色土、僅かに炭化物を含み、基本土層層の土質に似る。

SX-04(Fig.26)SX-05と同様に、層を全て除去した直後に遺構として確認できた。焼土と見られる赤色粒や炭化物が散見されたところから、やはり上部構造は削平されていると考えられる。炭化物の多くは北東端の土坑状の落ち込みで多く検出された。

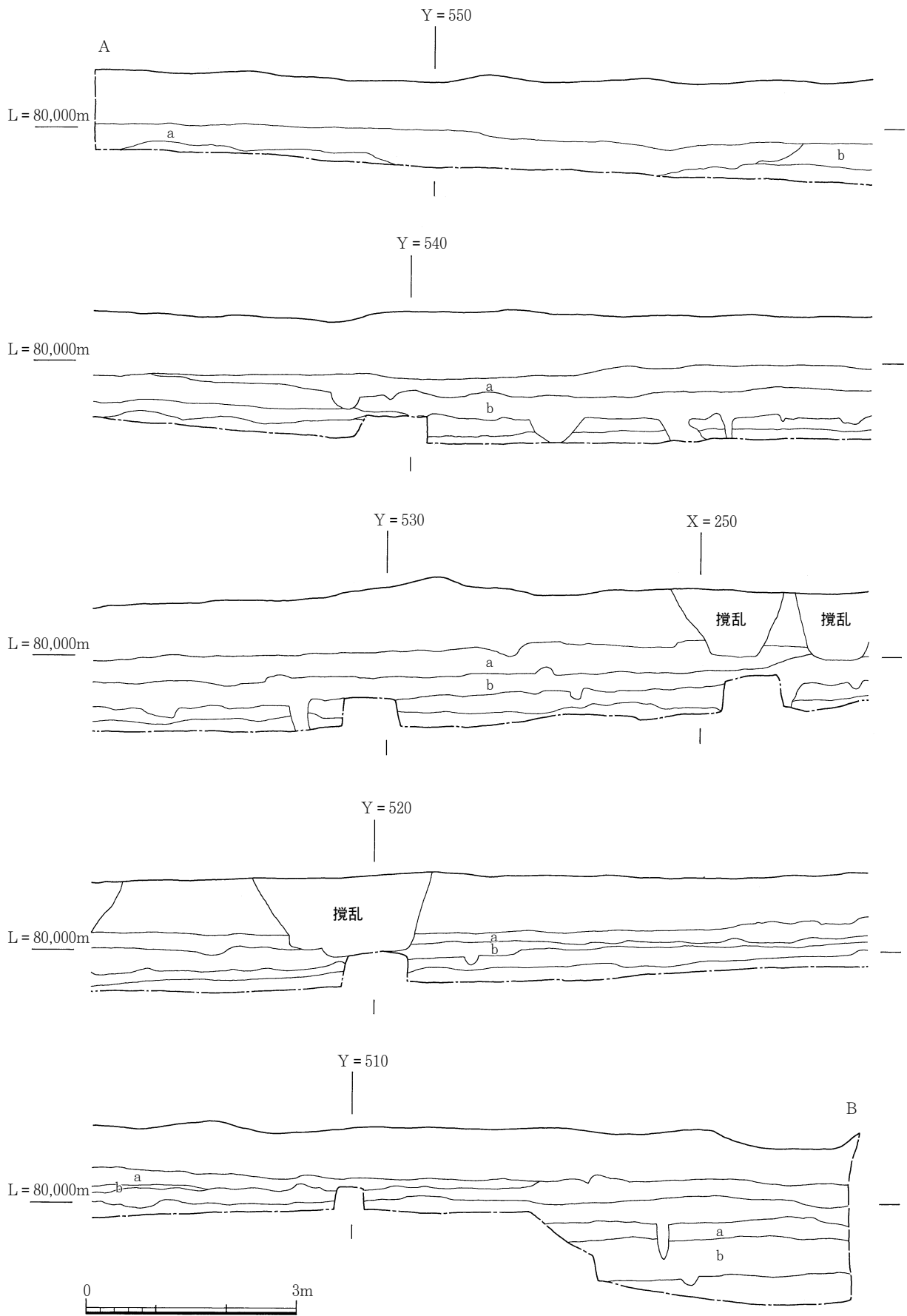


Fig.25 17区土層図

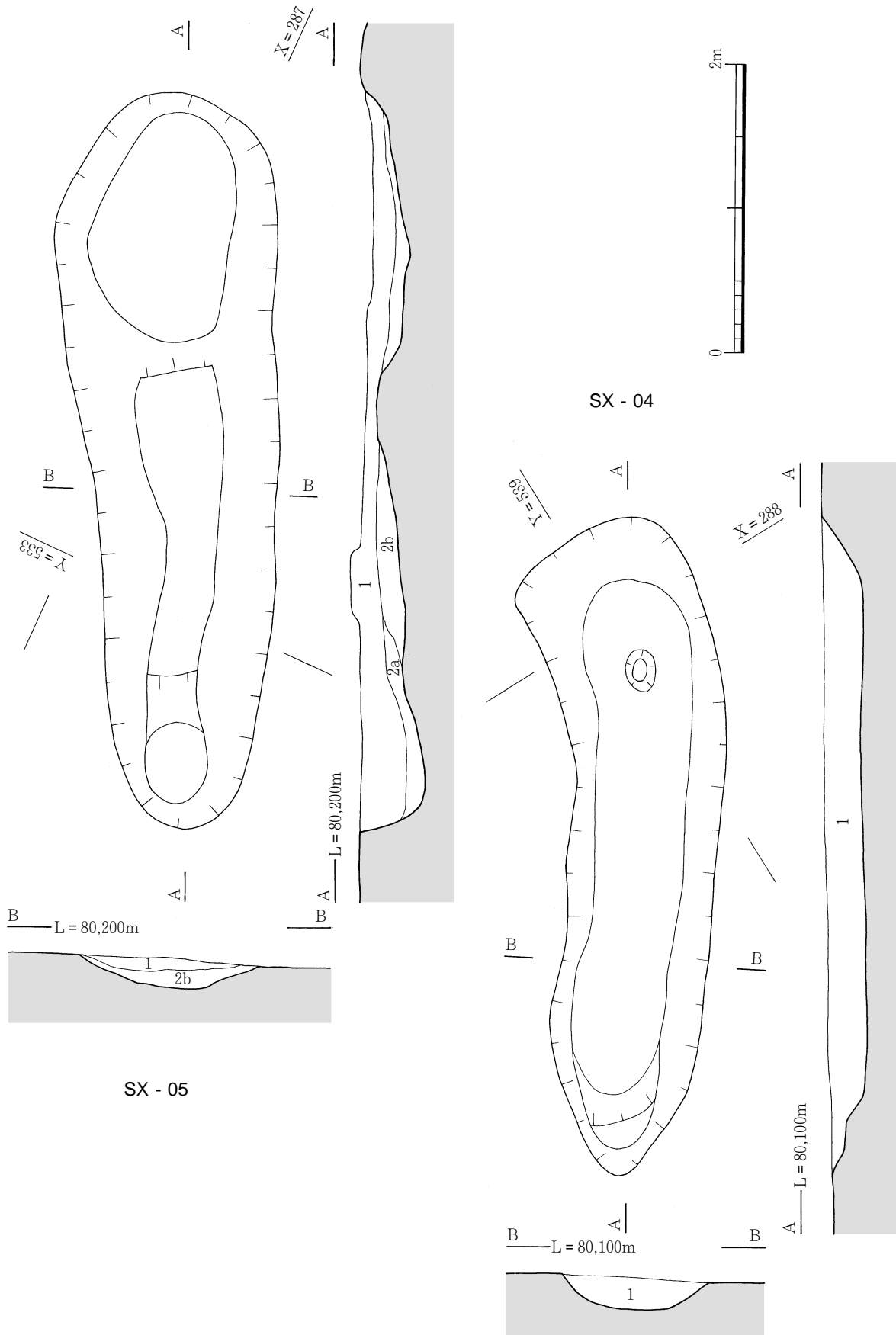


Fig.26 17区炉穴実測図

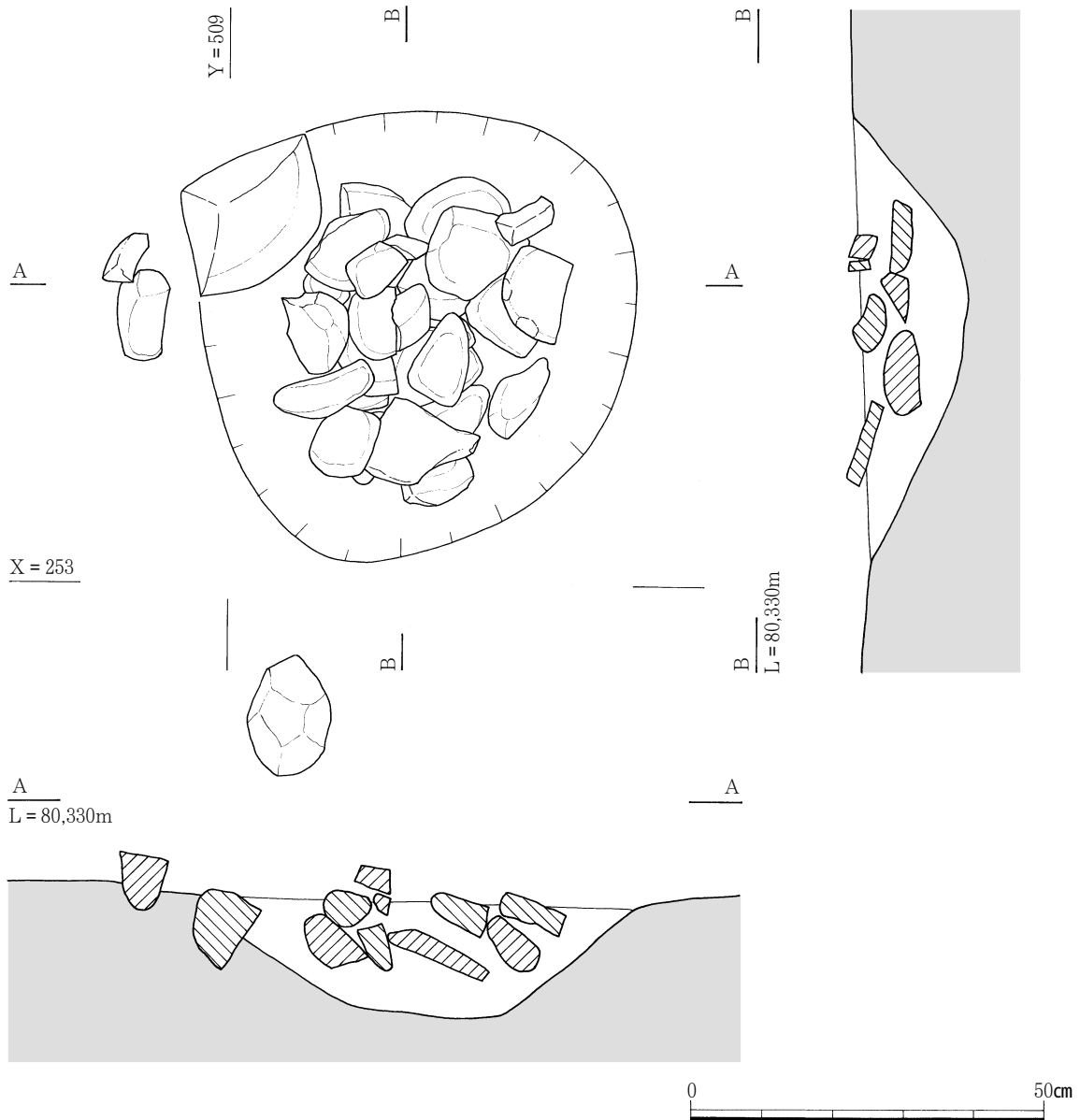


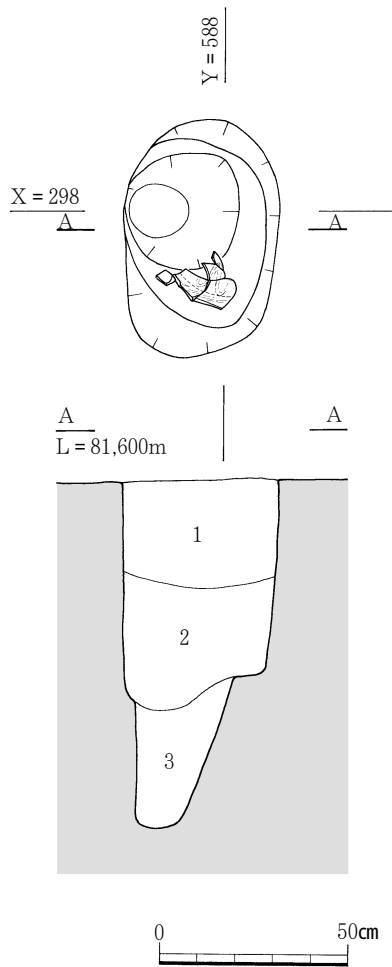
Fig.27 17区5号集石遺構実測図

埋土1層：焼土を多量に含む。炭化物は多くは見られない。

埋土2層：明褐色土、焼土、炭化物を少量含む。北東端、南西端の遺構の幅が僅かに広がる部分の床面にかろうじてみとめられた。

この2基の遺構は、何れも遺構の中央が浅く盛り上がり、両端が土坑状に落ち込みを持つ。炭化材が集中して見つかったのは、何れも北東端と南西端の土坑状の落ち込みである。特に比較的広い北東端の落ち込み側では、炭化材の残りが良く、炭化材を除去すると激しく焼けた床面が認められた。菊池郡大津町瀬田裏遺跡、上益城郡嘉島町櫛島遺跡で多く検出されている、縄文時代早期の炉穴と考えられる。炭化材以外に遺物は含まれていない。

5号集石遺構磨石を含めた、円礫で構成されている。礫同士の接合作業を行っているが、接合例は得られなかった。熱によって、表面が赤く変化したものもあるが、ごく一部の礫で部分的なものである。炭化物、焼土は検出されていない。



SX - 08 (Fig.28) 柱穴状に落ち込みが認められた。焼土、炭化物とも検出されておらず、遺構の性格は不明である。

埋土1層：褐色土に暗褐色土の土を含む。粘質の少ない土質である。

埋土2層：暗褐色土にややクロニガ（層下面）のブロックを含む。

埋土3層：黒色土に少量の砂質土を含む。基本層序 層の土質に近い。

埋土2層と埋土3層の境から 類土器 (Fig.28下) を検出している。

出土遺物 (Fig.28 ~ 31、Fig.34・35)

層から 層上面にかけて大量の石器が出土している。その多くは磨石・敲石の類である。土器は、層中で複数の型式が混在して検出されている (Fig.95 ~ 100)。層下面から 層上面にかけて 類の貝殻文系土器群が纏まって出土しているのほか、層下面からは 類の押型文土系土器が出土している。

貝殻文系土器群 (Fig.28 ~ 31)

層から 層上面にかけて (Fig.32・33)、円礫や石器と共に混在して検出されている (Fig.36・37)。出土範囲は、埋没



Fig.28 17区SX - 08土坑実測図及び出土 類土器実測図

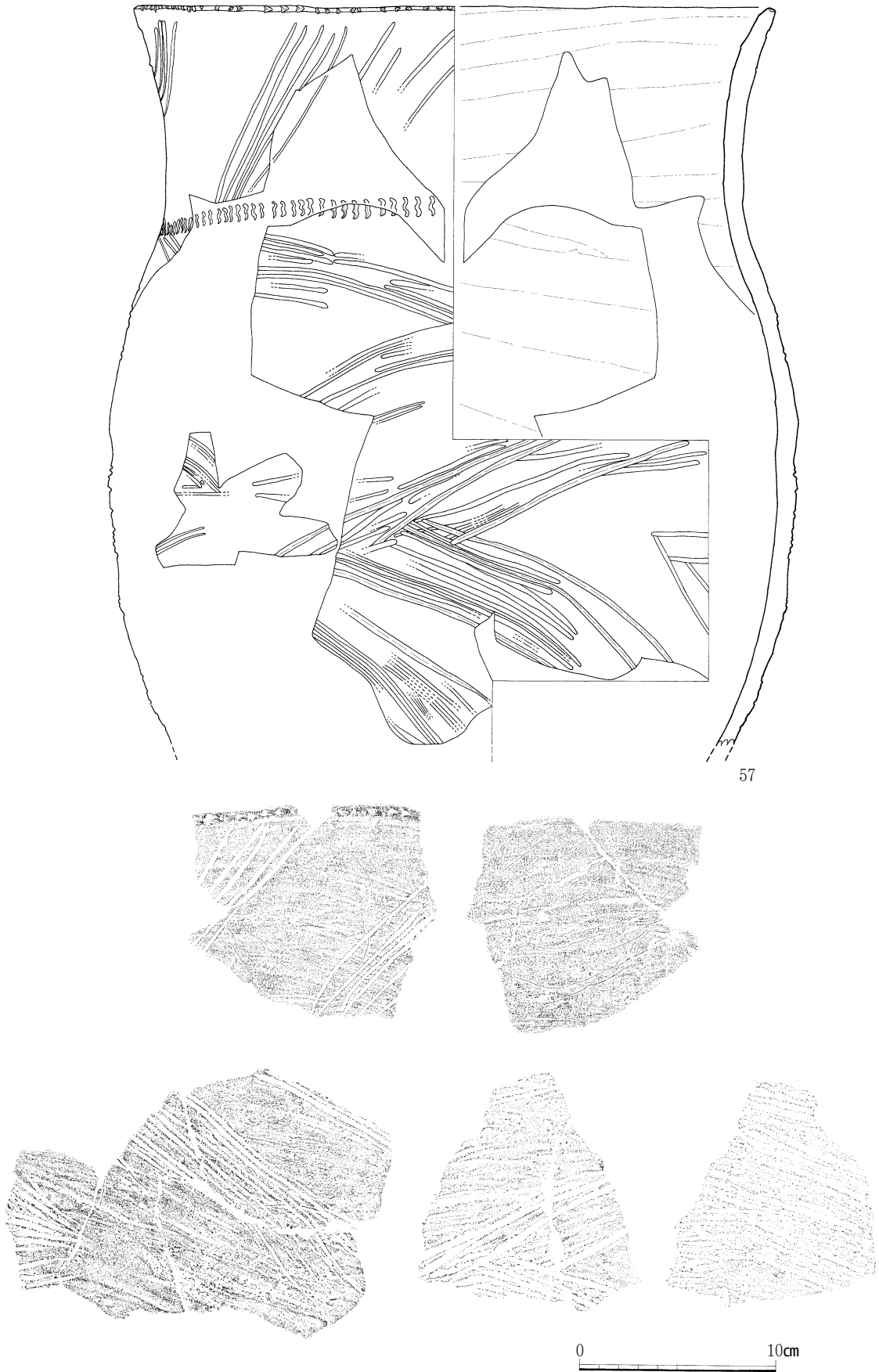


Fig.29 17区出土 類土器実測図(1)

谷を境にして西側斜面に広く散逸している。完形復元が出来た1個体(57)の出土範囲を抽出したが、同様の傾向が窺える。5号集石遺構は一部出土範囲と重なるが、同時期のものかは判断できない。この時期の遺構の可能性があるものは、埋没谷を挟んで調査区東側のSX-08である。

56 2~3条程度の細かな貝殻復縁を原体に使用している。口縁部には横方向、胴部は波状の施文を行う。

57 内面はケズリ気味のナデ調整が顕著に見られる。二枚貝の復縁の2条程を施文具にして、口唇部及び頸部に刺突文を施している。胴部の格子目状の施文には同じく2条程度の貝殻復縁が利用されている。口縁部外面の斜方向の沈線文は一本一本独立した施文で、先の円い棒状施文具によるものである。

58・61は、貝殻以外の施文具による刺突文を巡らしている。61・62・63・64・67は、緻密な調整を行い、器面も磨かれたように滑らかである。一方、60・68は、器面調整が粗く拓本時に、多量の水分を吸い込むほど、吸湿性の良いものであった。機能による使い分け、あるいは精製と粗製土器としての差があるのだろうか。また、68は隣接する13区の土器と接合している。

石器 (Fig.34・35)

69 黒曜石製の石鏃である。西北九州が産地と思われる良質の黒曜石を使用している。素材の剥片の剥離面をほとんど残さず、脚部から先端部への加工が顕著に見られる。

70 安山岩製のスクレイパーである。多孔質の安山岩を使用している。素材の打面部以外の周辺を念入りに刃部作出を行っており、ラウンドスクレイパーに近い形態と成っている。

71 サヌカイト質安山岩を利用した石匙。素材獲得時の主要剥離面側の打点をそのままに残し、打面側からの調整を行ってつまみに相当する突起を作出している。

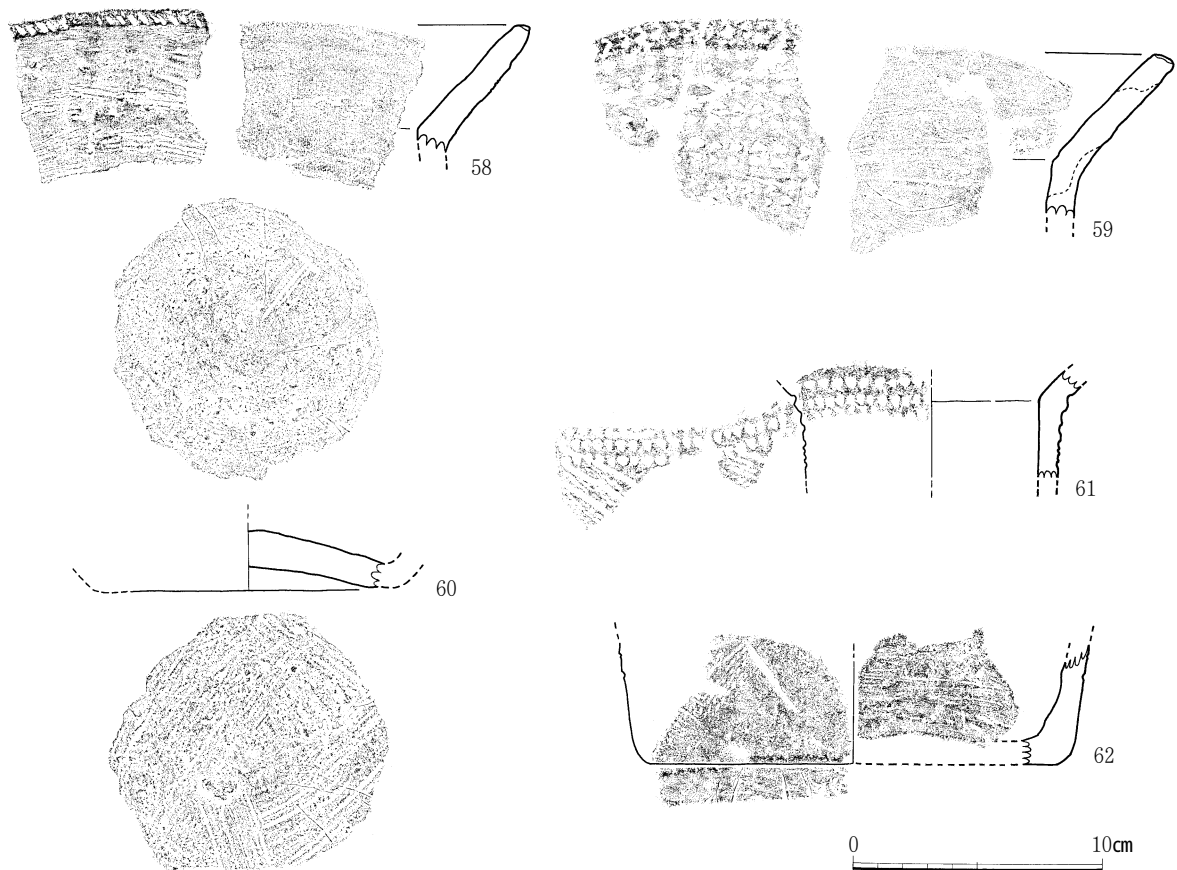


Fig.30 17区出土 類土器実測図(2)

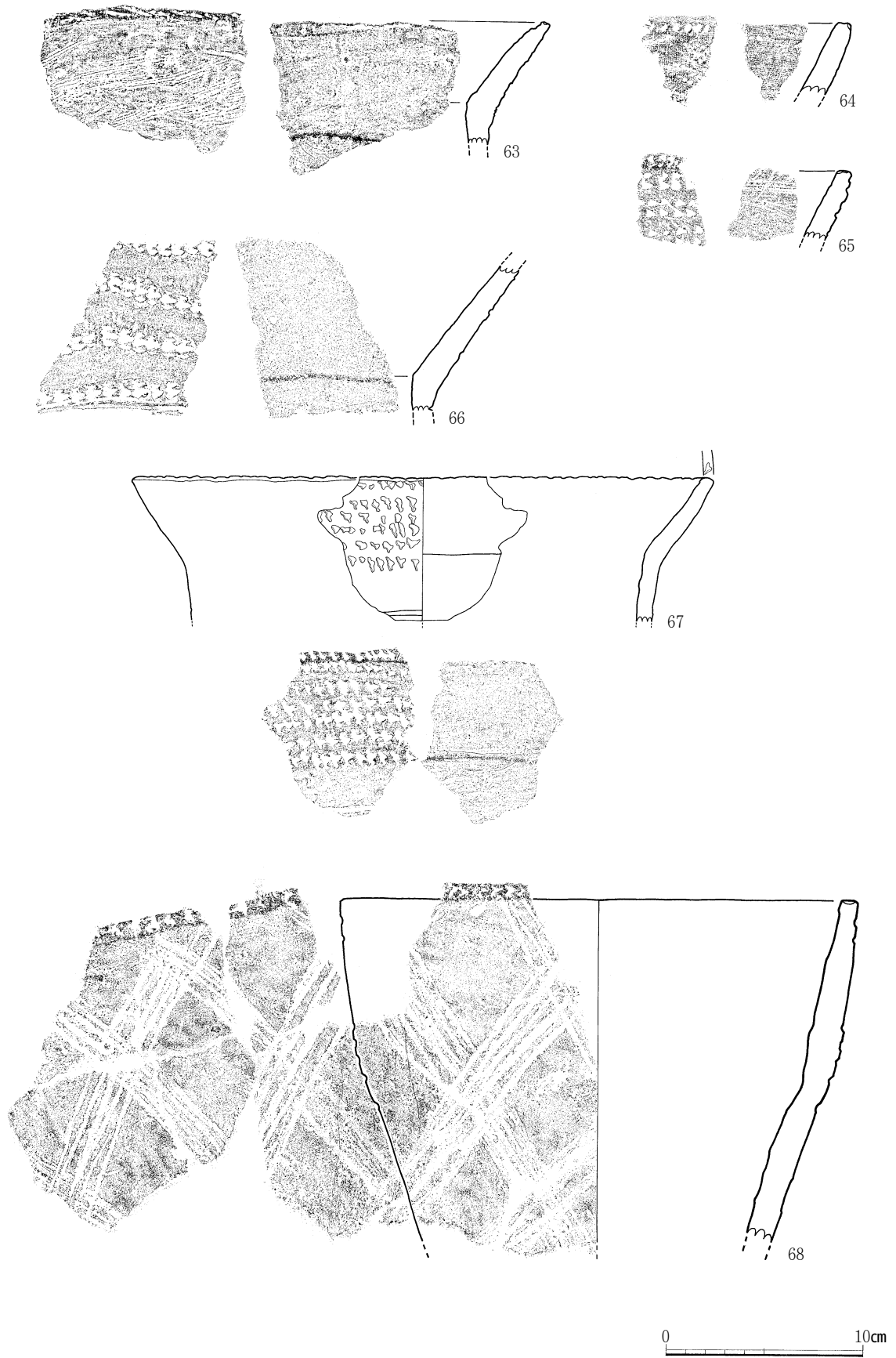


Fig.31 13・17区出土 類土器実測図

第4節 各調査区の成果

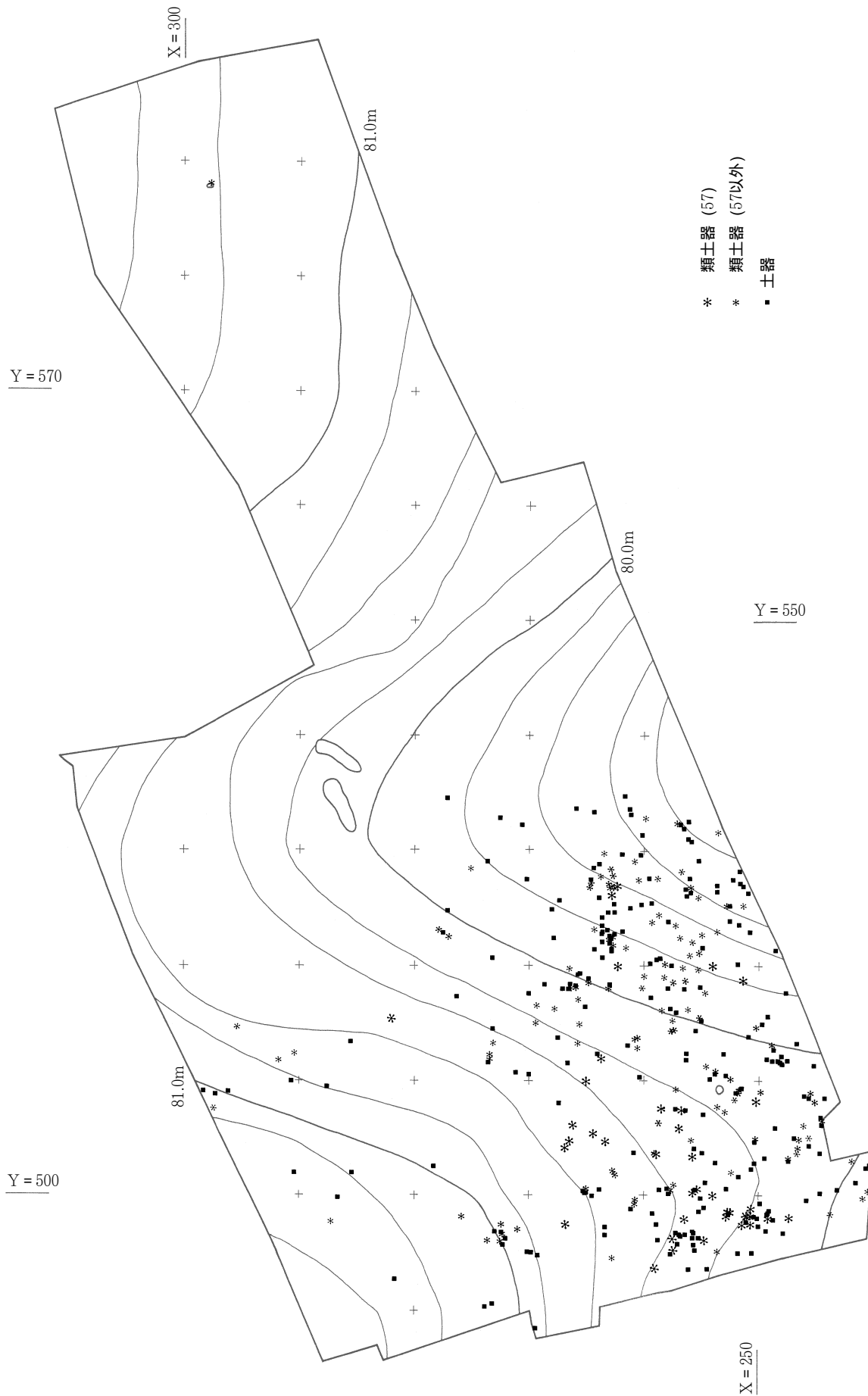


Fig.32 17区縄文時代早期土器出土分布図

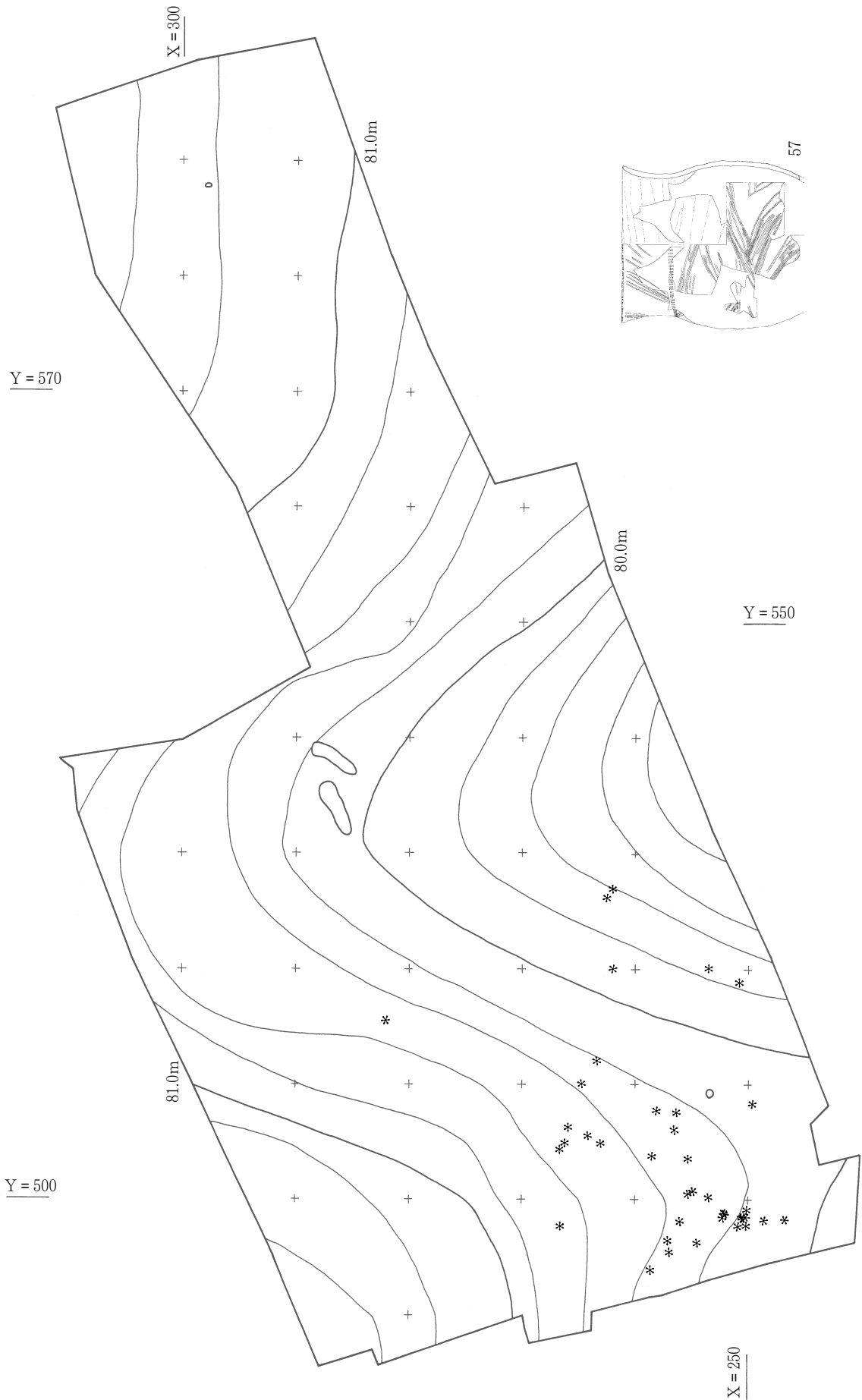


Fig.33 17区 類土器 (57) 出土状況図

第4節 各調査区の成果

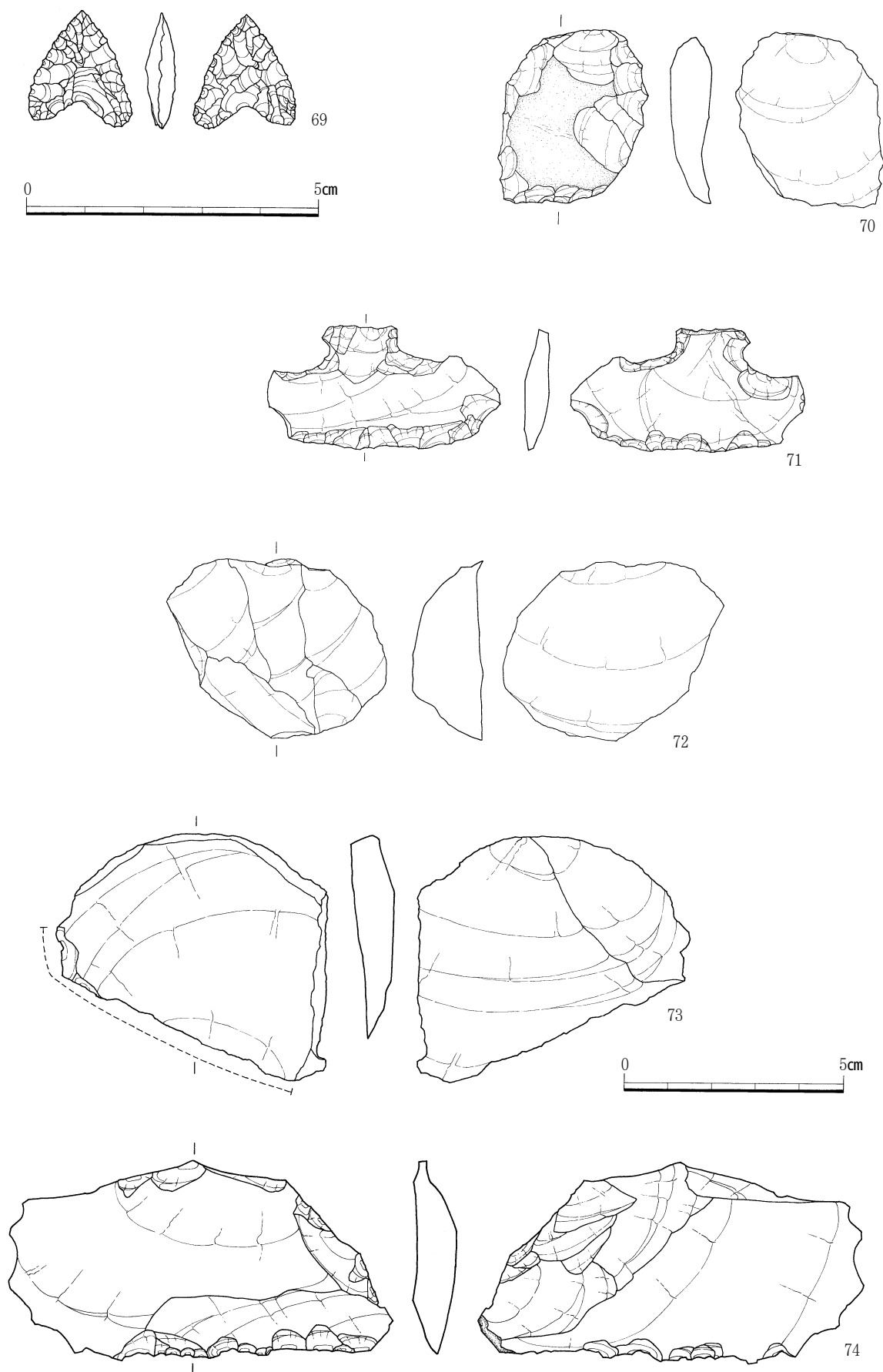


Fig.34 17区出土石器実測図(1)

72 多孔質の安山岩で剥離された剥片である。多面体の石核から剥離されたものと見られる。打面部は、剥離時の衝撃により欠損したようである。

73 サヌカイト質安山岩製の使用痕剥片。180度打面転移した後に剥離された剥片の末端に刃こぼれ状の使用痕が顕著に見られる。

74 サヌカイト質安山岩製の二次加工剥片。素材の打面側と、末端に両面からの二次加工を施している。特に打面側は、主要剥離面側の打点部を残しながら調整を行っていたようである。71と同様な石匙であった可能性が高い。

本調査区では、出土した円礫・角礫の状態から集石遺構等、生活痕跡を残す大規模な遺跡と認識して取り上げを行ってきた。しかしながらその出土状況から、原位置を保っているとは言いがたく、その供給地点も大方の予想がつけられた。また角礫の大部分が、自然堆積層中の基盤岩が破碎し、流入したものと結論から、遺物の可能性が低いものと判断し、現地で遺棄している。整理作業からも、土器・石器の出土状況と、遺構との関係や、これら礫群との人的な因果関係を見出すことは出来なかった。従って、現地で明らかに石器と認定されたものを選別して、持ち帰られている。以下に図示する剥片石器以外の石器は、そうした選択後に抽出されたものである。

75 磨石、安山岩製。全面に擦痕が見られるが、両端が打ち欠いている。石錘としての使用も考えられるが、数量的に満たしていないため偶発的なものとも考えられる。今後、当該時期の調査で注意する必要がある。

76 凹石、安山岩製。円礫の両面に顕著な窪みが施されている。意図的な配列とも考えられなくはないが、様々な痕跡を持つ円礫が多量にあり、事例の追加を待つべきであろう。

77 敲石、頁岩製。緻密な硬質の石材を使用している。磨石からの転用で、擦痕・敲打痕ともに明瞭である。特に表面左側面に激しい敲打痕が残る。表面右側面からも、敲打による衝撃で、石器表面が剥離してしまっている。

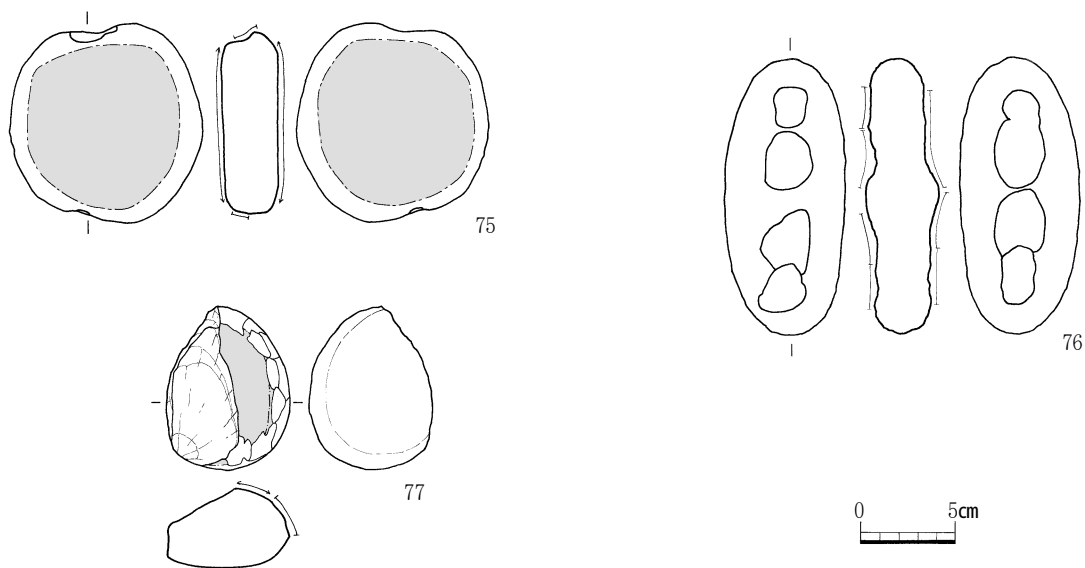


Fig.35 17区出土石器実測図(2)

第4節 各調査区の成果

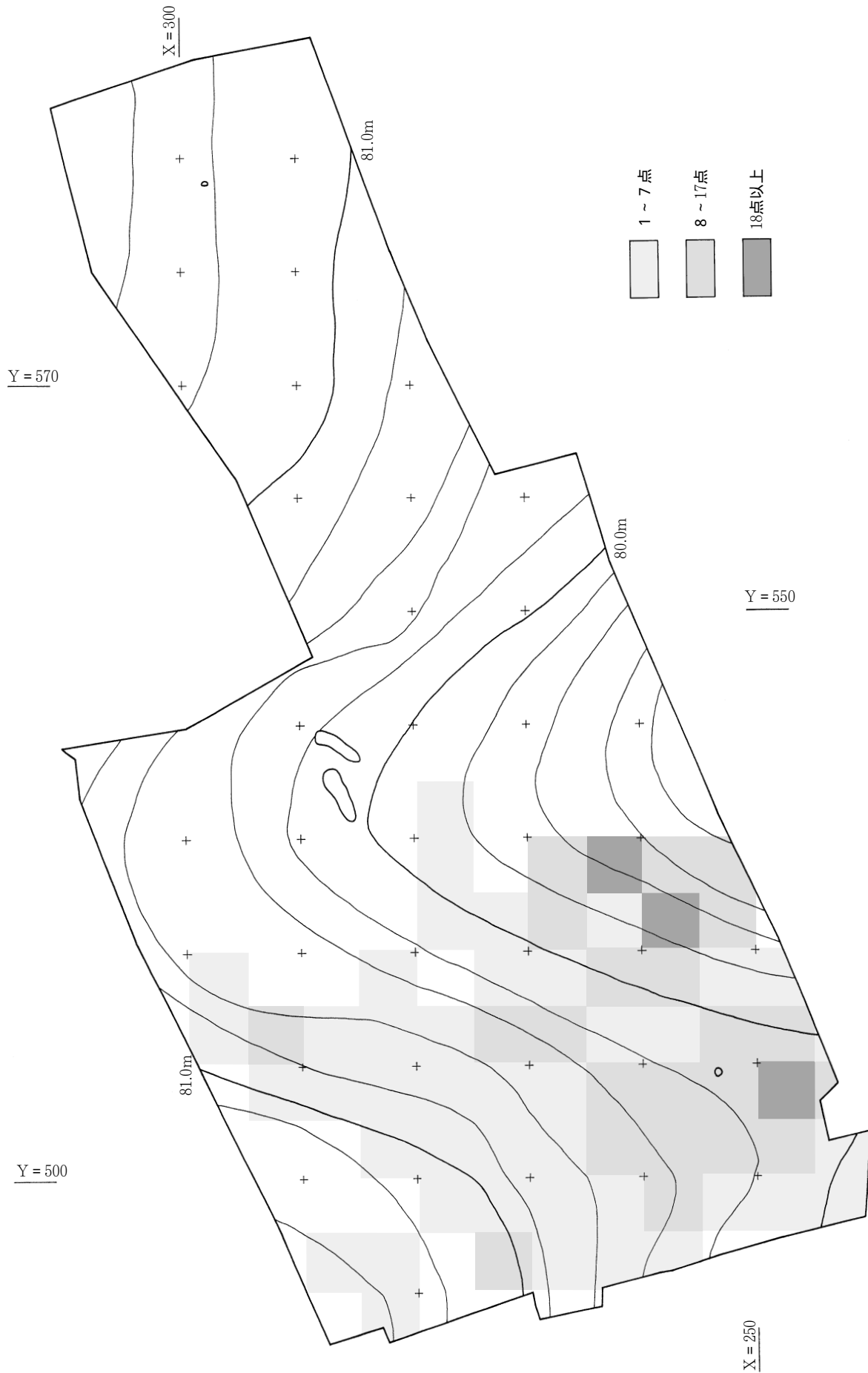


Fig.36 17区石器等量線図

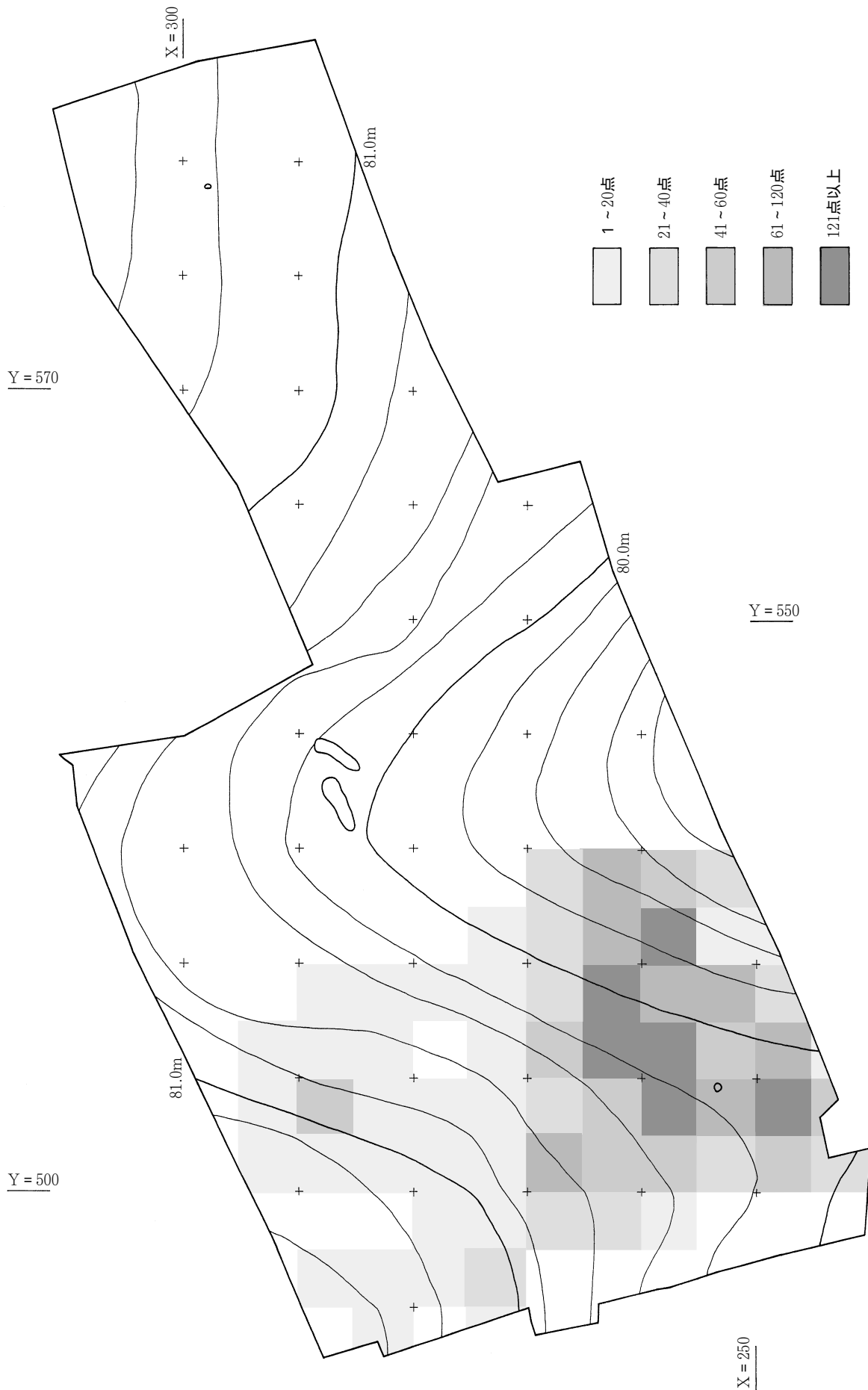


Fig.37 17区礫群等量線図

36区 (Fig.38~64)

標高91~92mを測る、白川の河岸段丘の最上部に位置している。この調査区の西側では、表土層の下は既に削平されて、層の堆積が見られなかった。調査区北西隅が最も削平が激しく、層まで露出していた。50区の段で推定したように、地形は北西方面からの丘陵の末端と考えられる。緩やかな斜面を形成し、南東方向に下っている。南東方向に下る斜面は、そのまま30区で確認された南へ続く埋没谷の西側の裾にあたりと考えられる。調査区北西側の削平を受けた範囲でも、層の堆積が残る部分では遺物の拡がりの確認できたので、遺跡はさらに北西側の丘陵上まで続いていたと思われる。調査区の北側・東側は、道路によって掘り下げられており、既に失われていた。南側に隣接する35区は、耕作地として利用されていた時に本調査区より更に削平されていた。このため、36区からの遺構・遺物の広がりには確認できなかった。層が残っていた35区の南側では遺構・遺物は検出されなかったことから南側斜面に遺跡は拡がらないものと考えられる。

土層の堆積は、表土層の層下で、クロボク土壌の層が a・b・c層の3枚に細分して見られる。

a・b層下で、比較的新しい客土が入った攪乱層が多く検出されていることから、旧耕作土の一部と考えられる。層は、上層、下層の2枚に分層される。層上層は、黄褐色粘質土で、鉱物質のガラスを多く含んでいる。アカホヤ火山灰の二次堆積土が基本層序である層のなかで最も火山性の鉱物を多く含んでいると考えられる。層下層は、暗黄褐色土で、層上層よりやや粘性が強い。層との漸移層と考えられる。

層は、層上層とされる黒褐色粘質土と、それよりやや暗い黒褐色粘質土の層下層に二分される。層上層はいわゆるクロニガ層そのものである。層下層は、層のニガシロ層との漸移層であり、ニガ土が混じる。層以下、層までの堆積は基本層序と同様である。

遺物の出土状況は、層から層下層にかけて縄文時代後~晩期の遺物が散在していたことが確認されている。層上面まで、後~晩期の遺物が出土するほかは、掘り込み等、縄文時代後~晩期以降の遺構が検出されている。この時期の住居址は、層上層中で検出され層下層を掘り込んでいる。層下層から早期土器の一群が検出され始めるが、別地点では後~晩期の土器片も含まれて検出される。この面から掘り込んだ遺構等の検出はほとんど無かった。従って、層上層は基本的に縄文時代後~晩期の遺物包含層と捉えることが出来る。

一方、集石・角礫の類は、層下層から検出されはじめ、層上層にその全体が把握できるまでになった。条痕文土器の一部も層下層から序々に検出され始め、層上層にそのピークが認められた。貝殻文土器もこの層から検出され始める。一部、層下層からも縄文時代後~晩期の遺物が検出されているが、層下層掘削直後で、土層の掘り下げを進めていくと全く検出されなかった。部分的な落ち込みから出土していると考えられる。層下層では主要な遺構が検出されず、層下層を除去後、層上層から掘り込まれた焼土坑等が検出され始める。従って、層下層から層上面にかけて縄文時代早期以降の生活面が想定される。

層上層で検出された遺構 (Fig.36) は、集石14基、焼土坑2基である。地形図は、層上面で遺構が検出されたところで作成している。一点破線で示された北西部は、層上面が削平を受けていたところである。削平を受けていても、層が残っていた範囲には遺物の検出が認められ、さらに拡がっていたものと推定される。層下層での遺構は検出されなかったが、条痕文土器・円礫・磨石等の出土がみられる。貝殻文系土器等、他の土器群の検出はこの層位では全くみられない。

集石は、全て掘り込みをもたず、円礫・角礫が特に密集していた範囲を任意に想定して確認している。焼土・炭化物も特に集中しているという場所でもない。また散在しているが、同質の礫は周辺でも確認でき、その範囲を見出すのは非常に困難であった。しかしながら、任意に推定した各集石を観察すると、礫のなかには明らかに磨石とみられるものが多く含まれているものや、熱によって表面が赤く変化しているものが見

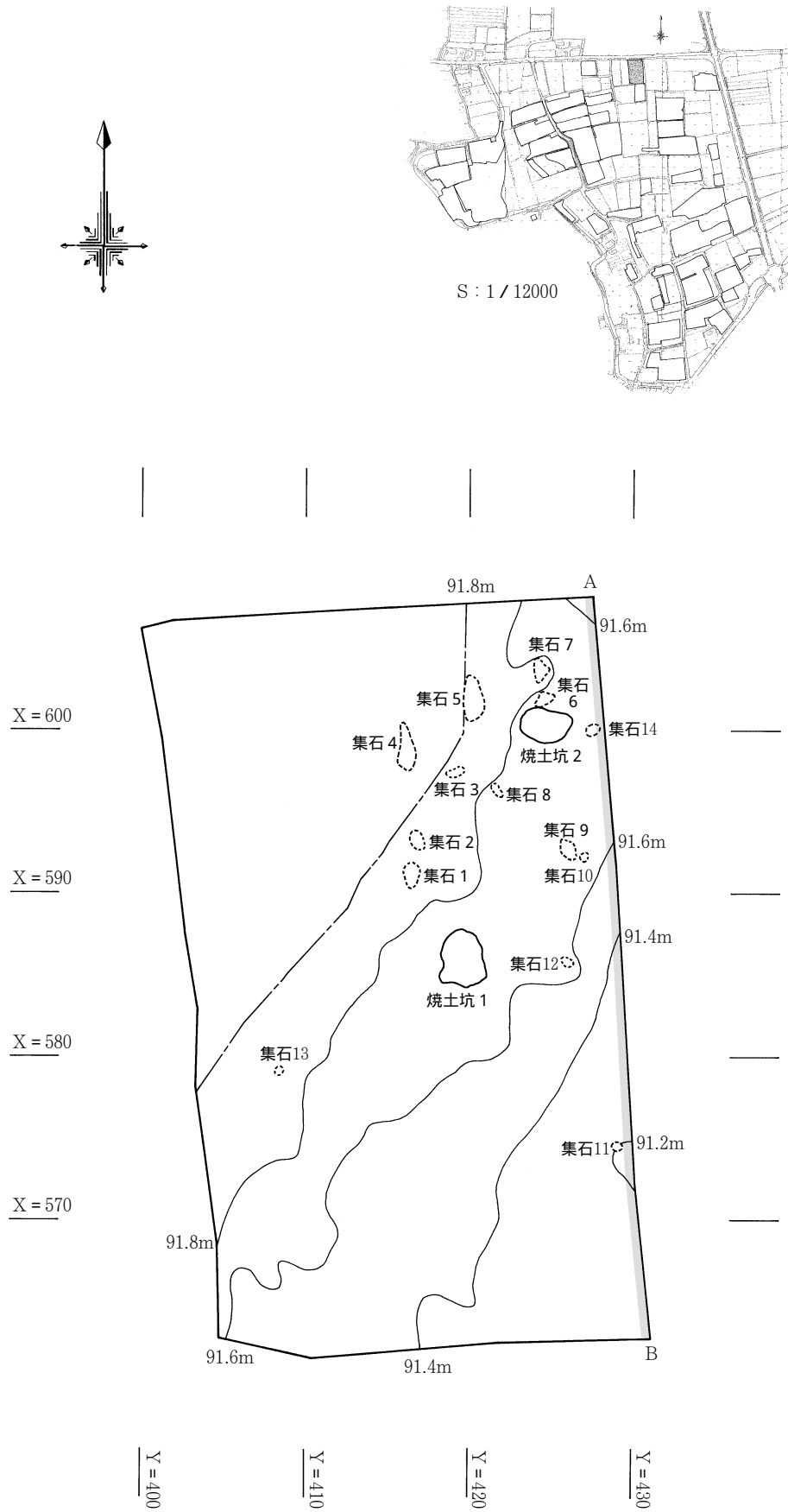


Fig.38 36区 層遺構配置図 S : 1 / 400

第4節 各調査区の成果

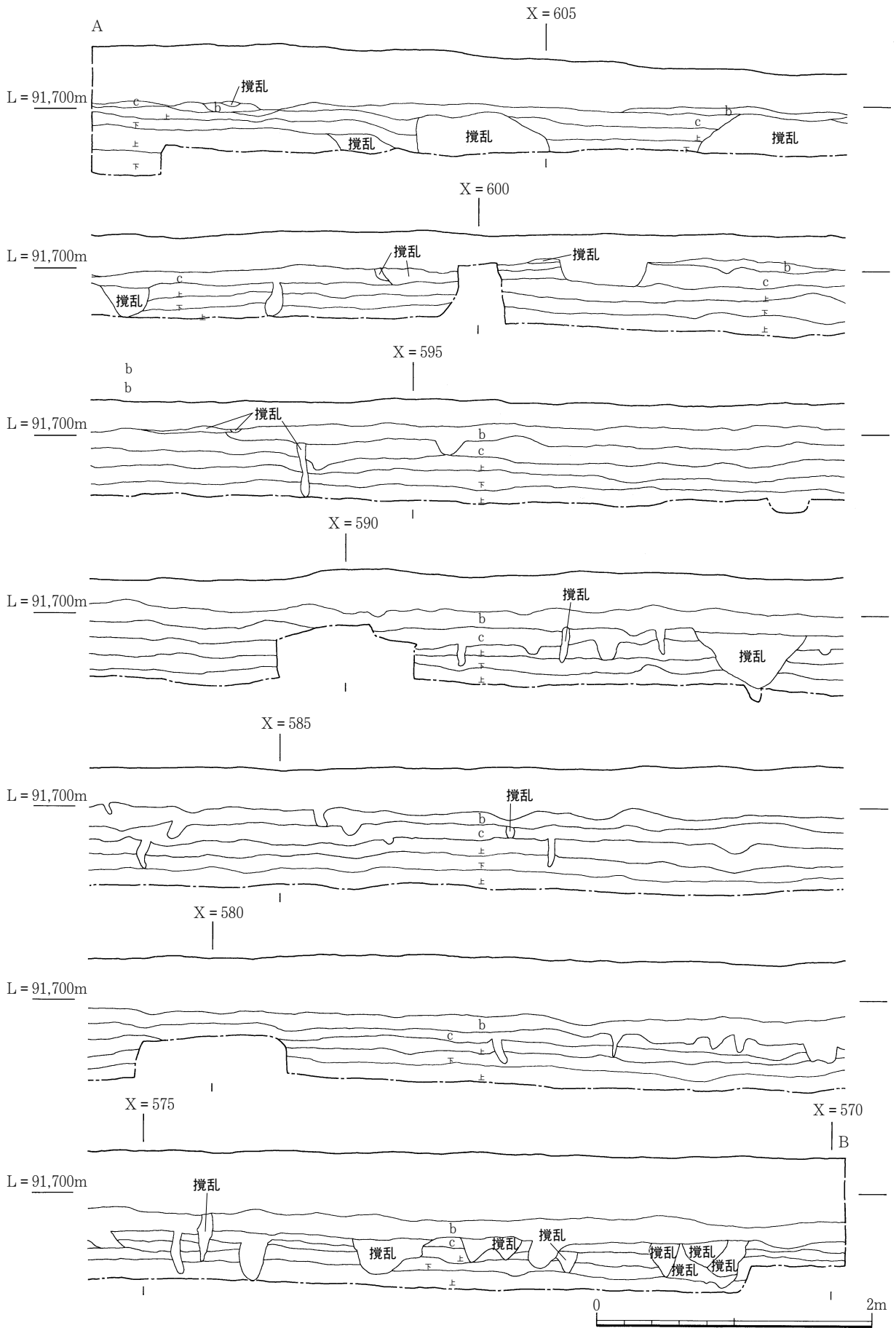


Fig.39 36区土層図

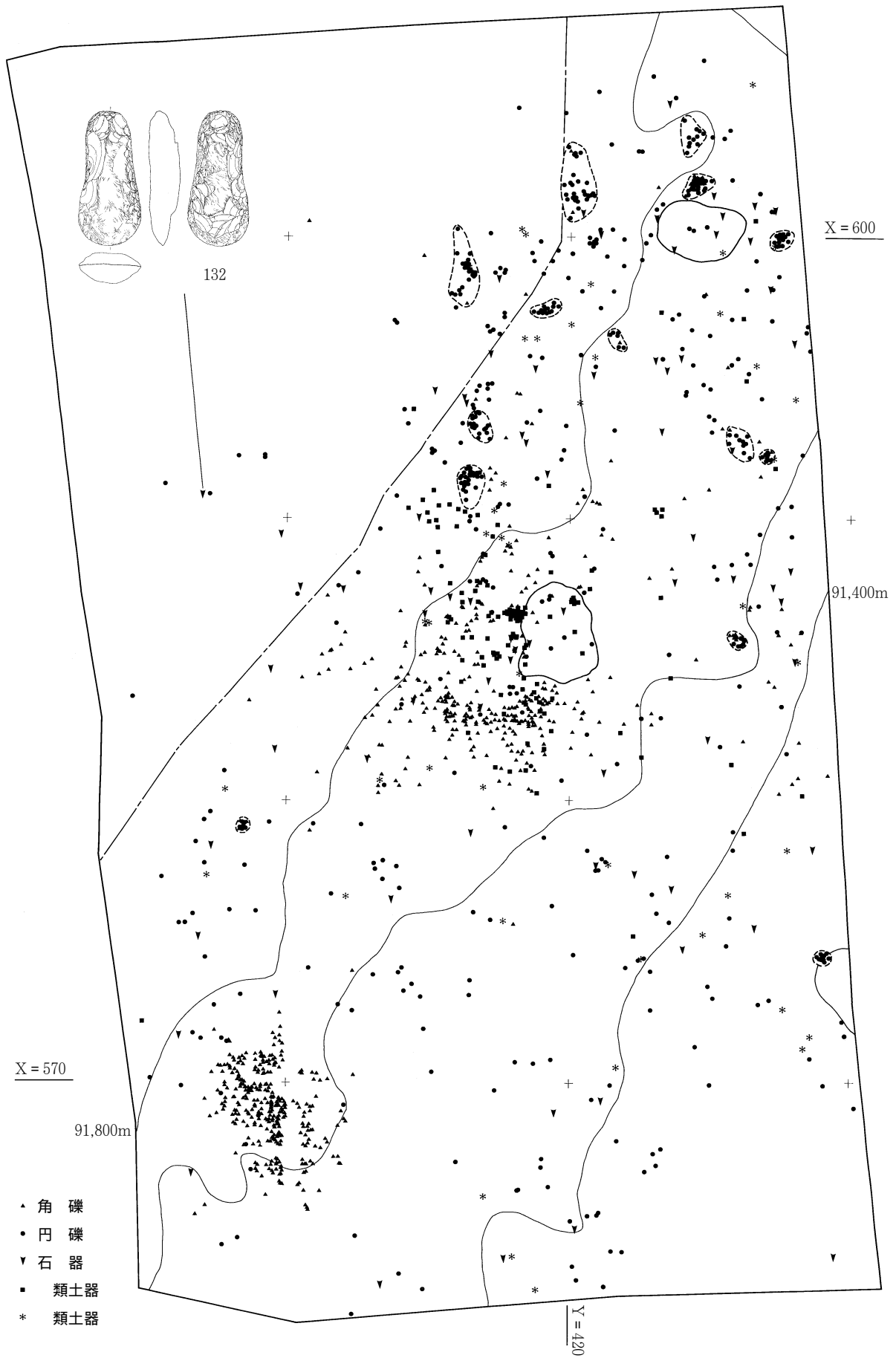


Fig.40 36区 層出土遺物分布図 S : 1 / 200

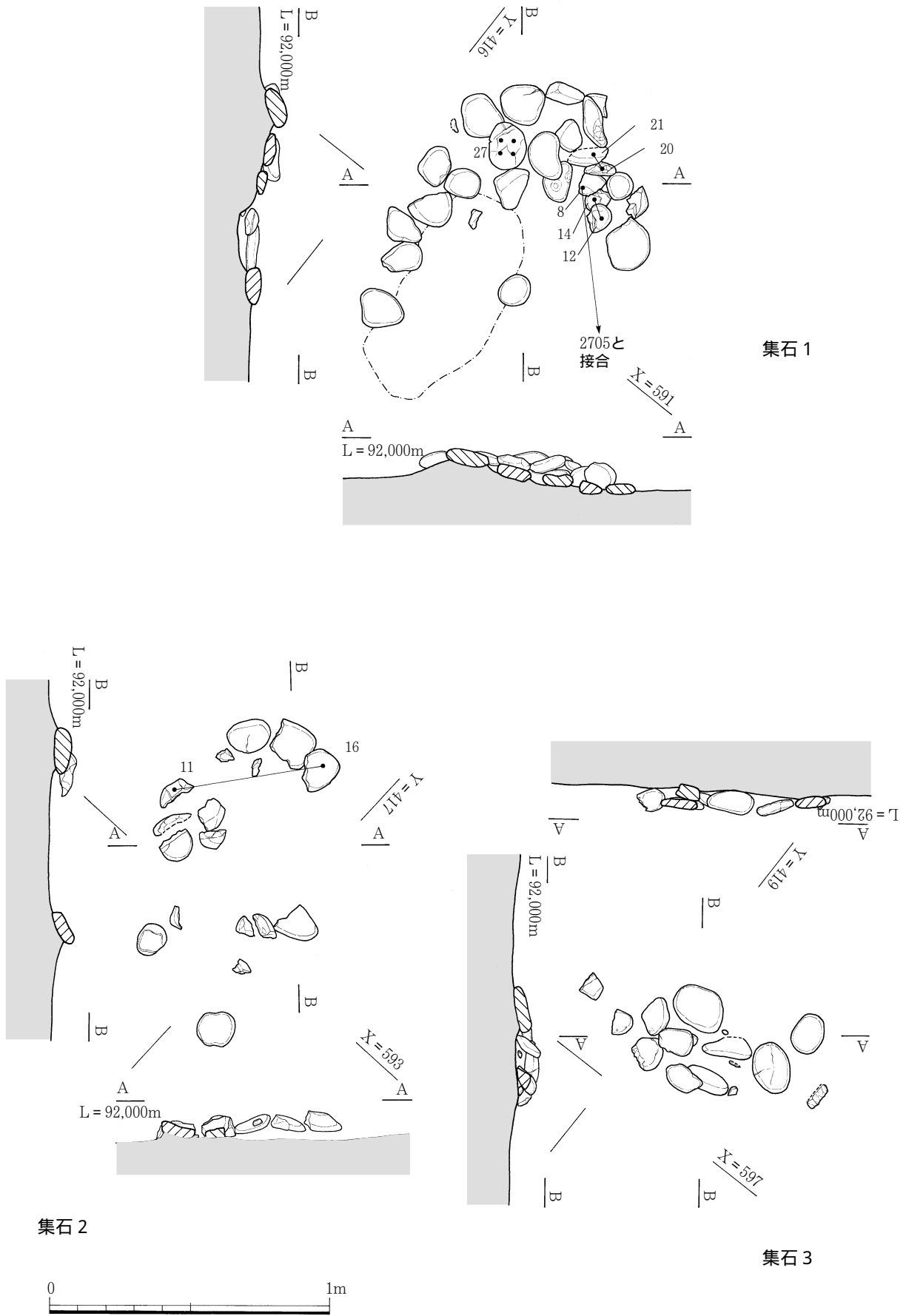


Fig.41 36区集石実測図(1)

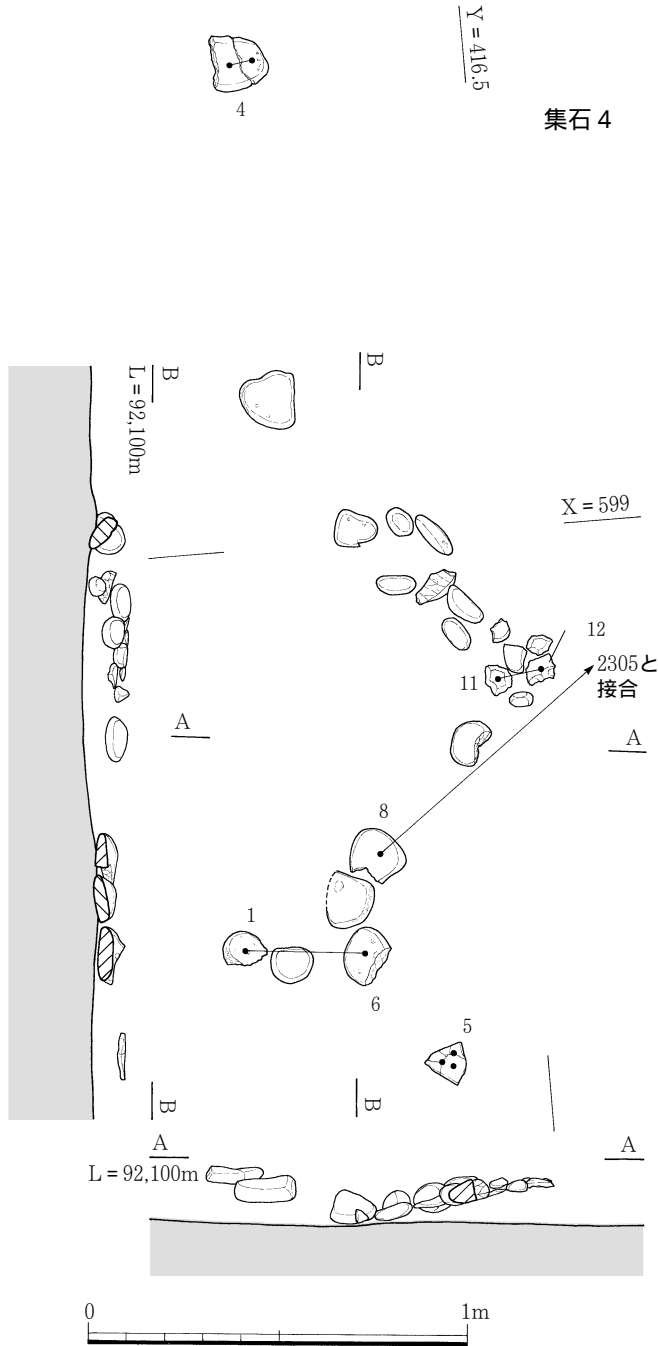


Fig.42 36区集石実測図(2)

集石3 構成される礫が高い割合で石器として使用され、赤変している。また、破碎されたものにも関わらず、接合資料は得られていない。

集石4 僅かに角礫を含むが、特に他の集石と異なる特徴は持たない。やはり破碎された礫の割合に対して接合例が少なく4例のみである。うち3例はその場で破碎されたまま遺棄されている。

集石5 石皿を含み、全体として散漫な分布を示している。土器も検出されているが、小片で施文がはっきりしない。焼成から縄文早期の土器と見られる。

集石6・集石10 構成される礫は、円礫・角礫が混在する。但し、磨石・敲石など、石器は全く見られな

受けられ、それらが一定のまとまりを持って重なっていたことから、これらの礫のまとまりに何らかの人的な作業による痕跡が認められると判断し、遺構として認識するに至っている。一方でそれらを検討する必要性から、出土遺物全点の出土地点を記録している。礫の類は、円礫等の擦痕・敲打痕が認められそうな礫を始め、角礫に至るまで取り上げ作業を行っている。そのため、集石内、集石間、集石と周辺で検出された礫との関係把握から、それぞれに接合作業を行うことが出来た。

集石1 構成される礫は全て円礫からなり、その約半数は、磨石など石器としての使用が認められるものである。熱によって表面が赤く変化しているもの（以下、赤変と称する）も半数以上見受けられる。礫接合も、まるで熱を受けたことによって破碎したかのように見られ、4つの接合資料のうち3つは、割れてしまったその場で遺棄されている。

集石2 円礫から全て構成されているが、破碎されているものが17点中、15点と高い割合を示す。その一方で得られた接合資料は1例のみである。石器として使用されているものも含まれる。赤変しているものも見受けられるが、全てではない。この赤変した礫は、出土地点が特に纏まっているわけではなく、肉眼観察による礫への受熱状況を正確に示す属性とは言いがたいようである。

第4節 各調査区の成果

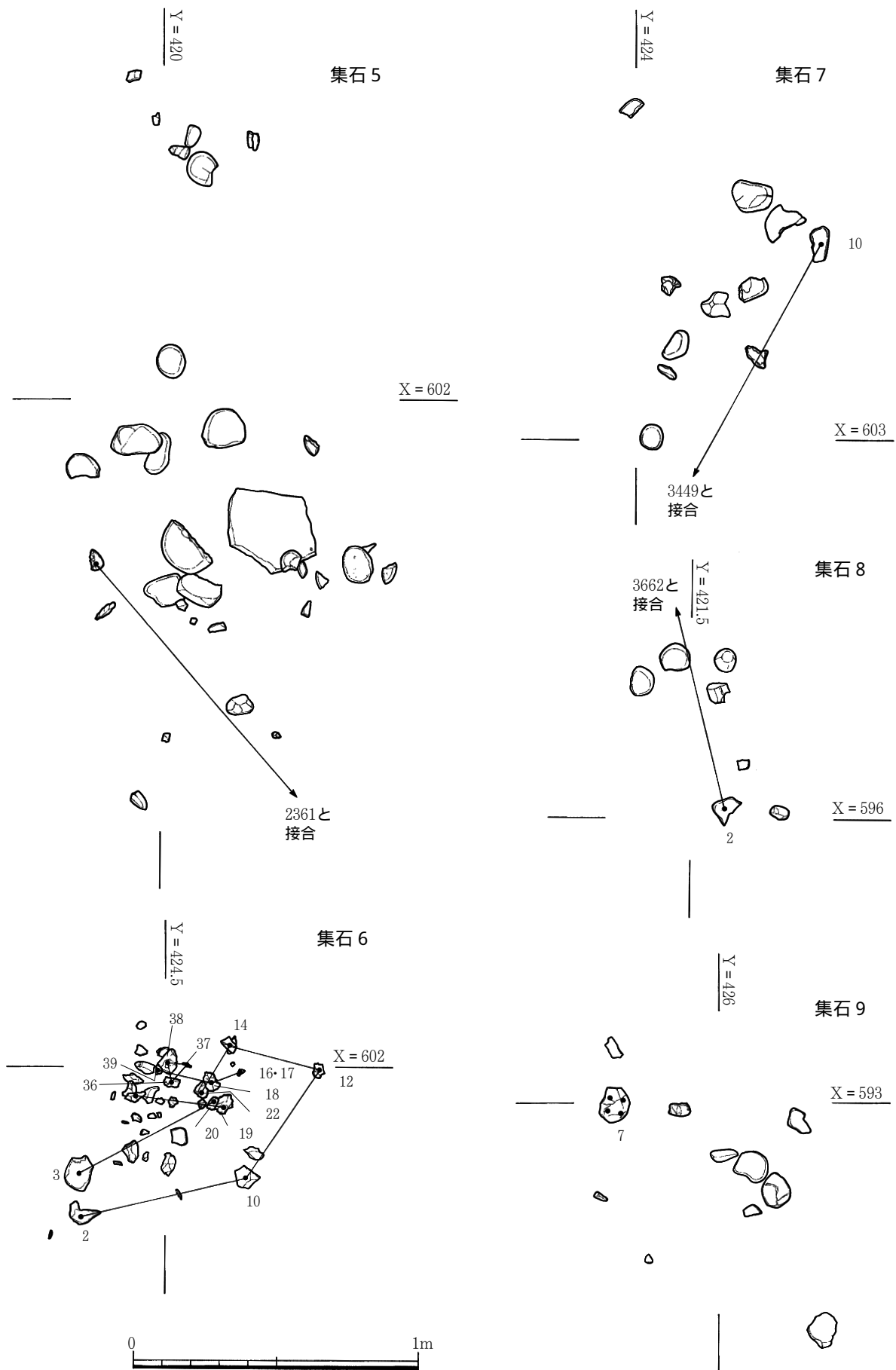


Fig.43 36区集石実測図(3)

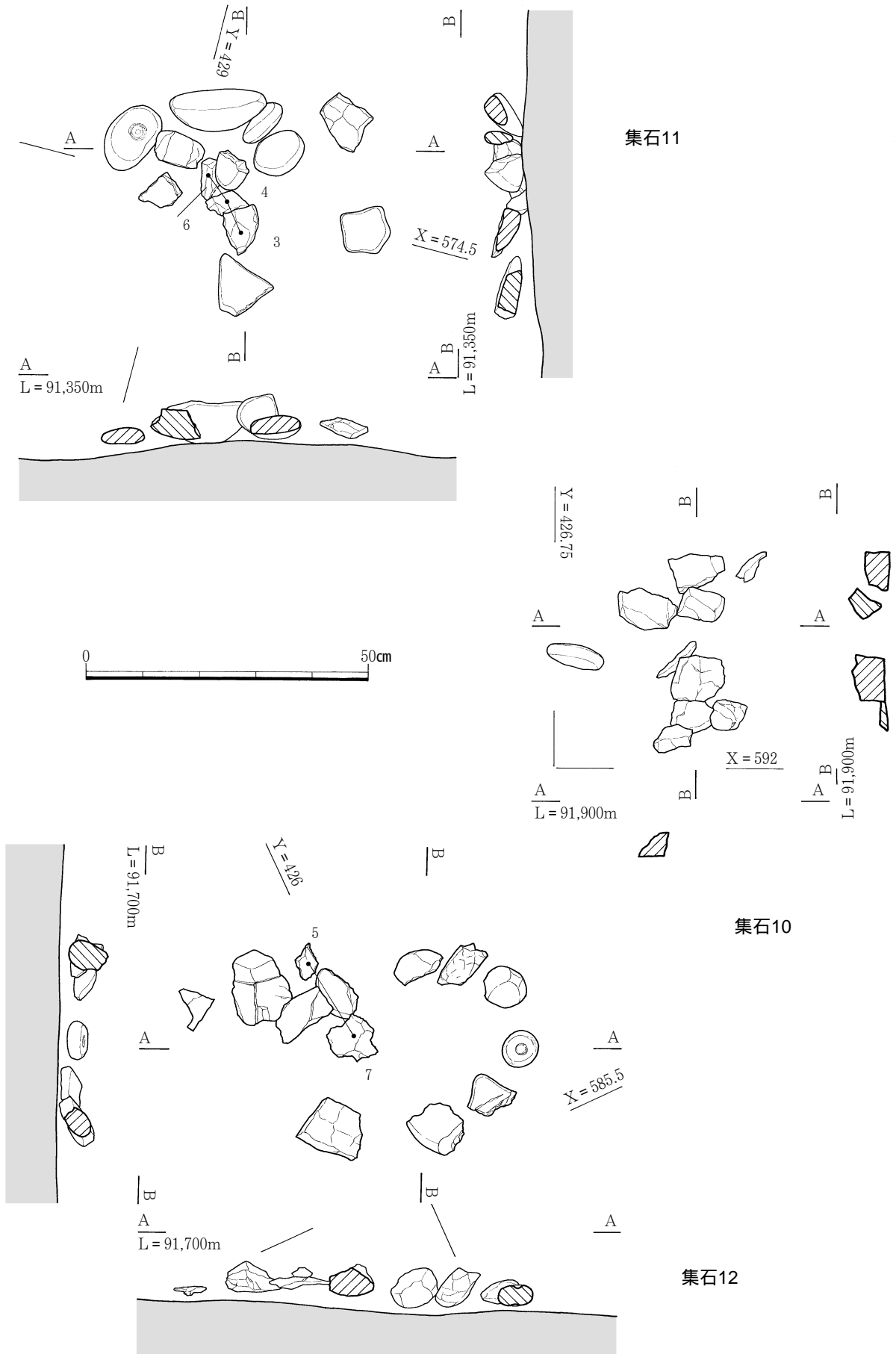


Fig.44 36区集石実測図(4)

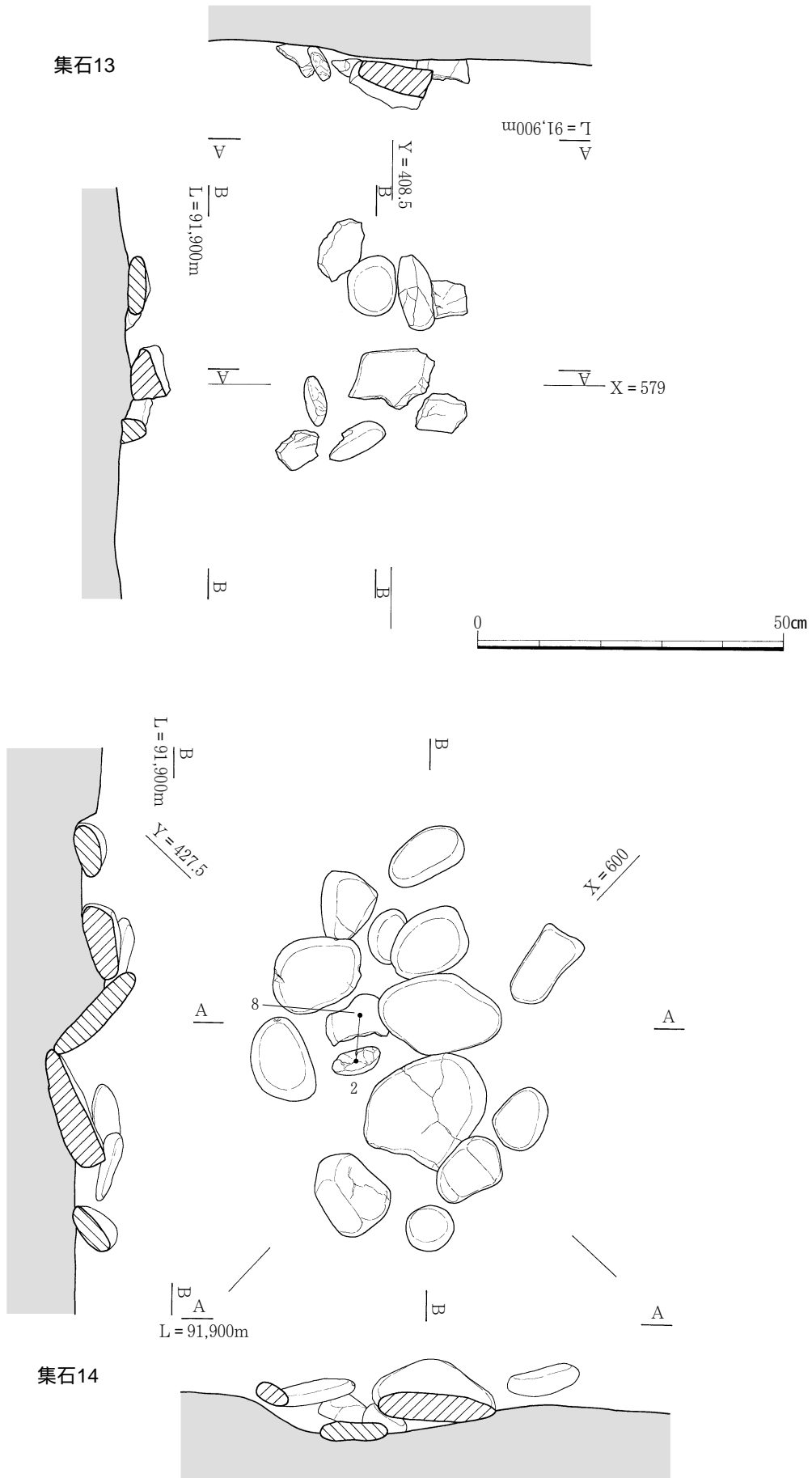


Fig.45 36区集石実測図(5)

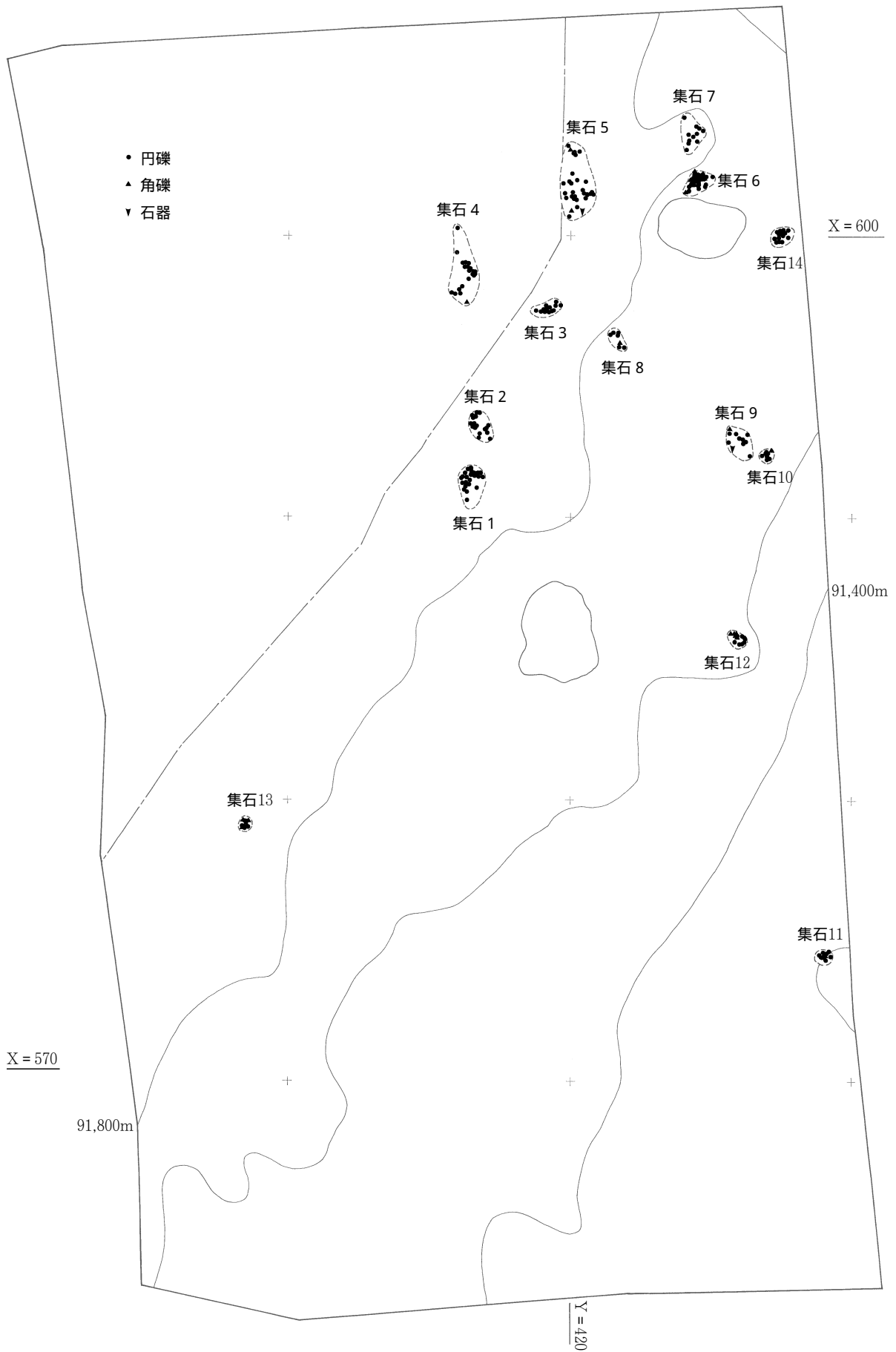


Fig.46 36区 層集石分布図

第4節 各調査区の成果

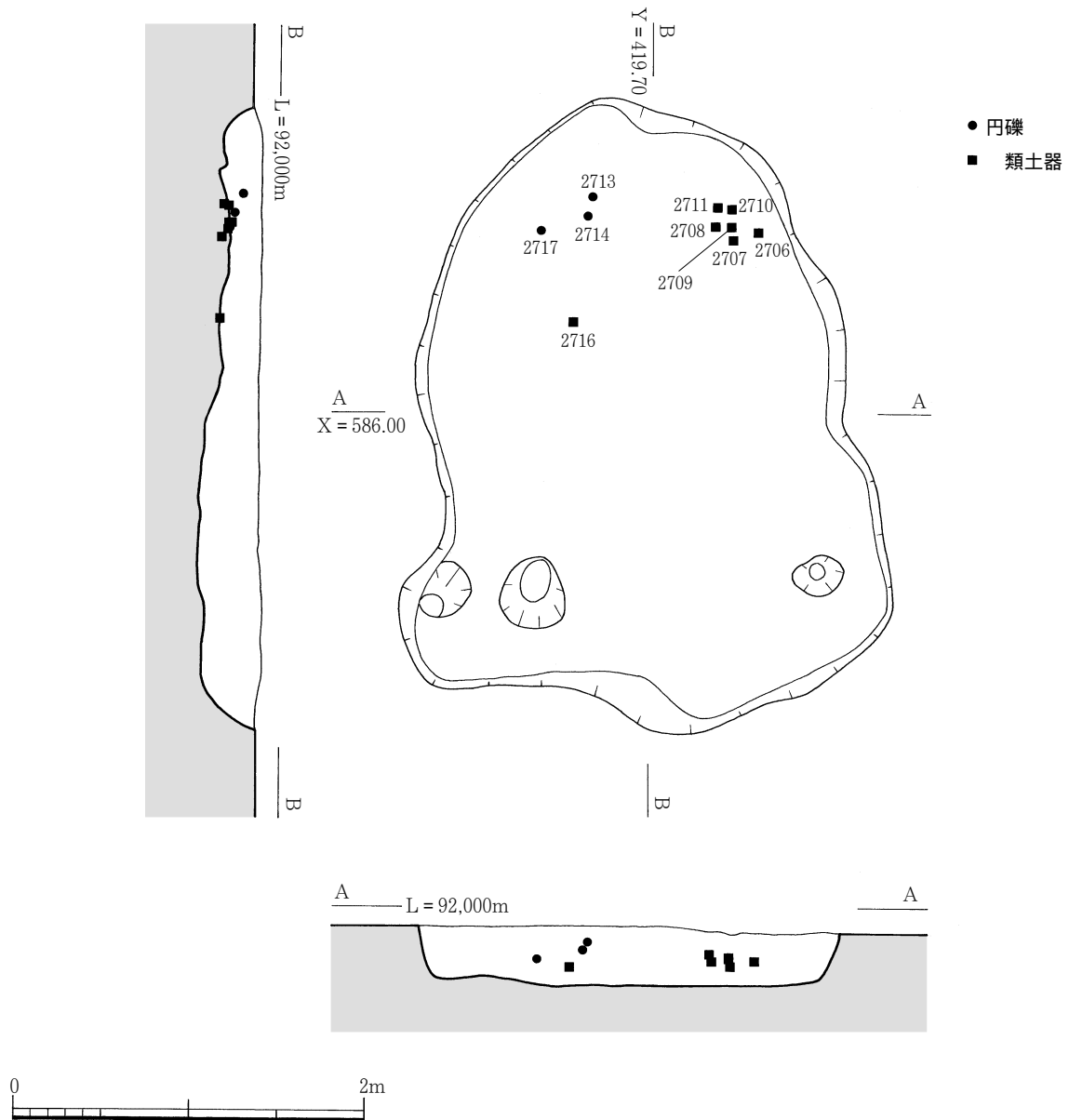


Fig.47 36区焼土坑1 実測図

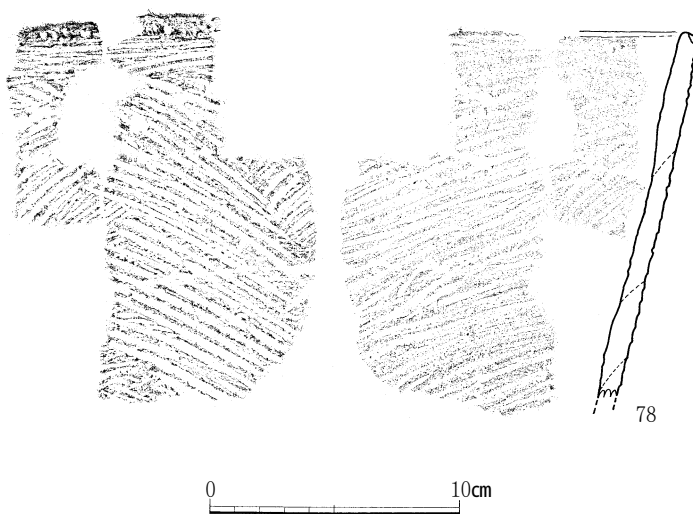


Fig.48 焼土坑1 床面出土 類土器実測図

取上げ番号		X	Y	標高
2706	P IV類	587.03	420.32	91.698
2707	P IV類	587.00	420.17	91.668
2708	P IV類	587.07	420.06	91.734
2709	P IV類	587.08	420.16	91.702
2710	P IV類	587.17	420.16	91.701
2711	P IV類	587.18	420.08	91.686
2713	S 磨石	587.24	419.36	91.791
2714	S 磨石	587.13	419.34	91.748
2716	P IV類	586.53	419.26	91.662
2717	S 磨石	587.04	419.07	91.707

P…土器 S…石器

※78は2707・2710・2711が接合したもの

Tab.5 焼土坑1内出土遺物一覧

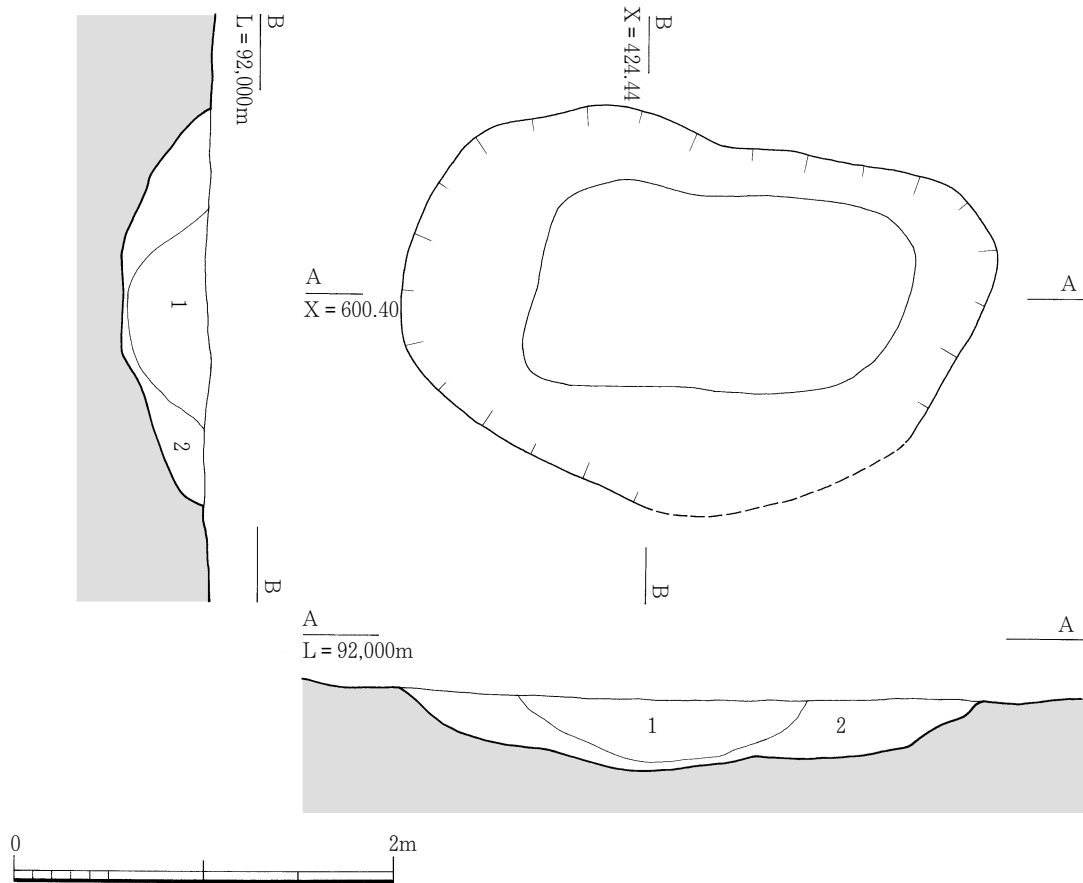


Fig.49 36区焼土坑2 実測図

い。また、礫の全てが破碎されており、その半分以上も残っていない。素材の礫が完形を成していないものばかりで構成される集石は、この二つの集石のみである。接合資料も、礫の表面が僅かに接合する程度に限られている。特に集石6内では、濃密な接合関係を示すが、破碎の後なんらかの作用により礫がかなり移動していることが判る。

集石7・集石8・集石9 構成される礫の割合は、その範囲に比べ少ない。集石9では、その場で破碎されたままの状態を示す接合資料が1例あるが、集石7・集石8は、かなり離れた場所との接合例がある。破碎状況も一様ではなく、赤変しているものも混在している。

集石11・集石12・集石13 比較的、一定のまとまりを持ち、礫同士が重なっている。接合資料は、その場で破碎されたままの状態で検出されている。

集石14 構成される礫が全て磨石などの石器であり、顕著な赤変が全ての礫に見られる。浅い掘り込みを持つ。一部破碎しているものもあるが、接合状況からその場で遺棄されたものである。それ以外の礫にも熱を受けての作用か、割れかけているものが見受けられる。

角礫の集中域 前述した円礫を主体として構成されている「集石」と呼称した一群以外に、層上層では角礫をその構成の主体とした一群が検出されている (Fig.90)。座標 X - 570と Y - 410の交点付近 (以下、角礫集中域1と呼称)、さらに X - 580~590の間と Y - 420付近 (角礫集中域2と呼称) である。どちらも、約1m四方に広がりを見せ円礫やその他の石器を全く伴わない。両角礫ともに 層下層中から検出され、層下層中を基底面としている。角礫のまとまりのなかでは、焼土・炭化物は検出されていないが、北側の X - 580~590の間と Y - 420付近の角礫集中域2は、角礫集中域1とは少し状況が異なる。球心円状に纏まった分布を見せる角礫集中域1に対し、角礫集中域2は放射状に分布している。また、角礫集中域2の下面では

礫を除去したところ、焼土が確認され、楕円形を呈した土坑が検出された（焼土坑1）。角礫集中域1には掘り込みがわずかに検出されているが、人為的なものか不明である。

焼土坑1（Fig.47） 前述したように、先立って出土した角礫集中域1を精査後、ほぼ方形を呈するプランが検出できた。ほぼ2m×3mほどの大きさで、壁面はほぼ垂直に立ち上がっている。焼土坑1は、層上面を検出面としており、層上層を掘り下げている。遺構の埋土は基本的に1枚の土層で埋まっていた。遺構全体に、焼土と思われる赤褐色土の土壌が纏まって見られた。埋土を完全に除去したところ、南側に3箇所、浅い15cmほどの掘り込みが確認されている。同様に、遺構北東側の床面直上から条痕文土器が纏まって検出されたほか、北西側からは磨石も検出された。図示されていないが、この条痕文土器と磨石が出土した付近にも浅い窪みが見られた。

焼土坑2（Fig.48） 同じく層上面から検出されている。3m×2m程度の楕円形を呈する。検出された遺物はない。埋土の状況から、遺構の上面が削平を受けているか、本来はもっと小さな焼土坑であった可能性がある。また、焼土坑1のように、検出面で角礫など、伴った礫群は見られなかった。

埋土1層：赤褐色土、焼土と考えられる。炭化物を大量に含むが、土質は基本土層層に準ずる。

埋土2層：黒褐色土、若干の焼土が含まれる。

出土遺物（Fig.50・52・53・Fig.56～64）

集石・焼土坑が検出された層下層から層上層・下層にかけて出土した土器は、上層からの落ち込みによって検出された、黒色磨研土器を除けば、貝殻文系土器群（Fig.50）、条痕文系土器群（Fig.52・53）に概ね集約される。二つの土器群は、出土層位は層上層中にそのピークを持ち、層下層・層下層の上下幅を持って出土している。層上層からの検出は無い。出土層位はほぼ同一であるが、出土範囲には大きな

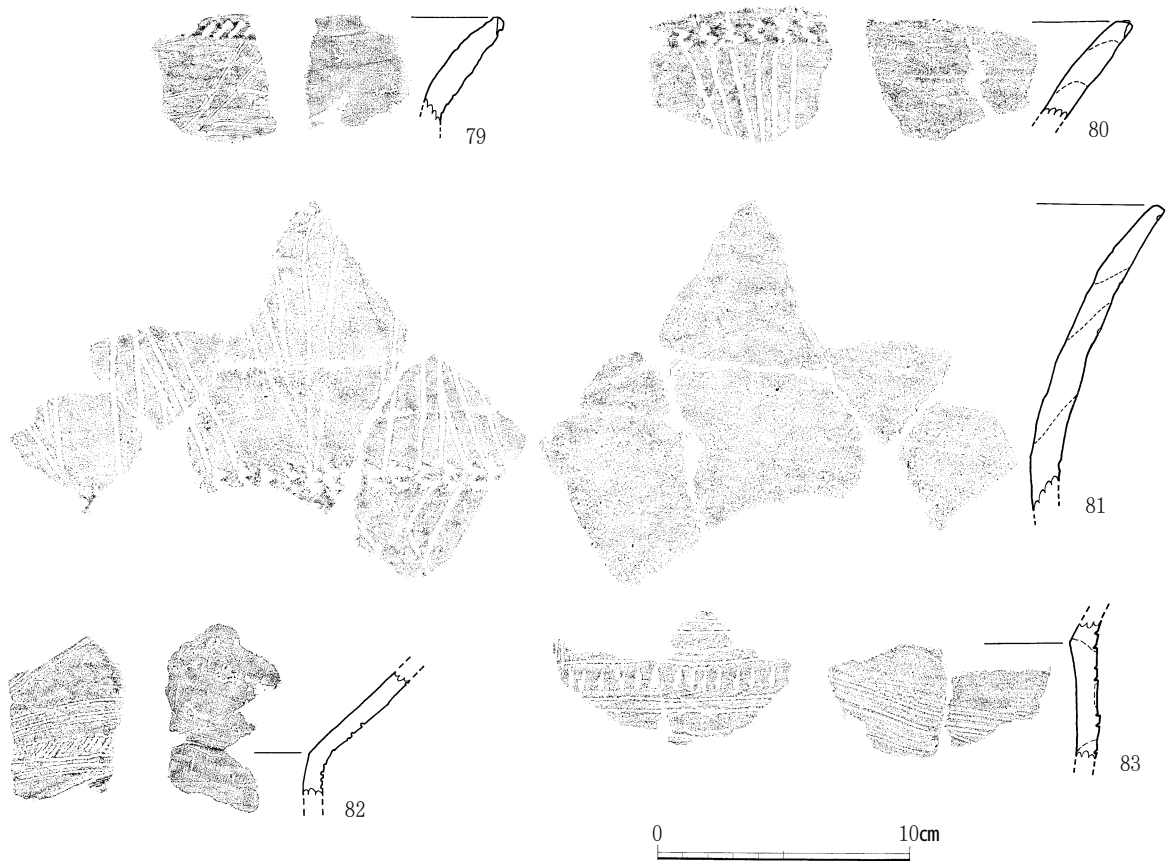


Fig.50 36区出土 類土器実測図

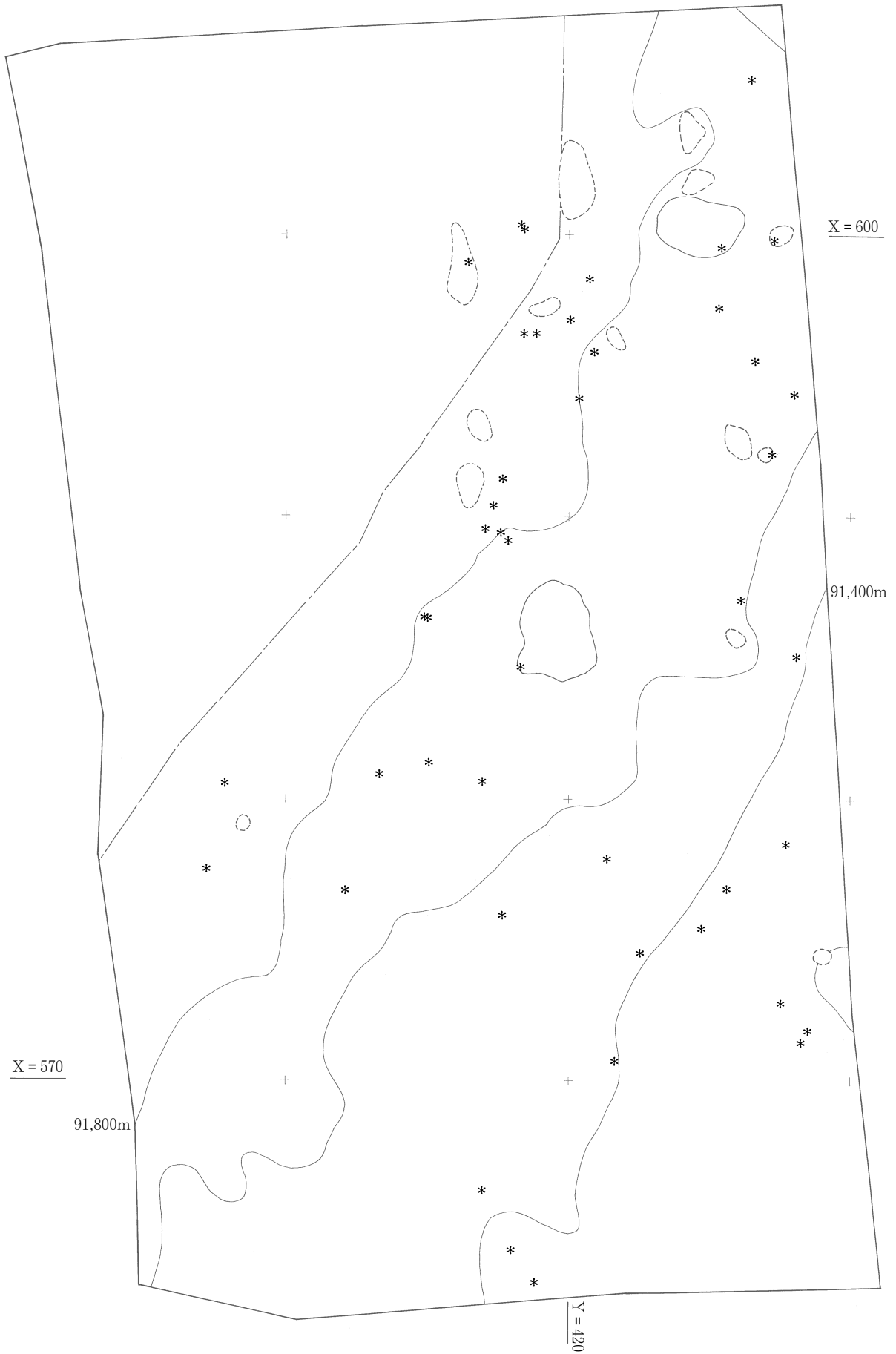


Fig.51 36区 類土器出土分布図

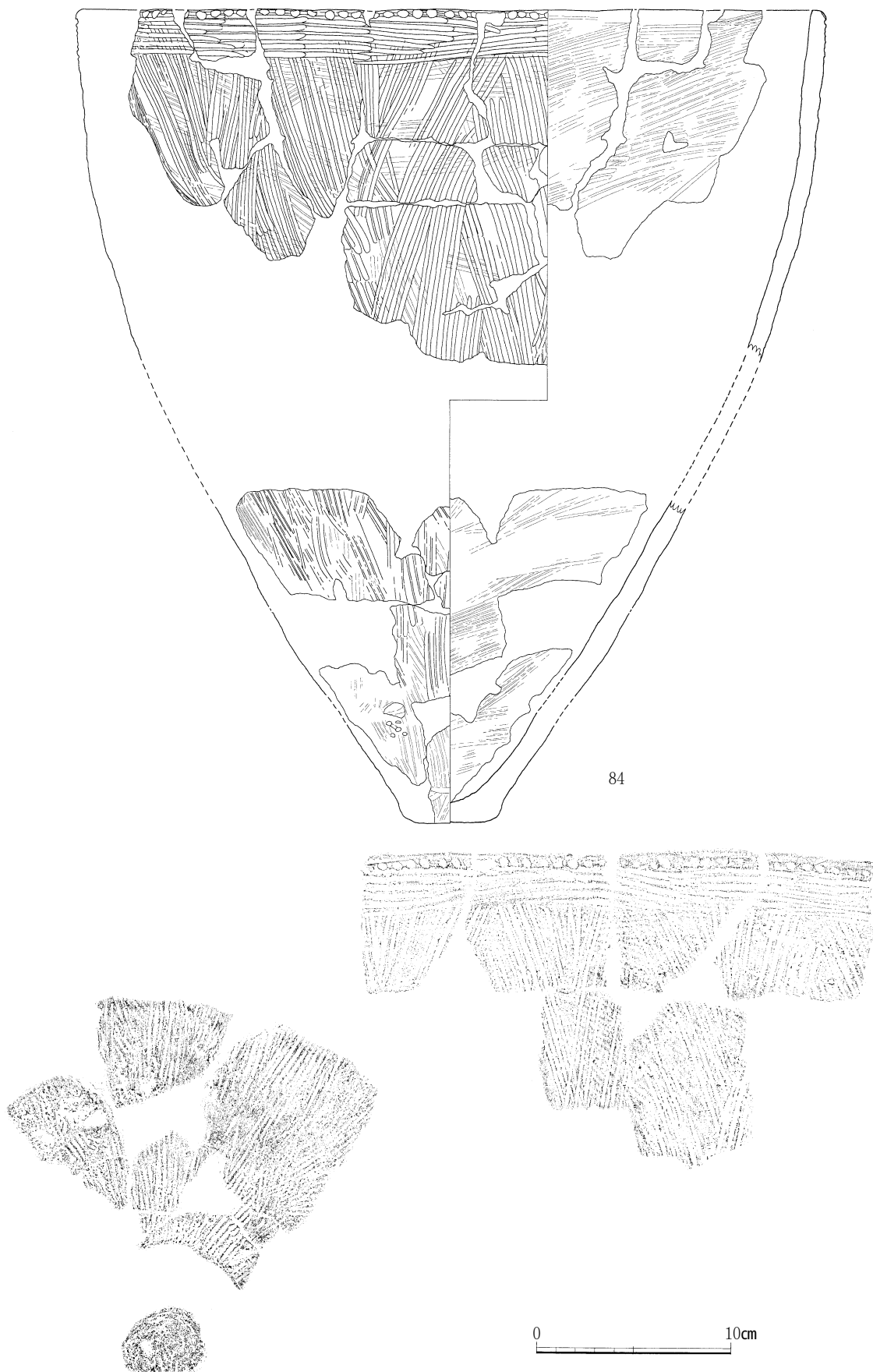


Fig.52 36区出土 類土器実測図(1)

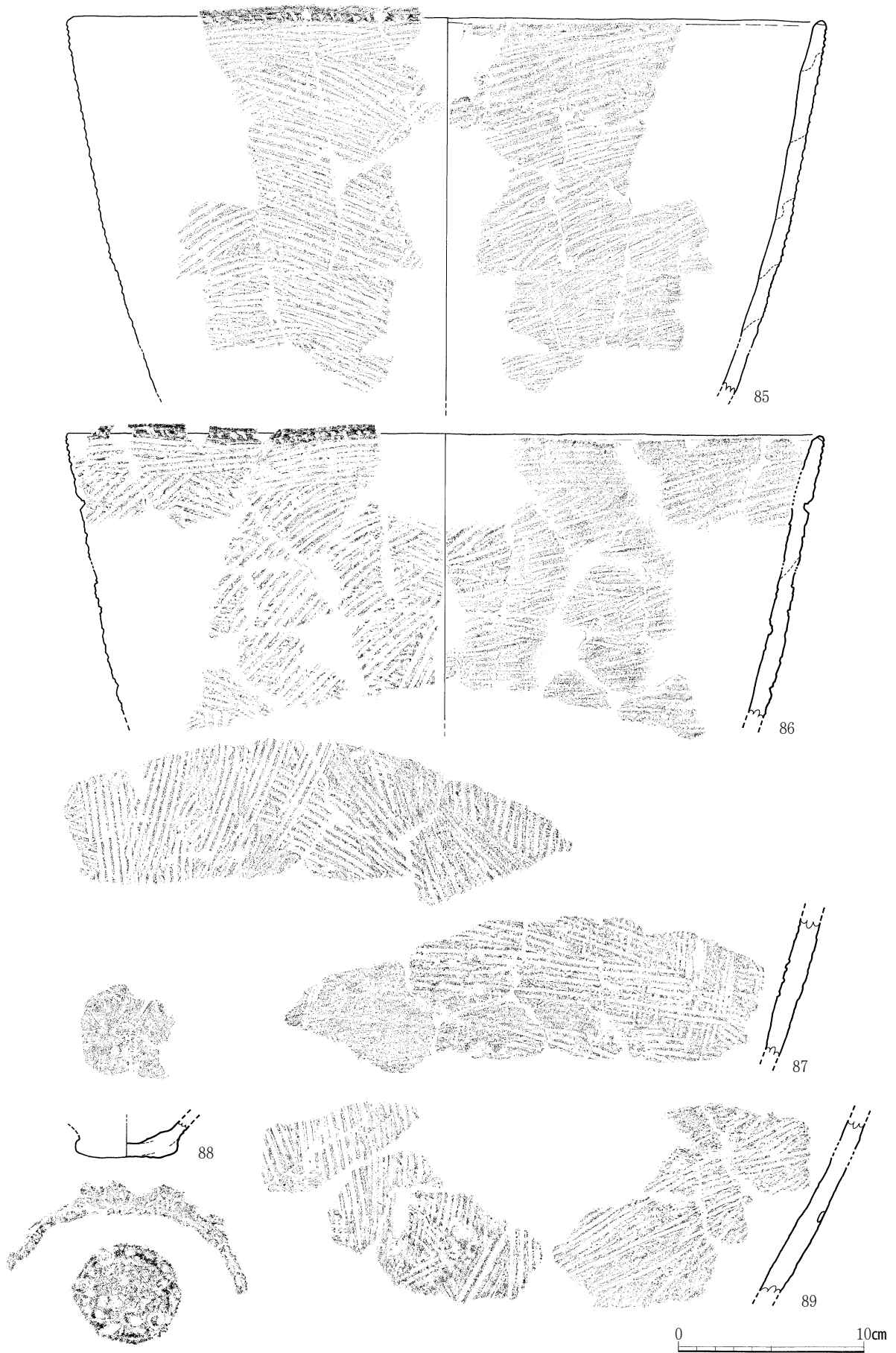


Fig.53 36区出土 類土器実測図(2)

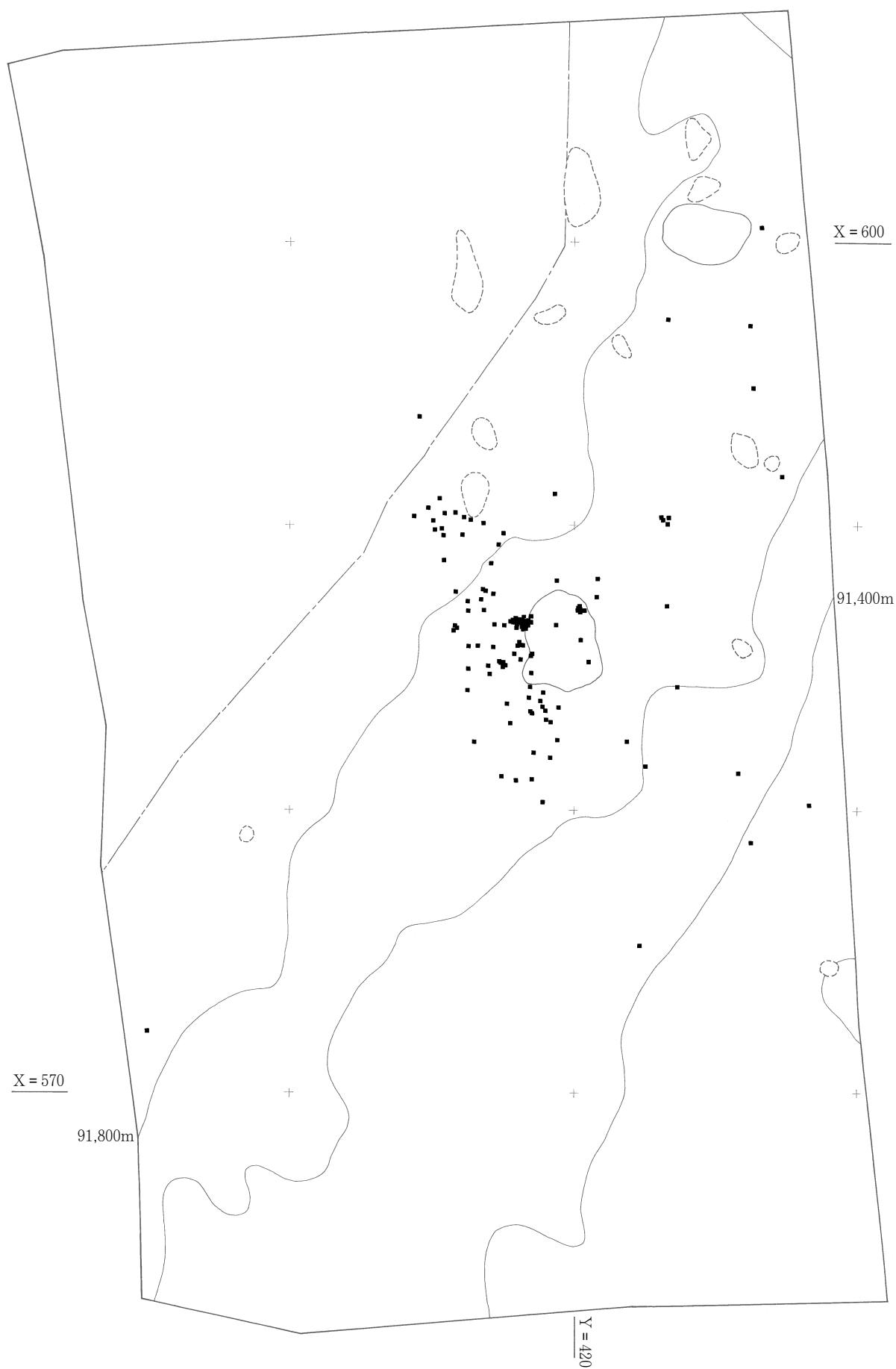


Fig.54 36区 層 類土器出土分布図

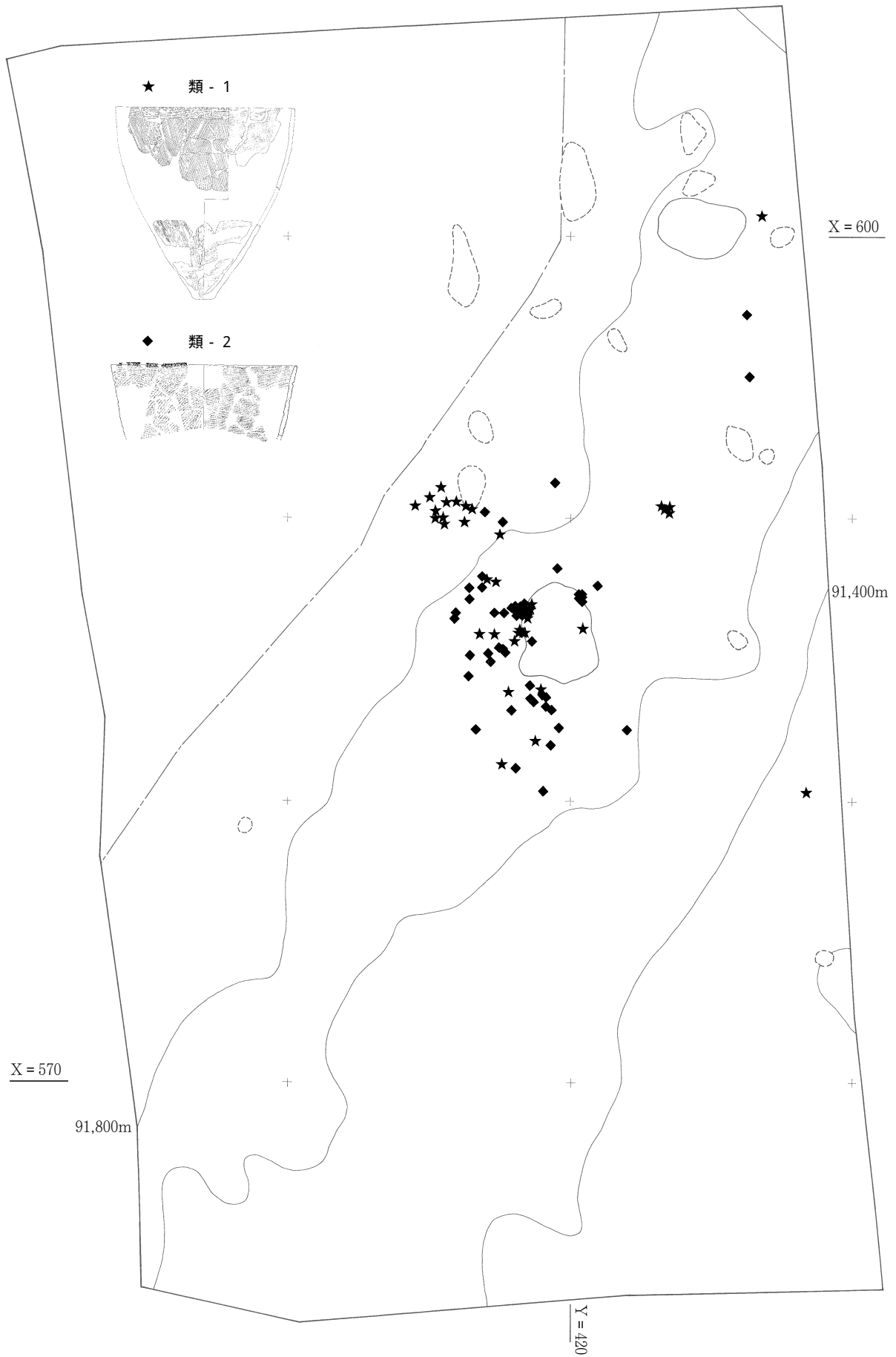


Fig.55 36区 層 類土器個体別出土状況図

違いがある (Fig.51・54)。

貝殻文系土器群はその出土範囲からみて、これと言った集中域が見出せない。その拡がりも、削平された調査区西北側を除いてほぼ全域で検出されている。分布域は散漫で折り重なって出土することは無く、なんらかの遺構との相関関係を示す状況でも無かった。但し、角礫集中域1・2が検出された一帯、及び焼土坑2付近での出土例はあまり無く、空白域が見出される。

条痕文系土器群は対照的にその出土範囲は限られている。調査区のほぼ中央にその集中域が見出され、焼土坑1の西側にとくに濃密な分布を示している。また、前述したように焼土坑1の床面からも同種の土器を検出している。

貝殻文系土器群 (Fig.50)

接合作業によって完形復元できた資料は無い。内外面に横方向のナデ調整を施した後、二枚貝の復縁を使って施文されているものと、棒状施文具によるものがある。塞ノ神式系の土器である。

79 表面に横方向の浅い条痕を施している。口唇部にも刺突文が施されるが、どちらも貝殻の復縁ではなく、棒状の細い施文具を使用している。

80 口唇部に2条の二枚貝の復縁で刺突している。口縁部外面には縦方向に沈線文を施しているが、貝殻によるものではなく、1本ごとに施文されている。

81 頸部に二枚貝の復縁を2条単位で刺突している。頸部から口縁部、胴部にかけて、やや間延びした格子目状の沈線文を施している。1本ごとに施文されているが、独立して1本で施文されず、数条になるよう配慮されている。

82 79と同様な施文具を用いている。平な棒状施文具による頸部への刺突文と、3条を基本とした沈線文を幾何学的に施文しているようである。

83 細身の断面三角形を呈した施文具による頸部への刺突文が見られる。胴部、口縁部では2条単位の沈線文が施されている。

条痕文系土器群 (Fig.48・52・53)

内外面ともに二枚貝の復縁による条痕文を、器面調整のように横方向に施した後、外面に明確な文様帯を施している。胴部から底部にかけて、三角形を呈するように底部付近にまで斜方向に貝殻条痕文が施される。施文は基本的に左右交互に行われている。左右交互に施す条痕文の角度が鈍角の時は、除々に底部に下がって交互に施文を繰り返している。鋭角に切り込んだように条痕文が施されているときは、基本的に底部付近までその施文が伸びているようである。口縁部には横方向の貝殻条痕文が帯状に施され、先ほどの三角形を呈した胴部文様帯を切っている。一度施文具をあてて器面を周回することなく、何度か途切れながら口縁部に施文している。その文様帯の幅は、施文された貝殻条痕の原体の幅をそのまま反映しており、原体の幅が小さいものは口縁部文様帯の幅が小さい。また、同じように胴部文様帯の交互に施された三角形の条痕文も、原体の幅が狭い分、底部まで何度も繰り返し施文されているようである。さらに口唇部には貝殻復縁若しくは、棒状施文具による刻目が施されている。

84 (Fig.52 類 - 1) 貝殻条痕文土器の完形資料である。内外面に斜方向の条痕文を施したあと、内面は整形によるナデ、指による圧痕がみられ、条痕が浅く、不明瞭になっている。外面は、左右交互に三角形を成すように5条の条痕文が口縁部から底部にかけて施された後、同一施文具によって、口縁部文様帯に横方向の条痕文が施されている。文様帯の幅は、施文具である原体の幅そのまま、基本的に1条巡らすのみである。その後、原体を何らかの角の丸い棒状施文具に変えて、口唇部を外側から等間隔に刻み目を入れている。底部は、平底を成しているが、緻密な面取は行っておらず水平な平底ではない。また、内面側は外

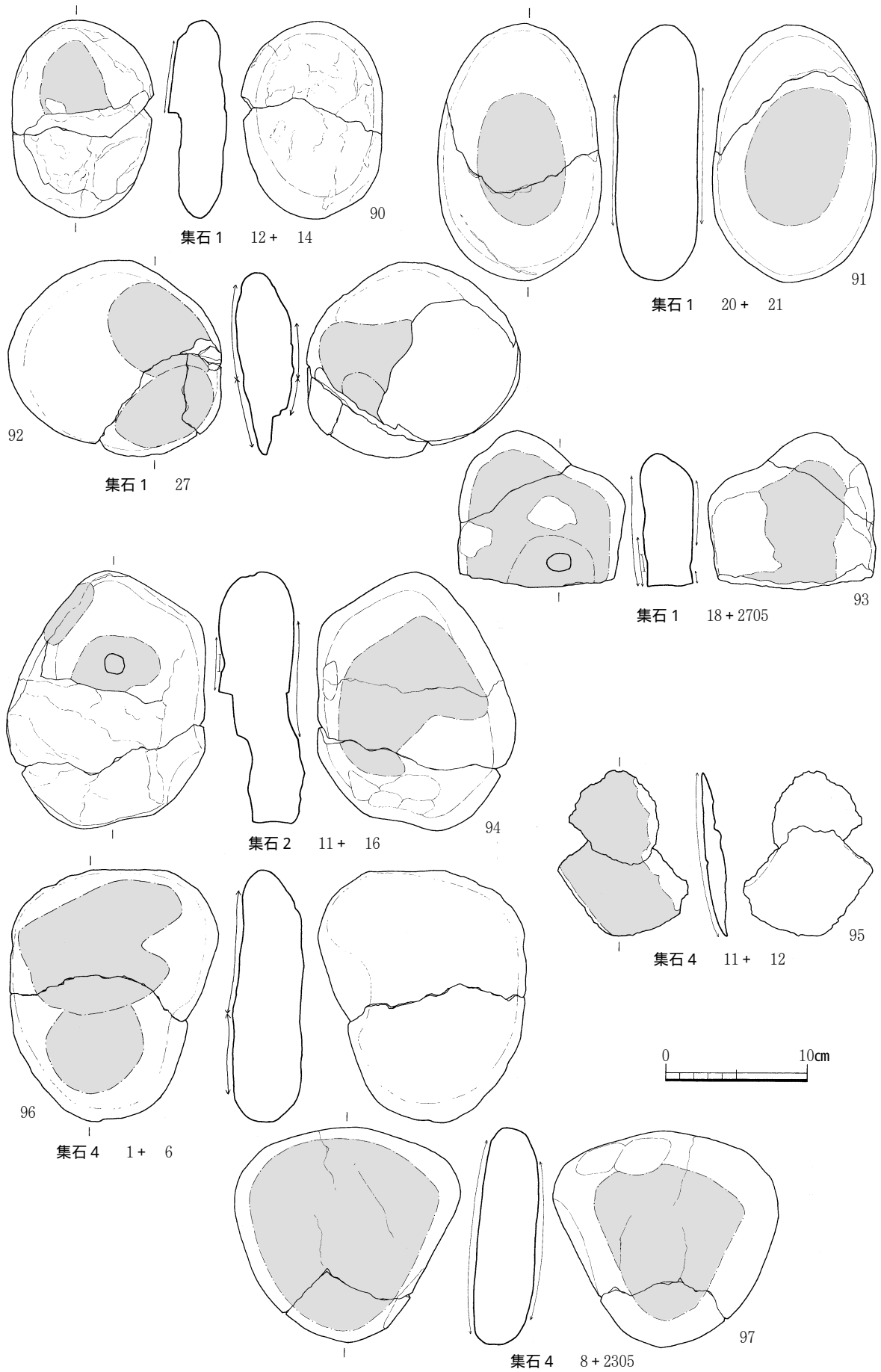


Fig.56 36区出土石器実測図(1)

第4節 各調査区の成果

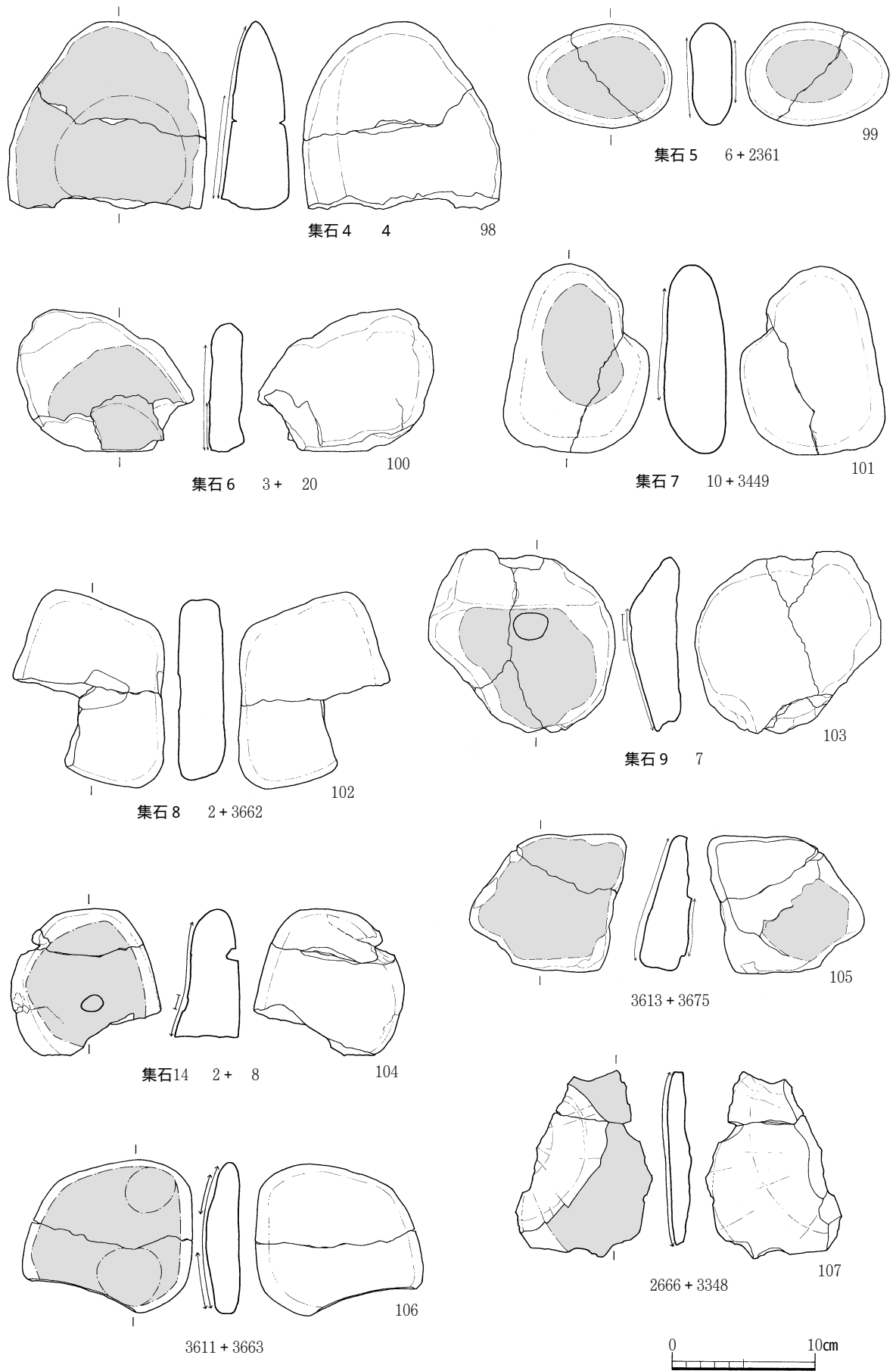


Fig.57 36区出土石器実測図(2)

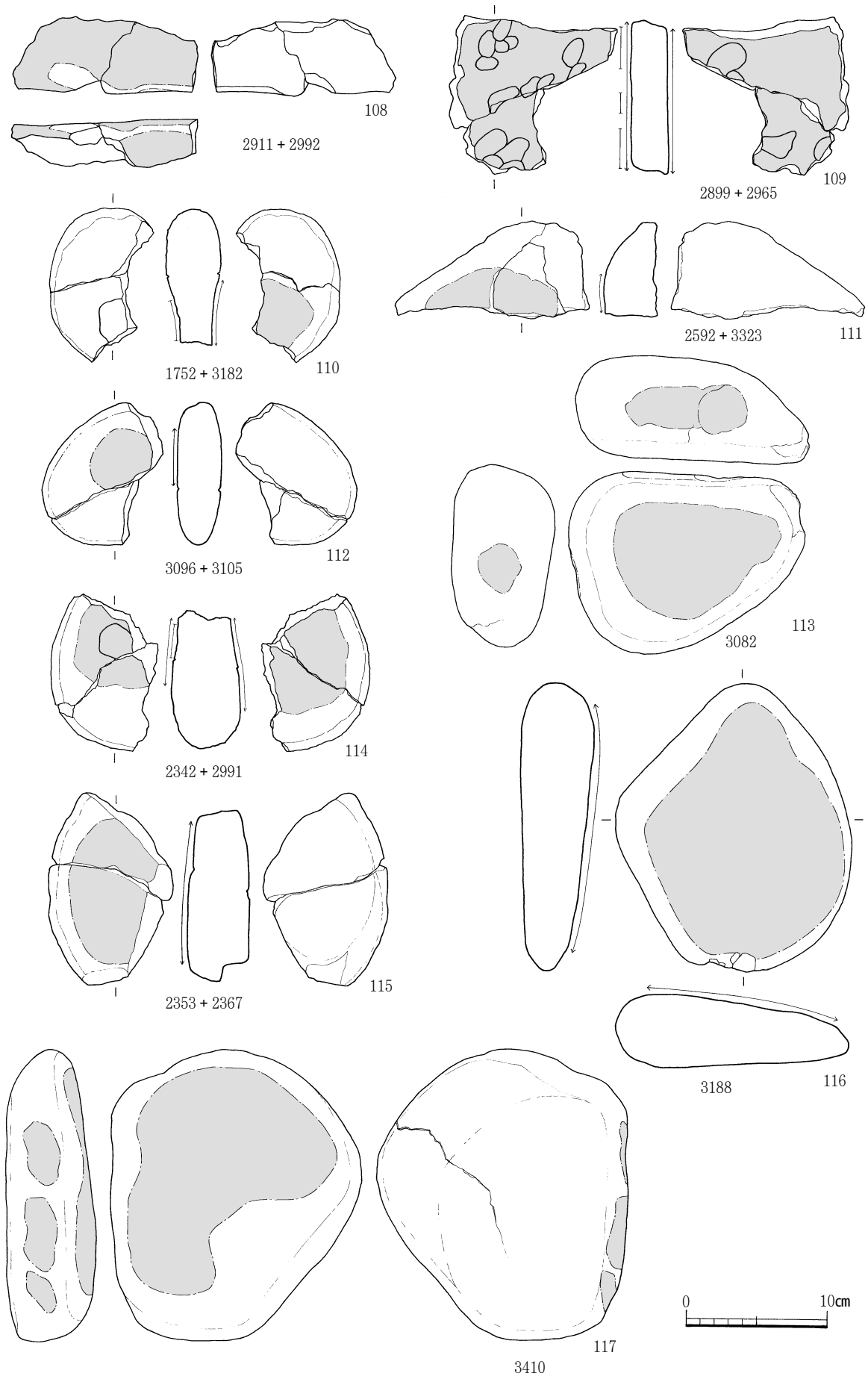


Fig.58 36区出土石器実測図(3)

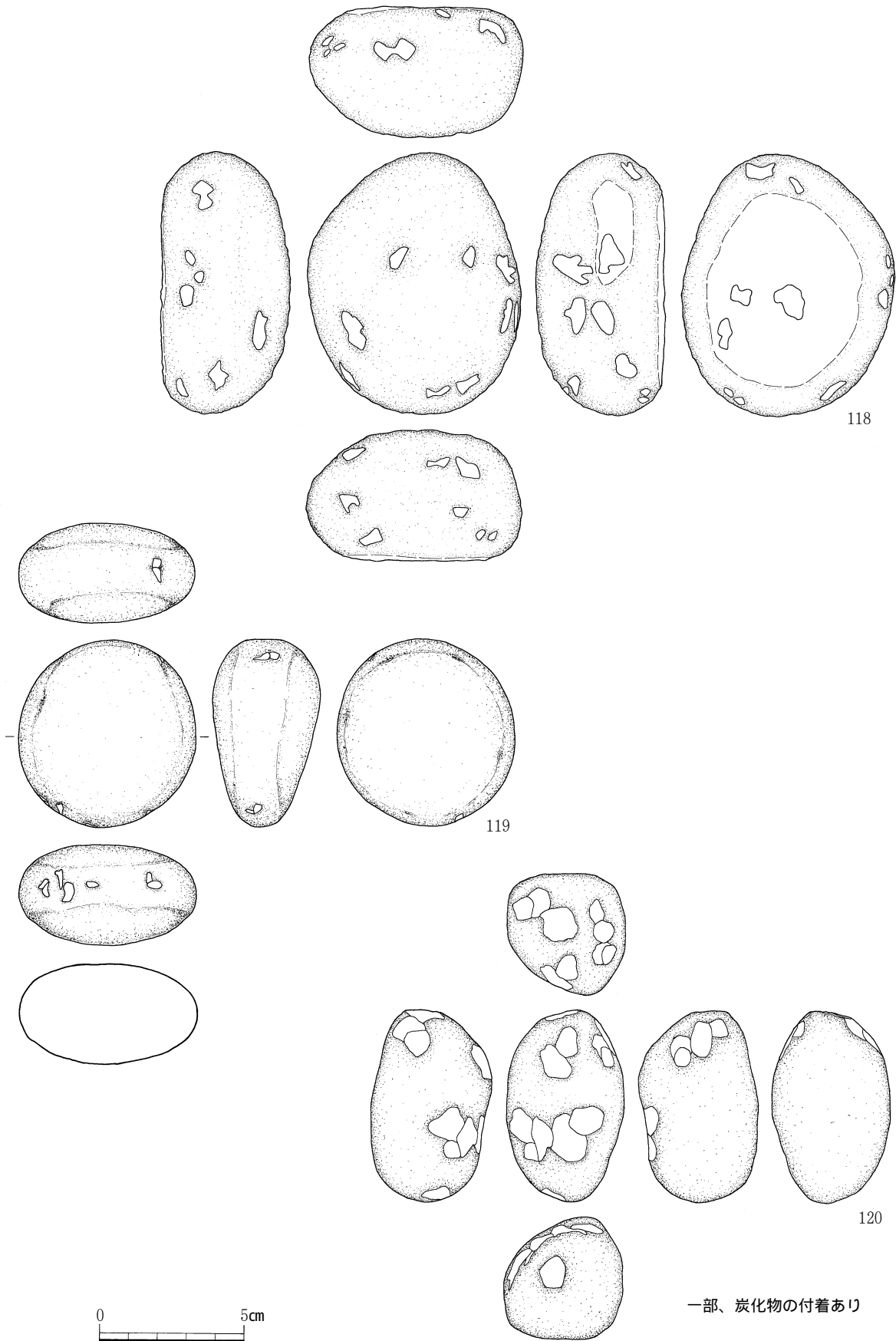


Fig.59 36区出土石器実測図(4)

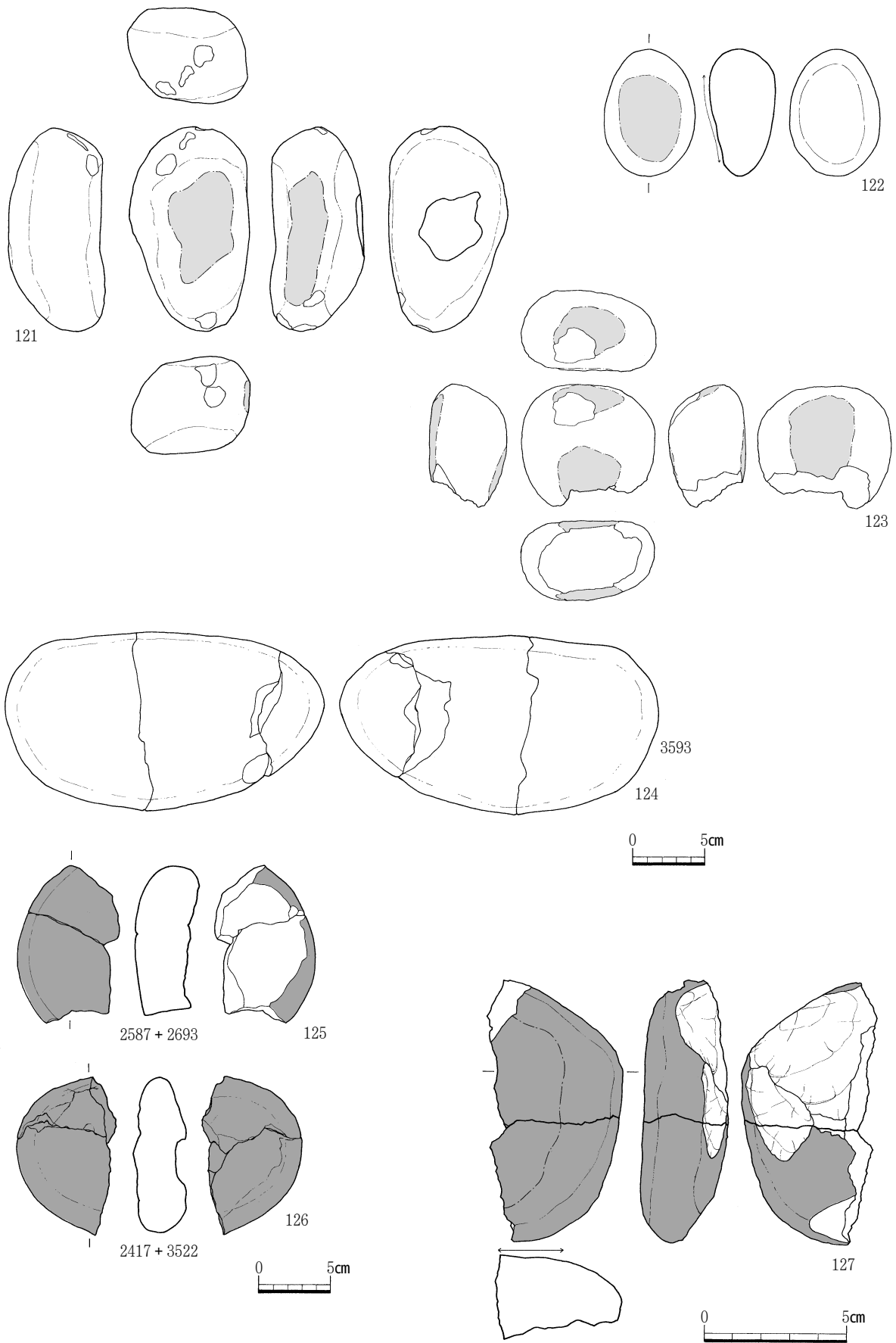


Fig.60 36区出土石器実測図(5)

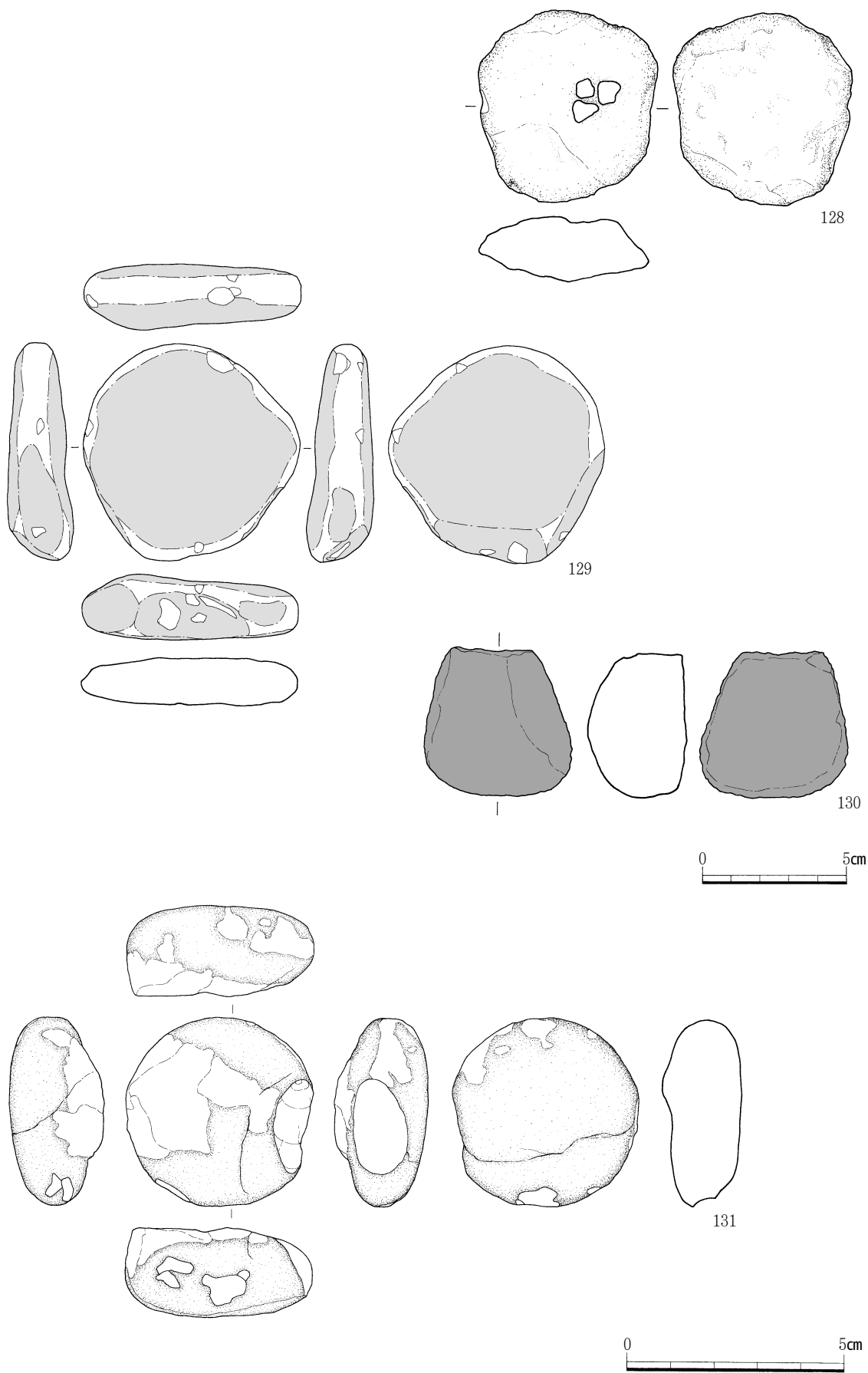


Fig.61 36区出土石器実測図(6)

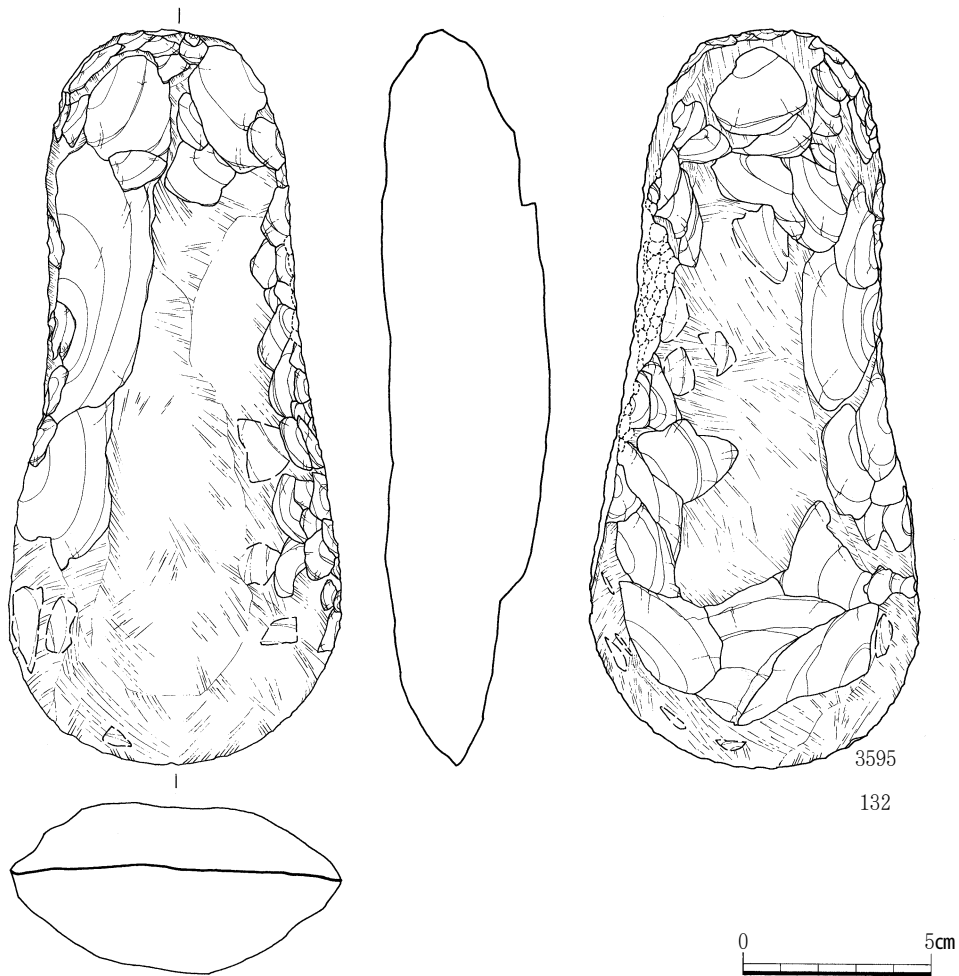


Fig.62 36区出土石器実測図(7)

面と異なり、丸底を呈している。外側の底部は条痕調整も施しておらず底部にそってなでられているだけである。また灰と思われる、淡灰色の粉末が、底部から底部付近の胴部が立ち上がるあたりにこびりついている。色調は底部付近と口縁部付近は暗褐色を呈し、特に口縁部文様帯付近は、炭化した付着物がみられる。また二次焼成を受けたらしく、胴部のやや底部よりの、シリンダーが開くあたりでは赤褐色に色調が変化している。この付近の土器片はほとんど器壁が粗くなり、接合状態も悪い。内面は外面にくらべ、黄褐色の色調を呈している。炭化物等の付着は見られない。

78・85・86・87・88・89 (Fig.48・53 類 - 2) 器形・口径・断面の厚み・焼成・3条単位の条痕の施文具を使用していることから同一個体と考えられる。内外面ともに、3条単位の横方向の条痕調整を施した後、器面の外側全体を覆うように、左右交互に緩斜度の条痕文を、3条単位の同一施文具で施している。底部は、外側は平底ながら器面調整の意識が乏しく、水平に面取されていないため、自立させるのが困難である。内面は丸底を呈する。84と同様に、淡灰色の付着が見られる。口縁部、底部の色調は、暗褐色から褐色を呈し、一様である。口縁部外面にはやはり炭化物の付着がみられる。胴部は二次焼成を受けた如く、赤褐色になり、脆くなっている。

二つの条痕文土器群同一個体資料の分布域はほぼ重なるが、類 1は焼土坑1のやや北西よりに集中する傾向にある。類 2は焼土坑1のやや南西よりにその拡がり確認でき、角礫集中域2と出土範囲が重なる。両個体とも、轟A式土器の範疇として捉えられる。

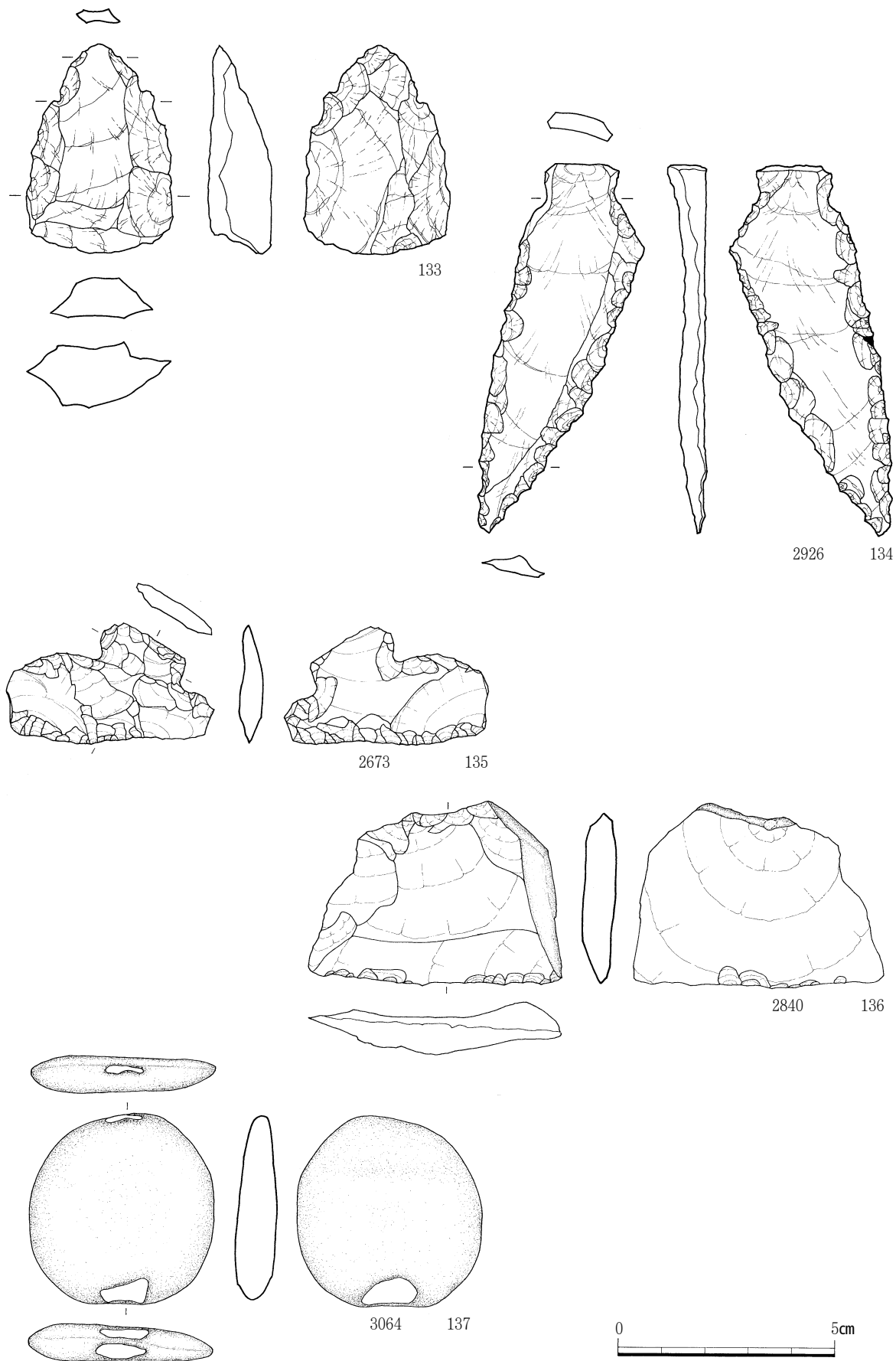


Fig.63 36区出土石器実測図(8)

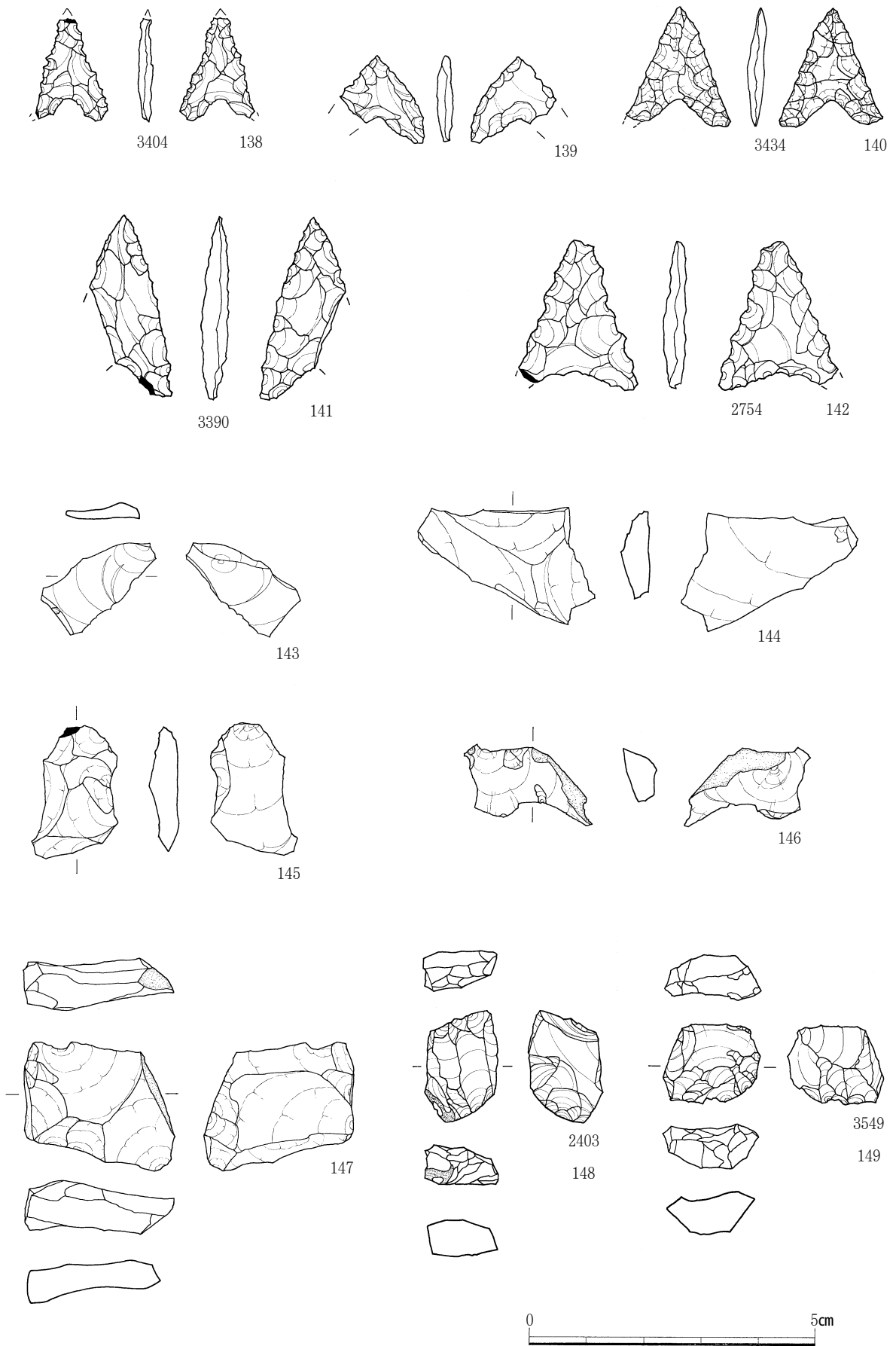


Fig.64 36区出土石器実測図(9)

石器接合資料・磨石・敲石・受熱礫 (Fig.56～58・60)

集石に伴って出土した礫の多くは、破碎されているが、多数の接合資料も出ている。集石内で得られた接合資料以外に、集石周辺での接合例・集石と周辺の礫との接合例も見られる。割れ方はそのほとんどが、礫の一部が欠損したものなどではなく、半裁か、3分割以上に粉碎されたものがほとんどである。また、礫の表面が剥落したものがさらに割れている資料も見られる。割れ口は、一点からの加撃による剥離とは全く異なり、砕けたような破断面を呈している。ほとんどは磨石・敲石として使用されていたものが転用されていると見られ、擦痕・敲打痕を破断面が切っているのが観察できる。

表面が剥落した後、半裁されたように割れている状況は、90・92・94で観察できる。

礫表面から剥落した破片がさらにわれているものとしては、95・107・108・111が上げられる。このうち、107は明確な剥離痕がみられ、敲石・台石としての使用時に剥離した可能性がある。

三つ以上に分割されている資料は多く、93・98・102・104・109・110・112・114・115・124・126・127などである。その割れ方も、剥片剥離など、およそ敲打による衝撃で割れるには不可能に近いほど厚みのある磨石が分割されている。分割された礫が近接することから、割るという行為そのものにあまり意味は無いとみられる。離れた場所同士の接合例があるのは、一度破碎された礫群を、別地点にかき集めた結果によるものであろうか。

また、分割されないまでも、かなりのひびが入り壊れる直前の資料も見られる (94・117)。やはり、割っておくという状態に必ずしなければならない...、ということではないようである。

こうした割れ方には受熱によるものとする見方もできる。しかしながら、表面が真っ赤に焼け、全面が赤変した資料はそれほど多くなく (125・126・127・130)、割れた後再び熱を受けているものは126で見られる程度である。但し、他の大多数の礫には図示できるような赤変は確かに見られないが、一部に赤変した例は数多い。熱をうけた礫が、こうした赤変が肉眼観察できるものに限られるものと限定するのは早計のようである。これらの判断には、破碎のメカニズムと共に、膨大な実験データが必要となるだろう。

石器 (Fig.62・63・64)

132 磨製石斧 硬質な頁岩製とみられる両刃の縦斧である。周辺からの入念な剥離による整形を施し、刃潰し状の敲打による整形を側面に行っている。整形時の磨きは、表裏とも、左右どちらも斜方向から丁寧な磨きを行っている。刃部には僅かに刃こぼれ状の使用痕もみられる。また、刃部先端に僅かながら右斜め方向の使用による線状痕も観察できる。出土地点は 層から 層上面の一部が削平された場所であったが、削平後残っていた 層上層から下層中に埋っていた。 層上層に伴うものと考えられる。

133 尖頭器 多孔質安山岩の中でも、比較的良質な石材を使用している。不定形の幅広剥片を素材として、先端に余り調整を加えず、主に左右両側面からの調整によって尖らせている。

134 石匙 サヌカイト質安山岩製、素材の打面をつまみの突出部として利用している。縦長剥片を利用し、両側面に緻密な刃部作出を行っている。

135 石匙 チャート製、同じく素材の打面をつまみの突出部として利用している。

136 二次加工剥片 サヌカイト質安山岩製、幅広剥片の末端に刃部を作出しており、石匙としての機能が想定される。

137 石錘 扁平な円礫の両端を打ち欠いている。 層下層から検出されているが、上層からの落ち込みの可能性も残る。当該期にこのような石器の利用が見られたのか、今後の追加資料を待って考えたい。

148・149 楔形石器 黒曜石製、良質な西北九州系の黒曜石を利用している。厚みのある剥片を素材にして、微細剥離を素材の両端に施している。

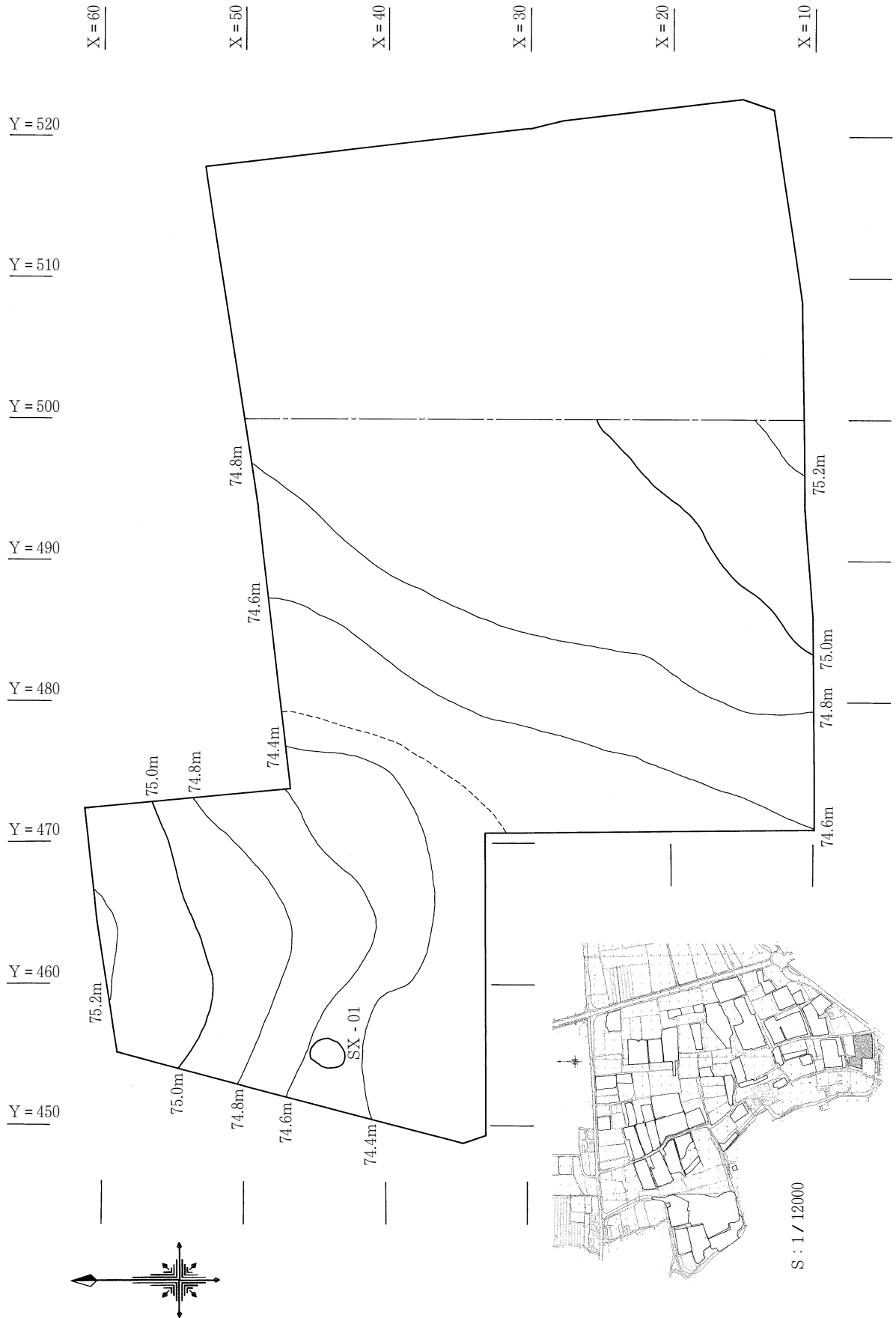


Fig.65 5区 層遺構配置図 S : 1 / 400

5区 (Fig.65~68)

5区は、北西方向から入る谷と、やや東よりの北側から下る谷が合流する地点と見られる。北西方向から入る谷は、本項の17区のところでも述べた南北方向に入る埋没谷の一部である。また西側から下る谷は、第1項の22区の段で述べた、小江山と石の本遺跡群を隔てる谷の一部である。調査区外の南西側で合流していると考えられる。調査区西側の拡張区で北側から入る微丘陵は、17区の段で述べた二つの谷の間に入る、「鰐山」からの丘陵の末端である。

調査区のほとんどが埋没谷の中と見られ、層・層・層の各土層ともに2つの層に分層できる。17区と同様に層は、色調から層との漸移層と考えられるa層と、アカホヤの二次堆積土がまとまって見られ、色調が最も明るい橙色のb層に分かれる。また、層はこのb層との漸移層であるa層、層本来の土質であるクロニガが確認できるb層に分かれる。

この埋没谷で水が流れた痕跡は、基本層序層～層では確認できなかった。北側の8区・9区で層を発掘調査した際、埋没谷の最も深いところで砂層の堆積が確認されている。水が流れた痕跡は、少なくとも後期旧石器時代まで遡り、縄文時代早期にはすでに谷が埋没していた。また、層が分層しているところでは、基本層序層の堆積が、丘陵上の堆積とは著しく異なる。いわゆるニガシロ層は形成されておらず、ニガ土を含む、暗褐色土層が層の上面まで堆積している。本調査区も同様な堆積がみられ、層は、ニガ土の入らない、クロボク土壌に似た土質である。8区(石の本遺跡群参照)で報告した層に相当する堆積とみられる。同様な堆積は、埋没谷が入る17・13・9区でも確認されている。

また5区の東側半分は、埋没谷の東側斜面にあたると思われるが、後世の耕作によって、ほとんど層に

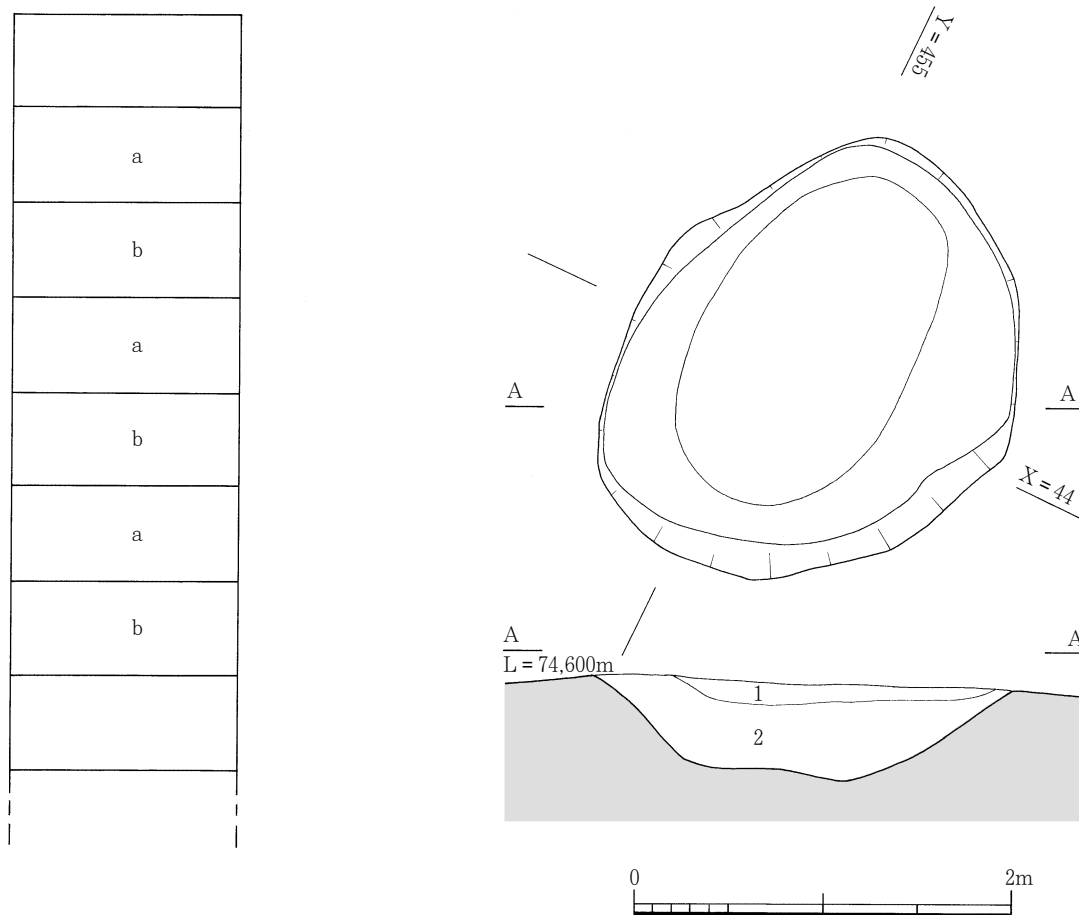


Fig.66 5区土層柱状図及びSX - 01土坑実測図

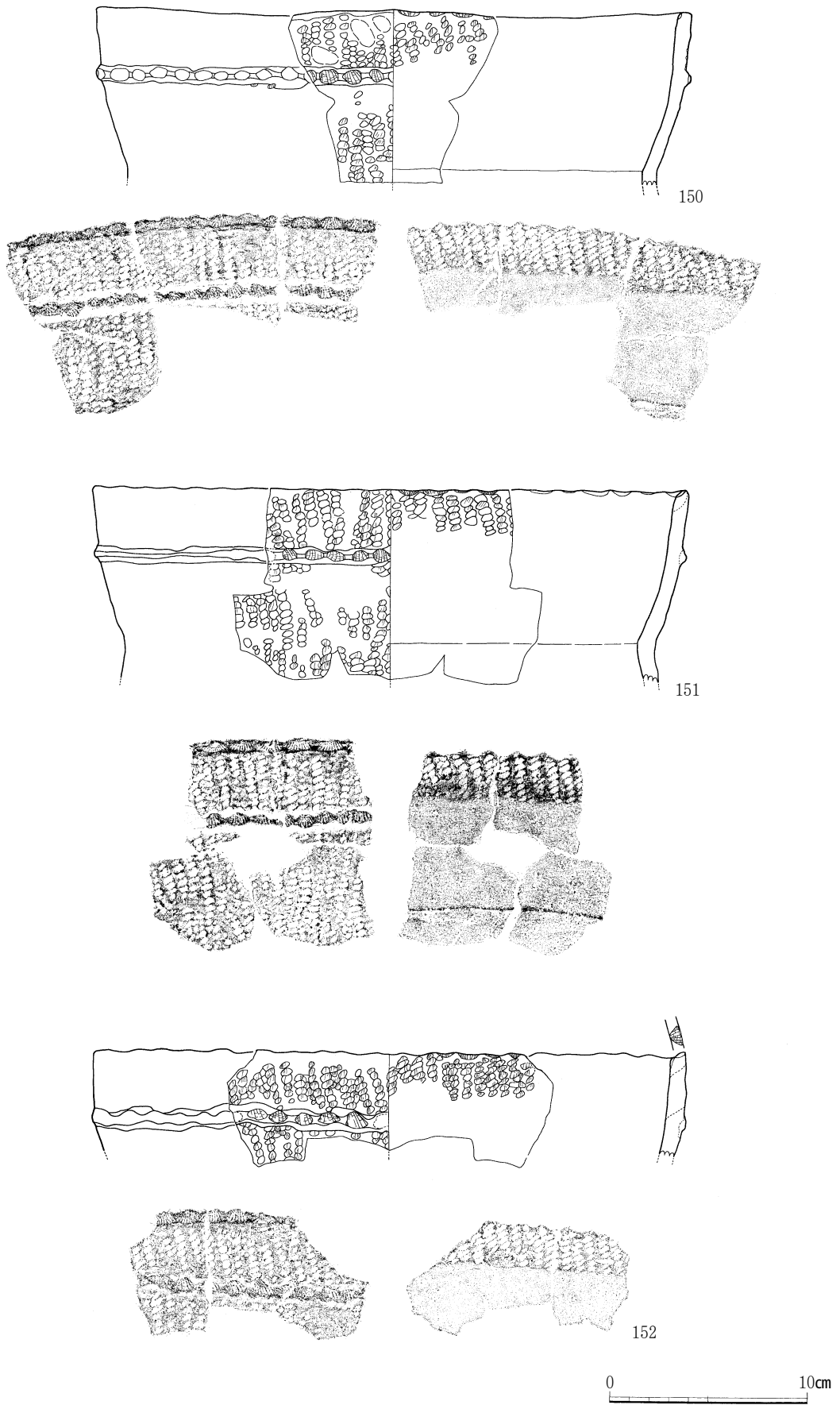


Fig.67 5区出土 類土器実測図(1)

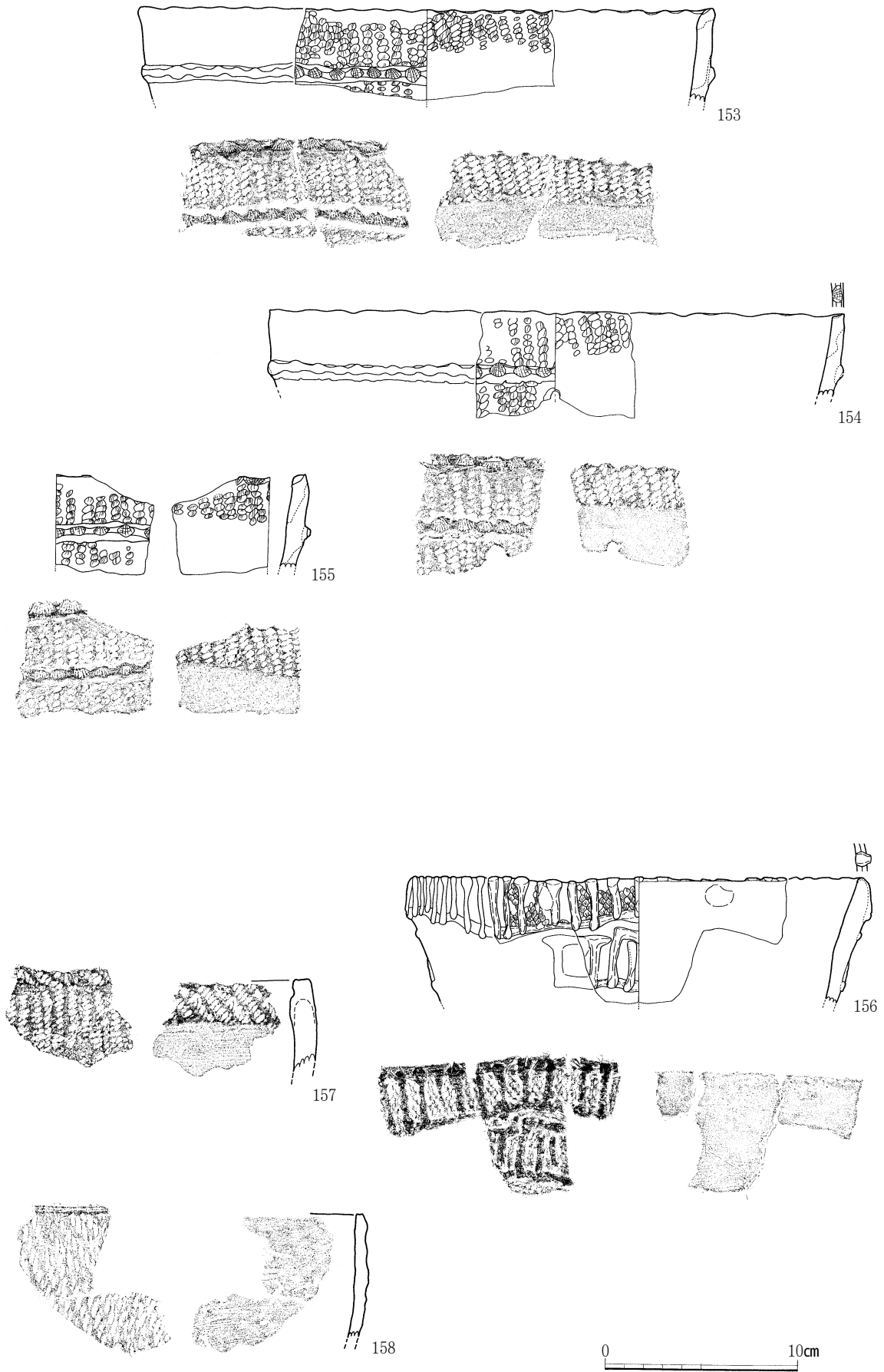
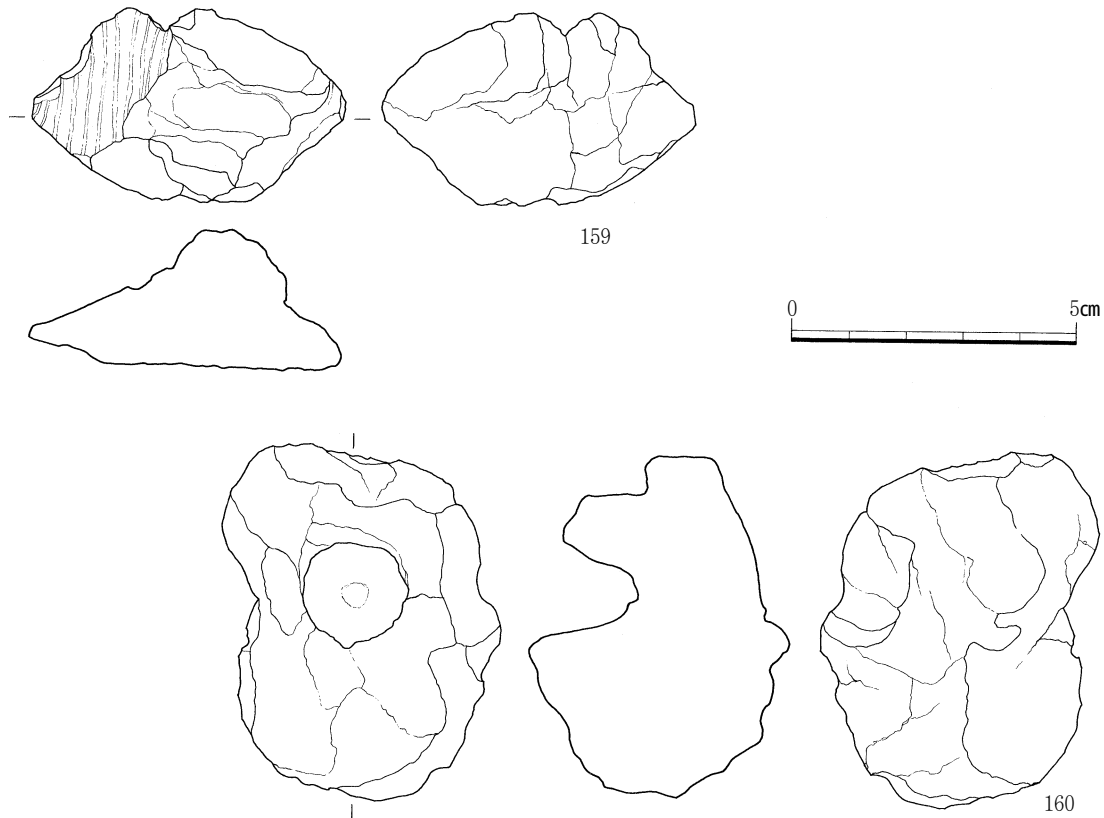


Fig.68 5区出土 類土器実測図(2)



SX - 01出土焼成粘土塊実測図 (参考資料)

まで削平を受けていた。東側の調査区は(発掘調査は行われなかったため調査区番号無し)、同様に削平を受けていたが、4区・9区では5区にむかって谷の傾斜方向が確認できたところから、地形的に大きな変化を持つことなく、埋没谷へ傾斜していたと考えられる。

SX - 01 調査区西側の斜面で検出された。約2mの円形の焼土坑である。検出面は b上面にある。埋土の堆積から、遺構の掘り込み面は更に上層にあったと考えられる。

埋土1層 混赤褐色土黒褐色土層 黒褐色土に 層の土質に似た褐色土がまじり、焼土と思われる赤褐色の粒子が混じる。

埋土2層 混明橙褐色土黒褐色土層 赤褐色の粒子のほかに、明橙褐色のブロック状の土が入る。硬く焼けており、一部焼成粘土として検出できた(焼成粘土塊実測図)。

出土遺物 (Fig.67)

層から a層にかけて縄文時代後～晩期の土器を始め、弥生土器も混じる。 b層からは遺物はほとんど検出されなかったが、SX - 01周辺でFig.67の土器が検出されている。

船元式系土器群 (Fig.67・68)

150・151・152・153・154・155 菊池郡七城町岡田遺跡で検出された土器群と同型式と考えられる。LRの撚りによる縄文を内外面共に施した後、突帯を施し、突帯と口縁部に二枚貝の押圧を行っている。接合しなかったが、同質の色調と胎土から同一個体の可能性もある。いわゆる竹崎式の範疇で捉えられよう。

156 LRの縄文を内面に施した後、方格に粘土紐を貼り付けている。時期的には前述の資料より後出するものと見られる。

157 口縁部内外面、口唇部に同一原体である縄文を施している。

158 口縁部外面にやや粗雑な縄文を施している。

焼成粘土塊 (5区出土焼成粘土塊)

SX - 01の埋土2層中に含まれていた。大小10個程度の粘土塊が検出されている。大きなものでも、160の5 cm前後のものである。159は、板目の圧痕が付いた粘土塊。160は中央に親指と思われる、指の刺突痕が見られる。焼成は悪く、粉々に砕けやすい。このような出土遺物から土器焼成坑の可能性も考えられるが、時期は特定できない。

13区 (Fig.69~78)

13区の立地は、13区のほぼ中央を16区から続く埋没谷へ伸びる、谷地形にある。13区埋没谷の東西両側の丘陵に、10区・11区が立地している。11区は64区からの微丘陵の延長上に位置し、8区へ繋がる。この丘陵の末端は5区まで続く。10区は、14区・15区の丘陵の南側斜面に位置している。10区は、層上面で検出された、縄文後～晩期の埋甕が残されていた。13区と南側の9区・8区の谷の中央付近は、層のニガシロ層がほとんど見られず、代わりに黒色の粘質土が堆積している。

13区は、層上面まで削平されているようであり、後～晩期の黒色磨研土器様式の一部が早期の遺物と混在して出土している。

層は、場所によって a層と b層に分層できる。a層は、層との漸移層で縄文時代後～晩期以降の新しい土層と考えられる。b層は、アカホヤの二次堆積土がもっとも集約された土層だが、縄文時代後～晩期の遺物を含んでいる。さらに層は層との漸移層である a層、いわゆるクロニガ層と見られる b層に分層される。層はいわゆるニガシロ層そのものは見られず、ニガ土を僅かに含む、埋没谷への流入土と見られる (Fig.70)。層は典型的なローム層の堆積ながら、層との間に砂層が認められ、水が流れた痕跡がある。同様な層位は、9区・8区・5区でも認められる。

13区で検出された遺構は、層から層上面で6基検出されている。遺構は、a層を除去した直下のb層で確認された。掘り込まれた層位は未確認である。

SX - 01 埋土は明褐色土が堆積している。焼土と思われる橙黄色の粒子が多く含まれる。遺構の底面から条痕文、貝殻文系土器、礫が検出されている。焼土にはばらつきがあり、埋土全体に広がる。埋土全体が、別地点からの流入土と見られる。

SX - 02 埋土の暗褐色土には、焼土等は含まれない。確認面は b層であるが、遺構の掘り込み面はさらに上層と考えられる。

SX - 03 埋土に焼土の粒が含まれている。土質はアカホヤの二次堆積土である褐色土である。b層上面で確認されている。

SX - 04 b層を掘りこんでおり、時期は不明。土坑状の掘り込みに角礫・円礫が混在して投げ込まれた状況である。断面観察から、本来は二つの遺構であったと考えられる。

SX - 05 遺構の埋土は暗褐色土で、1 mm前後の焼土が含まれている。本来の掘り込み面は、確認面より



Fig.69 10・11・13区 層遺構配置図 S : 1 / 700

第4節 各調査区の成果

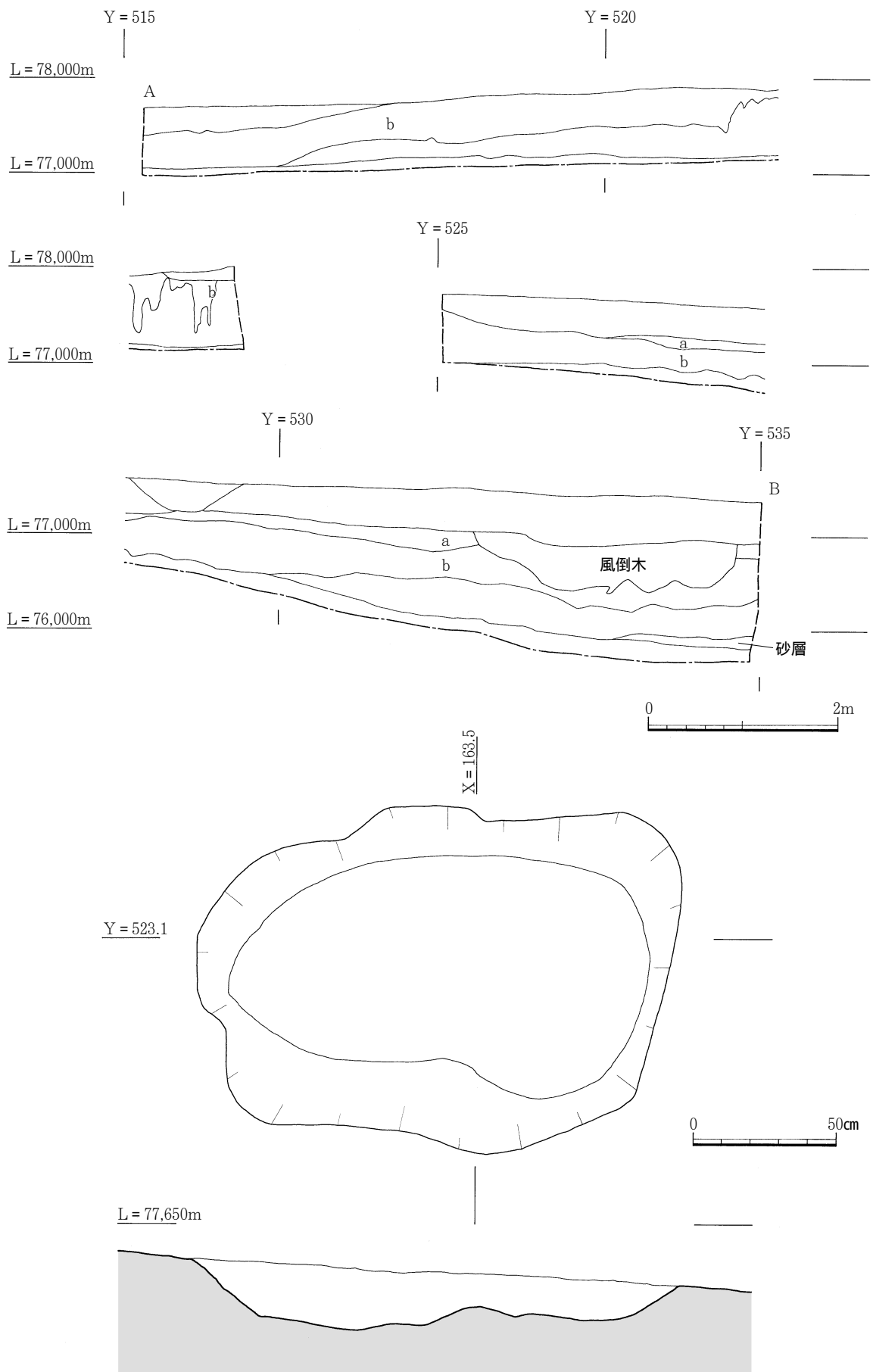


Fig.70 13区土層図及びSX - 01土坑実測図

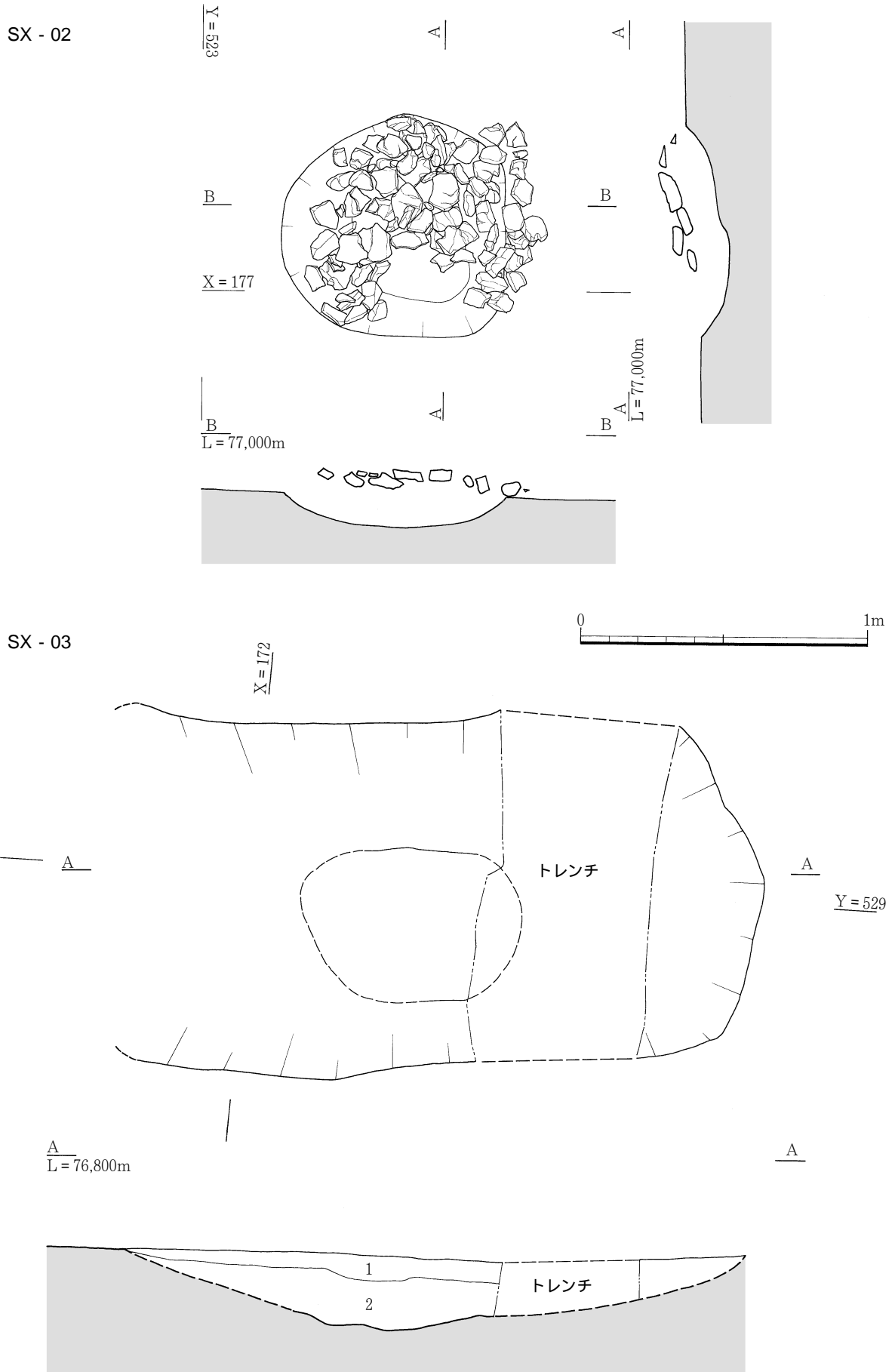


Fig.71 13区遺構実測図(1)

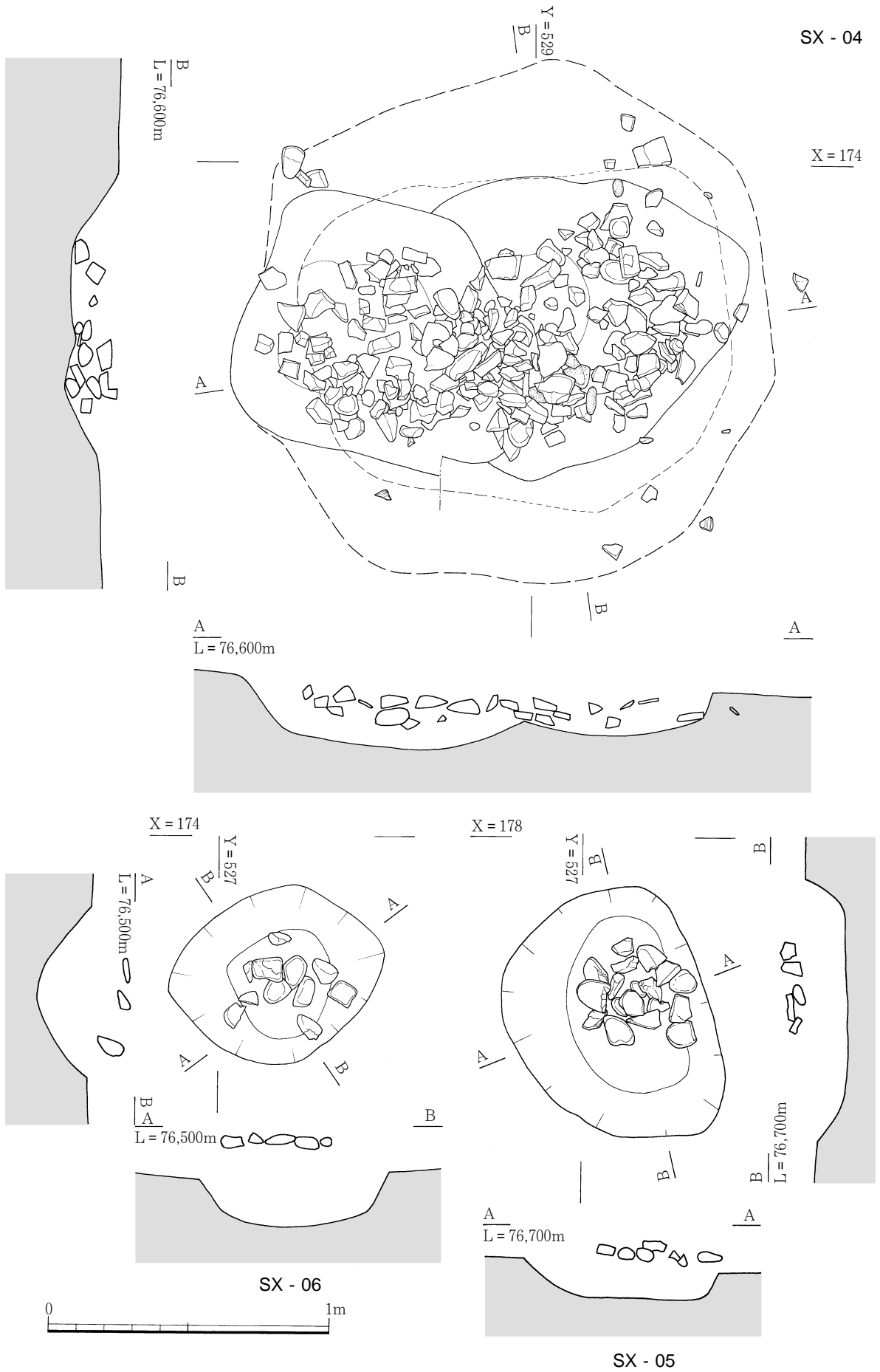


Fig.72 13区遺構実測図(2)



Fig.73 11・13区出土 類土器実測図(1)

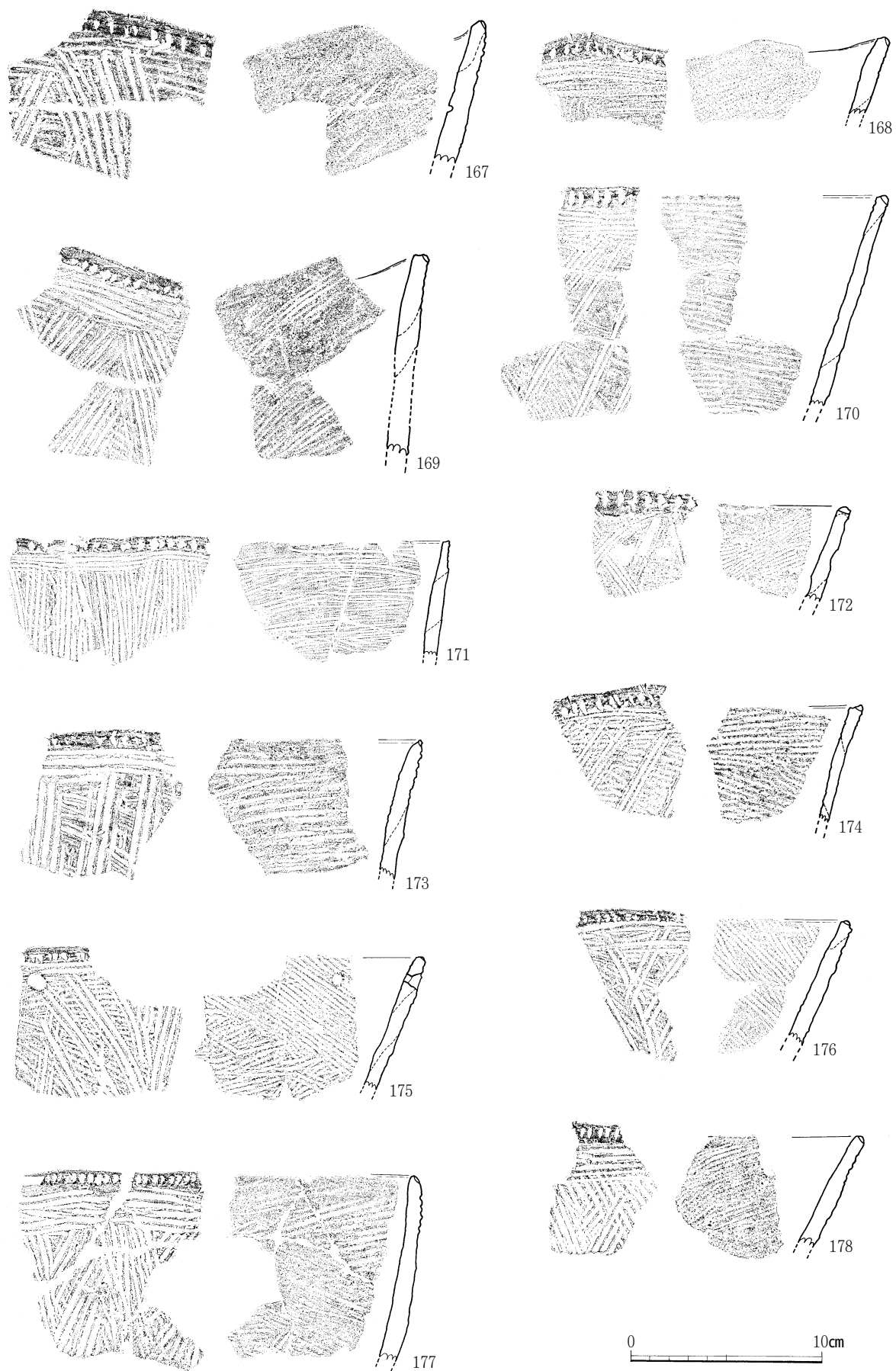


Fig.74 11・13区出土 類土器実測図(2)

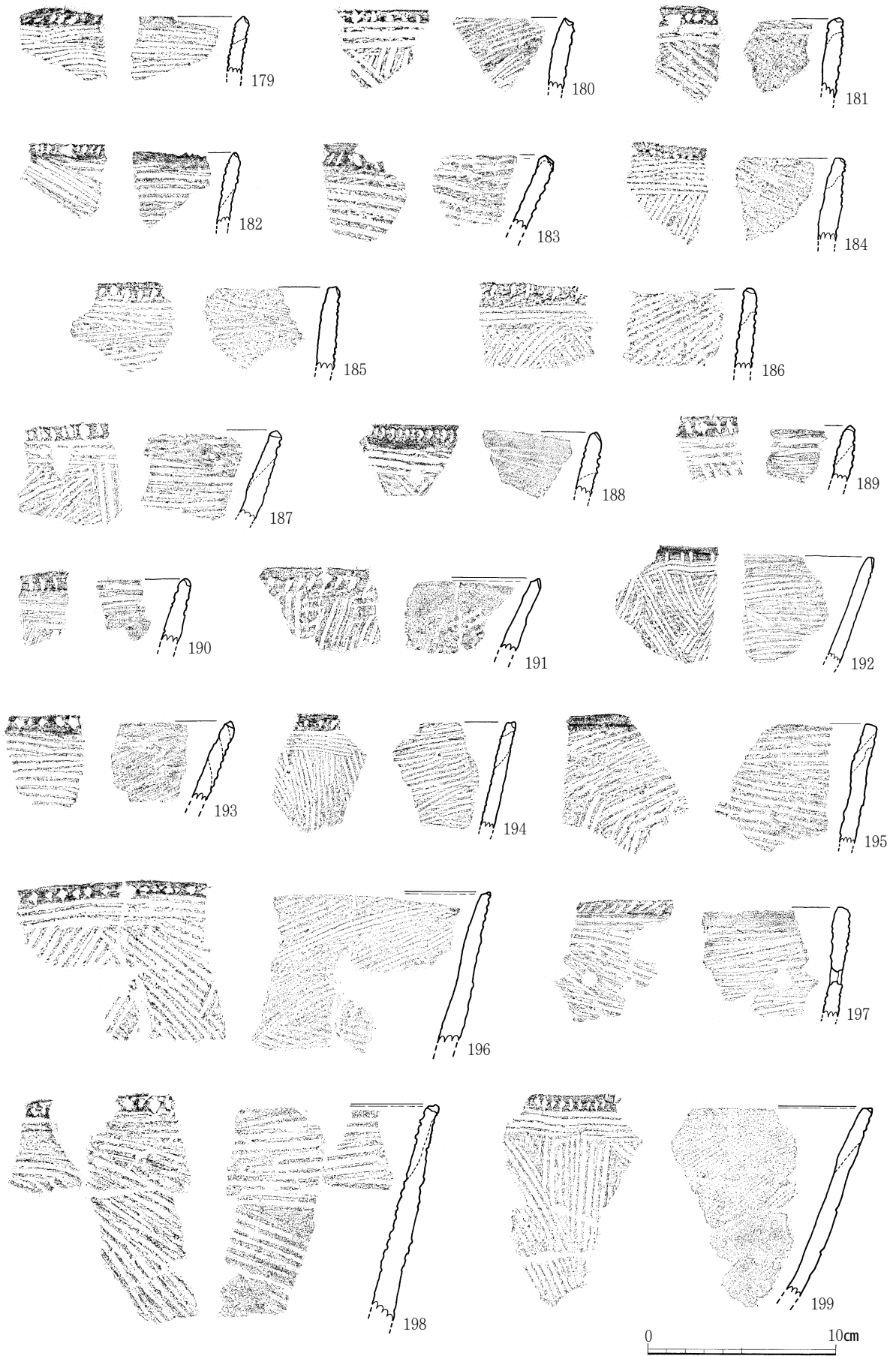


Fig.75 10・11・13区出土 類土器実測図(1)

上層であったと考えられる。

SX - 06 円礫を主体としている。検出面は b層上面。

出土遺物 (Fig.73~78)

遺物は、a層からb層にかけて多く検出されている。a層は、縄文時代後～晩期の黒色磨研土器と条痕文土器、貝殻文系土器、轟B式土器等複数の土器型式が混在した遺物包含層である。これらの遺物の供給源は、隣接する調査区から出土した土器との接合によって窺える。貝殻文系土器群は、北側の17区と接合している。また、条痕文系土器群は、11区(198)と接合しており、供給源は谷の西側斜面と見られる。また接合資料は得られていないが、10区でも同系統の土器が検出されており、調査区の立地と遺物の広がりから、貝殻文系土器群の時期は17区にその中心があり、条痕文系土器群の時期には、10区・11区の東西両地点に遺跡の中心があった可能性がある。13区で検出された遺構は、b層上面で検出されているため時期の特定は出来ないが、これらの土器型式に伴う可能性も残される。

条痕文系土器群 (Fig.73~76)

36区の条痕文系土器群と同様に、内外面ともに二枚貝の復縁による条痕文を、器面調整のように横方向に施した後、外面に明確な文様帯を施している。外面の文様帯は、底部まで達する斜方向から縦方向への条痕文と口縁部文様帯の横位条痕文、さらに口唇部への刺突文である。36区で検出された同型式と異なるのは、波状口縁の器形が含まれていることである。

161・162は、浅く幅の広い貝殻条痕文を施している。口唇部の刺突文は、同じく貝殻の復縁によるものであるが、1条程度の浅い刺突である。

163・164・165は、原体の幅が2条程度しかない貝殻復縁で施文されている。口縁部の波状に沿って、口縁部文様帯が施されているが、166のように口縁部の形状に沿わないものもある。

2条から3条程度の幅の狭い原体による施文でも、口縁部文様帯を複数回施文して、文様の幅を広めた170も見られる。また口縁部文様帯を省略した、191も見られる。175の補修孔は、基本的に外面からのみの穿孔と見られる。原体の幅にも変化が見られるが、原体を構成する貝殻復縁の幅そのものが細かいものもある(171)。また、口縁部、底部の外面の色調は、概して暗褐色を呈するが、口縁部・底部の接合資料に比べて数の少ない胴部片の接合資料は、外面の色調が(200・202)赤褐色を呈しており、二次焼成をもっとも受けた部分と考えられる。

また底部形態は、ほとんどが尖底に限りなく近い、平底である。そのほとんどが底部に条痕による緻密な調整を施さない(201・206)。まれに施していても水平にならず(204・208)、独立することが出来にくいと見られる。また204は、平底と尖底の折衷的な形態であり、203・205は明らかに尖底である。この尖底の実例は、熊本大学が調査し、木村雅明・富樫卯三郎によって設定された轟A式土器の標式土器のなかに見られる。また、これら平底の内面は、断面観察から見ても明らかに尖底を呈している。平底としての機能はもはや見出せない段階と捉えられよう。何れの資料も轟A式土器の範疇として捉えられる。

石器 (Fig.78)

221・223 使用痕剥片 多孔質安山岩の中でも、比較的良質な、石質を使用している。

222 尖頭器 厚みのある横長剥片を利用して周辺に両側面から調整を施している。

224・225・226 石匙 224はチャート製、225・226はサヌカイト質安山岩製の石匙である。素材の打面側の厚みを利用してつまみに相当する突出部を作出した225に対し、顕著な二次調整によって、打面側を刃部作出した224が見られる。素材剥片の形状からか、刃部が斜めに作出されている。

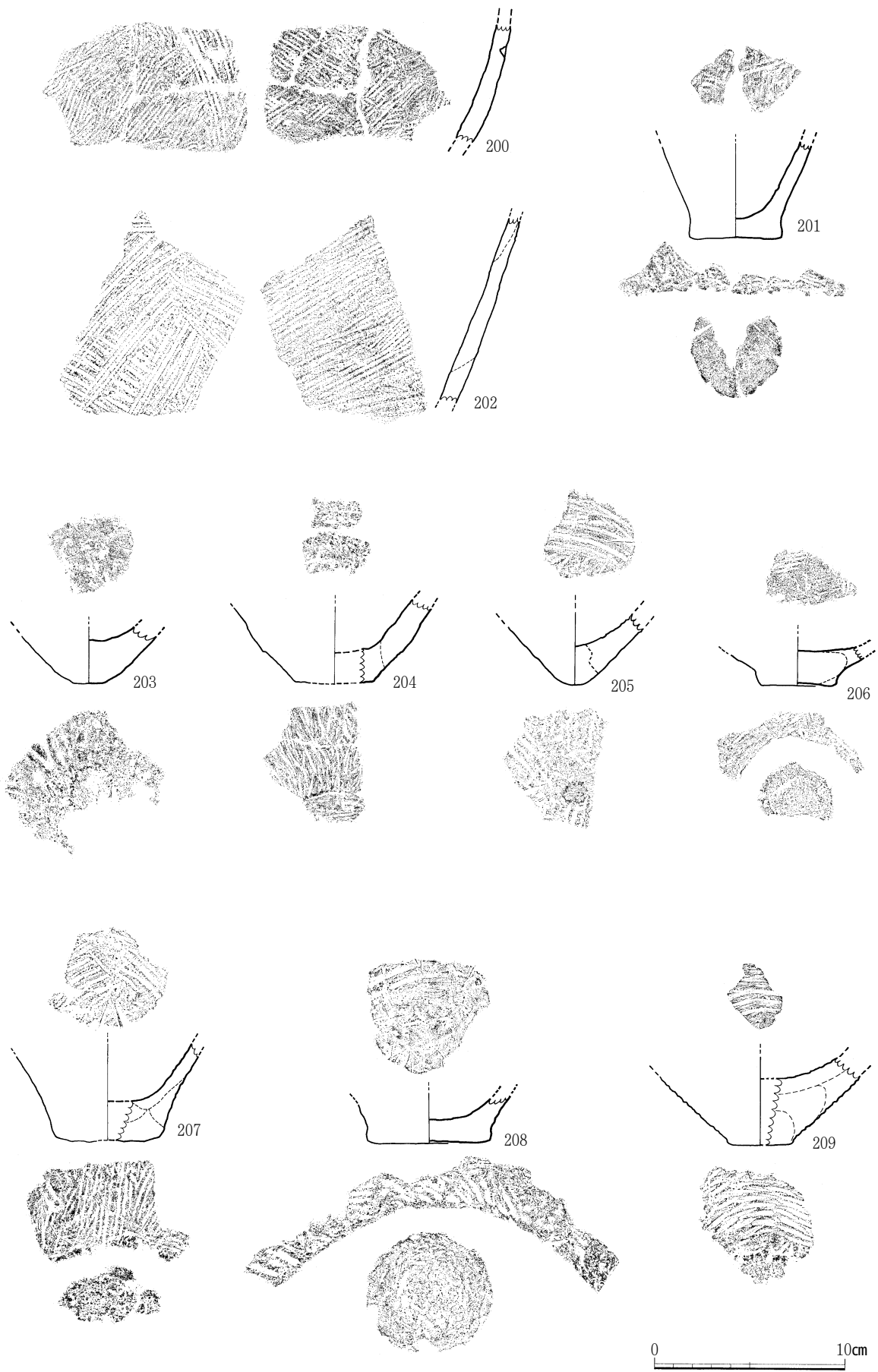


Fig.76 10・11・13区出土 類土器実測図(2)

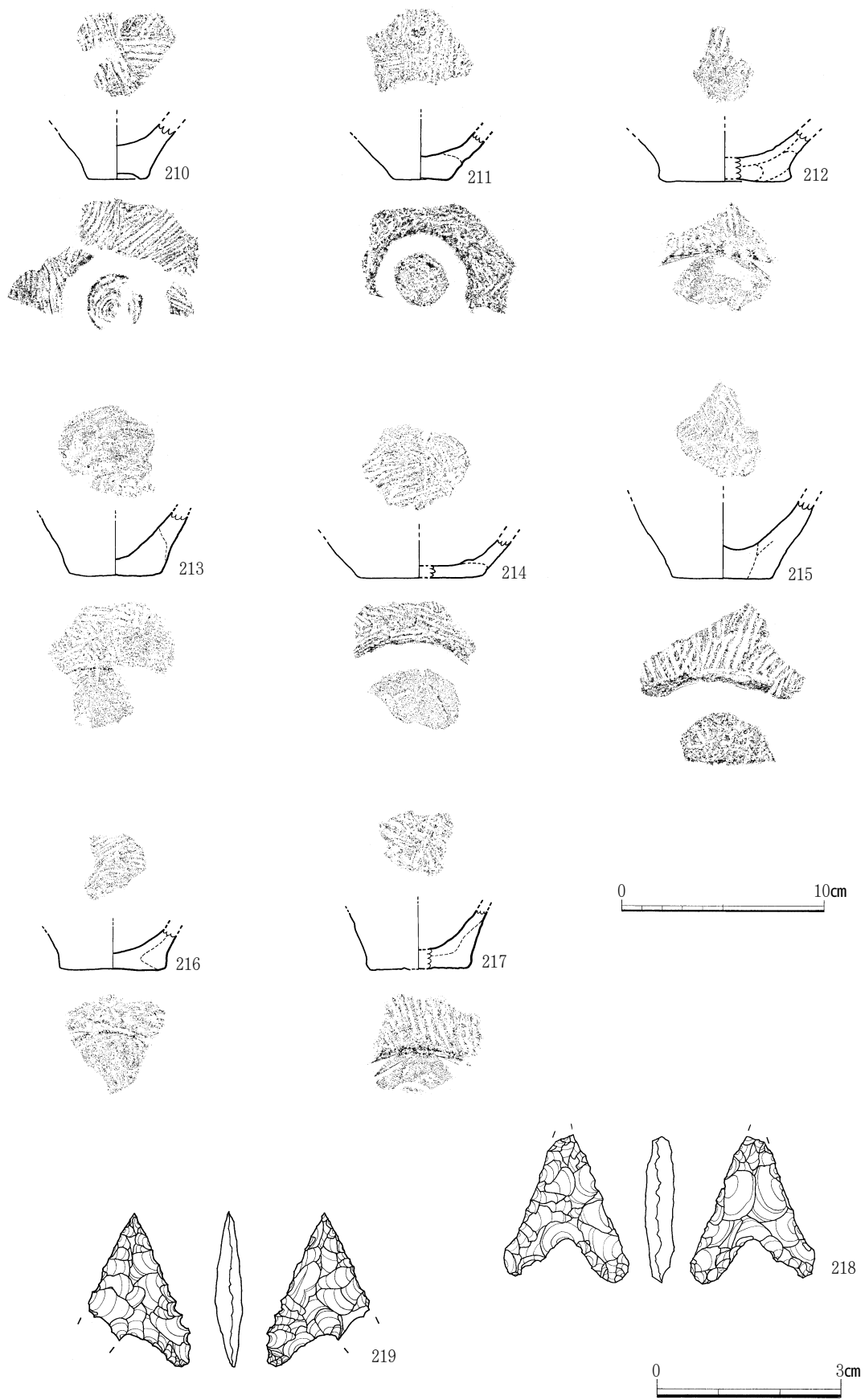


Fig.77 13区出土 類土器及び11区出土石器実測図

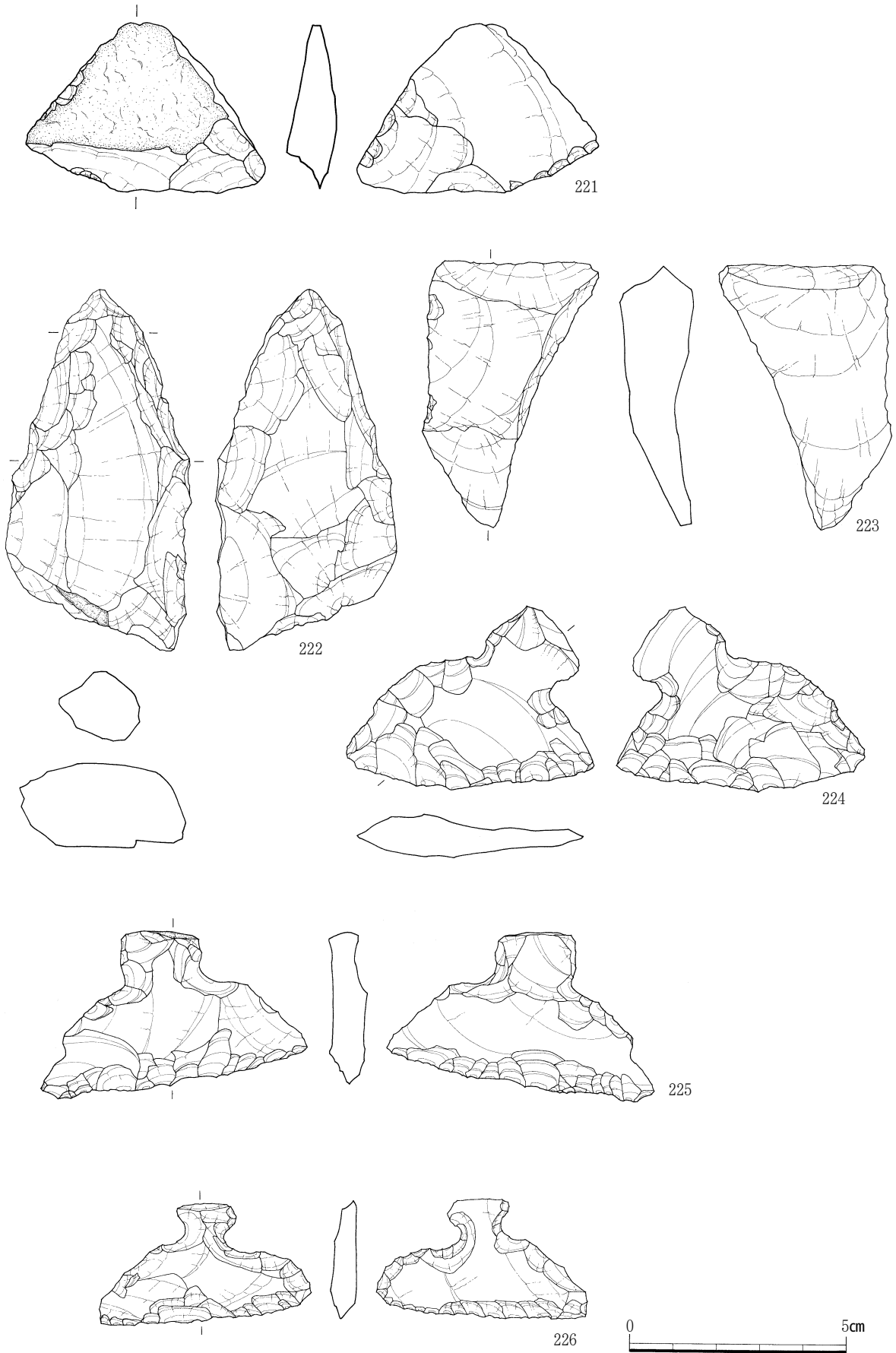


Fig.78 13区出土石器実測図

その他包含層遺物 (Fig.79~85)

石の本遺跡群で出土した遺物量は、コンテナにして約1500箱を超える。この大部分は、縄文後～晩期の黒色磨研土器、扁平打製石斧、集石遺構に伴う円礫などである。出土している土器のバリエーションも多く、概ね13に分類することができた。調査区ごとに、異なる土器型式を可能な限り網羅して図示してある。石器は時期ごとに抽出出来ないため、特筆すべきもののみをピックアップしている。

以下、土器の基本的な分類について纏めておく。

類：押型文系土器群 楕円・格子目・山形押型文が見られる。外面の施文は横方向・縦方向のどちらも存在する。口縁部内面には原体条痕文及び押型文の施文を施す。器形は頸部で緩やかにくびれ、口縁部は外反するものが多い。底部は平底・尖底のどちらも存在する。田村式・ヤトコロ式に相当する土器が含まれている。

類：沈線文系土器群 沈線文・刺突文を主に施し、突帯を貼り付けるものもある。口縁部は、二重口縁を呈するものと、緩やかに外反するものがあり、波状口縁を呈するものもある。平椀式・天道ヶ尾式土器に相当する。

類：貝殻文系土器群 底部形態は平底ないし、上げ底気味の平底。器形は、単純なバケツ状のものと頸部がくびれ、ラッパ状に開くものがある。口縁部には二枚貝の先端による刺突文、胴部には格子目に条痕文を施しているものと、沈線で区画された幾何学模様の中に撚糸文を施すものがある。塞ノ神式の範疇として捉えられる三代寺タイプ、塞ノ神タイプに相当する。

類：条痕文系土器群 底部は尖底、又は尖底に限りなく近い平底。底部から緩やかに広がり、口縁部は直口する。内外面ともに貝殻の復縁による条痕文を施す。口唇部には刻目が施される。典型的な轟A式である。

類：轟B式 内外面の調整は、条痕の後ナデ消している。波状口縁を呈し、断面がかまぼこ状突帯を施す、轟B式でも新段階のタイプである。

類：曾畑式 深鉢は、口縁部内面に刺突文を施し、外面には刺突文のほか横位の沈線文による区画施文と斜方向の山形施文による沈線文を充填する。刺突文を施さない、鉢形の器形も見られる。複数の文様帯を省略していないところから、熊本で検出される曾畑式の中では古層に位置付けられる。

類：船元式系土器群 頸部がくびれ、口縁部が内傾して、いわゆるキャリパー状の器形を呈している。縄文を施した後、沈線文、突帯文で施文している。

類：並木式 胎土に滑石を含む。

類：阿高式系土器群 凹線文を器面全域に施すもの、胴部より上に施すもの、口縁部付近に集約するものがみられる。阿高式、南福寺式、出水式に相当する。

類：鐘崎式

類：北久根山式

類：西平式

類：その他

出土した土器は、調査区ごとに抽出し、出土した土器型式が複数の場合は割愛せず、可能な限り図示している。従って、出土した土器型式は、図示したものが全てである。また異なる調査区から同じ土器型式が出土した場合は、同一土器型式でも両調査区の土器を図示するように努めた。縄文時代の石の本遺跡群全域を通史的に概観できることを目的に、各調査区で出土した全ての土器型式について全て網羅した。定量的な情報は遺構が確認された時期のものにとどめ、定性的な情報を重視して掲載している。

227・228は、56区で検出された円筒形条痕文土器である。字石の本の一带の調査区は、地滑りか土石流の

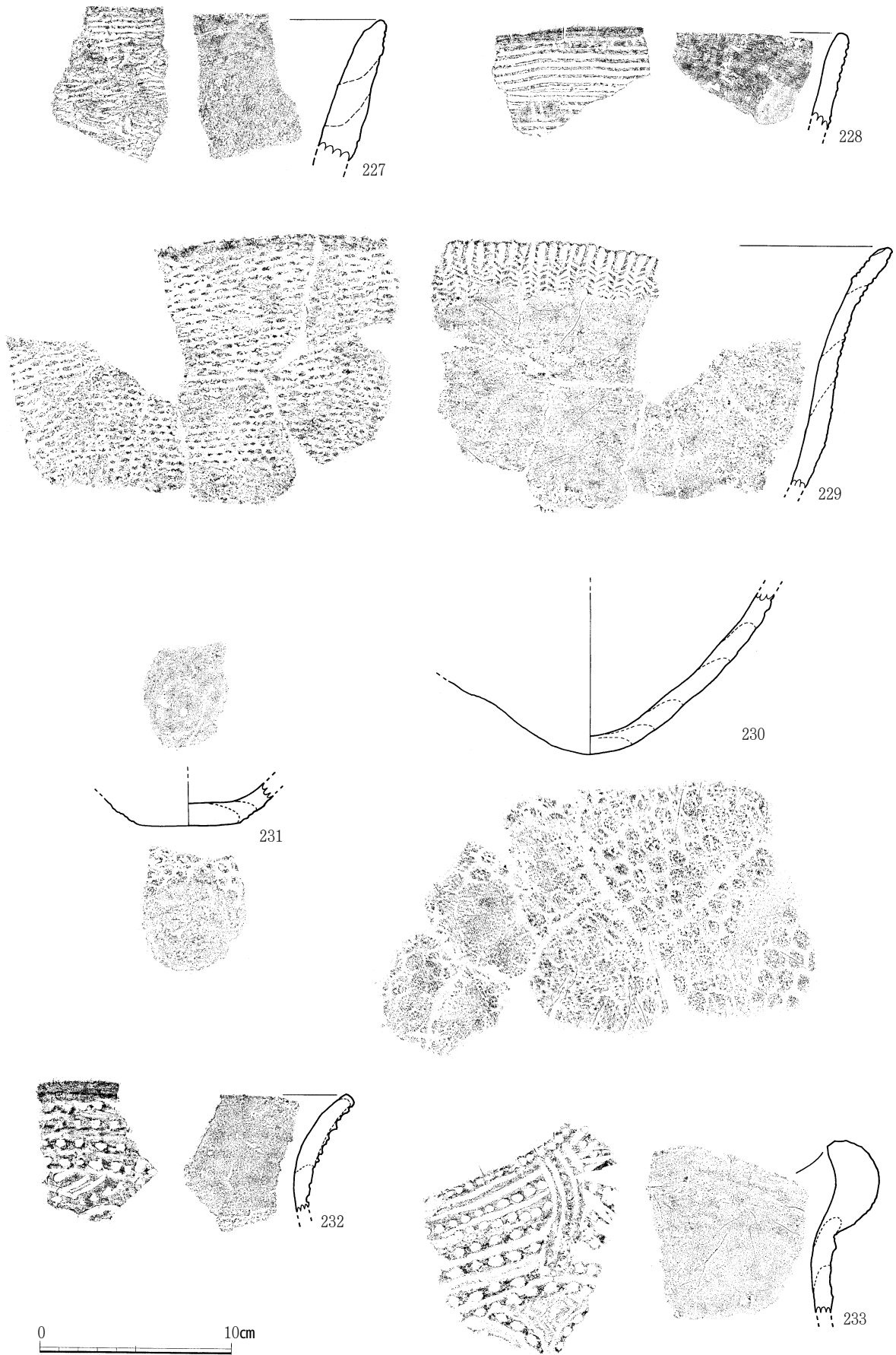


Fig.79 ・ 類土器実測図

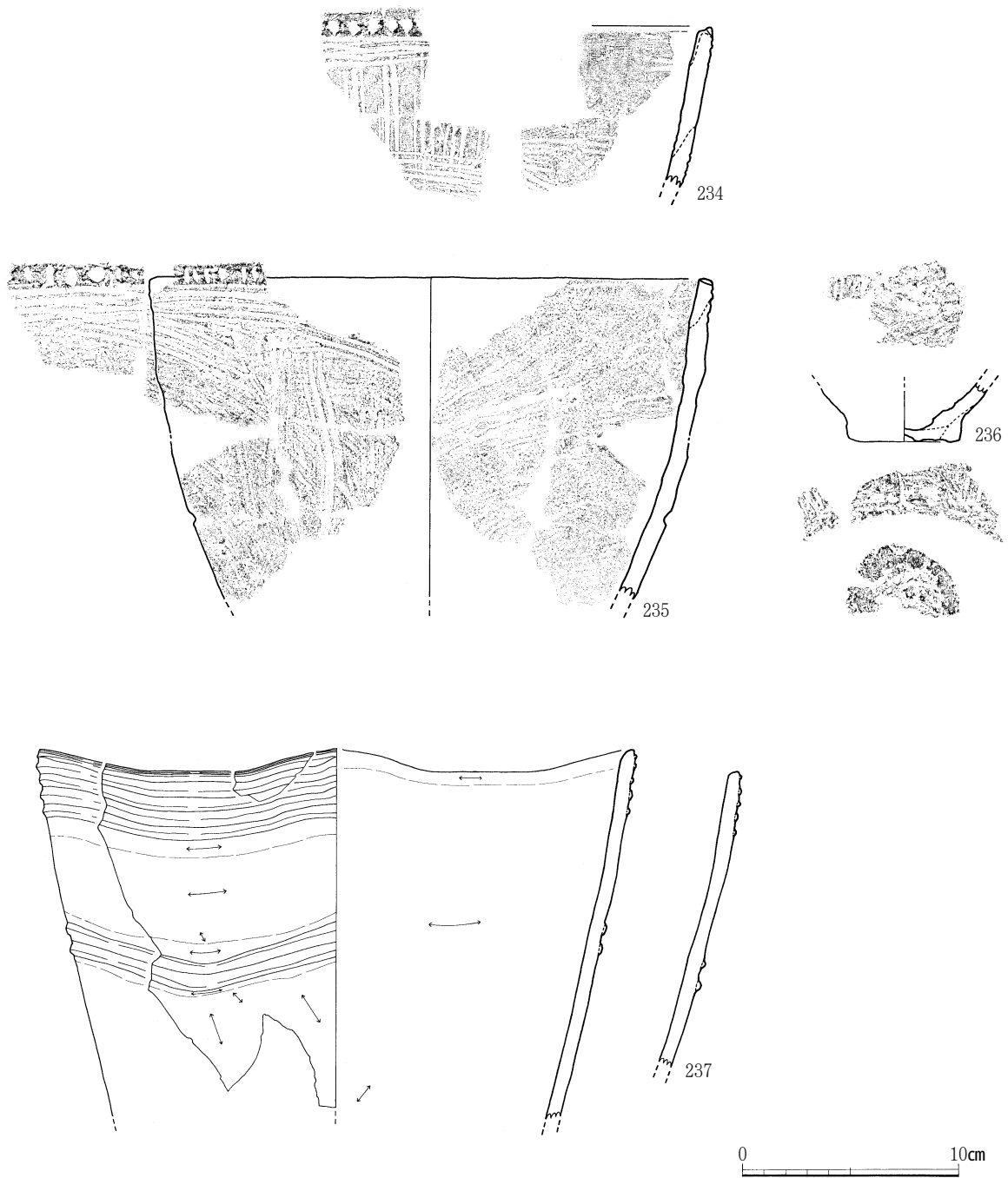


Fig.80 ・ 類土器実測図

影響で 層から上層が削平されている。A層・B層と呼称している、乱れた土砂が2 m以上堆積していた。この土層からは多量の円礫・押型文土器・円筒形条痕文土器が出土しており、大規模な早期の遺跡があったことを窺わせる。54・55区の立地の詳細は石の本遺跡群 に掲載してある。

類土器のうち、229・231は35区から出土し、230は28区から検出されている。類土器のうち、232は23区から、233は16区から検出されている。232は天道ヶ尾式、233は平椀式と考えられる。遺物量はどちらも少なく、客体的である。234・235・236は 類土器に分類できる。235・236が出土した67区は、 層まで削平を受けてしまい、遺跡は残っていなかった。234は横位の条痕による区画施文が口縁部と胴部の2箇所に見られ、注目される。通常的口縁部にのみ横位の施文しか施さない他の 類土器と時間的な前後関係がある

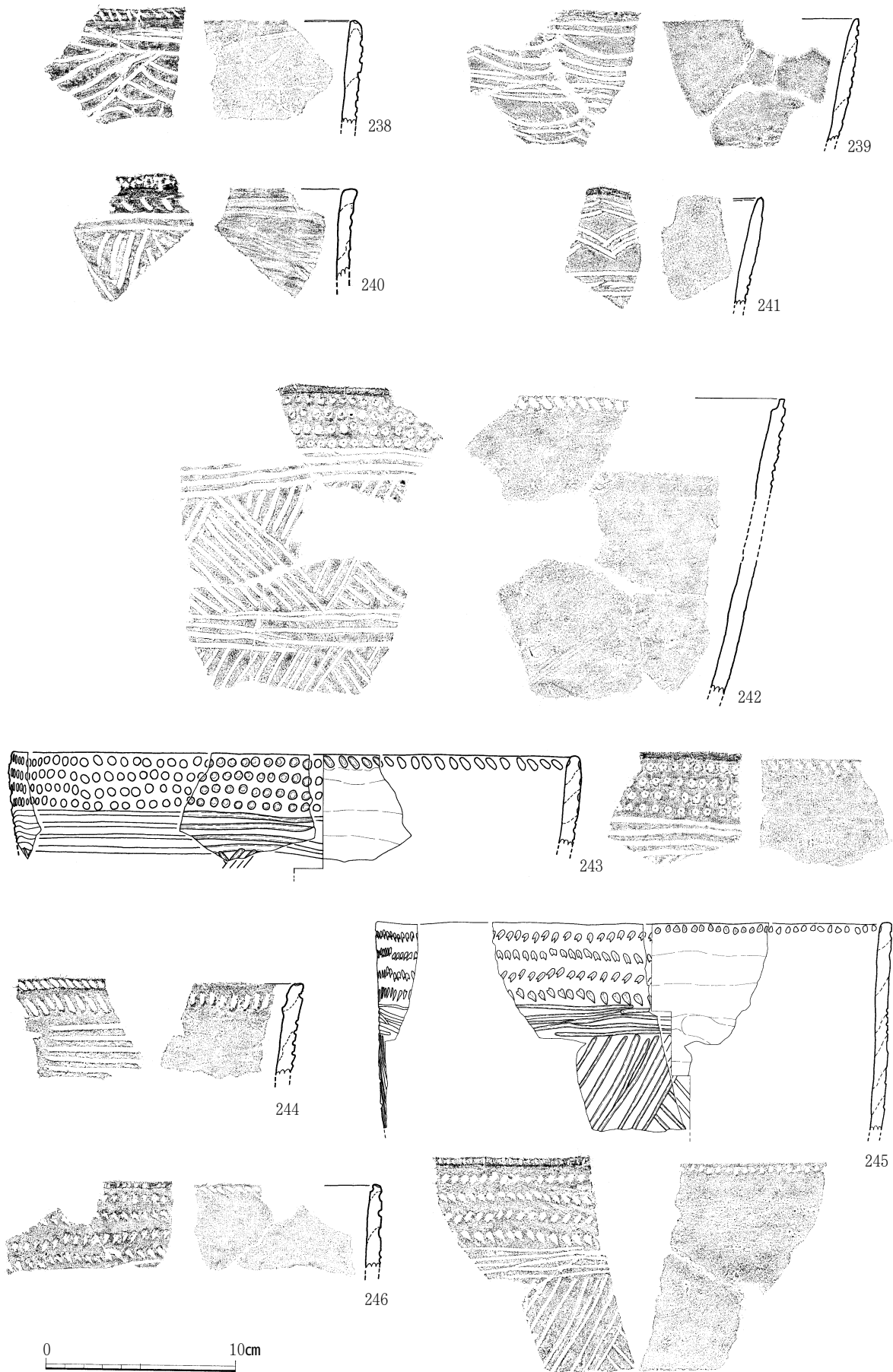


Fig.81 類土器実測図

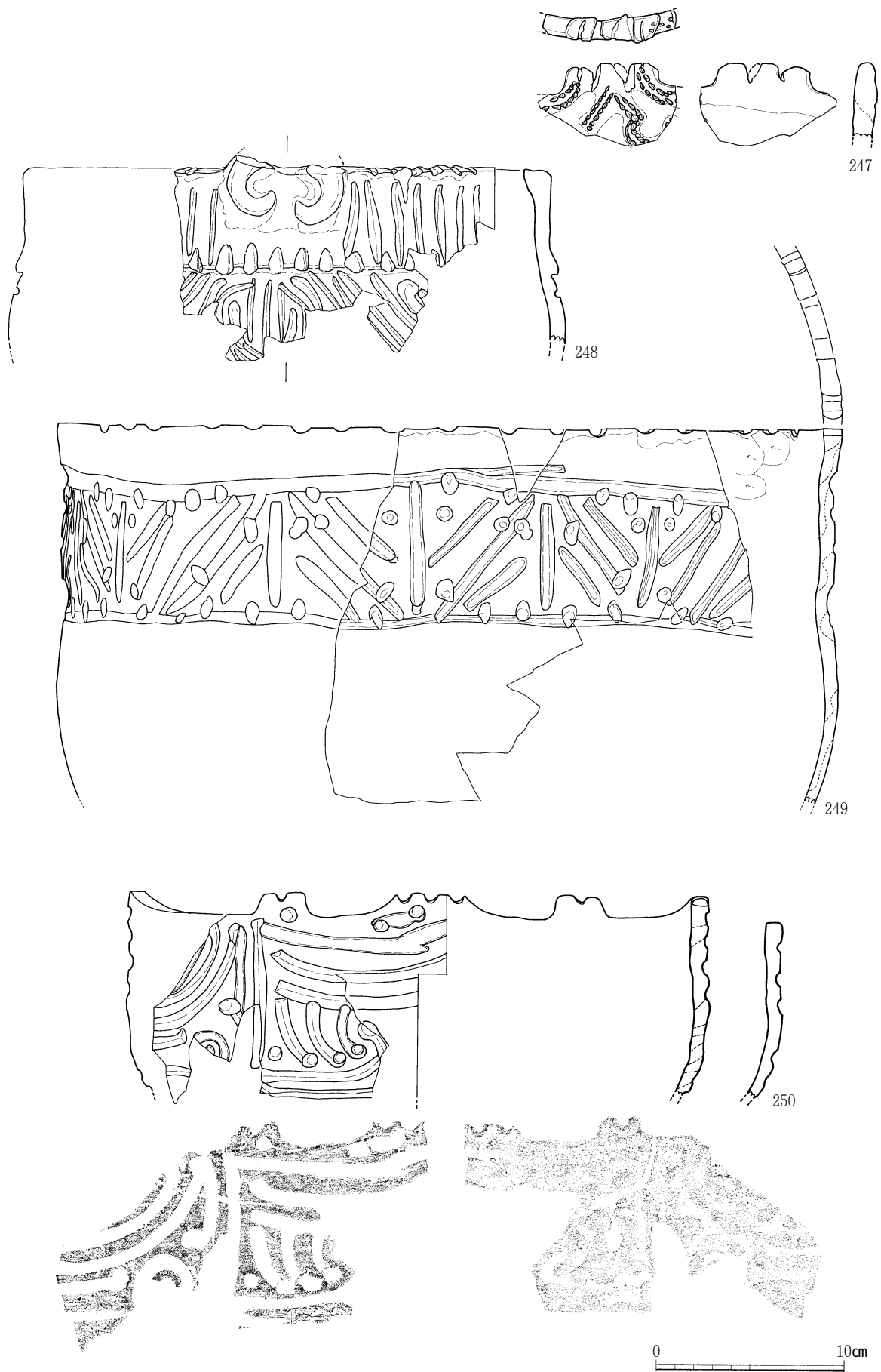


Fig.82 ・ 類土器実測図

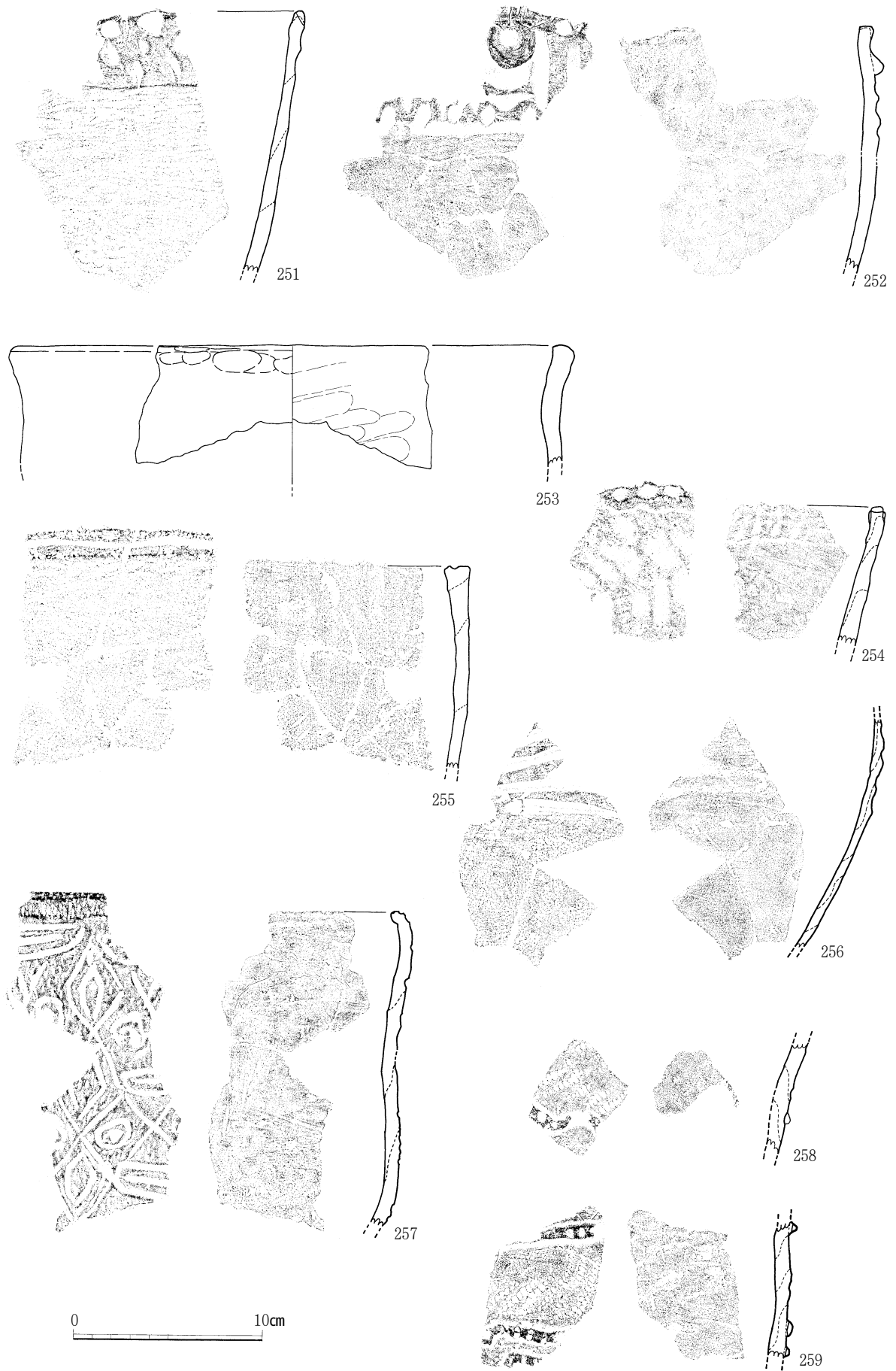


Fig.83 ・ 類土器実測図

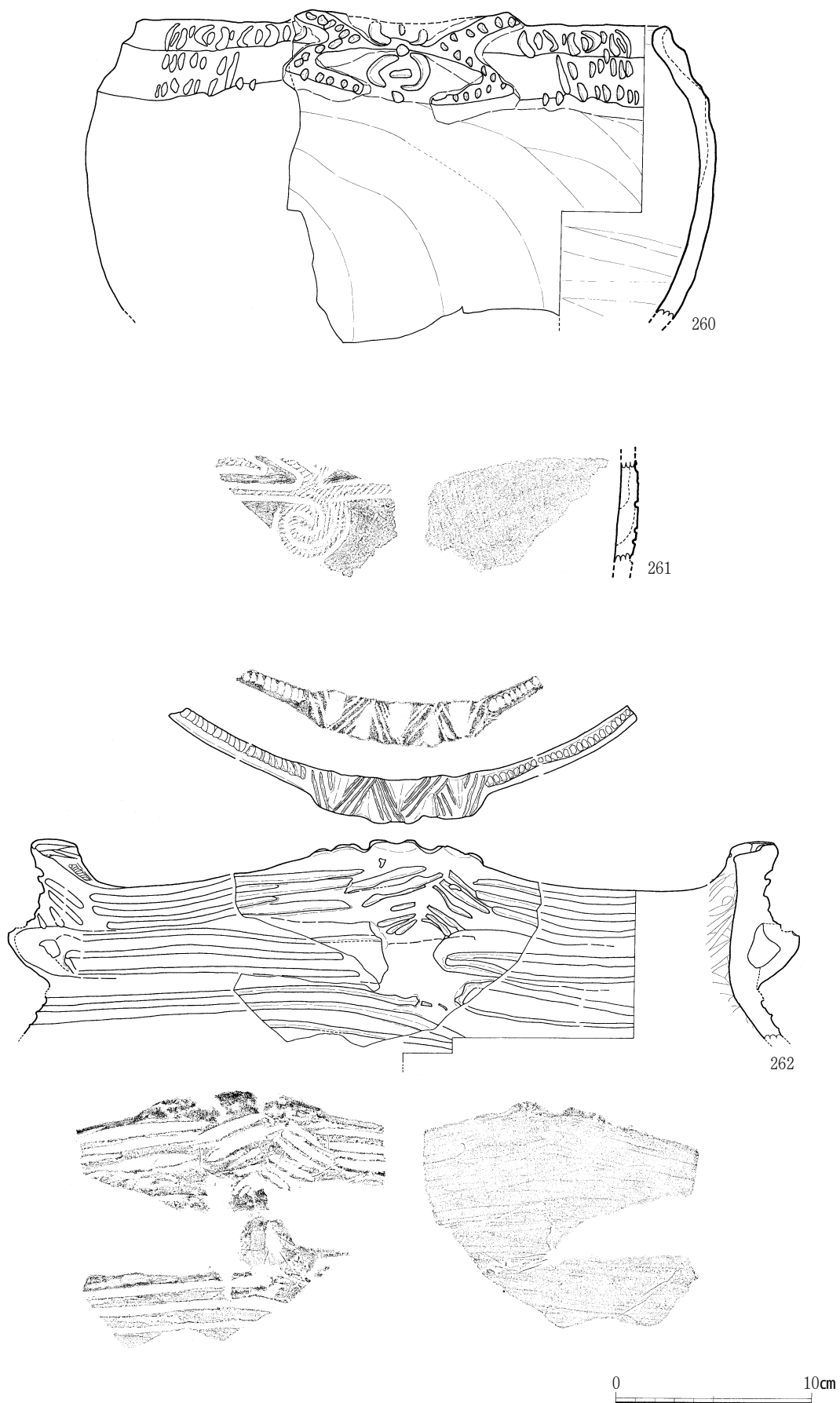


Fig.84 ・ ・ XI類土器実測図

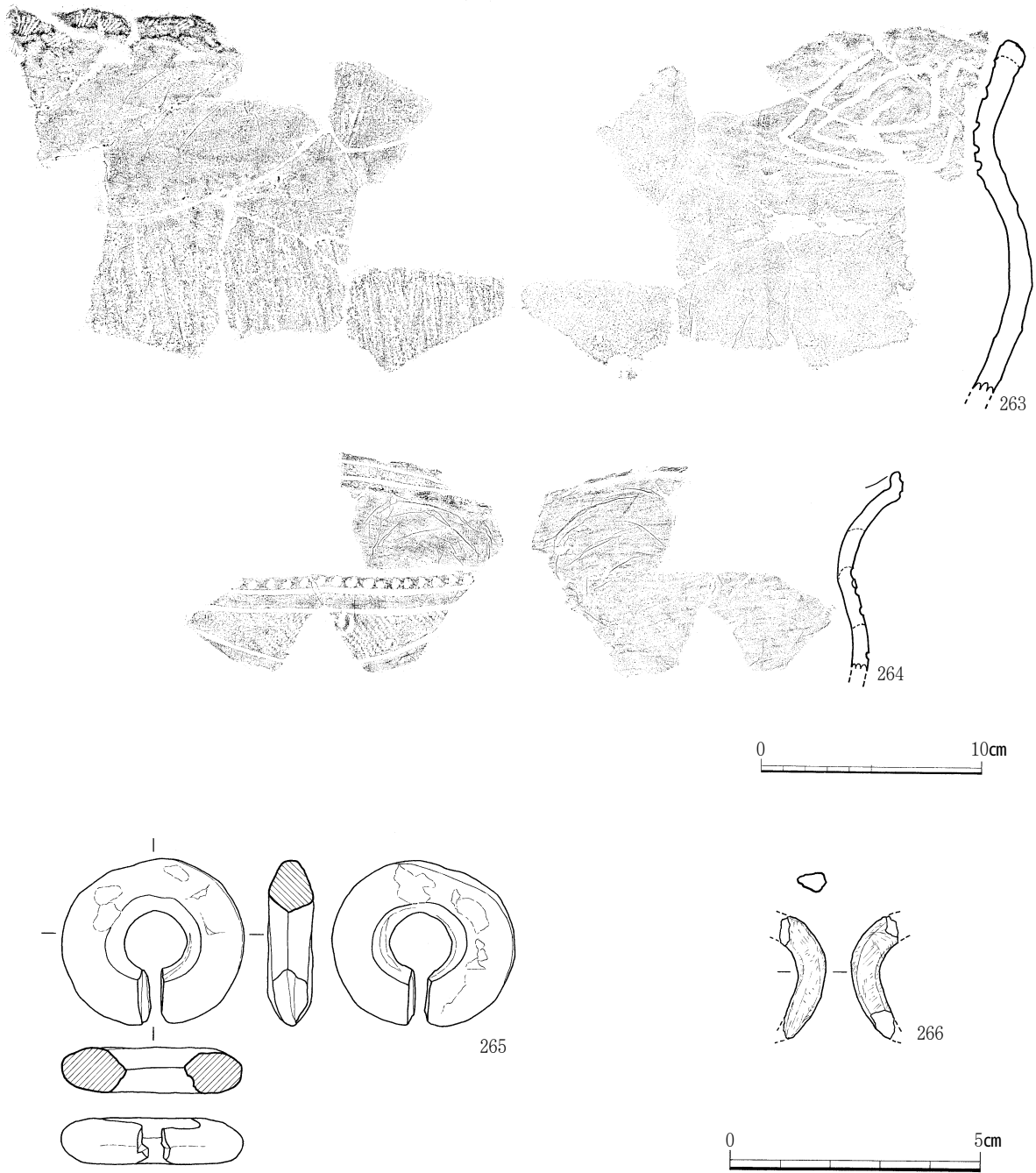


Fig.85 XII類土器及び塊状耳飾り・勾玉実測図

のか、バリエーションの差なのかは不明である。また、類の曾畑式土器は64区で集中して検出された。64区は全面攪乱を受けており遺構は見つかっていない。また、類の土器は、石の本遺跡群全域でほとんど見られなかった。遺構をはじめ、遺物も図示した土器以外多くは見受けられない。主要な生活痕跡は残されていない。

このほか16区では、265塊状耳飾りが検出されている。層から層の掘削時に検出され、出土した時期の判断が困難である。但し周辺からは類土器が見つかることから、縄文時代早期後半から前期前半の可能性が。但し、266勾玉と見られるものも同一地点で見つかっている。通常は、縄文時代後～晩期で検出される勾玉と同種と考えられるが、伴うものか否かは全く不明である。

第3項 中世・近世・近代の調査成果

中世・近世および近代の生活面は、基本層序 層によって攪乱を受けて削平され、基本層序 層にその一部が含まれているとみられる。石の本遺跡群のほぼ全域で、 層から人力による掘削を行い、遺構検出を試みている。結果、縄文時代後～晩期の遺構が 層下面で検出されている。 層中に大量の黒色磨研土器が含まれていることから、縄文時代の本来の遺構面の上部は削平を受けており、さらに上層にあったと考えられる。 層上面で検出された遺構としては、「芋穴」と呼ばれるサトイモ・サツマイモの短期貯蔵用の土坑、畑の地割にそった区画溝、用途不明の硬化面を伴った道路状遺構などである。これらはすべて 層直下で普遍的に見られるもので、異なる時期のものも含まれているとは思われるが、現代以前のものであり、それ以上の事は言えない。 層のクロボク土壌が発達したところならば、こうした各種の時期の遺構も、確実に時期を抑えることができるであろう。石の本遺跡群で、 層が良好に残されている調査区は少なく、中世以降の時代の可能性を持つ各種の遺構は、全て 層上面の同一面で検出されている。

41・42区で検出されたSX - 01は、土層断面を見る限り、本来はフラスコ状に掘り込まれていたものが、屋根に相当する土層部分が崩落し、埋まったものと考えられる。北側には入り口施設とみられる張り出し状の掘り込みがみられ、詳細に検出したところ、階段状に小段を持つことがわかった。 層のローム層が壁面になる付近では、掘削痕が確認されている。出土遺物は無く、検出面も、本来の生活面では無いことから、時期不明の大型土坑と判断されるが、その形態から中世の地下式壙と考えられる。

42区でSX - 01と同様に、SX - 50は、 層中で検出されている。この土坑の底面から木札が出土している。墨書等が書かれていたかは不明である。ほぼ北側に作業用と思われる階段状の小段が存在する。人一人分の大きさである大型の桶程度が収まるほどの土坑であり、近世墓と考えられる。墓石などは耕作等によって失われており、絵図でも墓地の利用は示されていない。聞き取り調査でも有力な証言は得られず、この1基しか検出されていない。

字石の本の最も東側の54区の東端で検出されている。絵図ではちょうど平山町と石原町の町境にあたる。遺構の最下層の埋土3c層から、19世紀以降の酒徳利が2個体検出されている。「六軒町」と描かれている。7層は砂層であり、一時期は水が流れている。その場合は北から南へ流れ、54区の南端で東へ方向を変え、調査区で言えば、28区の方面へ流れていたようである。この溝はそのまま谷の一部となり、22区・8区の西側と小山山の間を抜けて南に流れていたらしい。降雨後は、雨水が大量に流れている。54区・55区は山腹から染み出す雨水などが大量に吹き出すところである。水を逃がすために掘りなおされたものであろう。また石原町側には寺跡があったとする言い伝えがあるが、それらを想定する痕跡は見られなかった。但し、この付近で確認調査時に布目瓦を1点検出している。またすぐ近くの地元の方は、須恵器の杯身と蓋を完全なセットで採取しており、石の本遺跡群 で報告している耳環とあわせて考えると、古墳が付近にあったことが伺える。但し本遺跡群ではこれ以上の資料は得られていない。

また、「芋穴」をはじめ、近代以降のものも、当時の調査記録に残しており、保存による調査によって得られた情報であるので、敢えて記述して残すことにしたい。今現在は利用した方々からお話が聞けるので、ごく簡単にこれらの情報を知ることが出来る。一つの土地利用のあり方であり、発掘調査時に聞き取りしたことを記して報告とする。

改めて書き記すまでもないが、冬季の芋の貯蔵用に使用されている「芋穴」については、発掘調査に従事していただいた作業員の方々のうち、60歳以上の人達ならば少なからず利用した経験を持つ。「芋穴」の形態は、円形・方形・長方形など様々である。この違いは掘る道具の違いによる時期差で、円形 方形 長方形と時期が下ると変化していくという方もいるし、サトイモ・サツマイモなど貯蔵する芋の種類によって変

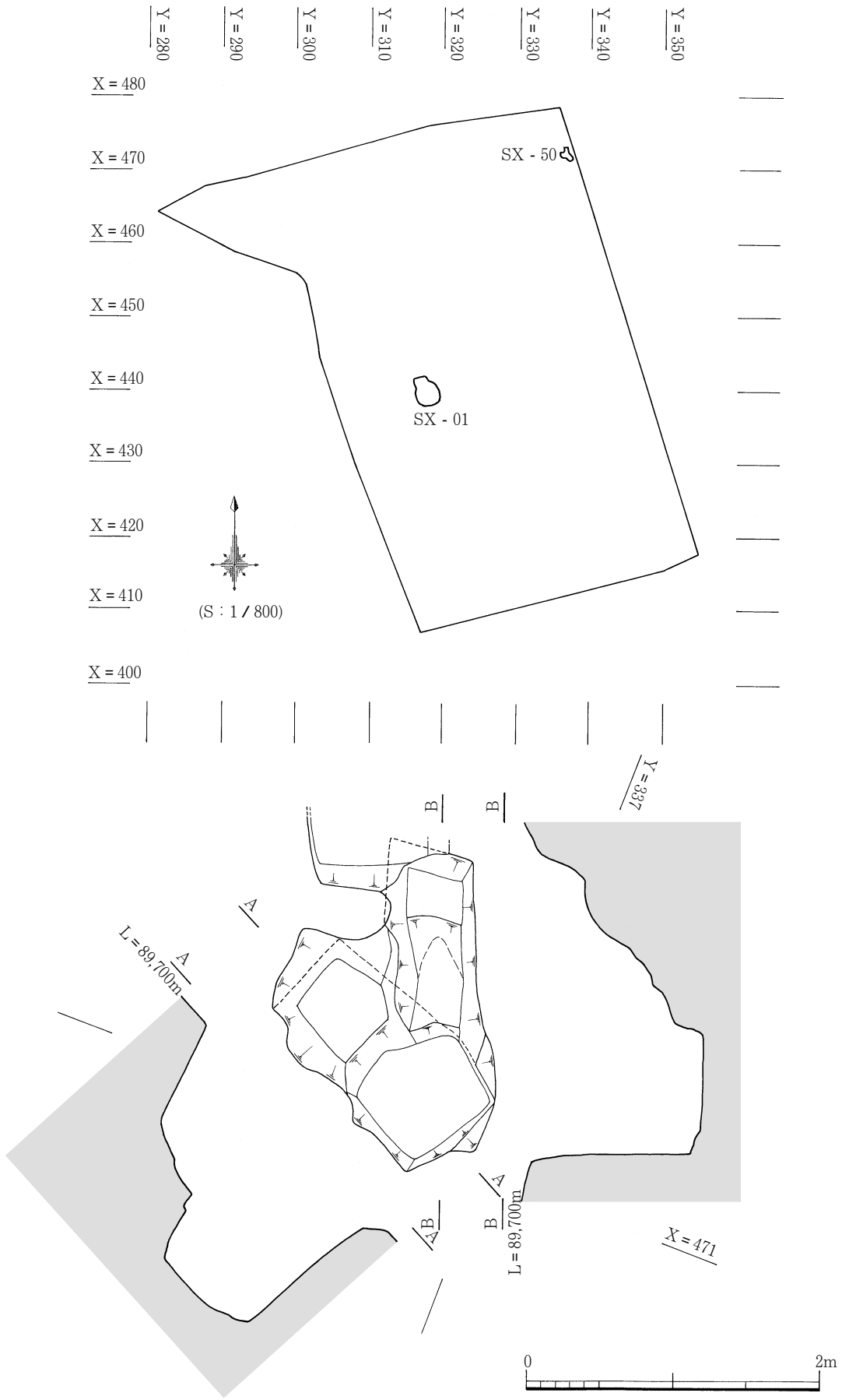


Fig.86 41・42区 層遺構配置図及び42区SX - 50近世墓実測図

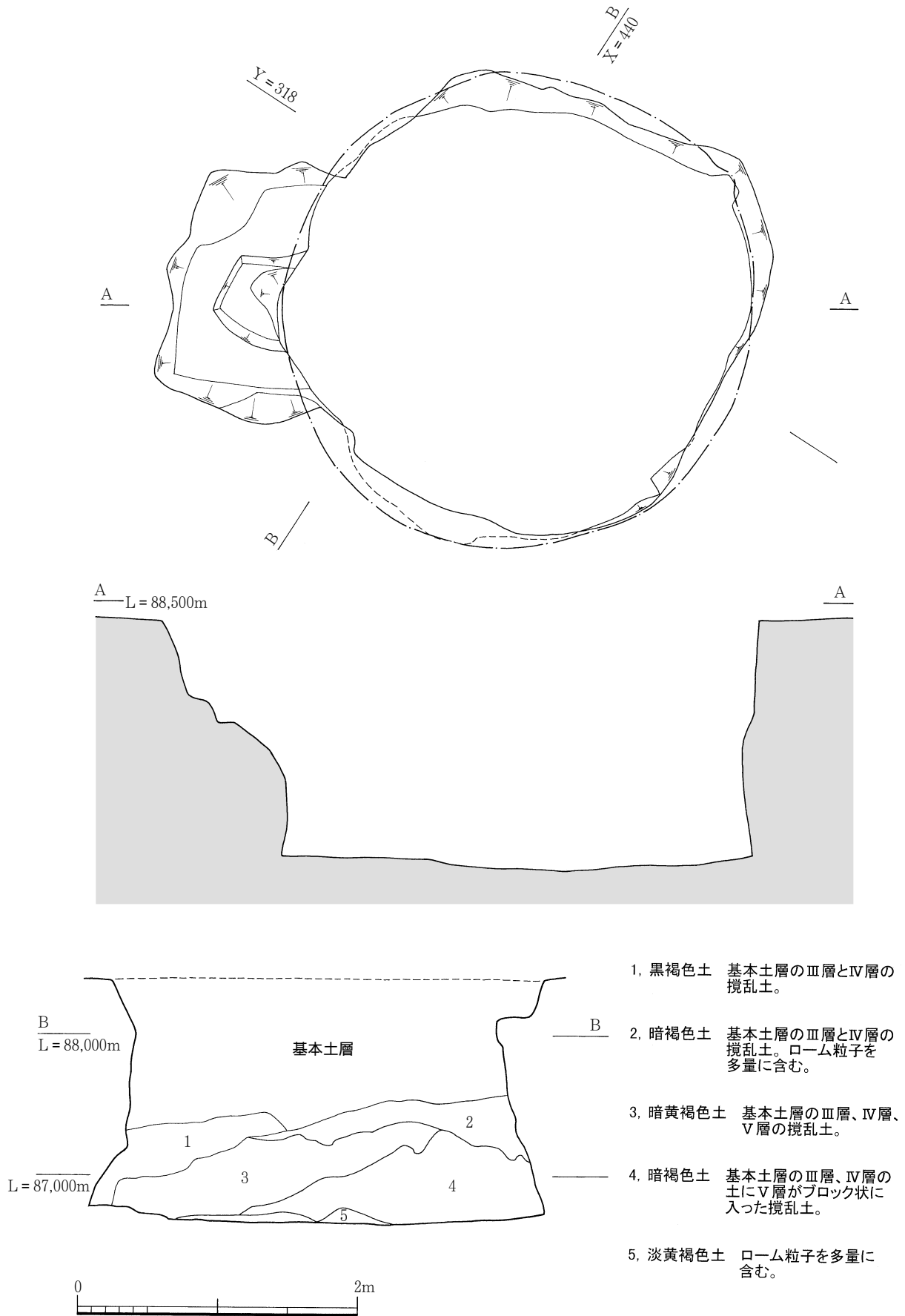


Fig.87 41区SX - 01地下式墳実測図

えているだけという方もいる。芋の種類によってプランが変わる理由としては、一般的にサツマイモは霜に弱く傷みやすいことから深く掘って貯蔵を行い、サトイモは比較的強いので浅い穴に貯蔵して構わないといった、貯蔵する芋の種類の差とのことであった。方形になるのは、深く掘る必要があるのでシャベルを使うためである。サトイモを貯蔵する浅い土坑なら、鍬などで代用できるため、円形になるものがあるのだろうか。「芋穴」は、冬季の低温に対して芋が腐るのを防ぐ意味があるとされており、掘りこみの浅い（30cmほど）円形のものサトイモを埋め、掘り込みの深い（深いものでは1m近くのものがある）方形のものはサツマイモを貯蔵するのに使うとのことである。畑の端で多くみられることから、古い地割を示す溝・杭列と平行して並ぶことが多い。熊本市の絵図（新熊本市史別編第1巻 絵図・地図（下）近代・現代参照）で、平山町・石原町を見ると、検出した地割溝・芋穴の列が古い地割に沿っているのが見て取れる。これによると、近代以降の石の本遺跡群内の開発史は畑を中心とした耕地で、開墾の順序としては、地割の線から概ね北側の最も高い丘陵から始まり、斜面を下るように南下してきたようである。このため、現代の地割も、東西方向に細長いものが多く、区画溝・杭列・芋穴列もこれに沿って東西方向に伸びるものも多く見られた。

参考文献

- ・1992 新熊本市史「別編第一巻絵図・地図」

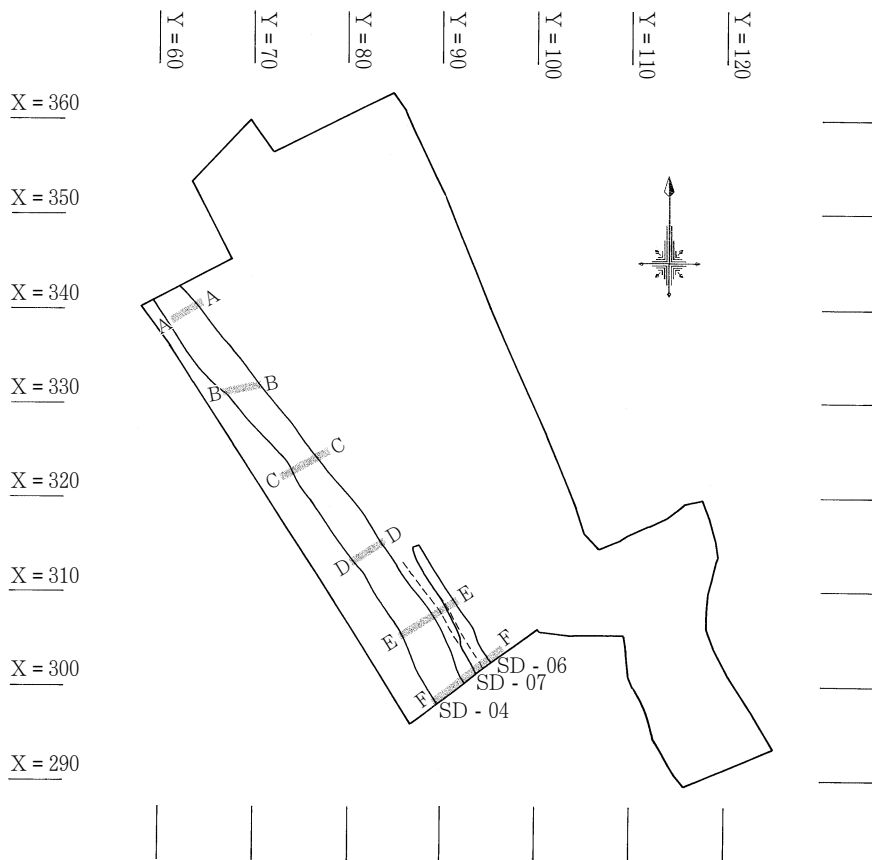


Fig.88 54区近代溝配置図

第4節 各調査区の成果

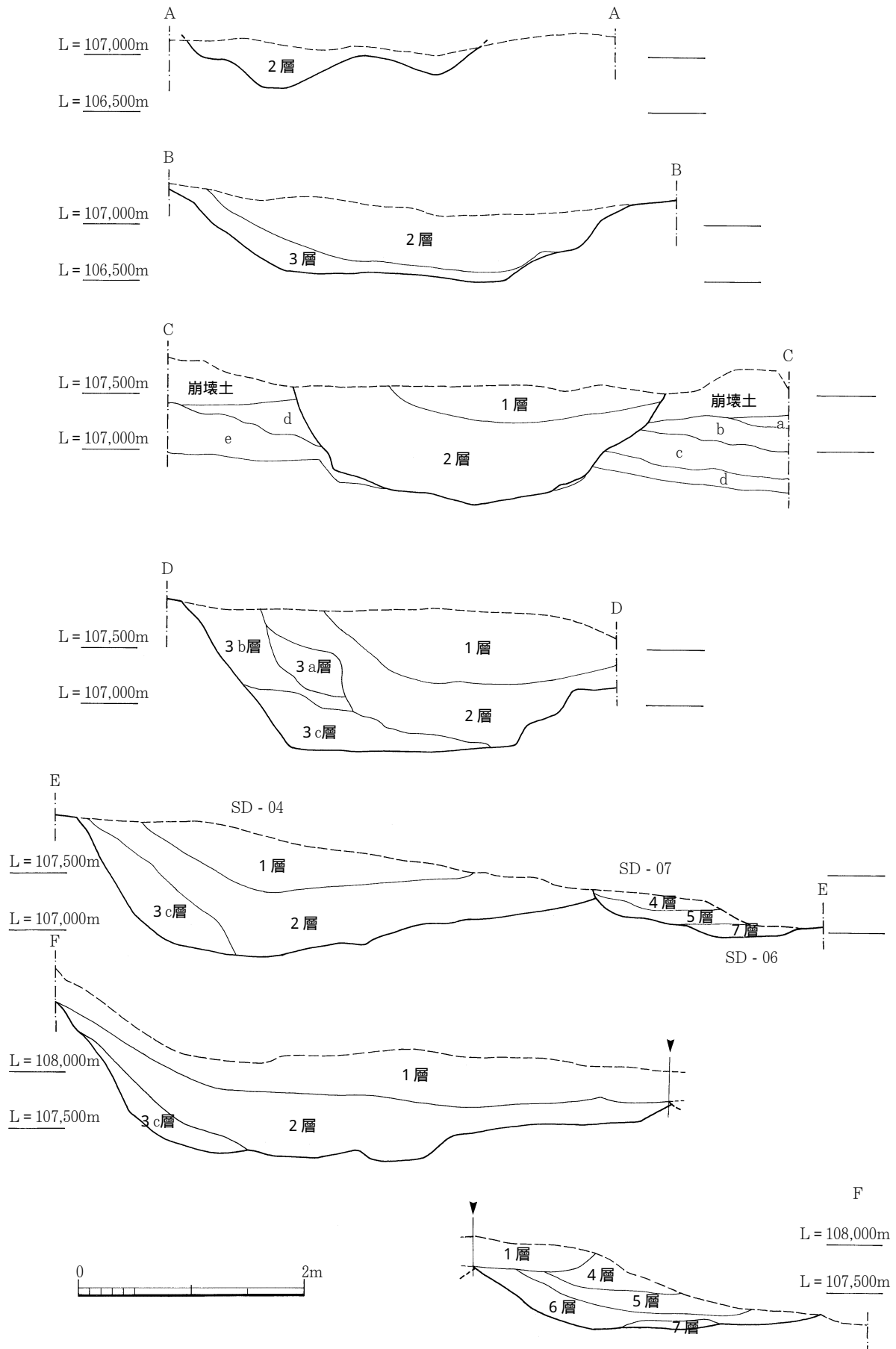


Fig.89 54区近代溝土層図

第4章 自然科学分析

熊本県、石の本遺跡の自然科学分析報告

株式会社 古環境研究所

・ 石の本遺跡、8区・22区のテフラ

1. はじめに

熊本県域には、阿蘇カルデラ、始良カルデラ、鬼界カルデラなどから噴出したテフラが多く分布している。これらのテフラについてはすでに噴出年代が明らかにされており、それらとの層位関係を求めることにより、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代に関する資料を収集できるようになっている。

そこで旧石器時代の石器が検出された石の本遺跡においても、土層断面から採取された土壌資料を対象にテフラ組成分析を行い、これら示標テフラの層位を明らかにして、遺跡の土層の堆積年代に関する資料を求めることになった。分析の対象となった試料は、8区および22区において発掘調査担当者により採取された9点の土壌試料である。

2. テフラ組成分析

(1) 分析試料と分析方法

8区の土層断面から採取された5点(図1)、および22区の土層断面から採取された4点(図2)の合計9点の土壌試料について、火山ガラス比分析と重鉱物組成分析を合わせたテフラ組成分析を行って、示標テフラの降灰層準の把握を試みた。

- 1) 試料20gを秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去
- 3) 80℃で恒温乾燥
- 4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の特徴を観察。

(2) 分析結果

8区のテフラ組成分析の結果をダイヤグラムにして図3に、火山ガラス比と重鉱物組成の内訳を各々表1と表2に示す。ここでは、試料番号7(a層)にとくに多くの透明で平板状のいわゆるバブル型ガラス(23.6%)が認められる。この透明のバブル型ガラスは、その特徴から約2.2~2.5万年前に始良カルデラから噴出した始良Tn火山灰(AT, 町田・新井, 1976, 1992)に由来するものと考えられる。一方、重鉱物組成では、試料番号5(c層)以上の層準で斜方輝石の割合が増加し(53.2%)、その上位の試料番号6(b層)で単斜輝石が比較的多く含まれるようになる(6.8%)。

22区のテフラ組成分析の結果をダイヤグラムにして図4に、火山ガラス比と重鉱物組成の内訳を各々表3と表4に示す。22区では試料番号11(a層基底部付近)にAT起源の透明のバブル型ガラスが比較的多く認められる(14.8%)。その上位の試料番号1(b層)には、透明のバブル型ガラス(6.0%)のほか、褐色(3.2%)や淡褐色(2.0%)のバブル型ガラスが比較的多く含まれている。これらの火山ガラスは、その形態や色調などから約6,300年前に鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah, 町田・新

井, 1978) に由来するものと考えられる。重鉱物組成では、試料番号11および1に比較的多くの斜方輝石や単斜輝石が含まれている。試料番号11における斜方輝石と単斜輝石の比率は、各々47.2%と7.2%である。また試料番号1における斜方輝石と単斜輝石の比率は、各々39.6%と18.4%である。

以上の分析結果、とくに火山ガラスの濃集層準から、a層付近にATの、また層付近にK - Ahの各々の降灰層準があると考えられる。

3. 小結

石の本遺跡の土層の堆積年代に関する資料を収集するために、土壌試料を対象にテフラ組成分析を行った。その結果、a層中に始良Tn火山灰(AT, 約2.2~2.5万年前)の、また層中に鬼界アカホヤ火山灰(K - Ah, 約6,300年前)の降灰層準があると考えられた。より良い精度での示標テフラの同定と降灰層準の把握には、屈折率測定のほか、遺跡の土層断面についての分析者の土層観察やより細かな間隔での試料採取などが必要となる。

文献

- 町田 洋・新井房夫 (1976) 広域に分布する火山灰 - 始良Tn火山灰の発見とその意義 - . 科学, 46, P.339 - 347.
- 町田 洋・新井房夫 (1978) 南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ - 鬼界アカホヤ火山灰. 第四紀研究, 17, p.243 - 263.
- 町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス. 東京大学出版会, 276p.

表1 石の本遺跡I-8区の火山ガラス比分析結果

試料	bw (tr)	bw (pb)	bw (br)	md	pm	その他	合計
7	59	0	0	4	1	186	250
6	12	0	0	3	1	234	250
5	6	0	0	1	1	242	250
3	1	0	0	0	0	249	250
1	0	0	0	0	0	250	250

数字は粒子数. bw: バブル型. md: 中間型, pm: 軽石型. tr: 透明, pb: 淡褐色, br: 褐色.

表2 石の本遺跡I-8区の重鉱物組成分析結果

試料	ol	opx	cpx	ho	bi	mt	その他	合計
7	0	138	20	13	0	75	4	250
6	0	119	17	5	0	109	0	250
5	0	133	3	18	0	96	0	250
3	0	60	10	39	0	138	3	250
1	0	43	3	30	0	168	6	250

数字は粒子数. ol: カンラン石, opx: 斜方輝石, cpx: 単斜輝石, ho: 角閃石, bi: 黒雲母, mt: 磁鉄鉱.

表3 石の本遺跡II-22区の火山ガラス比分析結果

試料	bw (tr)	bw (pb)	bw (br)	md	pm	その他	合計
1	15	5	8	1	0	221	250
9	14	0	0	2	1	233	250
2	29	2	1	3	1	214	250
11	37	0	1	1	1	210	250

数字は粒子数. bw: バブル型. md: 中間型, pm: 軽石型. tr: 透明, pb: 淡褐色, br: 褐色.

表4 石の本遺跡II-22区の重鉱物組成分析結果

試料	ol	opx	cpx	ho	bi	mt	その他	合計
1	0	99	46	5	0	100	0	250
9	0	103	13	38	0	95	1	250
2	0	95	28	18	0	108	1	250
11	0	118	18	10	0	100	4	250

数字は粒子数. ol: カンラン石, opx: 斜方輝石, cpx: 単斜輝石, ho: 角閃石, bi: 黒雲母, mt: 磁鉄鉱.

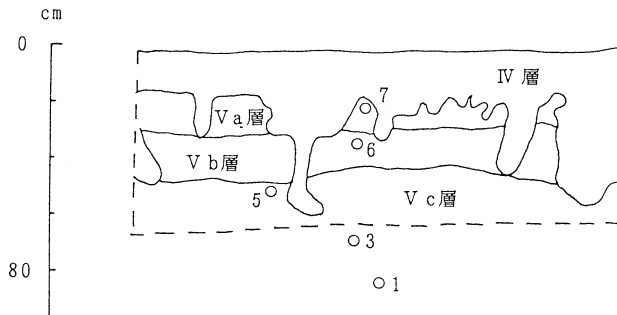


図1 I-8区の土層断面図(一部)

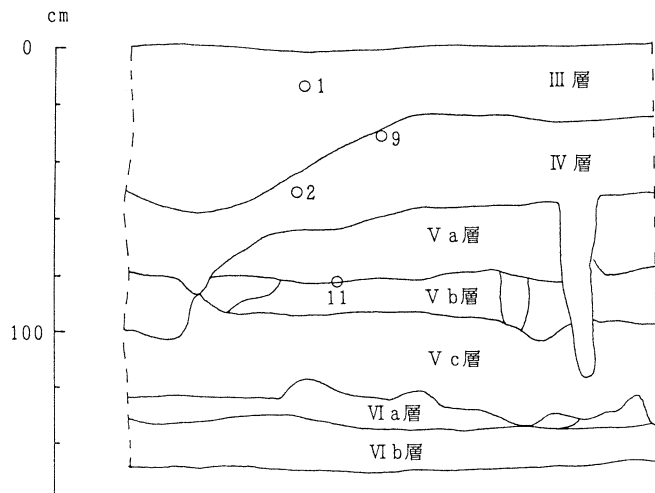


図2 II-22区の土層断面図(一部)
数字はテフラ分析の試料番号

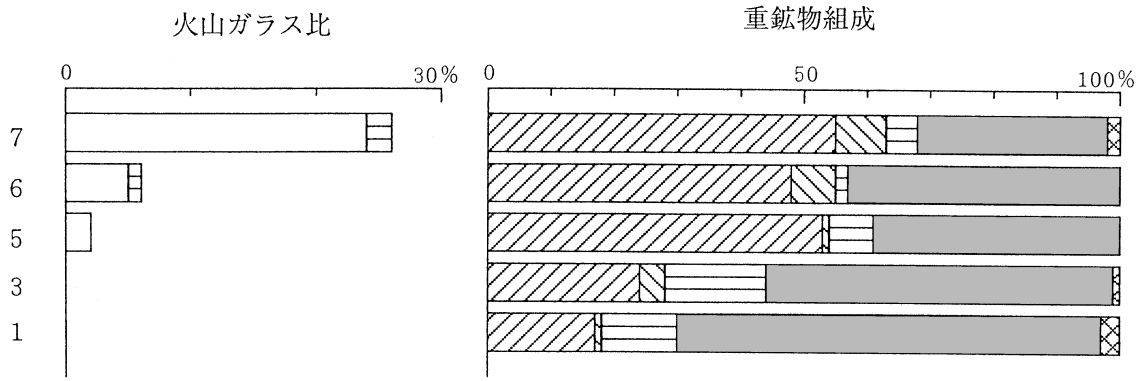


図3 I-8区のテフラ組成ダイヤグラム

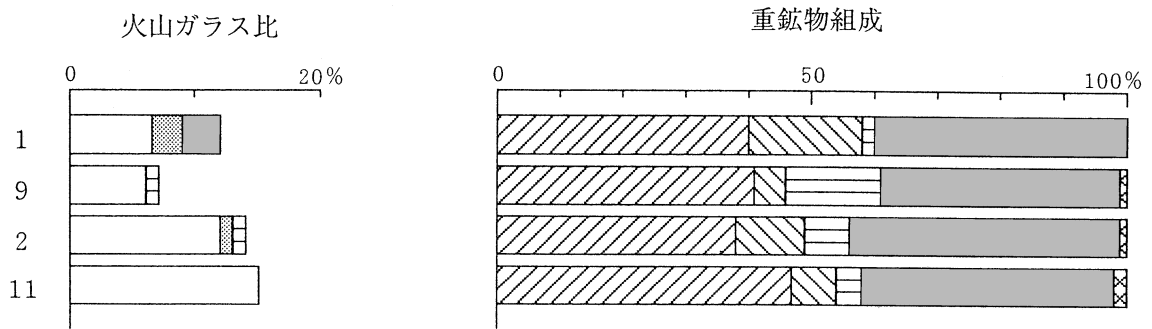
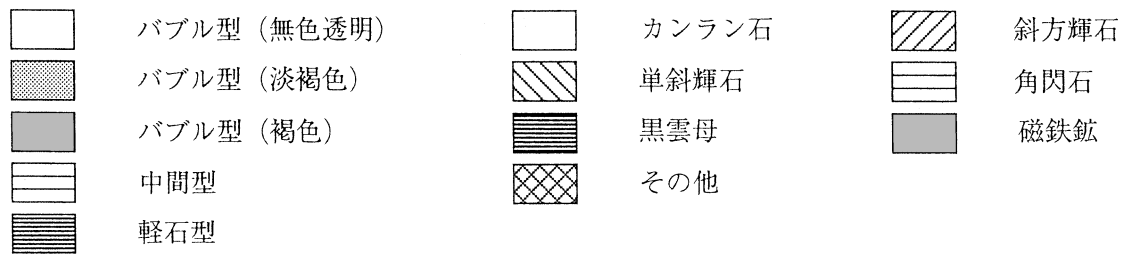


図4 II-22区のテフラ組成ダイヤグラム



．石の本遺跡と周辺地域の地質とテフラ

1．はじめに

石の本遺跡とその周辺地域において、地質調査、テフラ組成分析さらに屈折率測定を合わせて行い、示標テフラの層位および層序を明らかにして、遺跡の土層の形成年代に関する資料を求めることになった。石の本遺跡 (Loc. 1) における調査対象地点は、38南調査区深堀トレンチ第1地点、38南調査区深堀トレンチ第2地点、32北調査区の3地点である。また遺跡の土層と阿蘇カルデラ周辺のテフラ層との層位関係を求めるために、益城町小谷 (Loc. 2)、大津町高尾野 (Loc. 3)、一の宮町中通り字象ヶ鼻 (Loc. 4)、一の宮町手野井出牧場 (Loc. 5)、一ノ宮町手野 (Loc. 6)、岩瀬遺跡 (Loc. 7)、迫の上遺跡 (Loc. 8)、辛川免許センタ - 予定地 (Loc. 9)、以上図1、阿蘇町茗ヶ原 (図3 - 1)、小国町西里 (図3 - 2) の11地点の露頭についても調査分析を合わせて行った。

2．土層の層序

(1) 石の本遺跡38南調査区深堀トレンチ第1地点

この地点では、下位より締まった黄褐色土 (層厚34cm)、黄褐色土 (層厚14cm, b層)、黄灰色土 (層厚11cm, a層)、暗褐色土 (層厚16cm)、黒褐色土 (層厚10cm)、明るい黒褐色土 (層厚12cm, 以上 c層)、黒褐色土 (層厚22cm, b層)、黄色細粒軽石混じり暗褐色土 (層厚16cm, 軽石の最大径2mm, a層)、黒褐色土 (層厚13cm)、明るい黒褐色土 (層厚18cm, 以上 o層)、暗褐色土 (層厚12cm, b層) 明るい黒褐色土 (層厚12cm)、黒褐色土 (層厚13cm)、明るい黒褐色土 (層厚8cm, 以上 a層)、暗褐色土 (層厚11cm, 層) の連続が認められた (図2)。発掘調査では、これらの土層のうち、a層およびb層から石器が検出されている。

(2) 石の本遺跡38南調査区深堀トレンチ第2地点

ここでは、下位より明るい黒褐色土 (層厚9cm, a層)、明るい暗褐色土 (層厚14cm, b層)、暗褐色土 (層厚20cm, a層)、明るい黒褐色土 (層厚8cm, b層)、黒褐色土 (層厚5cm, a層)、暗褐色土 (作土, 層厚22cm, 層) の連続が認められた (図3)。

(3) 石の本遺跡32北調査区

この地点では、b層の下位にテフラ層を認めることができた (図4)。ここでは、下位より褐色土 (層厚30cm以上)、黄色軽石層 (層厚1cm, 軽石の最大径2mm, 仮に石の本軽石と呼ぶ)、褐色土 (層厚25cm)、クラックの発達した褐色土 (層厚44cm)、褐色土 (層厚24cm, b層) の連続が認められた。

(4) 益城町小谷

本露頭は、益城町小谷の益城町農協第二配送センタ - に位置する。ここでは、下位より円磨された黄色軽石を含む橙色火砕流堆積物 (層厚35cm, 軽石の最大径47mm, 石質岩片の最大径38mm) の上位に、下位より若干クラックの発達した褐色土 (層厚91cm)、黄色軽石に富む褐色土 (層厚3cm, 軽石の最大径3mm) 褐色砂質土 (層厚23cm)、褐色土 (層厚33cm)、クラックの発達した褐色土 (層厚35cm)、褐色土 (層厚18cm)、灰褐色土 (層厚9cm)、色調の明るい黒褐色土 (層厚8cm)、黒褐色土 (層厚7cm)、暗褐色土 (層厚14cm)、黒褐

黄色土（層厚17cm）、白色粗粒火山灰に富む褐色土（層厚13cm）が認められる（図5）。

これらのうち、最下位の火砕流堆積物は、層相から約7～9万年前に阿蘇カルデラから噴出した阿蘇4火砕流堆積物（小野ほか，1977，町田ほか，1985，町田・新井，1992）に同定される。

（5）大津町高尾野

本露頭は、大津町高尾野のミルクロ - ド沿いに位置する。この地点では、下位より褐色土（層厚71cm以上）、黄色軽石層（層厚5cm，軽石の最大径5mm）、黄色軽石混じり赤褐色スコリア層（層厚7cm，軽石の最大径5mm，スコリアの最大径3mm，石質岩片の最大径2mm，仮に大津スコリアと呼ぶ）、褐色土（層厚77cm）、灰褐色土（層厚14cm）、色調の明るい黒褐色土（層厚16cm）、黒褐色土（層厚34cm）、白色粗粒火山灰混じり暗褐色土（層厚10cm）、赤褐色スコリアを含む白色粗粒火山灰混じり暗褐色（層厚10cm，スコリアの最大径4mm）、黒褐色土（層厚22cm）、白色粗粒火山灰に富む褐色土（層厚7cm）、白色粗粒火山灰に富む黒褐色土（層厚13cm）、黒褐色土（層厚22cm）、暗褐色土（層厚31cm）が認められる（図6）。

（6）一の宮町象ヶ鼻

本露頭は、一の宮町象ヶ鼻の像ヶ鼻遺跡の脇に位置する。ここでは、下位より褐色土（層厚22cm以上）赤褐色土スコリア層（層厚8cm，スコリア最大径5mm，石質岩片の最大径2mm）、赤褐色スコリア混じり褐色土（層厚31cm）、暗灰石質岩片混じり黒灰色粗粒火山灰層（層厚10cm，石質岩片の最大径3mm）、褐色土（層厚18cm）、黒灰色粗粒火山灰層（層厚3cm）、褐色土（層厚83cm）、暗褐色土（層厚22cm，仮に層と呼ぶ）、黒褐色土（層厚8cm）、暗褐色土（層厚11cm）、黒褐色土（層厚10cm）、褐色土（9cm）、黒褐色土（11cm）、黒色土（層厚46cm）、黒褐色土（層厚11cm）、暗褐色土（層厚20cm）、黄色細粒火山灰層（層厚5cm）、暗褐色土が認められる（図7）。

（7）一の宮町手野井手牧場

本露頭は、一の宮町手野井出牧場のミルクロ - ド沿いに位置する。ここでは、一の宮町象ヶ鼻の層以下の土層をよく観察することができた。この地点では、下位より暗褐色土（層厚51cm）、成層したテフラ層（層厚59cm）、褐色土（層厚21cm）、褐色砂質土（層厚38cm）、褐色土（74cm）、灰褐色砂質土（層厚31cm）、褐色土（層厚71cm）、赤褐色スコリア層（層厚3cm，スコリアの最大径6mm，石質岩片の最大径2mm）褐色土（層厚24cm）、暗褐色土（層厚8cm，層）、が認められる（図8）。これらのうち、成層したテフラ層は、下部の黄橙色軽石層（層厚12cm，軽石の最大径12mm，石質岩片の最大径3mm）と上部の灰色粗粒火山灰層（層厚47cm）から構成されている。

（8）一の宮町手野

本露頭は、一の宮町手野のミルクロ - ドとやまなみハイウェイの合流点に位置する。ここでは、下位より黄色軽石混じり褐色土（層厚10cm以上，軽石の最大径6mm）、灰褐色砂質土（層厚24cm）、赤褐色スコリア層（層厚3cm，スコリアの最大径4mm，石質岩片の最大径2mm）、褐色土（層厚27cm）、灰色粗粒火山灰層（層厚23cm）、黄色軽石に富む灰色粗粒火山灰層（層厚13cm，軽石の最大径11mm）、褐色土（層厚9cm）黄色軽石混じり青灰色粗粒火山灰層（層厚14cm，軽石の最大径13mm）、褐色土（層厚72cm）、暗褐色土（層厚21cm）、黒褐色土（層厚17cm）、黄灰色粗粒火山灰層（層厚11cm）、黒灰色土（層厚38cm）、赤橙色軽石層（層厚11cm，軽石の最大径11mm，軽石の最大径8mm，石質岩片の最大径2mm）、暗灰色土（層厚14cm）、黄橙色軽石混じり

黄灰色粗粒火山灰層（層厚21cm、軽石の最大径4mm）、黒褐色土（層厚11cm以上）が認められる（図9）。

(9) 岩瀬遺跡

本遺跡の2 - 6杭北トレンチでは、段丘礫層を覆う火山灰土の良好な断面を観察することができた（図1）。ここでは、下位より褐色粘質土（層厚8cm以上）、若干色調の暗い褐色土（層厚17cm、以上層）、色調のとくに暗い暗褐色土（層厚13cm）、白色粗粒火山灰混じり黒褐色土（層厚17cm）、黒褐色土（層厚5cm、以上 - 2層）、褐色土（層厚15cm）、暗褐色土（層厚10cm、 - 1層）、若干色調の暗い暗灰褐色土（層厚17cm）、若干色調の暗い褐色土（層厚7cm、以上層）、褐色土（層厚19cm、層）、黒褐色土（層厚18cm）、黒褐色作土（層厚9cm、以上層）の連続が認められる。

これらの土層のうち、発掘調査では、層上部から層にかけて縄文時代後・晩期の遺物などが検出されている。

(10) 迫の上遺跡

迫の上遺跡では、下位より褐色粘質土（層厚8cm以上）、若干色調の暗い褐色粘質土（層厚8cm）、暗褐色土（層厚8cm）、黒褐色土（層厚20cm）、灰白色粗粒火山灰混じり（層厚4cm）の連続が認められる。これらの土壌を不整合に覆って、さらに黒褐色土（層厚32cm）が認められる（図1）。

これらの土層うち、発掘調査では下位より3層目の暗褐色土から旧石器時代の石器が、また最上位の黒褐色土から弥生時代の遺物が各々検出されている。

(11) 辛川免許センタ - 予定地

試掘トレンチでは、下位より黄褐色粘質土（層厚10cm以上）、若干色調の暗い褐色土（層厚14cm、層）、黒褐色土（層厚22cm、層）、暗褐色土（層厚12cm、層）、黒色土（層厚19cm、層）、黄色軽石混じり褐色土（層厚12cm、軽石の最大径3mm、層）、黒褐色土（層厚26cm、層）、褐色土（層厚11cm、層）、暗褐色土（層厚18cm、層）、黒褐色土（層厚14cm、層）、黒色土（層厚7cm、層）、黒褐色土（層厚14cm、層）、黒色作土（層厚13cm、層）、の連続が認められる（図1）。

深掘地点では、層より下位の土層をよく観察することができた（図2）。

ここでは、下位より垂円礫に富む褐色（層厚51cm、礫の最大径23mm）、垂円礫混じり褐色土（層厚62cm、礫の最大径13mm）、黄褐色砂質土（層厚13cm）、褐色土（層厚48cm）、比較的締まった黄褐色土（層厚35cm）、が認められる。

(12) 阿蘇町茗ヶ原

阿蘇町茗ヶ原の露頭（図3、第1地点）は、約7～9万年前に阿蘇カルデラから噴出した阿蘇4火砕流堆積物（Aso-4、小野ほか、1977、町田ほか、1985、町田・新井、1992）の堆積面上に位置する。この露頭では下位より赤褐色粗粒火山灰層（層厚10cm以上）、褐色土（層厚10cm）、成層したテフラ層（層厚7cm）、褐色土（層厚3cm）、成層したテフラ層（層厚39cm）、褐色土（層厚51cm）、灰色火山砂層（層厚8cm）、褐色土（58cm）、褐色スコリア層（層厚14cm、スコリアの最大径4mm、石質岩片の最大径2mm）、褐色土（層厚23cm）、黄色細粒軽石層（層厚3cm、軽石の最大径2mm）、褐色土（層厚22cm）、黄橙色軽石層（層厚17cm、軽石の最大径18mm、石質岩片の最大径3mm）、褐色土（81cm）、灰色土（層厚23cm）、暗灰色土（層厚23cm）、黄色軽石混じり暗灰色土（層厚14cm、軽石の最大径3mm）、暗灰色土（層厚14cm、軽石の最大径3mm）、暗灰色

土（層厚21cm）、若干色調の暗い褐灰色土（層厚12cm）、黄褐色土（層厚5cm以上）が認められる（図4）。

これらのうち、下位の成層したテフラ層は、下位より赤橙色軽石層（層厚3cm、軽石の最大径2mm、石質岩片の最大径2mm）、と上部の暗灰色火山砂層（層厚4cm）から構成されている。また、上位の成層したテフラ層は、下位より青灰色火山砂層（層厚11cm）、赤褐色火山砂層（層厚5cm）、灰色火山砂層（層厚23cm）から構成されている。また、最上位の黄褐色土は、層相から約2.4～2.5万年前に始良カルデラから噴出した始良Tn火山灰（AT, 町田・新井, 1976, 1992, 松本ほか, 1987, 池田ほか, 1995）の層位に相当すると考えられる。

(13) 小国町西里

小国町西里の露頭（図3, 第2地点）では、約4万年前以前に九重火山から噴出したと考えられている九重第1テフラ（Kj P1, 町田, 1980, 小林, 1984, 町田・新井, 1992, 奥野, 1997）の下位のテフラを観察することができた。ここでは、下位より若干色調の暗い褐色土（層厚20cm以上）、褐色土（層厚37cm）成層したテフラ層（層厚13cm）、褐色土（層厚5cm）、黄色細粒軽石層（層厚11cm、軽石の最大径2mm）、褐色土（層厚23cm）、灰色石質岩片層（層厚31cm、石質岩片の最大径48mm）、褐色土（層厚14cm）、成層したテフラ層（層厚49cm）、若干色調の暗い褐色土（層厚28cm）、褐色土（層厚23cm）、若干赤みを帯びた褐色土（層厚25cm）が認められる（図5）。さらにその上位に耳切遺跡においてKj P1に同定された成層したテフラ層（古環境研究所, 耳切遺跡分析結果報告）が認められた。

下位の成層したテフラ層は、黄色細粒軽石層（層厚2cm、軽石の最大径2mm）と上部の橙色細粒火山灰層（層厚11cm）からなる。一方、上位の成層したテフラ層は、下部の黄色軽石に富む褐色砂質細粒火山灰層（層厚18cm、軽石の最大径14mm、石質岩片の最大径8mm）と、上部の黄色軽石混じりで固結した赤褐色細粒火山灰層（層厚31cm）から構成されている。

3. テフラ組成分析

(1) 分析試料と分析方法

石の本・岩瀬・迫の上遺跡と辛川免許センタ - 予定地において示標テフラを検出するために、火山ガラス比分析と重鉍物組成分析を合わせたテフラ組成分析を行った。分析試料は、38南調査区深堀トレンチ第1地点および38南調査区深堀トレンチ第2地点において、基本的に5cmごとに採取された試料のうちの5cmおきの27点である。分析手順は次の通りである。

- 1) 試料15gを秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3) 80℃で恒温乾燥。
- 4) 分析篩により1/4 - 1/8mmの粒子を篩別。
- 5) 偏光顕微鏡下で250粒子を検鏡し、火山ガラスの色調別、形態別組成を求める（火山ガラス比分析）。
- 6) 偏光顕微鏡下で重鉍物250粒子を検鏡し、重鉍物組成を求める（重鉍物組成分析）。

(2) 分析結果

1) 38南調査区深堀トレンチ第1地点

テフラ組成分析の結果をダイヤグラムにして図10に、火山ガラス比と重鉍物組成の内訳を表1と表2に各々示す。火山ガラス比分析では、試料番号27に分厚い中間型ガラスの小規模な出現ピーク（8%）が認められ

た。したがって試料番号27付近（c層）に中間型ガラスで特徴づけられるテフラの降灰層準があると考えられる。また試料番号19に多くの透明で平板状のいわゆるバブル型ガラスを認めることができた（23.6%）。したがって試料番号19付近（a層）に透明なバブル型ガラスで特徴づけられるテフラの降灰層準があると考えられる。

さらに試料番号1には、透明なバブル型ガラスのほか淡褐色や褐色のバブル型ガラス（3.6%、2.4%）が比較的多く認められた。このことから、試料番号1付近（層）に、淡褐色や褐色のバブル型ガラスで特徴づけられるテフラの降灰層準があると考えられる。

一方重鉱物組成では、試料番号27と試料番号7に斜方輝石の出現ピク（56.8%、51.2%）が認められた。なお単斜輝石を合わせたいわゆる両輝石の出現ピクは、試料番号25（62.0%）および試料番号1（60.4%）にある。

以上のことから、分厚い中間型で特徴づけられる試料番号27付近のテフラは、斜方輝石あるいは両輝石型の重鉱物組成上の特徴をもつ可能性が大きいと思われる。また淡褐色や褐色のバブル型ガラスで特徴づけられる試料番号1付近のテフラは、両輝石型の重鉱物組成上の特徴をもつと考えられる。

2) 38南調査区深堀トレンチ第2地点

テフラ組成分析の結果をダイヤグラムにして図11に、火山ガラス比と重鉱物組成の内訳を表3と表4に各々示す。この地点では、試料番号9（b層）にとくに多くの淡褐色や褐色のバブル型ガラス（1.2%、2.1%）が認められた。したがって試料番号9付近に淡褐色や褐色のバブル型ガラスで特徴づけられるテフラの降灰層準があると考えられる。このテフラは、38南調査区深堀トレンチ第1地点の層中に降灰層準があると考えられたテフラと同一と考えられる。なお重鉱物組成では、全体として両輝石の比率が高い傾向にある。

3) 岩瀬遺跡

テフラ組成分析の結果をダイヤグラムにして図2に、火山ガラス比と重鉱物組成の内訳を表1と表2に各々示す。火山ガラス比分析では、試料番号19付近および11に火山ガラスで特徴づけられる示標テフラの降灰層準のある可能性が考えられる。

試料番号19付近には、透明で平板状のいわゆるバブル型ガラスが多く含まれている（12.4%）。同じ火山ガラスは、試料番号13にとくに多く含まれているものの（14.8%）、粗粒火山灰が多く含まれている - 2層の層相を考慮すると、試料番号19付近にその降灰層準のある可能性が指摘される。試料番号19に含まれる重鉱物としては、量の多い順に磁鉄鉱（52.4%）、斜方輝石（33.2%）、角閃石（12.0%）、単斜輝石（2.0%）が含まれている。

試料番号19付近に降灰層準のある可能性が考えられるテフラは、火山ガラスの特徴や斜方輝石と単斜輝石を合わせた両輝石が多く含まれていることなどから、約2.4~2.5万年前に始良カルデラから噴出した始良Tn火山灰（AT, 町田・新井, 1976, 1992, 松本ほか, 1987, 池田ほか, 1995）と考えられる。

一方、試料番号11には、透明なバブル型ガラス（4.8%）のほかに、淡褐色のバブル型ガラス（0.8%）、分厚い中間型ガラス（0.4%）、さらに軽石型ガラス（0.4%）が認められる。重鉱物としては、量の多い順に磁鉄鉱（38.4%）、斜方輝石（34.8%）、単斜輝石（16.4%）、角閃石（8.8%）が含まれている。このテフラは、とくに淡褐色バブル型ガラスを含むこと、さらに両輝石が多く含まれていることなどから、約6,300年前に鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰（K - Ah, 町田・新井, 1978）に由来すると考えられる。そして、その産状から試料番号11付近にK - Ahの降灰層順があると推定される。

したがって、本遺跡で検出された縄文時代後・晩期の遺物包含層は、K - Ahの降灰層順より上位にあることがわかる。

4) 迫の上遺跡

テフラ組成分析の結果をダイヤグラフにして図2に、火山ガラス比と重鉱物組成の内訳を表1と表2に各々示す。試料番号1には、透明で平板状のいわゆるバブル型ガラスが多く含まれている(12.4%)。ほかに繊維束状に発泡した軽石型ガラス(2.4%)、分厚い中間型ガラス(2.4%)、淡褐色バブル型ガラス(0.4%)が含まれる。

一方、重鉱物組成では、量の多い順に磁鉄鉱(46.8%)、斜方輝石(41.2%)、角閃石(7.2%)、単斜輝石(3.2%)が認められる。

透明のバブル型ガラスがとくに多く含まれていること、さらに斜方輝石と単斜輝石を合わせた両輝石が多く含まれていることなどから、このテフラは、約2.4~2.5万年前に始良カルデラから噴出した始良Tn火山灰(AT, 町田・新井, 1976, 1992, 松本ほか, 1987, 池田ほか, 1995)に由来すると考えられる。したがって層相を考慮すると、本遺跡では試料番号1付近にATの降灰層順があると考えられる。以上のことから、迫の上遺跡において検出された旧石器時代の石器の層位は、ATより下位にあると考えられる。

5) 辛川免許センタ - 予定地

テフラ組成分析の結果をダイヤグラムにして図3に、火山ガラス比と重鉱物組成の内訳を表1と表2に各々示す。火山ガラス比分析では、試料番号24および21に小さい気泡を多く含んだ分厚い中間型ガラスが少量含まれている(1.2~2.4%)。このテフラは未詳のテフラで、給源および噴出年代については現在までのところ不明である。今後このテフラについてさらに調査分析を進める必要がある。

その上位の試料番号20(層)には、透明で平板状のいわゆるバブル型ガラスが多く含まれている(24.8%)。この試料の含まれる重鉱物としては、量の多い順に斜方輝石(55.6%)、磁鉄鉱(32.8%)、単斜輝石(6.0%)、角閃石(4.4%)が含まれている。

試料番号20付近に降灰層順のある可能性が考えられるテフラは、火山ガラスの特徴や斜方輝石と単斜輝石を合わせた両輝石が多く含まれていることなどから、約2.4~2.5万年前に始良カルデラから噴出した始良Tn火山灰(AT, 町田・新井, 1976, 1992, 松本ほか, 1987, 池田ほか, 1995)と考えられる。

一方、試料番号4(層)には、透明なバブル型ガラス(4.0%)のほかに、淡褐色のバブル型ガラス(0.8%)や褐色のバブル型ガラス(0.4%)が認められる。重鉱物としては、量の多い順に斜方輝石(34.8%)、磁鉄鉱(38.0%)、単斜輝石(13.2%)、角閃石(6.8%)が含まれている。このテフラは、淡褐色や褐色のバブル型ガラスを含むこと、さらに両輝石を多く含むことなどから、約6,300年前に鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰(K - Ah, 町田・新井, 1978)に由来すると考えられる。その産状から、本遺跡では試料番号4付近にK - Ahの降灰層準があると推定される。

4. 屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

テフラの特徴記載を行うため、また示標テフラとの同定精度を向上させるために、石の本遺跡において降灰層準が認められたテフラ層および露頭において認められたテフラ試料の合計15点について、位相差法による屈折率測定(新井, 1972)を行った。

(2) 測定結果

屈折率測定の結果を、表5に示す。石の本遺跡 (Loc. 1) 38南調査区深堀トレンチ第1地点試料番号27には、斜方輝石のほかに角閃石 (緑色) や単斜輝石が少量含まれている。斜方輝石の屈折率 () は1.703~1.706、角閃石の屈折率 (n_2) は1.673~1.680である。また、試料番号に含まれる火山ガラスの屈折率 (n) は1.498~1.501 (中央値: 1.499~1.500) である。また斜方輝石の屈折率 () は1.727~1.734である。これらの特徴から、この試料付近に降灰層のあるテフラは約2.2~2.5万年前に始良カルデラから噴出した始良Tn火山灰 (AT, 町田・新井, 1976, 1992) に同定される。

また38南調査区深堀トレンチ第1地点の試料番号1に含まれる火山ガラスの屈折率 (n) は、1.499~1.513 (中央値: 1.510~1.512) である。斜方輝石の屈折率 () は1.708~1.723である。このテフラは、その特徴から約6,300年前に鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰 (町田・新井, 1978) に同定される。したがって、38南調査区深堀トレンチ第2地点の b層に降灰層のあるテフラ層も、K - Ahに同定される。

32北調査区の試料番号1のテフラ (石の本軽石) には、重鉱物として斜方輝石のほか単斜輝石が認められた。火山ガラスの屈折率 (n) は1.512~1.515、斜方輝石の屈折率は、約2.7万年前に阿蘇火山から噴出した阿蘇草千里浜テフラ (Aso - K, 小野・渡辺, 1985, 早川・井村, 1991) の斜方輝石の屈折率によく似ているが、従来火山ガラスの屈折率の記載がなく、Aso - Kについての分析も今後行う必要がある。

大津町高尾野 (Loc. 3) の試料番号5には、重鉱物として斜方輝石のほか、単斜輝石が認められた。斜方輝石の屈折率 () は1.702~1.706である。試料番号4 (大津スコリア) には、重鉱物としてカンラン石のほか、単斜輝石や斜方輝石が含まれている。斜方輝石の屈折率 ()、1.698~1.702である。試料番号3には、重鉱物として斜方輝石のほか単斜輝石が含まれている。火山ガラスの屈折率 (n) は1.502~1.505斜方輝石の屈折 () は1.702~1.706である。試料番号2には、重鉱物として斜方輝石のほか単斜輝石が含まれている。火山ガラスの屈折率 (n) は1.502~1.505、斜方輝石の屈折率 () は1.702~1.706である。試料番号1には、重鉱物として斜方輝石のほか角閃石や単斜輝石が含まれている。この試料には透明のバブル型ガラスが多く含まれており、その屈折率 (n) は1.499~1.501 (中央値: 1.499~1.500) である。また斜方輝石の屈折率 () は1.728~1.734である。このテフラは、ATに由来すると考えられる。

一の宮町象ヶ鼻 (loc. 4) の資料番号4には、重鉱物として単斜輝石のほかカンラン石が含まれている。この試料については、風化および斜方輝石や角閃石などが含まれていないことなどから、屈折率の測定はできなかった。一方、試料番号1には、重鉱物として斜方輝石や単斜輝石がごくわずかに認められた。火山ガラスの屈折率 (n) は1.509~1.514 (中央値: 1.510~1.512)、斜方輝石の屈折率 () は1.708~1.712である。

一の宮町手野の井出牧場 (Loc. 5) の試料番号1には、重鉱物として斜方輝石のほか単斜輝石が認められた。火山ガラスの屈折率 (n) は1.502~1.505、斜方輝石の屈折率 () は1.702~1.706である。

一の宮町手野 (Loc. 6) の試料番号3には重鉱物として斜方輝石や単斜輝石、さらにごく少量の角閃石や黒雲母が認められた。斜方輝石の屈折率 () は1.702~1.705である。また試料番号2には重鉱物として斜方輝石のほか単斜輝石、黒雲母、さらにごく少量の角閃石が認められた。火山ガラスの屈折率 (n) は1.510~1.513、斜方輝石の屈折率 () は1.702~1.705である。さらに試料番号1には、重鉱物として斜方輝石のほか単斜輝石が含まれている。火山ガラスの屈折率 (n) は1.502~1.505、斜方輝石の屈折率 () は1.702~1.705である。

阿蘇町茗ヶ原 (Loc. 10) の試料番号5の軽石層には、重鉱物として斜方輝石や単斜輝石が認められる。斜方輝石 () の屈折率は、1.700~1.703である。斜方輝石の屈折率から、このテフラは阿蘇火山に由来す

ると考えられる。試料番号3の軽石層には、重鉱物としてカンラン石のほか斜方輝石や単斜輝石、さらにごく少量の黒雲母が認められる。斜方輝石（ ）の屈折率は、1.700～1.704である。

阿蘇町茗ヶ原の試料番号2の軽石層には、重鉱物として斜方輝石のほか、単斜輝石やカンラン石さらにごく少量の角閃石が認められる。これらのうち斜方輝石（ ）の屈折率は、1.699～1.701である。試料番号1には、重鉱物として斜方輝石や単斜輝石が含まれている。斜方輝石（ ）の屈折率は、1.700～1.703である。特徴から、これらのテフラについても阿蘇火山起源と考えられる。これらのうち、試料番号1の軽石については、層位や岩相さらに斜方輝石の屈折率などから、阿蘇草千里浜テフラ（Aso - K, 小野・渡辺, 1985, 高田, 1989）に同定される可能性が考えられる。

小国町西里（Loc. 11）の試料番号5には、重鉱物として斜方輝石のほか、単斜輝石やカンラン石が含まれている。斜方輝石（ ）の屈折率は、1.700～1.703である。また、試料番号4には、重鉱物として斜方輝石や単斜輝石のほか、少量の角閃石が含まれている。斜方輝石（ ）の屈折率は、1.701～1.703である。さらに、試料番号3には、重鉱物として斜方輝石のほか単斜輝石やカンラン石が含まれている。斜方輝石（ ）の屈折率は、1.701～1.703である。

試料番号1には、角閃石のほか斜方輝石や少量のカンラン石や単斜輝石が含まれている。斜方輝石（ ）や角閃石（ n_2 ）の屈折率は、1.699～1.701および1.685～1.689である。これらの特徴は、阿蘇4火砕流堆積物の特徴と一致する。周辺に阿蘇4火砕流堆積物が厚く堆積していることを考慮すると、この堆積物については二次的な堆積物の可能性がある。さらに周辺の調査を行い、テフラ層序について検討を行う必要がある。

5. 考察

石の本遺跡における調査分析の結果、ATとK - Ahの2層の示標テフラを検出することができた。石の本遺跡において石器の検出された a層および b層は、ATより下位にあることは明らかである。さてさらに石器包含層の層位を限定するために、「石の本軽石」の層位および他の示標テフラの存在の可能性について検討を行っておく必要がある。ただし現段階では、資料が少ないために詳細について正確に述べることはできない。そこで、ここでは推測と期待を含めて記述し、今後の調査分析のための資料を残すことにする。

地質調査と屈折率測定の対象としたテフラの中で、おそらく最下位にあるテフラは、一の宮町手野（Loc. 6）の試料番号3および試料番号2のテフラ群である。これらの軽石には、重鉱物の中に角閃石や黒雲母が含まれており、阿蘇カルデラ起源のテフラとは若干特徴を異にする。これらについては九重火山起源の可能性が考えられる。ただし角閃石の量が少ないこと、また斜方輝石の屈折率が異なることなどから、九重第1軽石（Kj - P1, 約3.0～3.5万年前, 小林, 1984, 小野・渡辺, 1985）とは別のテフラの可能性が考えられる。

その上位にあると思われるテフラが、一の宮町手野（Loc. 6）の試料番号1と一の宮町手野の井手牧場（Loc. 5）の試料番号1の赤味がかった橙色の軽石層である。さらに上位に、井手牧場（Loc. 5）の最上位のスコリアおよび一の宮町象ヶ鼻（Loc. 4）の試料番号4のスコリアがある。なおこのテフラの上位には、いわゆる火山砂の堆積が認められ、さらに上位にK - Ahが認められる。以上のように一の宮町域でのテフラの層序関係については、比較的容易に層序の把握が出来た。

さてこれらのテフラと、大津町域から熊本市域で認められるテフラとの関係については大きな問題が残された。つまり石の本軽石とまったく同じ屈折率上の特徴をもつテフラが検出されなかったのである。比較的似ているテフラは、一の宮町手野（loc. 6）の試料番号2であるが、現段階で屈折率から同一テフラと判断することは難しい。なお一の宮町手野（Loc. 6）の試料番号1が大津町高尾野（Loc. 3）の試料番号2の軽石に対比され、さらにATの下位にある石の本遺跡38南調査区深堀トレンチ第1地点の試料番号27付

近のテフラ粒子に対比される可能性も指摘できる。なお、石の本遺跡38南調査区深堀トレンチ第1地点の試料番号27に含まれる角閃石は、緑色のものがほとんどで、屈折率も阿蘇4火砕流堆積物のそれとは異なる傾向が伺えた。したがって、この試料の層準に九重火山あるいは雲仙火山起源のテフラ粒子も混入している可能性が考えられる。

今後さらに多くの地点で層相層序の記載や調査分析を行う必要がある。実際には、一の宮町域においてATとKj - P1の層位の把握を早急に行う必要がある。また今回調査を行った一の宮町域と大津町域の間の地域の地質調査も必要である。いずれにしても、従来阿蘇火山西部および熊本市域にかけての地域でのテフラの記載分析例は少ないため、さらに継続して調査分析を進め資料を蓄積する必要性が指摘されよう。

6. 小結

石の本遺跡とその周辺地域の露頭において、土層の形成年代に関する資料を収集するために、地質調査、テフラ組成分析、屈折率測定を合わせて行った。その結果、石の本遺跡において、始良Tn火山灰(AT, 約2.2~2.5万年前)と鬼界アカホヤ火山灰(K - Ah, 約6,300年前)さらにATの下位の石の本軽石の3層を検出することができた。石の本遺跡で検出された石器のうち、a層およびb層の石器は、少なくともATの下位にある。石の本遺跡では、さらに多くのテフラが降灰していると考えられた。周辺には、実際に多くの噴出年代が未詳のテフラ層が認められる。したがってさらに調査分析を進めていくことにより、より詳細に石の本遺跡の石器出土層位を確定できると期待される。

岩瀬遺跡において、土層の形成年代に関する資料を収集するために、地質調査とテフラ組成分析を合わせて行った。その結果、下位より始良Tn火山灰(AT, 約2.4~2.5万年前)と鬼界アカホヤ火山灰(K - An, 約6,300年前)の降灰層準を把握することができた。岩瀬遺跡で検出された縄文時代後・晩期の遺物包含層はK - Ahの降灰層準より上位にある。

迫の上遺跡において、土層の形成年代に関する資料を収集するために、地質調査とテフラ組成分析を行った。その結果、始良Tn火山灰(AT, 約2.4~2.5万年前)の降灰層準を把握することができた。そして迫の上遺跡において検出された旧石器時代の石器の層位は、ATの下位にあると考えられた。

幸川免許センター - 予定地において、土層の形成年代に関する資料を収集するために、地質調査とテフラ組成分析を合わせて行った。その結果、下位より始良Tn火山灰(AT, 約2.4~2.5万年前)と鬼界アカホヤ火山灰(K - Ah, 約6,300年前)の降灰層準を把握することができた。ATの下位の少なくとも層以下の層準には、中間型ガラスで特徴づけられる未詳のテフラの存在が指摘された。今後、旧石器時代の詳細な編年を行うために、その層位を把握するとともに、給源火山や噴出年代について、資料を収集していく必要がある。

阿蘇カルデラ周辺露頭において、石器包含層の層位や土層の形成年代に関する資料を収集するために、地質調査、テフラ組成分析、屈折率測定を合わせて行った。

その結果、石の本遺跡において、d層中に始良Tn火山灰(AT, 約2.4~2.5万年前)、f層中に阿蘇火山起源と思われるテフラを検出することができた。また、阿蘇カルデラ周辺露頭において、ATより下位の層準に多くのテフラ層を認め、とくに軽石質のテフラについて岩石記載的特徴把握を試みた。阿蘇カルデラ周辺のテフラについては、層序や岩石記載的特徴の把握がまだ十分に行われていない。熊本県域の旧石器の詳細な編年のためにも、テフラに関する資料を収集していく必要がある。

文 献

- 新井房夫 (1972) 斜方輝石・角閃石によるテフラの同定 - テフロクロノジ - の、基礎的研究. 第四紀研究, 11, p.254 - 269.
- 早川由紀夫・井村隆介 (1991) 阿蘇火山の過去 8 万年の噴火史と1989年噴火. 火山, 36, p.25 - 35.
- 小林哲夫 (1984) 由布・鶴見火山の地質と最新の噴火活動. 地質論集, 24, p.93 - 108.
- 町田 洋・新井房夫 (1976) 広域に分布する火山灰 - 始良T_n火山灰の発見とその意義 - . 科学, 46, p.339 - 347.
- 町田 洋・新井房夫 (1978) 南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ - 鬼界アカホヤ火山灰. 第四紀研究, 17, p.243 - 263. p.143 - 163.
- 町田 洋・新井房夫・百瀬 貢 (1985) 阿蘇 4 火山灰 - 分布の広域性と後期更新世示標層としての意義 - . 火山, 第 2 集, p.49 - 70 .
- 町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス. 東京大学出版会, 276p.
- 小野晃司・松本征夫・宮久三千年・寺岡易司・神戸信伸 (1977) 竹田地域の地質. 地域地質研究報告 (5 万分の 1 図幅), 地質調査所, 156p.
- 小野晃司・渡辺一徳 (1984) 阿蘇火山地質図 (5 万分の 1) および説明書. 火山地質図 4 . 地質調査所.
- 松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗 (1987) 始良T_n火山灰 (AT) の14C年代. 第四紀研究, 26, p.79 - 83.
- 池田晃子・奥野 充・中村俊夫・小林哲夫 (1995) 南九州, 始良カルデラ起源の大隅降下軽石と入戸火砕流中の炭化樹木の加速器14C年代. 第四紀研究, 34, p.377 - 379.
- 町田 洋 (1980) 岩戸遺跡のテフラ (火山灰). 坂田邦洋編「大分県清川村岩戸における後期旧石器文化の研究」. 広雅堂書店, p.443 - 454.
- 高田英樹 (1989) 阿蘇火山中央火口丘群のテフラ概要. 熊本地学会誌, 90, p. 8 - 11.

表1 38南調査区深掘トレンチ第1地点の火山ガラス比分析結果

試料	bw (tr)	bw (pb)	bw (br)	md	pm	その他	合計
1	10	9	6	0	0	225	250
3	7	6	6	1	1	229	250
5	11	2	3	1	5	228	250
7	45	4	0	3	3	195	250
9	45	1	0	6	3	195	250
11	49	1	0	5	0	195	250
13	45	0	0	3	3	199	250
15	41	0	0	5	5	199	250
17	42	0	1	1	1	205	250
19	59	0	0	2	2	187	250
21	43	0	0	0	3	204	250
23	16	0	1	5	3	225	250
25	0	0	0	6	8	236	250
27	0	0	0	1	5	244	250
29	0	0	0	1	0	249	250
31	0	0	1	0	0	249	250
33	0	0	1	0	0	249	250
35	0	0	1	0	0	249	250
37	0	0	0	0	0	250	250
39	0	0	0	0	0	250	250
41	0	0	0	0	0	250	250
43	0	0	0	0	0	250	250

数字は粒子数. bw: バブル型, md: 中間型, pm: 軽石型, tr: 透明, pb: 淡褐色, br: 褐色.

表2 38南調査区深掘トレンチ第1地点の重鉱物組成分析結果

試料	ol	opx	cpx	ho	bi	mt	その他	合計
1	3	94	57	4	0	90	2	250
3	1	94	54	2	0	96	3	250
5	0	113	40	10	0	83	4	250
7	0	128	21	30	0	63	8	250
9	0	128	6	45	0	58	13	250
11	0	106	14	44	0	78	8	250
13	0	122	5	33	0	84	6	250
15	0	98	17	45	0	84	6	250
17	0	108	3	51	0	84	4	250
19	0	103	4	53	0	87	3	250
21	0	123	13	19	0	93	2	250
23	0	133	8	9	0	99	1	250
25	2	141	14	3	0	89	1	250
27	0	142	10	8	0	84	6	250
29	0	91	15	8	0	134	2	250
31	0	76	11	13	0	150	1	250
33	0	84	6	14	0	143	0	250
35	0	82	6	18	0	142	3	250
37	0	51	2	20	0	176	2	250
39	0	52	0	32	0	160	1	250
41	3	82	0	36	0	127	6	250
43	11	71	11	7	0	133	2	250

数字は粒子数. bw: バブル型, md: 中間型, pm: 軽石型, tr: 透明, pb: 淡褐色, br: 褐色.

表3 38南調査区深掘トレンチ第2地点の火山ガラス比分析結果

試料	bw (tr)	bw (pb)	bw (br)	md	pm	その他	合計
1	9	1	3	2	1	234	250
3	5	1	0	2	2	240	250
5	4	2	2	2	1	239	250
7	3	4	3	0	1	239	250
9	7	3	7	4	2	227	250

数字は粒子数。bw：バブル型，md：中間型，pm：軽石型，tr：透明，pb：淡褐色，br：褐色。

表4 38南調査区深掘トレンチ第2地点の重鉱物組成分析結果

試料	ol	opx	cpx	ho	bi	mt	その他	合計
1	5	111	60	4	0	73	1	250
3	0	105	46	4	0	91	4	250
5	0	105	50	0	0	92	3	250
7	0	118	42	3	0	84	3	250
9	0	83	45	9	0	112	1	250

数字は粒子数。bw：バブル型，md：中間型，pm：軽石型，tr：透明，pb：淡褐色，br：褐色。

表1 岩瀬遺跡 2-No.6杭北トレンチの火山ガラス比分析結果

試料	bw (tr)	bw (pb)	bw (br)	md	pm	その他	合計
1	7	0	0	1	0	242	250
3	4	4	1	1	0	240	250
5	4	2	1	0	1	242	250
7	3	1	1	1	0	244	250
9	8	0	1	2	0	239	250
11	12	2	0	1	1	235	250
13	37	0	0	3	1	209	250
15	33	0	0	5	0	212	250
17	28	0	0	1	0	221	250
19	31	0	0	3	0	216	250
21	17	0	0	3	0	230	250
23	8	1	0	3	0	238	250
25	0	1	0	0	0	249	250

数字は粒子数。bw：バブル型，md：中間型，pm：軽石型，tr：透明，pb：淡褐色，br：褐色。

表2 岩瀬遺跡 2-No.6杭北トレンチの重鉱物組成分析結果

試料	ol	opx	cpx	ho	bi	mt	その他	合計
1	0	103	22	16	0	104	5	250
3	2	82	44	18	0	101	3	250
5	2	96	39	14	0	98	1	250
7	0	86	50	16	0	94	4	250
9	0	89	44	24	0	87	6	250
11	0	87	41	22	0	96	4	250
13	0	107	10	22	0	108	3	250
15	0	96	7	39	0	106	2	250
17	0	90	4	34	0	120	2	250
19	0	83	5	30	0	131	1	250
21	0	70	5	32	0	142	1	250
23	1	75	7	35	0	132	0	250
25	2	67	7	37	0	133	4	250

数字は粒子数. ol:カンラン石, opx:斜方輝石, cpx:単斜

表1 迫の上遺跡の火山ガラス比分析結果

試料	bw (tr)	bw (pb)	bw (br)	md	pm	その他	合計
1	41	1	0	6	6	196	250

数字は粒子数. bw:バブル型, md:中間型, pm:軽石型, tr:透明, pb:淡褐色, br:褐色.

表2 迫の上遺跡の重鉱物組成分析結果

試料	ol	opx	cpx	ho	bi	mt	その他	合計
1	0	103	8	18	0	117	4	250

数字は粒子数. ol:カンラン石, opx:斜方輝石, cpx:単斜輝石, ho:角閃石, bi:黒雲母, mt:磁鉄鉱.

辛川免許センター予定地

表1 試掘トレンチの火山ガラス比分析結果

試料	bw (tr)	bw (pb)	bw (br)	md	pm	その他	合計
2	2	1	3	1	1	242	250
4	10	2	1	4	3	230	250
6	15	1	0	1	0	233	250
8	45	1	0	1	2	201	250
10	46	1	0	3	1	199	250
12	38	0	0	1	1	210	250
14	59	0	0	1	1	189	250
16	41	0	0	2	1	206	250
18	59	1	0	1	6	173	250
20	62	1	0	0	1	186	250
22	8	0	0	6	3	233	250
24	2	0	0	3	16	229	250

数字は粒子数. bw:バブル型, md:中間型, pm:軽石型, tr:透明, pb:淡褐色, br:褐色.

辛川免許センター予定地
表2 試掘トレンチの重鉱物組成分析結果

試料	ol	opx	cpx	ho	bi	mt	その他	合計
2	0	82	65	3	0	99	1	250
4	0	105	33	17	0	95	0	250
6	2	124	31	13	0	78	2	250
8	0	123	17	18	0	92	0	250
10	0	105	10	17	0	116	2	250
12	0	117	8	23	0	100	2	250
14	0	102	10	41	0	90	7	250
16	0	104	15	43	0	87	1	250
18	0	130	13	40	0	67	0	250
20	0	139	15	11	0	82	3	250
22	0	140	21	3	0	86	0	250
24	0	128	24	2	0	93	3	250

数字は粒子数. ol:カンラン石, opx:斜方輝石, cpx:単斜輝石, ho:角閃石, bi:黒雲母, mt:磁鉄鉱.

表5 石の本遺跡とその周辺における屈折率測定結果

地点	試料	重鉱物	火山ガラス (n)	斜方輝石 (γ)
1-38南1	1	opx, cpx, ho	1.499-1.513(1.510-1.512)	1.708-1.723
1-38南1	19	opx, ho, (cpx)	1.498-1.501(1.499-1.500)	1.727-1.734
1-38南1	27	opx, cpx, ho* ¹	—	1.703-1.706
1-32北	1	opx>cpx	1.512-1.515	1.700-1.703

	3	1 opx, ho, cpx	1.499-1.501(1.499-1.500)	1.728-1.734
	3	2 opx>cpx	1.502-1.505	1.702-1.706
	3	3 opx>cpx	1.502-1.505	1.702-1.706
	3	4 ol>cpx, opx	—	1.698-1.702
	3	5 opx>cpx	—	1.702-1.706

	4	1 (opx, cpx)	1.509-1.514(1.510-1.512)	1.708-1.712
	4	4 cpx, ol	不適	不適

	5	1 opx>cpx	1.502-1.505	1.702-1.706

	6	1 opx>cpx	1.502-1.505	1.702-1.706
	6	2 opx>cpx, bi, (ho)	1.510-1.513	1.702-1.705
	6	3 opx, cpx, (ho, bi)	—	1.702-1.705

屈折率の測定は、位相差法(新井, 1972)による。重鉱物の()は量の少ないことを示す。屈折率の()は中央値を示す。

表3 石の本遺跡とその周辺における屈折率測定結果

地点	試料	重鉱物	屈折率 (modal range)
3097グリッド北	7	opx>ho, cpx, (bi)	gl(n) : 1.497-1.499 opx(γ) : 1.726-1.734 (1.731-1.733)
3097グリッド北	15	opx>ho, (cpx)	opx(γ) : 1.701-1.704
阿蘇町茗ケ原	1	opx>cpx	opx(γ) : 1.700-1.703
阿蘇町茗ケ原	2	opx>cpx, ol, (ho)	opx(γ) : 1.699-1.701
阿蘇町茗ケ原	3	ol>opx, cpx, (bi)	opx(γ) : 1.700-1.704
阿蘇町茗ケ原	5	opx>cpx	opx(γ) : 1.700-1.703
小国町西里	1	ho>opx, (ol, cpx)	opx(γ) : 1.699-1.701 ho(n_2) : 1.685-1.689
小国町西里	3	opx>cpx, ol	opx(γ) : 1.701-1.703
小国町西里	4	opx>cpx, (ho)	opx(γ) : 1.700-1.708
小国町西里	5	opx>cpx, ol	opx(γ) : 1.700-1.703

屈折率の測定は、温度一定型位相差法（新井，1972）による。gl：火山ガラス，ol：カンラン石，opx：斜方輝石，cpx：単斜輝石，ho：角閃石，bi：黒雲母。重鉱物の（）は量の少ないことを示す。

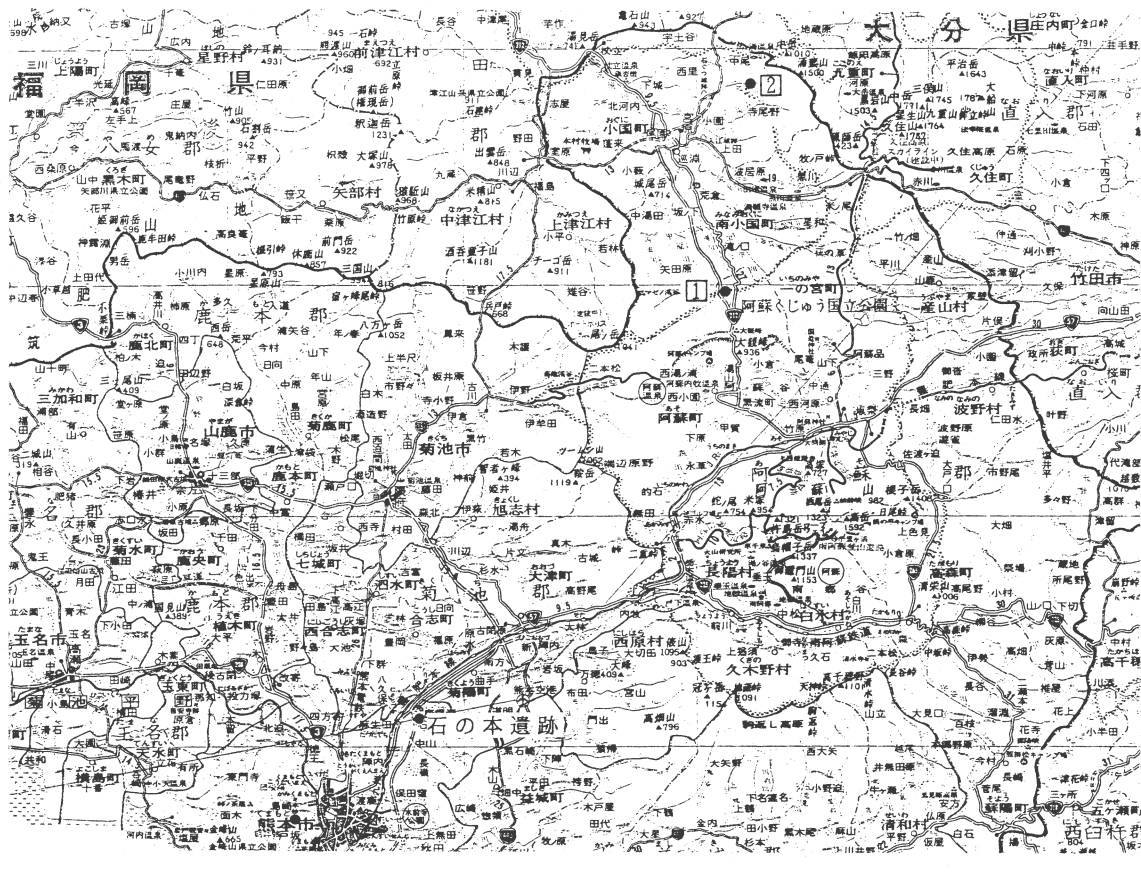


図3 調査地点の位置図 基図は国際地学協会（1994）

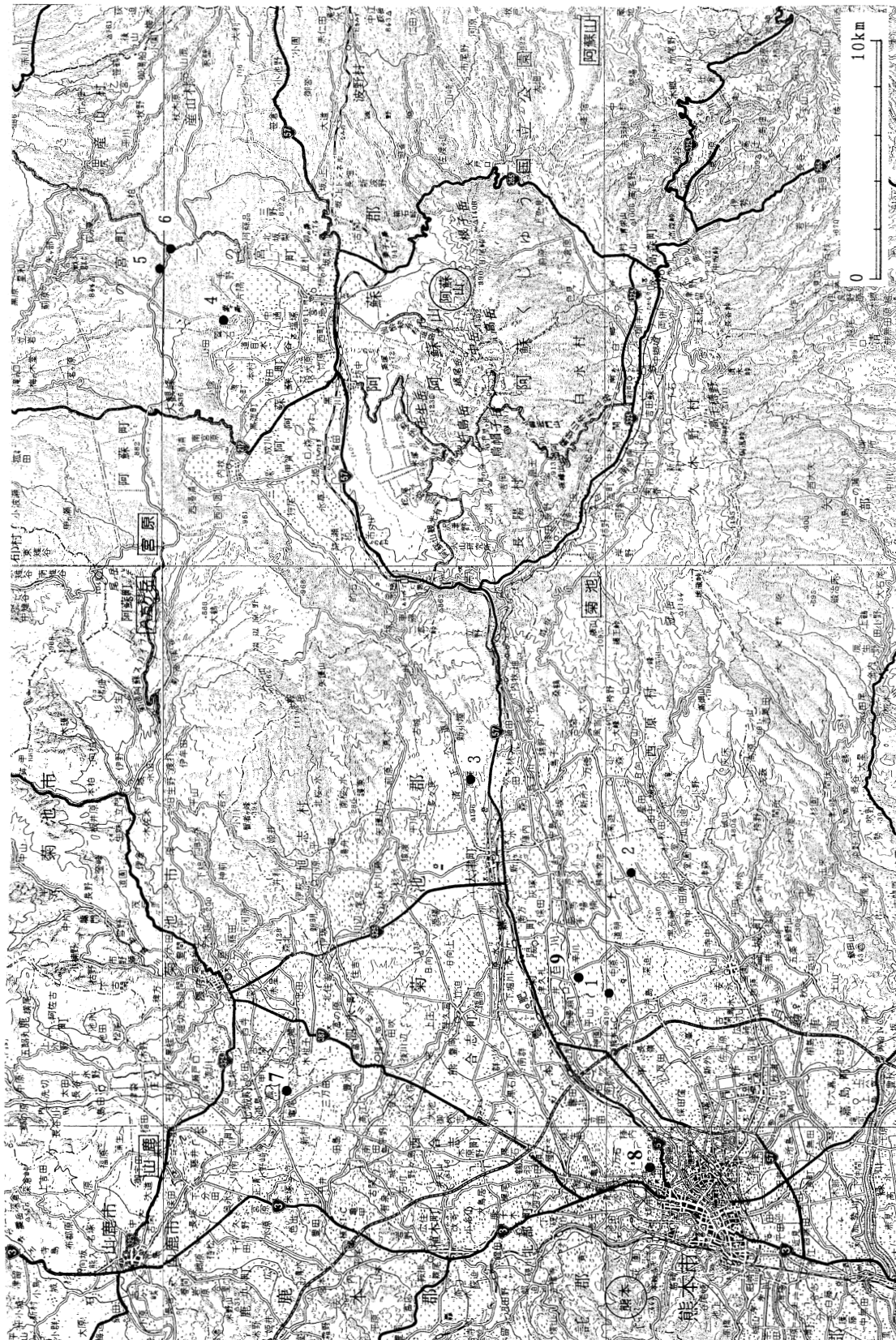


図1 調査地点位置図（数字は、地点番号）
 1：石の本遺跡 2：益城町小谷 3：大津町高尾野 4：一の宮町象ヶ鼻 5：一の宮町井手牧場 6：一の宮町手野
 7：七城町岩瀬遺跡 8：熊本市迫の上遺跡 9：菊陽町辛川免許センター予定地

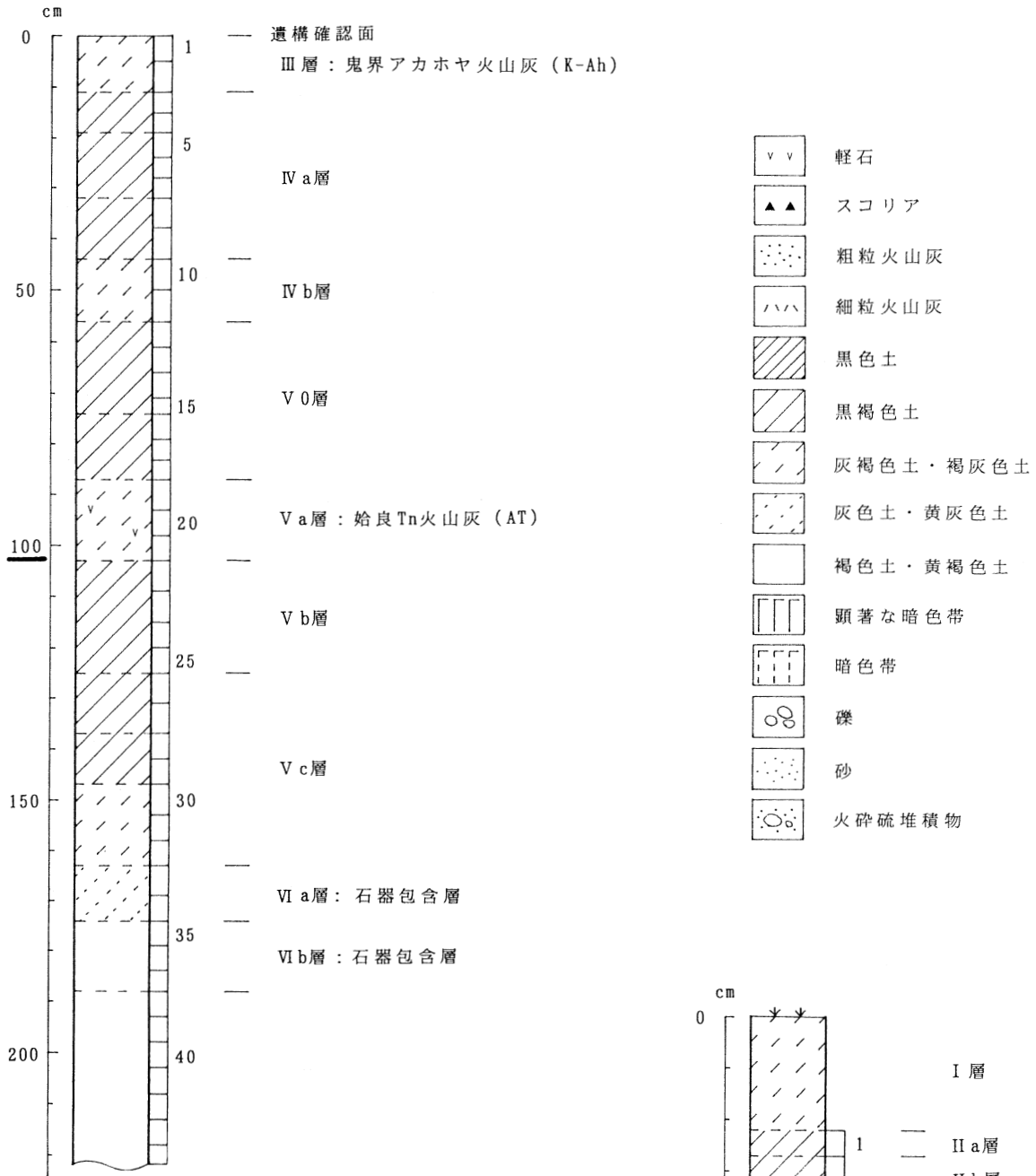


図2 38南調査区深掘トレンチ第1地点の土層柱状図

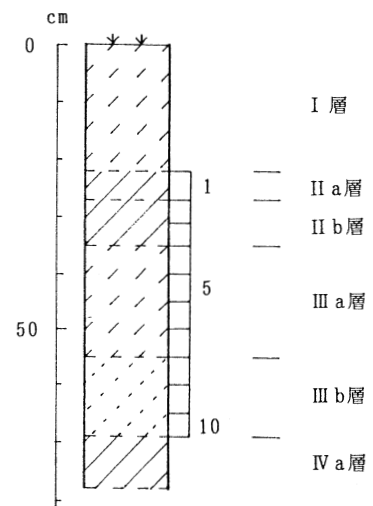


図3 38南調査区深掘トレンチ第2地点の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

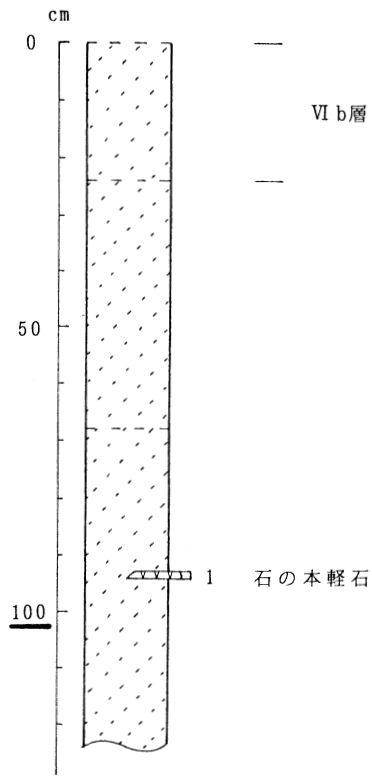


図4 石の本遺跡32区北調査区の土層柱状図

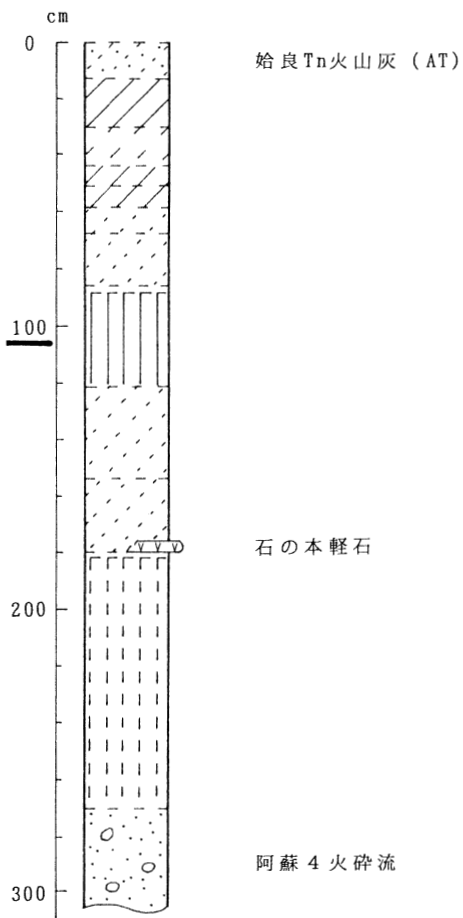


図5 益城町小谷の土層柱状図

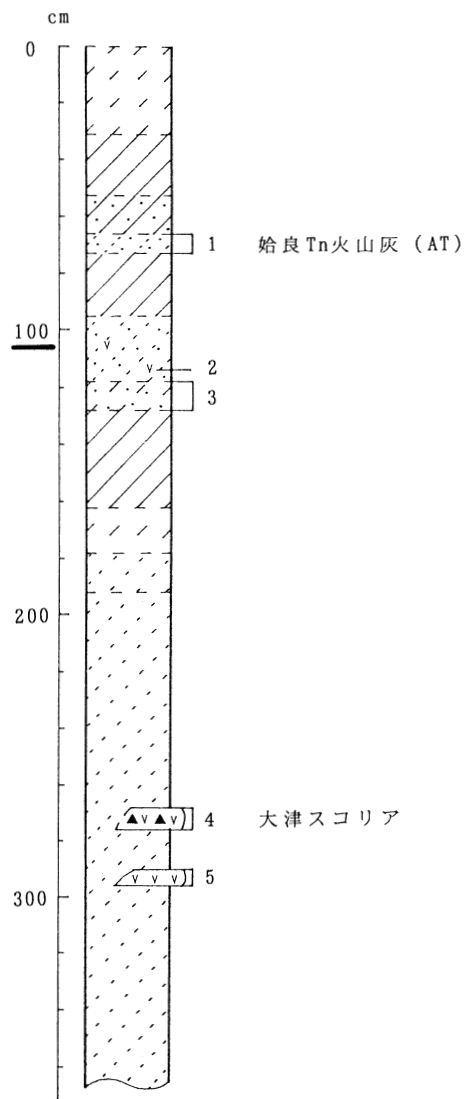


図6 大津町高尾野の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

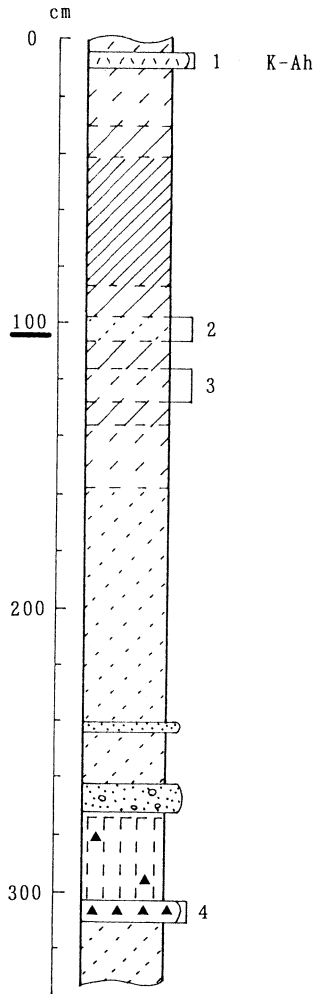


図7 一の宮町象ヶ鼻の土層柱状図

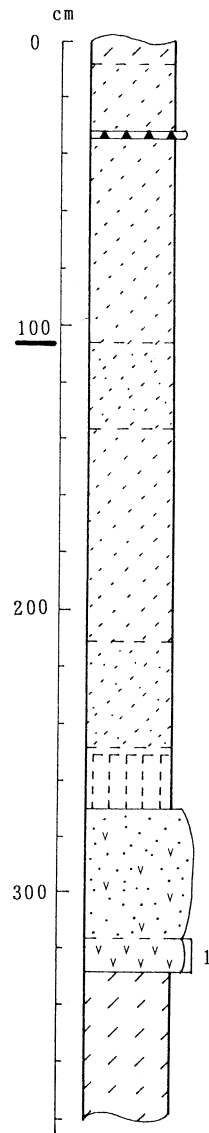


図8 一の宮町井出牧場の土層柱状図

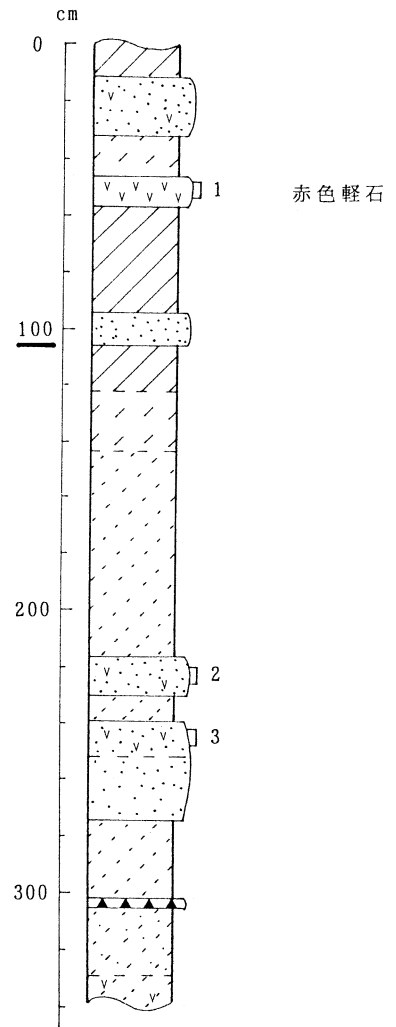


図9 一の宮町手野の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

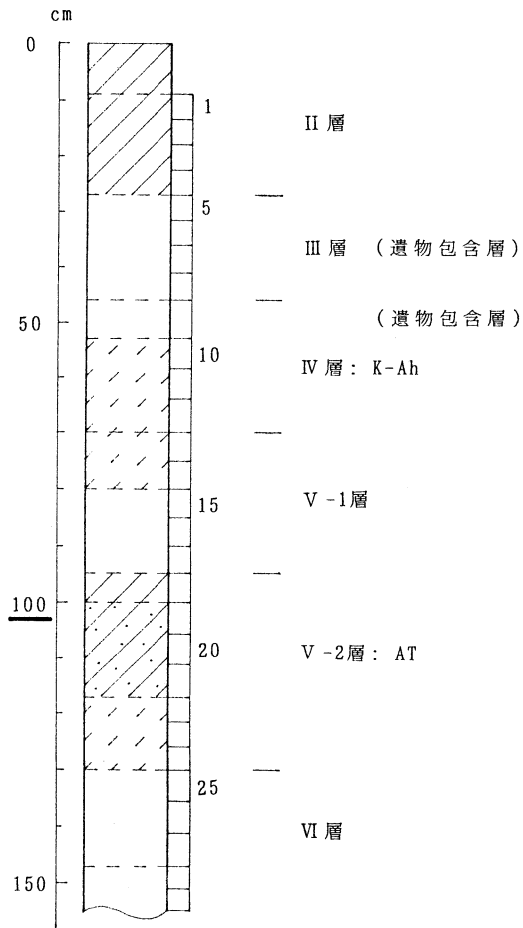


図1 岩瀬遺跡2-No.6杭北トレンチの土層柱状図

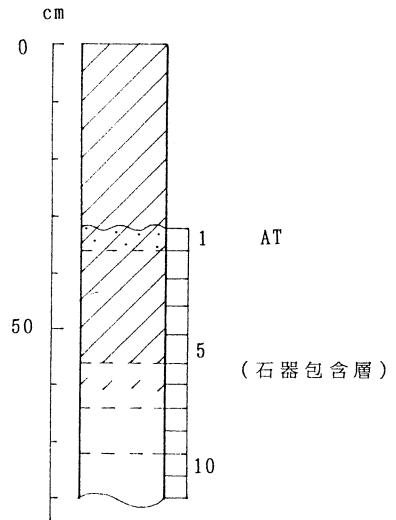


図1 迫の上遺跡の土層柱状図

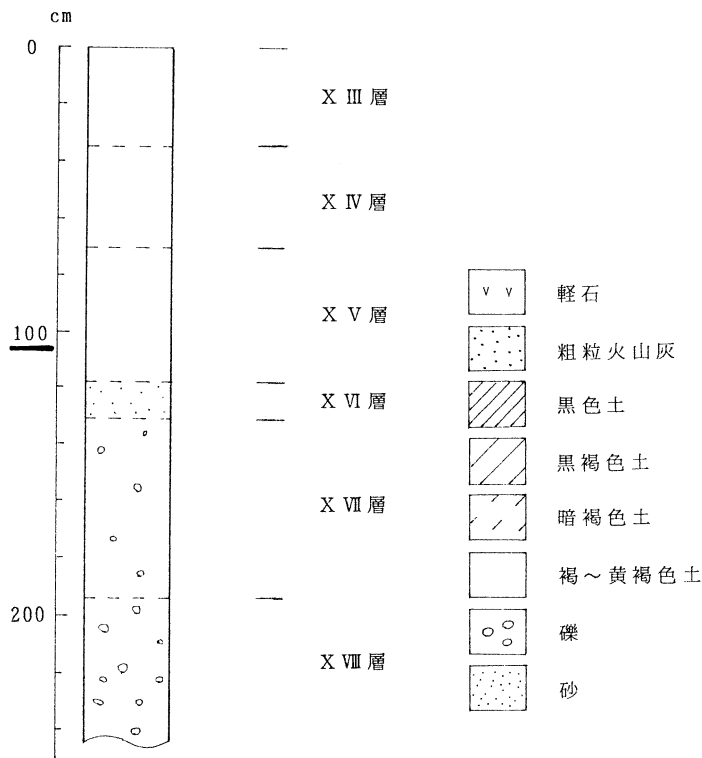


図2 辛川免許センター予定地深掘トレンチの土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

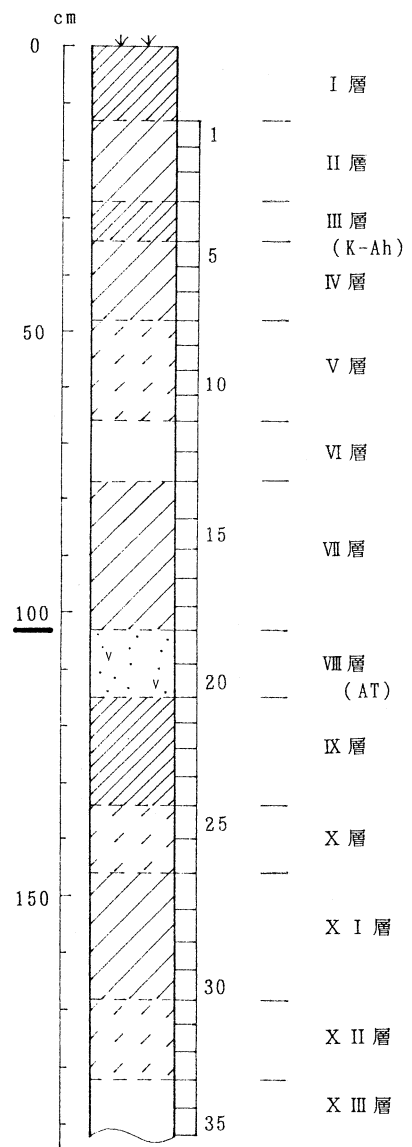


図1 辛川免許センター予定地
試掘トレンチの土層柱状図

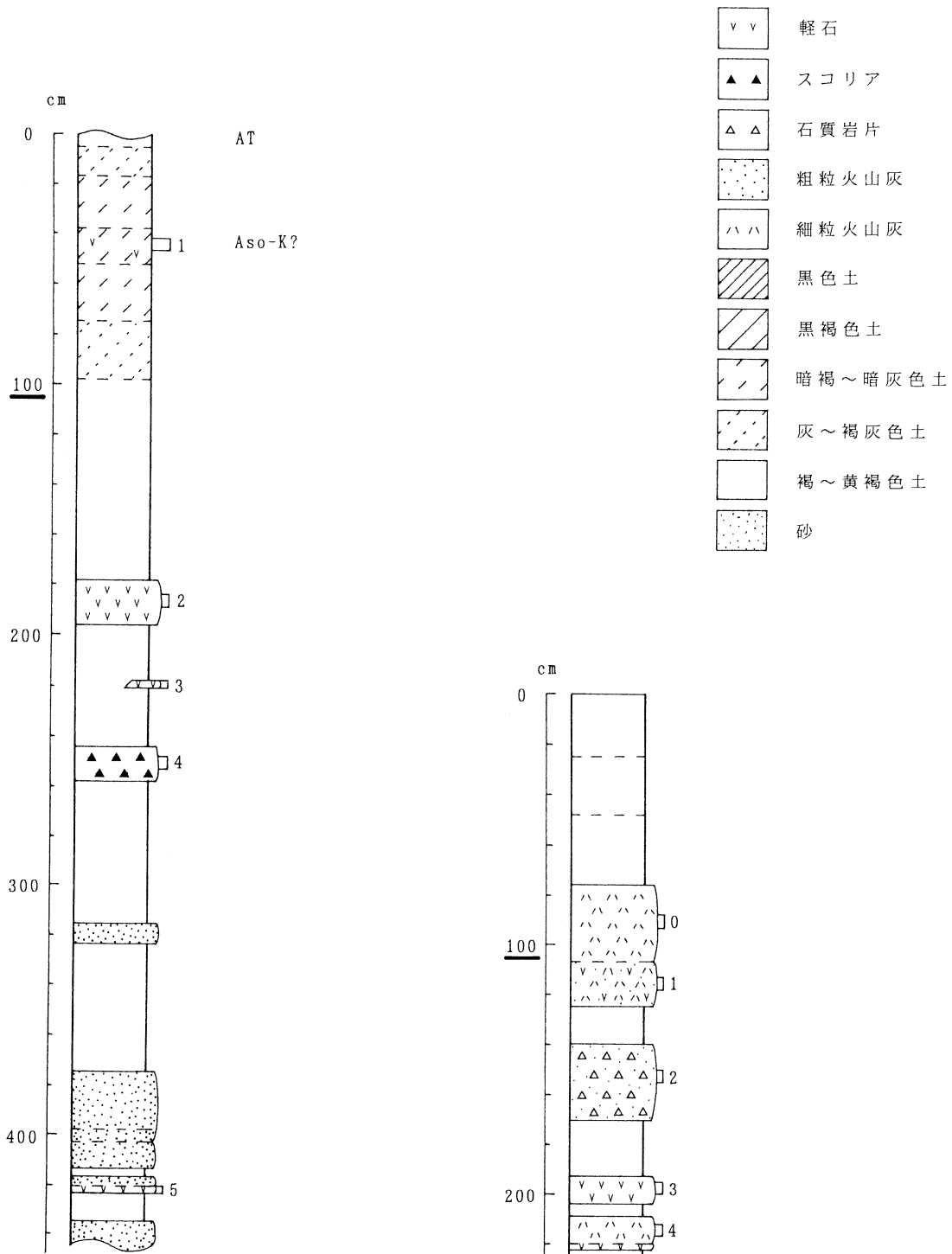


図4 阿蘇町茗ヶ原の土層柱状図

図5 小国町西里の土層柱状図 (Kj-P1の下位)

数字はテフラ分析の試料番号

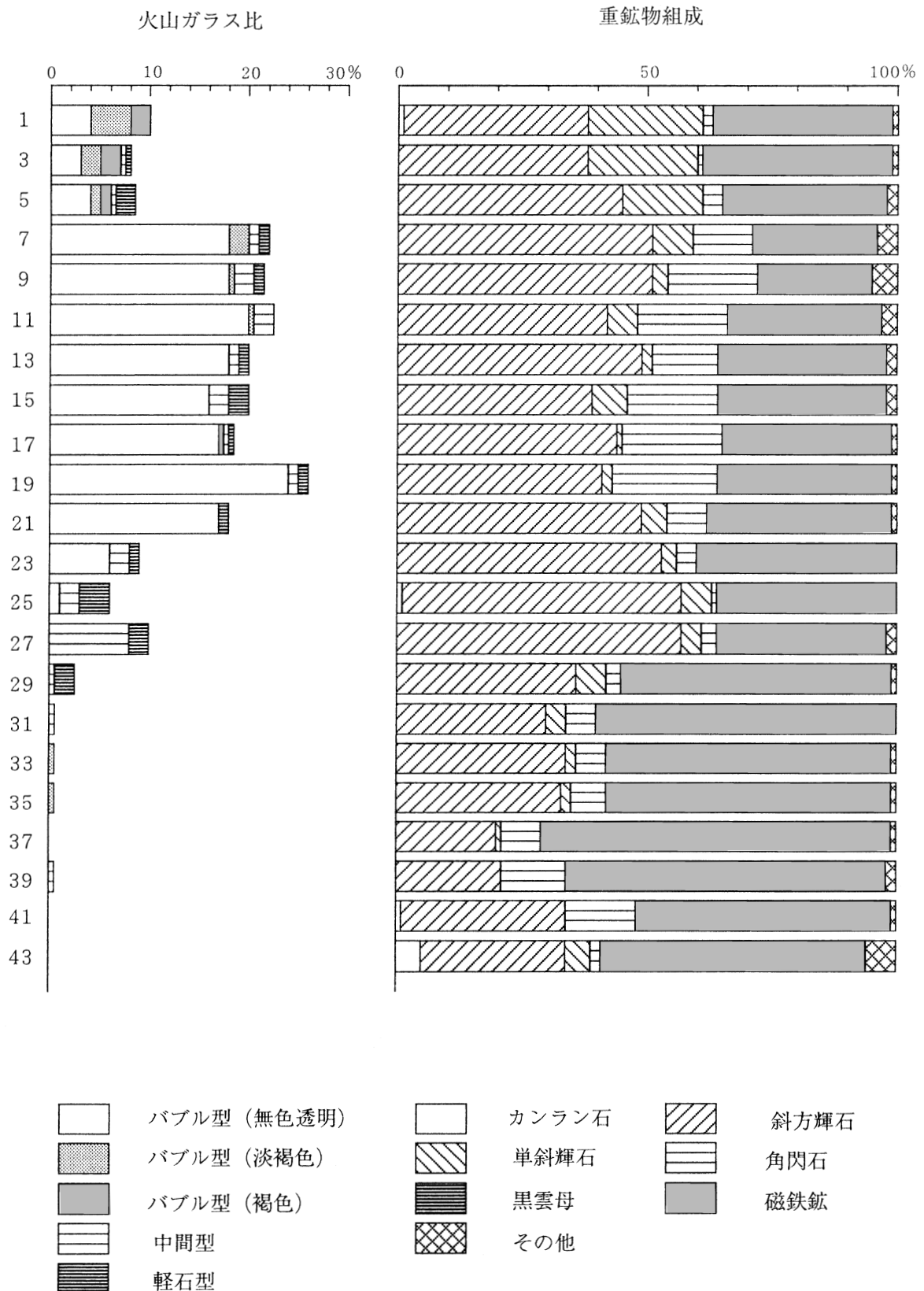


図10 38南調査区深掘トレンチ第1地点のテフラ組成ダイヤグラム

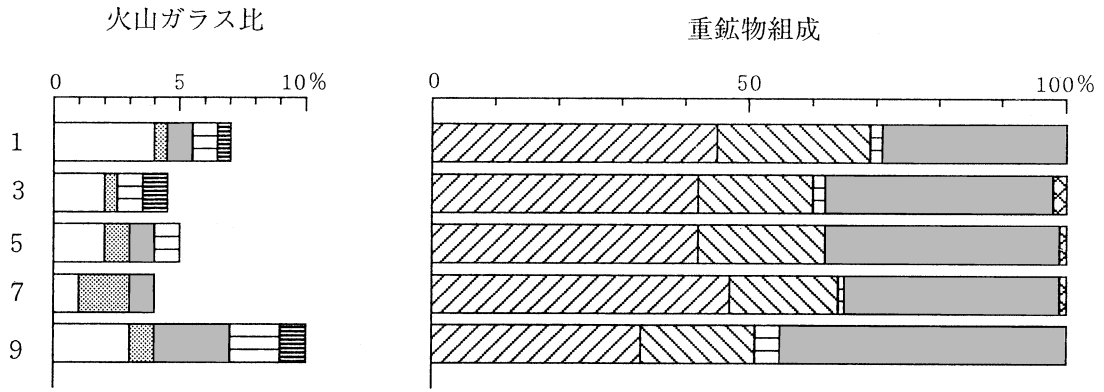


図11 38南調査区深掘トレンチ第2地点のテフラ組成ダイヤグラム

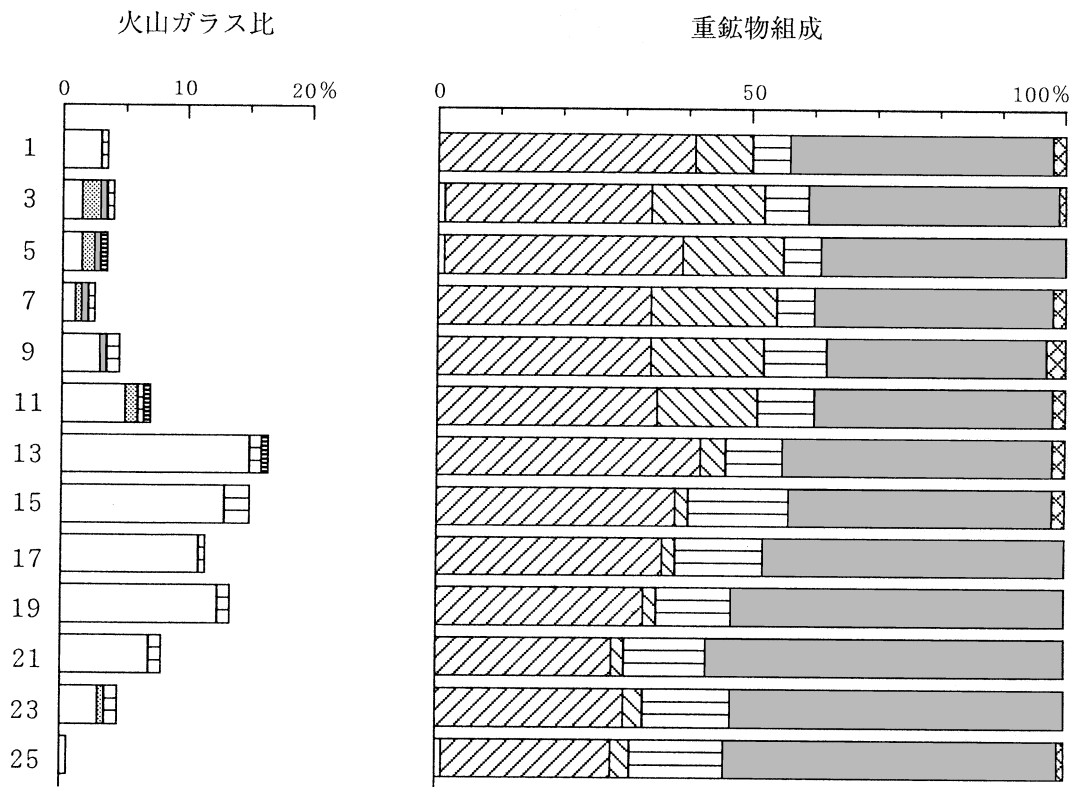


図2 岩瀬遺跡2-N6.6杭北トレンチのテフラ組成ダイヤグラム

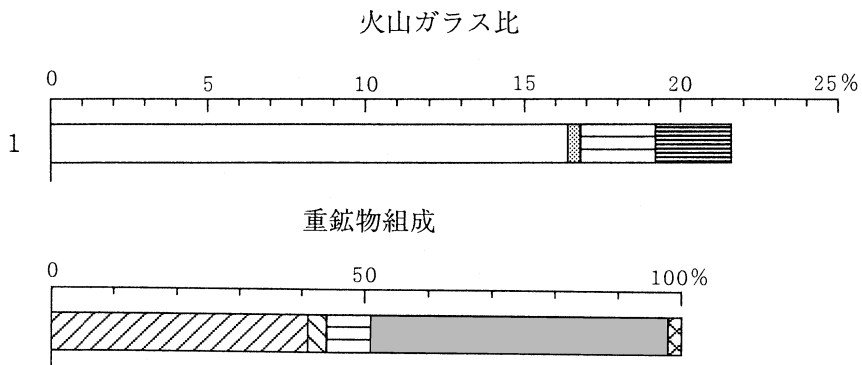
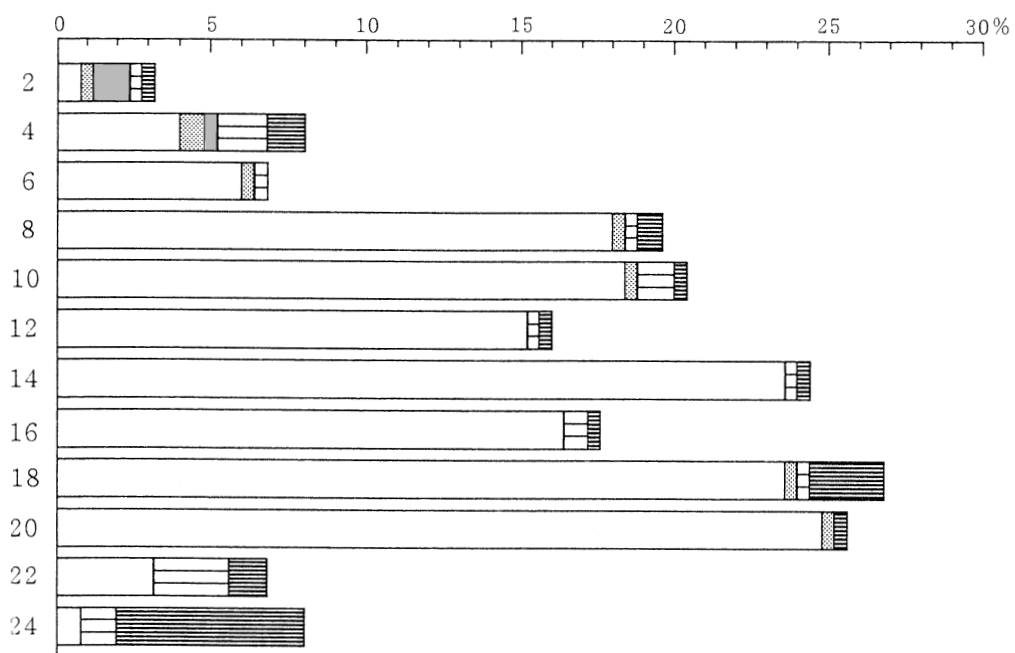


図2 迫の上遺跡のテフラ組成ダイヤグラム

火山ガラス比



- バブル型 (無色透明)
- バブル型 (淡褐色)
- バブル型 (褐色)
- 中間型
- 軽石型

- カンラン石
- 単斜輝石
- 黒雲母
- その他

- 斜方輝石
- 角閃石
- 磁鉄鉱

重鉱物組成

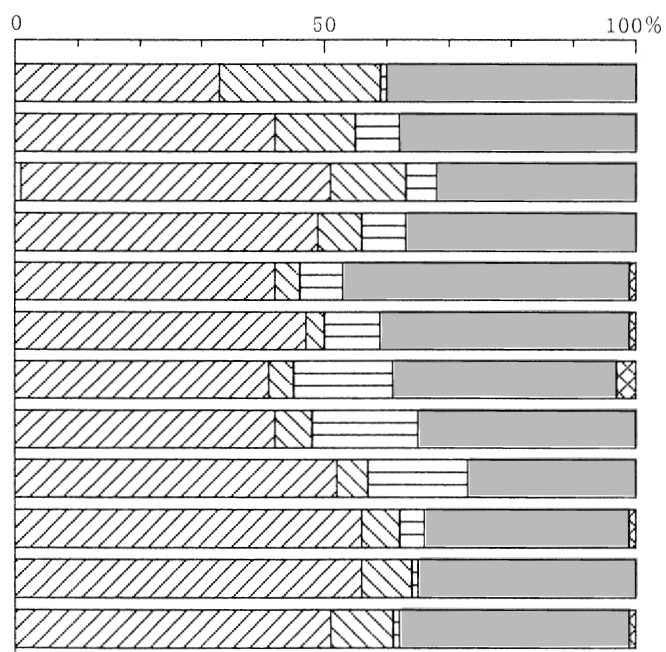


図1 辛川免許センター予定地のテフラ組成ダイヤグラム

第5章 考察・まとめ

第1節 36区 層検出の遺跡

石の本遺跡群で遺構が確認された層位は、層の縄文時代後～晩期以降の時代、層の縄文時代後～晩期、層の縄文時代早期、層の後期旧石器時代AT降灰前後、層の後期旧石器時代初頭、と遺構が層を除く、～層全てにわたっていた。このうち層は、54区・55区でさらに細分され、層位的に良好な遺跡の調査が行われた。そこでは、実際の確認面は更に増えて7時期以上数えられる。各調査区では、旧地形によって様々な土層堆積が示されており、細分するとより詳細な変遷が迎えられるだろう。特に遺存状態が良好な集落遺跡として、縄文時代後～晩期の住居跡群、後期旧石器時代の始良丹沢火山灰降灰前の石器群が上げられる。これらは様々な分析から、それぞれの変遷について細かく語る事ができよう。その成果の詳細は、石の本遺跡群・を参照されたい。

本報告書で取り上げた調査報告のなかでは、このように詳細な変遷が迎えられる調査成果として、36区層検出の縄文時代早期の遺跡について考察したい。以下、36区層の調査報告に若干の分析を加え、集落の時間的変遷を辿ることとする。あわせて検出された遺構・遺物の性格についても述べる。

36区の遺構・遺物が検出された層位は、概ね層下層から層上面までである。このうち、遺構の確認面は層上層であり、b層のアカホヤ火山灰を含む土層に覆われていた。本来ならば、b層に覆われた下層の遺物は完全に密閉され、当時の状況そのままに把握できる。しかしながら、熊本市周辺のアカホヤ火山灰の堆積は二次的なものと考えられており、地点によっては縄文時代後～晩期以降の遺物を含んでいる。

36区では、この基本層序層が上層・下層の2枚に分層され、縄文時代後～晩期の遺物包含層は層上層と見られる。早期の遺物・集石は層上層を基底面にしており、層下層にパックされたような状態にある。但し、層下層が一次堆積のアカホヤ火山灰とは認定されておらず、層直上にある遺構・遺物が原位置を完全に保っているとは断言できない。

しかしながら、層下層直下の遺構・遺物の残り方は、一定のまとまりを持っている。そのまとまりも、層上層を掘り込んだ焼土坑等の遺構・遺物の出土状況との機能的な関連性を窺わせる。例えば、角礫集中域2と焼土坑1のあり方である。単なる遺構の重なりだけならば、後世の見かけ上の分布と捉えられる。ところが、焼土坑1の床面で検出された轟A式土器は、やや焼土坑から西よりにずれて分布する放射状の拡がりを見せる角礫集中域1の周辺からも検出されている。さらにこの轟A式土器は層上層にその出土するピークが見られる。ここで検出された土器は比較的良好な接合状況を示し、完形復元が可能になっている(胴部付近の接合例が少ないことについては別に説明する)。以上の状況から、この報告の時点では得られた成果に対して、後世の攪乱の影響をほとんど受けていないものとして評価したい。但し、層下層そのものが再堆積を受けていない良好なアカホヤ堆積層なのか、周辺地域の調査例から今後も検討が必要であろう。

ここから出土する土器群は、塞ノ神式土器と、轟A式土器の二型式である。この二型式の分布と遺構との関連に焦点をあて、二型式間の遺跡の時間的変遷を抽出してみる。

塞ノ神式土器の分布と轟A式土器の分布域を見ても (Fig.51・54)。第3章第4節第2項で述べたように、両型式は層上層という同一層に出土ピークが見出されるが、その出土範囲が大きく異なる。

轟A式土器は、焼土坑1周辺にその分布の集中域がみられ、接合によって完形に復元が成されている。先ほども述べたように、その分布から有機的な関連を持つ遺構としては、焼土坑1・角礫集中域2が抽出できる (Fig.91)。焼土坑2・角礫集中域1には周辺に轟A式土器の目立った集中域は見出せなかったが、その

形態から考えて、轟A式土器の時期として想定しておきたい。

また、焼土坑1については床面に小規模な柱穴を持ち、床面から垂直に立ち上がる壁面を持つこと。床面が水平に整形されていることから、竪穴住居跡の可能性も指摘しておきたい。焼土坑としての利用は、住居として利用された後のことであろう。

さらに一方の塞ノ神式土器についても見てみる。塞ノ神式土器は、調査区全域にこれと言った出土地点の集中域を持たず、接合資料も少なく、完形資料も得られなかった。但し、塞ノ神式土器の出土層位も層下層から層上層にあり、少なくとも縄文時代早期より後世の攪乱により失われているとはいえない。また、出土状況は一見散漫な分布を示すが、出土地点が他の遺構・遺物とほとんど重ならない空白の範囲として角礫集中域1・2が検出された一帯、及び焼土坑1・2が検出された付近を上げることができる。

このような、塞ノ神式土器と同様に、特にまとまりを持たずに広がる遺物に、円礫の分布が考えられる(Fig.40)。さらに塞ノ神式土器と同様に、焼土坑1・2、角礫集中域1・2と分布が重ならない遺構として集石1～13が考えられる。このうち、集石6は焼土坑2と切り合い関係が見られ、集石6 焼土坑2という時間的な変遷が成り立つ。

このことから、塞ノ神式土器と相関関係のある遺構・遺物は、集石・円礫と考えられる。この仮説をもとに集石間、集石・円礫間で得られた接合関係を図示し、あわせて塞ノ神式土器の分布を重ねて見る(Fig.92)。

そうすると、非常に錯綜した接合関係が見出される。特に掘り込みを持たない集石は周辺の円礫と接合関係が見出され、その移動範囲はほぼ塞ノ神式土器の出土範囲を覆いながら、行き交うように示されている。一定のまとまりを持ち、錯綜した接合関係を持たない集石3・6・9・10・11・12・13でも、集石6・9・11・12は、その範囲内で接合関係が見られ、移動した距離的な問題でしかなく、錯綜した分布を示す一連の集石・円礫と同種の拡がりと捉えられる。

残る集石3・10・13は比較的円礫が重なりあい、錯綜した様子が見られず、非常に纏まった状態である。この3基は、角礫集中域・焼土坑・轟A式土器の分布から外れていることも指摘できる。

以上のことから、指摘される見解を要約する。

- ・轟A式土器に伴う遺構・遺物として、角礫集中域・焼土坑が上げられる。
- ・塞ノ神式土器に伴う遺構・遺物として、円礫・集石（掘り込みがほとんど見られず、構成する礫を再利用している）が上げられる。
- ・その時間的な変遷は、塞ノ神式土器及び関連遺構・遺物 轟A式土器及び関連遺構と考えられ、塞ノ神式土器期の遺構・遺物が、轟A式土器の段階に攪乱を受け、比較的生活痕跡を端的に示す状況で遺棄された後、アカホヤ火山灰の降灰が想定できる。

筆者の管見する限り、県内での轟A式の完形資料は得られていない。最近隣県の大分・宮崎・鹿児島では、関係を示す好例が多く報告されており比較資料として注目される。また、検出された遺構も、轟A式土器に伴う遺構としてはおそらく県内で最初の事例であろう。その使用を想定するにあたって、轟A式の器形的な特徴、礫の利用など様々な考察が可能であろう。大分県直入郡荻町の「右京西遺跡」で高橋信武氏が指摘されているように、土器底部にはことごとく灰が付着している。同一型式が多く出土した10・11・13区でも同様である。平底でありながらも、事実上、尖底と大差ない水平に面取り整形を行わない不安定な底部形態である理由も、この事例から述べる事が可能となるだろう。さらに集石が検出されていない理由にも言及できよう。また、同様に指摘されている塞ノ神式土器の安定した、上げ底気味の底部形態を持つ器形の機能的な推定も指摘できるだろう。

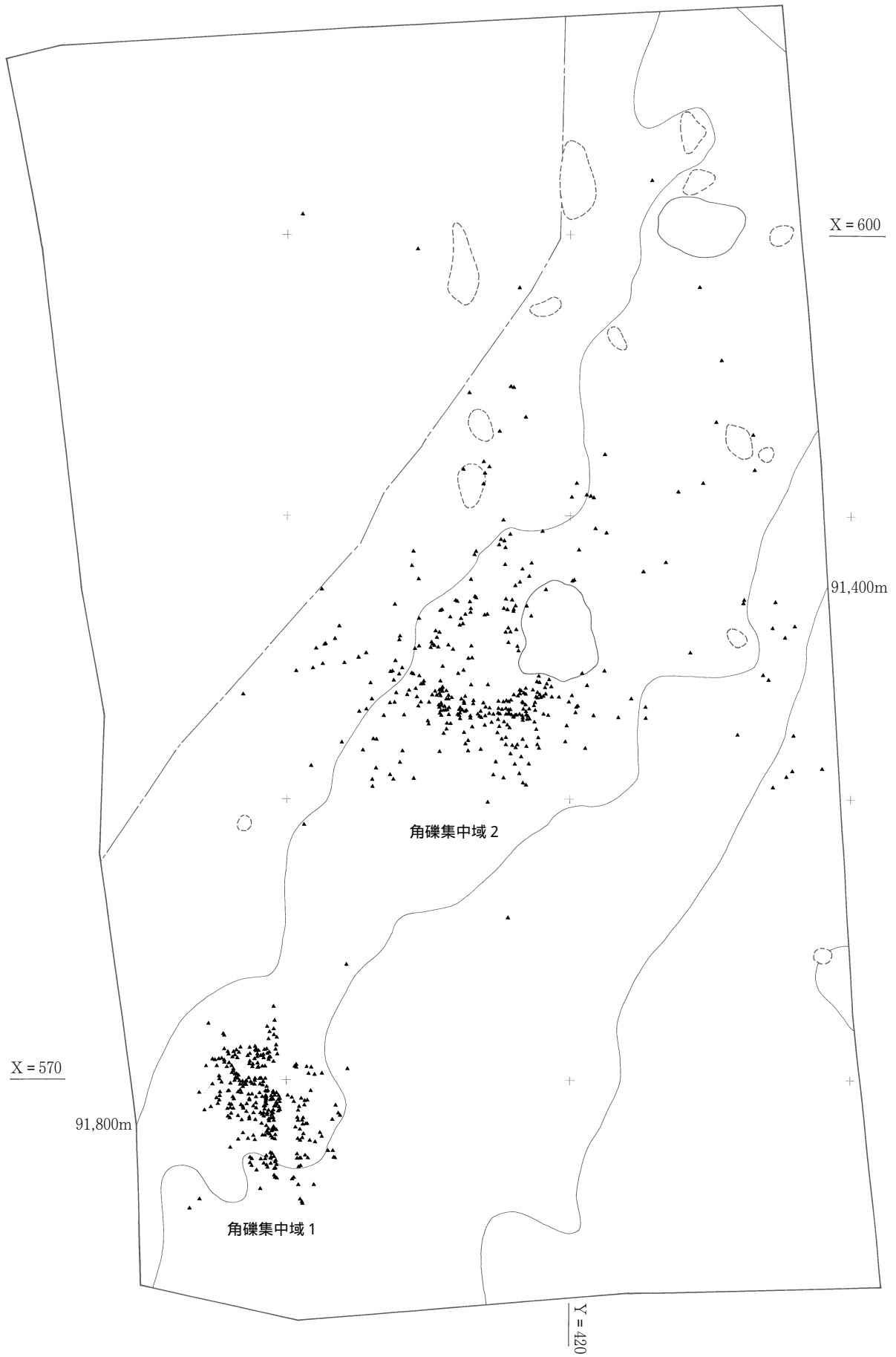


Fig.90 36区 層角礫出土分布図

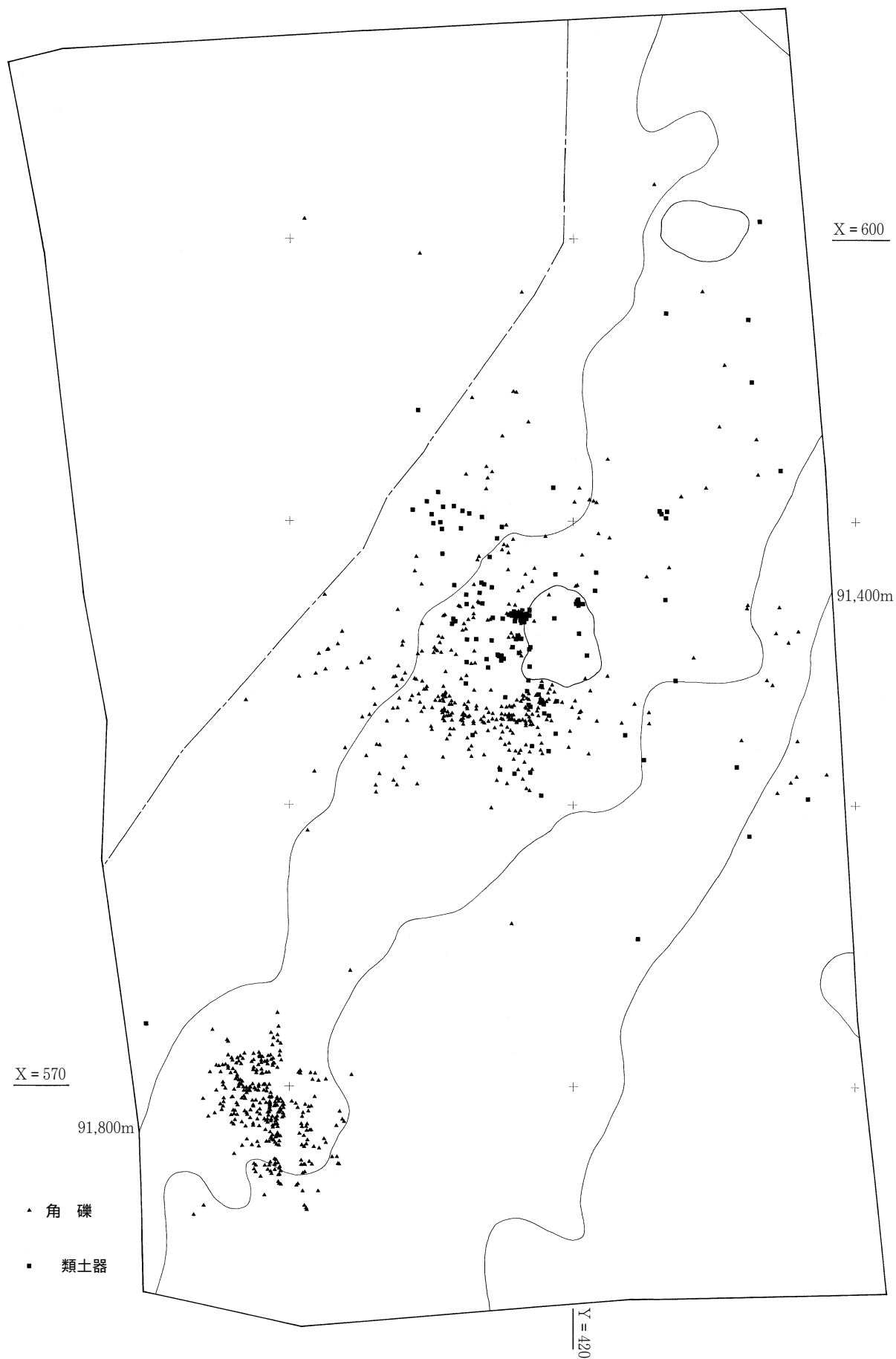


Fig.91 36区 層主要遺構・遺物分布図(1)

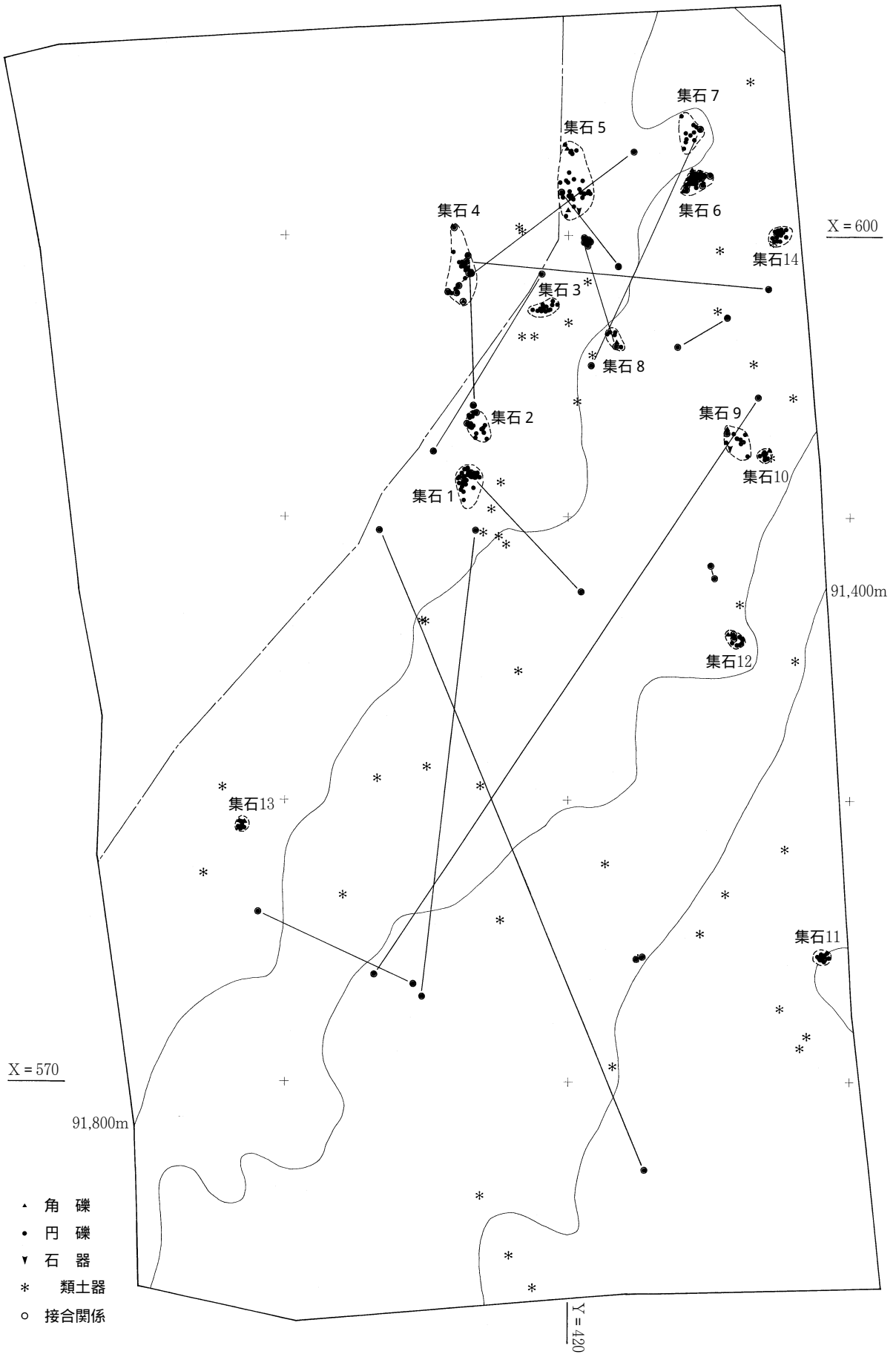


Fig.92 36区 層主要遺構・遺物分布図(2)

轟A式土器については、

・底部への灰の付着の指摘とあわせ、底部から口縁部にかけて膨らみ始める胴部付近が最も赤変して、熱を受けていた部分と考えられること。

・口縁部に内容物がふきこぼれたことによって炭化物が付着する事例が多く見られること。

・尖底もしくは自立できない平底を持つ一方で、焼土が詰まった土坑が伴い、土坑から掻きだされたように周辺に円礫を全く含まない、角礫のみの分布がみられること。

・土器片が土坑内にのこされること。

・胴部付近の接合資料が非常に少ない割に、底部付近・口縁部の良好な接合資料が多いこと。

以上の指摘ができよう。それらを説明する轟A式土器の使用例として、掘り込まれた土坑に土器を据えたあと、灰・礫によって倒れないよう安定させ、その上に燃焼させる材をならべ、煮沸させていたのではないだろうか。使用後は、焼土が出来た土坑から礫を掻きだし、土器の内容物を取り出したのではないだろうか。熱が最も当たる胴部は赤く二次焼成を受け、脆く崩れやすくなって、結果的に遺存することが少なかっただろう。轟A式の完形資料の少なさも、こうした使用想定から説明できよう。

この他、石の本遺跡群で遺構が検出され、轟A式土器が纏まって出土した調査区は17区・13区が上げられる。焼土の詰まった土坑は、両調査区ともに検出されているが17区は、従来炉穴と呼称されるかなり性格の異なる遺構である。但し、この調査区では「罫山」から流れ込んだ角礫が大量に検出されている (Fig.94)。その出土範囲は、円礫や他の石器の出土範囲とほぼ重なっている。地形的な要因があるので断言できないが、角礫の利用は指摘できそうである。現地形では削平を受けているが、供給源である「罫山」の麓に36区のような施設は想定できないだろうか。

13区では形態上、酷似した焼土坑にSX - 01が上げられる。SX - 03も同様な事例として指摘できそうである。角礫・円礫も多く出土している。今回の報告では分布図を提示できていない。また、礫接合も行っていないので、熱によって破碎された角礫があるかどうかについても述べる事が出来ない。層位的な事実から、13区の遺構を縄文時代早期とは断定できないが、36区と同様な検証を加え、比較資料とすることができるであろう。

塞ノ神式土器については、平底の土器を据えられるよう円礫を選択的に集めており、円礫を敷き詰めた上に土器を置くとき、上げ底気味の底部がより安定して据えられることに関連するのではないだろうか。今回検出された集石は掘り込みがほとんどみられず、焼土・炭化物も希薄である。実際に煮炊きを行ったのか、それはどのような施設であったかは、まだ検討の余地があるだろう。

時期的な変遷としては、遺構・遺物の分布から、塞ノ神式土器から轟A式土器への変遷を見出すにいたった。その型式学的な変遷はすでに案が提示されているが、安定した平底から不安定な平底ないし尖底・丸底土器へ変化する機能的な側面についてはこれまで検討されにくいことであった。遺構の検出例とこれまで出土した土器の底部形態・胴部の色調などの観察と合わせ、実験による検証が望まれる。

以上、得られた事実から縄文時代早期の集石 (又は礫群) の利用形態の差について述べる。

塞ノ神式土器と轟A式土器に伴う集石 (又は礫群) の形態的な差異は、土器を据えるか、周囲に巡らし安定させるかという視点から、それぞれ角礫・円礫 (角礫も一部混じる) というように、利用する石材が異なる。塞ノ神式土器に伴う集石を詳細にみると、まるで水平な面が利用できるように礫が水平な面に平行して剥落しているものが見られる。偶発的なものを利用したのか、意図的かは、利用される石材の質もあって判断が難しい。またどちらも土坑状の掘り込み面は、塞ノ神式土器のそれは浅く、掘り込みのないものもある。轟A式土器の場合は、付近に2m四方の土坑が存在するようである。これに対し、39・40区の押型文土器の

時期と考えられる集石遺構を比較すると、しっかりした土坑状の掘り込みに、円礫・角礫を敷き詰めたように置かれている。竈A式土器と塞ノ神式土器の利用形態を考えたとき、その底部形態によって利用のされ方は大きく変わるようであり（或いは、煮炊きする対象が異なるのか）、39・40区の押型文土器の場合は、尖底・丸底であったようである。

参考文献

1986 右京西遺跡 荻町教育委員会

1993 宇佐別府道路・日出ジャンクション関係埋蔵文化財調査報告書 エゴノクチ遺跡 大分県教育委員会

2000 九州の縄文住居 熊本県 九州縄文研究会



Fig.93 石の本遺跡群 層地形推定図 S : 1 / 5000

第2節 石の本遺跡群の変遷

石の本遺跡群で遺構が検出される確認面は、層の縄文時代後～晩期以降の時代、層の縄文時代後～晩期、層の縄文時代早期、層の後期旧石器時代A以降前後、層の後期旧石器時代初頭、と概ね5時期以上と既に述べた。今回報告した各時期を中心に取り上げ、縄文時代各時期にいたる遺跡の変遷過程を概観する。

まず、石の本遺跡群の調査によって得られた成果から、各調査区の標高を推定ラインで結びながら、旧地形の復元を想定した (Fig.93)。

旧地形の景観を理解するのに利用される各調査区の地形図は、最も遺構の検出例が多かった、縄文時代後～晩期の地形に近いと考えられる層中の等高線、次いで検出例が多かった、縄文時代早期以降の地形に近いと考えられる層中の等高線がある。旧石器時代の調査は、調査区全域で行われてはいないので旧地形の把握は遺跡群全体では難しい。

縄文時代後～晩期以降の旧地形は石の本遺跡群で詳細が報告されるので参照されたい。図示した地形推定図は、縄文時代早期以後の地形の変化を、仮に層中の等高線から作成したものである。

本文中でも部分的に各調査区の立地を説明するところで述べているが、石の本遺跡群の範囲は、古生代を基盤とする小山山の麓、さらに更新世砂礫層・阿蘇凝灰岩が堆積する託麻台地の一端にある。この託麻台地の一端である小山山の東側丘陵は、緩やかに南側に傾斜していくつもの小丘陵を形成している。

石の本遺跡群は、こうした山裾、丘陵に拡がり、さらに小さな谷と微高地によっていくつもの遺跡が散在している。遺跡群内でみられる大きな地形の起伏から説明すると、小山山の麓と託麻台地とを分ける比高差10mを測る段差、標高86m程の基盤層が露出していた「鏝山」と呼称される小丘陵、小山山の中腹を起源として、遺跡の東側の境と小山山の間に入る埋没谷が、特に遺跡の範囲に大きく影響を与えている。

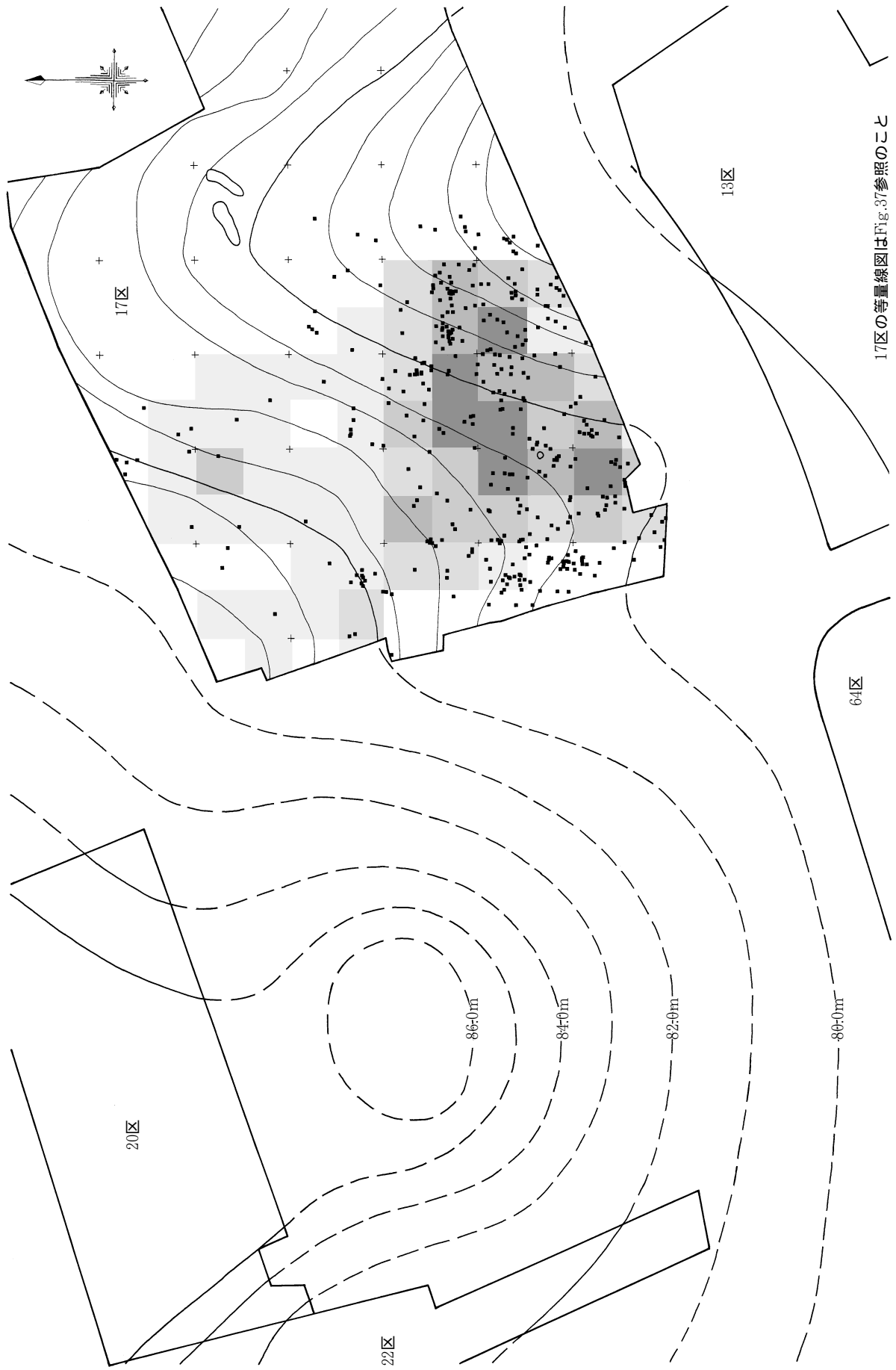
土層の堆積も、これらの範囲で大きくまとまりが見られる。特に基本層序層の堆積が地形の差の影響を良く残していると考えられる。

このうち、字石の本に代表される、小山山の麓一帯では地滑りとも土砂崩れとも判別のつかない泥流層が厚く層を覆っているのが確認された。その中でも54区・55区の一部では土層の不整合面も見られる。何れもどのような自然災害によるものなのか判別するには至っていない。このように様々な自然現象による痕跡を残す遺跡であるが、基本層序層以上の土層の残存状況は決して良好なものではない。遺物包含層中には、縄文時代早期の所産と見られる集石遺構等に使用された円礫の類が非常に多い。それに比べ、厚い泥流層によって覆われていた層は、土層の良好な堆積が見られた。具体的には a～gまでの各7枚の土層に細分できている。巨視的に見て暗色土と黄褐色土が交互に堆積した状況が観察できる。

山麓と台地の間は比高約10mの、段差があり託麻砂礫層が露出している。

一方、託麻砂礫層を基盤とする託麻台地上の各遺跡では、埋没谷中の遺跡と、丘陵上の遺跡で土層の堆積が大きく異なる。「石の本遺跡群」の土層図で示したように、丘陵上では層は概ね3～4枚に分けて分層できる。丘陵の上では「ニガ土」と地元で呼称する土層の堆積が見られる。

一方の埋没谷、Fig.97に代表される17区周辺から9区、8区東側、5区にかけては層相当層の堆積は見られるものの、ニガ土は見られず、むしろ層のクロボク層に近い土質である。層と8区で呼称した土層に覆われており、同調査区の丘陵から埋没谷にかけての土層から、ニガ土を形成していた本来の層が、何らかの自然現象により再堆積したものと見られる。



17区の等量線図はFig.37参照のこと

Fig.94 17区周辺 層地形図 S : 1 / 600

以下、土器分類ごとに検出された遺物・遺構から可能な限り、当時の生活の場を想定した。その多くは遺物包含層中の資料であるが、本遺跡群のように、一定の面積を調査したことにより流れ込んだ遺物の供給源をある程度解明できた。尚、記した地形図は、あくまで残存した層・層上での地形であり、該当する時期の生活面を示すものではない。しかしながらそこで見出された地形の変化が当時の生活の場、或いは遺跡の形成に大きく関わった要因として無視できないものと考え、参考までに掲載している。

生活の場として想定した範囲を破線で示している。矢印は、遺物包含層中に検出された土器の流れ込んだ方向を想定し、示している。

類土器とした押型文系の土器群の出土した調査区のうち、数量的に最も多く検出されたのは、字石の本と呼ばれた、52～56区である。前述したように遺跡の大半は攪乱を受け、その多くは小破片であり接合資料もほとんど得られなかった。その中でも多くの磨石・敲石の類が検出された55区がおそらく遺跡の中心であったと見られる。

この他、当該期の遺構が検出された39・40区の周辺が、生活の場と言える。50区は土器が伴っていないため、決定的な時期は不明である。

それ以外の範囲は、遺物包含層中で検出した土器の存在と地形から想定したものである。



Fig.95 類土器出土範囲図

類土器が検出された調査区で、当該期のものと考えられる遺構が検出された調査区は36区がある。この他、この時期の遺構として可能性が残るものに17区の炉穴、SX - 08といった土坑が挙げられる。

生活の場として36区周辺と、鏑山周辺の南側の裾野が考えられる。この他、遺物包含層中に検出された土器と地形から想定した生活の場が4つほど考えられる。特に55区周辺、50区から57区の北西側に1類土器の時期と同じように、遺跡の中心が想定されるがどちらも攪乱や削平を受けており状況が全くつかめなかった。北東隅の調査区67区の周辺は、大規模な土取りが行われてしまった後に表採された土器から想定した範囲である。大量に遺物が検出された調査区のほとんどが埋没谷の中に位置し、土器等の流れ込みが想定されるが、17区・13区のように谷の最も窪んだ地点にも遺構が検出される場合もあり、単丘陵の末端にのみ、生活の場が想定されるということでもない。行った作業による差なのか、季節的な制約によるものなのか、今後の調査時に注意が必要であろう。

又、類土器については、出土量・地点共に散発的であり、範囲を示すまでにはいたらなかった。



Fig.96 類土器出土範囲図

類土器が検出された調査区を見ると、
 ・ 類土器の場合と異なる点として55区周辺の標高100m付近や、50区から57区の北西側での土器の検出が見られないことが挙げられる。遺構が検出された36区周辺、17区周辺、削平を受けた67区周辺に生活の場と考えられ、遺物包含層中に土器が検出される調査区も比較的まとまりを見せる。そうしたことから、土器の接合例も
 ・ 類土器に比べ比較的多く得られている。前述した標高100mを超える範囲を除けば、ほぼ 類土器で想定した生活の場と合致し、標高90～85mの範囲に収まる。

36区周辺・17区周辺の立地をみると、南東方向の斜面にあたる。このような地形的な条件も付加して、当該期の遺構の性格を考える視点になるのか、 類土器の時期の遺構は決して多くないが、注意すべきであろう。



Fig.97 類土器出土範囲図

類土器の検出された調査区は更に減少する。類土器に至っては13区のみを検出であり、ほぼ1個体の検出のみである。標高90m以上の調査区からは、遺物が全く検出されておらず、より低地での生活の場が想定される。

但し、検出された調査区は限定されるものの、類土器の場合と異なり検出された土器の出土量は少なく、接合資料も決して多くは無い。生活の場として64区の一帯等が考えられる。



Fig.98 類土器出土範囲図

類土器が検出された調査区は、さらに南の標高75m付近にまで下る。土器が検出された調査区は、類土器の場合と同様、ごく限られた範囲である。類土器と検出された資料数、接合例が似ており、目立った数や接合資料が得られていない。また類土器にも言えることだが、類・類土器の底部若しくは底部付近の胴部片が全く検出されていない。検出量の少なさ、出土地点が限定されることと合わせ、何らかの使用を示す共通した要素とも考えられるが、本遺跡群のみでの状況であり事実を指摘するに留めたい。



Fig.99 類土器出土範囲図

・ 類土器が検出された調査区を見ると、標高100m付近の調査区を除き、広範囲に見られる。但しその量は少なく、出土状況も散漫である。遺構が検出された調査区も皆無であり、遺物包含層中で検出されても数点に限られる事から、流れ込んだ土器の供給源の想定が困難である。比較的纏まった出土例のあった17区周辺の状況から、鏝山周辺に生活の場が想定できる程度である。

尚、最も多く検出した黒色磨研土器を除くこれ以外の土器については、その検出例が更に少なく遺物の拡がりも想定するのも不可能であった。このような土器の検出の有無のみで生活の場を想定するのは自ずと限界があるが、摩消縄文土器の一群は、図示した土器以外皆無と言ってよく、刻目突帯文土器の出土例も全出土遺物中、1点も検出されなかったことを付記しておく。



Fig.100 ・ 類土器出土範囲図

黒色磨研土器の出土量は、本遺跡群中最も多く質的にも充実し、当該期の遺構検出数は九州でも稀有な存在である。その詳細は別稿に譲ることとしているため、詳細な言及は避ける。

但し、石の本遺跡群で検出された縄文時代の各時期の変遷を説明していることから、当該期の遺構が検出された調査区のみを示しておく。時期的には縄文後期末から晩期前半と考えられ、複数の時期が設定できるであろう。遺構は主に住居跡と土器埋設遺構から成っており、やはり複数のバリエーションが存在する。遺構の拡がりは、巨視的にみて42・43区周辺を中心とする拡がり、15区を中心とする拡がりが見られる。30区周辺でも住居跡が検出されているが、49区と30区の間は未調査区域であり、遺構の空白を示すものではない。これに対し、30区と15区は埋没谷を挟み立地が異なる。別時期の可能性がある二つ以上の遺跡の拡がり、と捉えられよう。この他、55区等標高100m付近でも遺構は検出されていないが、こちらは攪乱及び削平による空白部である。粗製深鉢などの接合資料も見られ、遺跡が広がっていたと推察される。

石の本遺跡群で検出された集落跡は、この時期をピークとしてその後急激に減少する。弥生時代は1区で住居跡が1軒検出された他、古墳時代に55区周辺で一定の隆盛を見る。しかしながらその後は一部の利用を除き、近代に至るまで大規模な生活の場とならず、しだいに耕地として利用されていったようである。

参考文献 2000 九州の縄文住居 熊本県 九州縄文研究会



Fig.101 縄文時代後期後半～晩期前半遺構範囲図

第3節 石の本遺跡群周辺の層位

本遺跡群の調査当初、調査者の（少なくとも筆者の）基本層序への理解、特に鍵層となるアカホヤ火山灰、始良Tn火山灰の認識は、過去の調査報告を解釈し肉眼観察によりあてはめていくという手法に終始していた。それは過去の調査報告が理化学的な分析から層位の把握を進め、各層序に各種のテフラを検出する一方で、各層位ごとに石器群を捉えていく極めて緻密な作業に裏付けられていると、確信していたためである。

特に、始良Tn火山灰下の黒色帯についてはある種の鍵層とも言うべき層位として漠然と捉えていた。

しかしながら、火山灰の肉眼観察の危うさや、地域、事によると地点によって様々な土層堆積が見られること。一口に黒色帯と言っても、暗色の土層はいくつもみられること。阿蘇を始めとする多くの火山が知られる熊本の地では、噴出起源も不明な火山灰が多くあり、その都度検証も進める必要があること、と言った多くの指摘があった。特に石の本遺跡群8区での層の調査以後は、上層である層中の堆積の把握が必然となった。これを契機に、平成6年度の後半から平成9年度にかけて、特に層以下の旧石器時代の遺跡に焦点をあてテフラ分析を行った。

当初は、遺跡内のしかもテフラの検出予想される土層のみの分析であった。しかしながらこの手法では、テフラの検出が出来るのみで、層位的にピークも見出せず、当然のことながら肉眼で認識できないテフラの分析までは不可能である。そこで、数度に渡って遺跡群内の層序と周辺の露頭、他の遺跡の層位比較を試みながら、土層の連続したサンプリングを分析者に行ってもらったこととした。

想定されるローカルテフラの一つに阿蘇起源が考えられる事や、良好な露頭が多いこと、大観峰遺跡・象ヶ鼻遺跡など過去にテフラ分析を行っている地点があること、平成9年には小国町で耳切遺跡が調査中であったことなどから、特に石の本遺跡群から東側に範囲を広げ分析を行った。また、遺跡群内の調査が進むにつれ、平成7年度以降当初から指摘のあった層の堆積状況の異なる調査区や、暗色帯が複数見られる調査区での旧石器時代の遺跡調査も進められ、絶えずテフラ分析を始めとする理化学的な分析を加えていった。

まず再考を余儀なくされたのは、石の本遺跡群で基本層序層下にあると考えていた鳥栖ローム、八女粘土の呼称である。遺跡群内では一次堆積が認められず、あるならばこれらを含むの二次堆積層であり、結果として始良Tn火山灰と阿蘇の間に未検出の火山灰が検出された。故に層の旧石器時代の石器群は、層位的に始良Tn火山灰と、この石の本軽石と呼称する層の間と限定できた。そこで、この軽石層の拡がりや噴出起源、年代の把握を行うことに努めた。益城町、大津町の地点では検出できたものの、阿蘇北外輪山周辺では未確認であり今後も分析を行う必要を感じた。資料採取時、肉眼観察では一の宮町、阿蘇町でも似た軽石層は見られたが、分析結果からは似て非なるものであり肉眼観察のみの層位の把握の危険性も再認識できた。また、理化学的な分析以前に、暗色帯が地点によって複数に検出され、しかも各層位に異なる旧石器時代の石器群が検出される事から、鍵層となるのはテフラ等、短期間に堆積した火山性噴出物をもってしか成しえない事も確認した。

Fig.102は、こうした分析結果をまとめたものであるが、第4章の自然科学分析の報告にも触れているように、大津スコリア、石の本軽石の特定をはじめ、なお多くの調査例・分析結果が必要である。筆者自身に対する訓戒をこめて、この調査結果が安易な肉眼観察からの対比により一人歩きしないことを切に望みたい。

参考文献

1984 曲野遺跡 熊本県文化財調査報告第65集 熊本県教育委員会

1986 熊本県旧石器時代調査報告書 熊本県文化財調査報告第81集 熊本県教育委員会

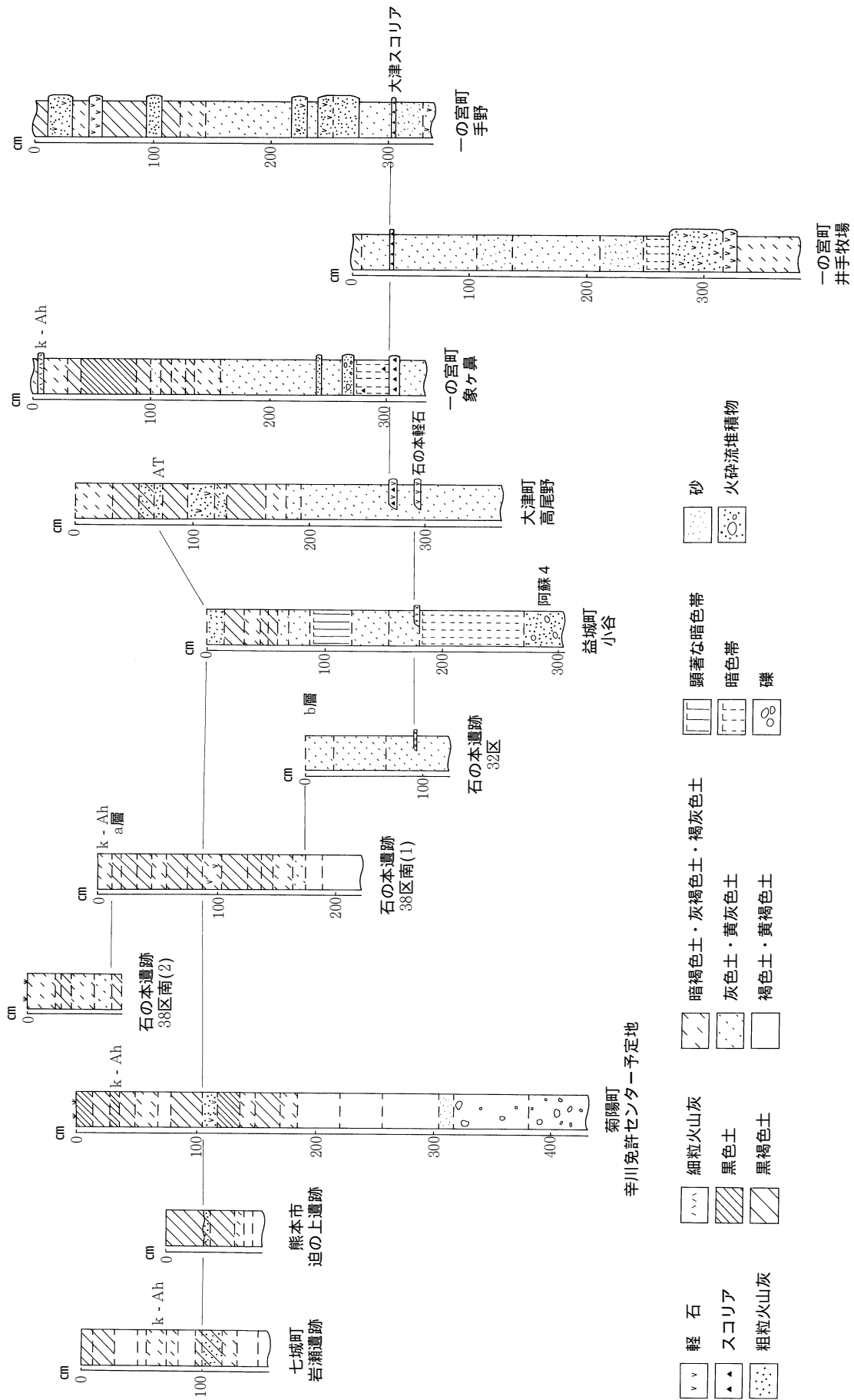


Fig.102 対比土層柱状図

觀 察 表

Fig.	図版番号	調査区	層位	類	器形	部位	径	胎土	備考
17	27	39		類	深鉢	□縁部			
17	28	39		類	深鉢	胴部			
17	29	39		類	深鉢	□縁部			
17	30	40		類	深鉢	□縁部			
17	31	40	c	類	深鉢	□縁部			
17	32	40	b	類	深鉢	底部			
17	33	40	c	類	深鉢	□縁部			
17	34	40	b	類	深鉢	□縁部			
18	35	40	b	類	深鉢	□縁部			
18	36	40		類	深鉢	□縁部			
18	37	40	c	類	深鉢	□縁部			
18	38	40		類	深鉢	□縁部			
18	39	40	c	類	深鉢	□縁部			
18	40	40	a	類	深鉢	□縁部			
18	41	40	b・a	類	深鉢	□縁部			
28	56	17		類	深鉢	□縁～胴部			SX - 08出土
29	57	17		類	深鉢	□縁～胴部	□(32.6)cm胴(35.1)cm器高37.5cm		
30	58	17		類	深鉢	□縁部			
30	59	17		類	深鉢	□縁部			
30	60	17		類	深鉢	底部			
30	61	17		類	深鉢	胴部	胴(10.8)cm		
30	62	17		類	深鉢	底部	底(16.3)cm		
31	63	17		類	深鉢	□縁部			
31	64	17		類	深鉢	□縁部			
31	65	17		類	深鉢	□縁部			
31	66	17		類	深鉢	頸部			
31	67	13		類	深鉢	□縁部	□(29.6)cm		
31	68	13・17		類	深鉢	□縁～胴部	□(26.5)cm		隣接する調査区間での接合
48	78	36	下下	類	深鉢	□縁部			
50	79	36	下下	類	深鉢	□縁部			
50	80	36		類	深鉢	□縁部			
50	81	36	下	類	深鉢	□縁部			
50	82	36		類	深鉢	頸部			
50	83	36	上	類	深鉢	胴部			
52	84	36		類	深鉢	完形	□(38.5)cm底(4.8)cm器高41.7cm		
53	85	36	下	類	深鉢	□縁部	□(44.4)cm		焼土坑1出土
53	86	36		類	深鉢	□縁部	□(40.4)cm		
53	87	36		類	深鉢	胴部			
53	88	36	下下	類	深鉢	底部	底(5.4)cm		
53	89	36	下下	類	深鉢	胴部			種子状の圧痕 150～155まで同一個体
68	150	5		類	深鉢	□縁部			
68	151	5		類	深鉢	□縁部			
68	152	5		類	深鉢	□縁部			
69	153	5		類	深鉢	□縁部			
69	154	5		類	深鉢	□縁部			
69	155	5		類	深鉢	□縁部			
69	156	5		類	深鉢	□縁部	□(23.4)cm		
69	157	5		類	深鉢	□縁部			
69	158	5		類	深鉢	□縁部			
70	159	5		焼成粘土塊					指頭と思われる凹みあり,SX 01出土
70	160	5		焼成粘土塊					板目状の圧痕あり,SX-01出土
73	161	11	上・a	類	深鉢	□縁～胴部			
73	162	11・13		類	深鉢	□縁部			隣接する調査区間での接合
73	163	13		類	深鉢	□縁部			
73	164	13		類	深鉢	□縁部			
73	165	13		類	深鉢	□縁部			
73	166	11	上	類	深鉢	□縁部			
74	167	13		類	深鉢	□縁部			
74	168	11		類	深鉢	□縁部			
74	169	13		類	深鉢	□縁部			
74	170	11・13		類	深鉢	□縁部			隣接する調査区間での接合
74	171	13		類	深鉢	□縁部			

Tab.6 土器観察表(1)

第3節 石の本遺跡群周辺の層位

Fig.	図版番号	調査区	層位	類	器形	部位	径	胎土	備考
74	172	13		類	深鉢	□縁部			Fig.76 - 202とは同一個体
74	173	13		類	深鉢	□縁部			
74	174	13		類	深鉢	□縁部			
74	175	13		類	深鉢	□縁部			
74	176	13		類	深鉢	□縁部			
74	177	13		類	深鉢	□縁部			
74	178	13		類	深鉢	□縁部			
75	179	10		類	深鉢	□縁部			
75	180	10		類	深鉢	□縁部			
75	181	10		類	深鉢	□縁部			
75	182	11		類	深鉢	□縁部			
75	183	11		類	深鉢	□縁部			
75	184	11		類	深鉢	□縁部			
75	185	11		類	深鉢	□縁部			
75	186	11		類	深鉢	□縁部			
75	187	13		類	深鉢	□縁部			
75	188	13		類	深鉢	□縁部			
75	189	13		類	深鉢	□縁部			
75	190	13		類	深鉢	□縁部			
75	191	13		類	深鉢	□縁部			
75	192	13		類	深鉢	□縁部			
75	193	13		類	深鉢	□縁部			
75	194	13		類	深鉢	□縁部			
75	195	13		類	深鉢	□縁部			
75	196	13		類	深鉢	□縁部			
75	197	13		類	深鉢	□縁部			
75	198	11・13		類	深鉢	□縁部		隣接する調査区間での接合	
75	199	13		類	深鉢	□縁部			
76	200	13		類	深鉢	胴部		Fig.74 - 173とは同一個体	
76	201	13		類	深鉢	底部	底(4.9)cm		
76	202	13		類	深鉢	胴部			
76	203	13		類	深鉢	底部	底(1.8)cm		
76	204	13		類	深鉢	底部	底(4.2)cm		
76	205	11		類	深鉢	底部			
76	206	11		類	深鉢	底部	底(4.0)cm		
76	207	11		類	深鉢	底部	底(5.6)cm		
76	208	13		類	深鉢	底部	底(6.4)cm		
76	209	10		類	深鉢	底部	底(3.2)cm		
77	210	13		類	深鉢	底部	底(2.8)cm		
77	211	13		類	深鉢	底部	底(2.8)cm		
77	212	13		類	深鉢	底部	底(6.4)cm		
77	213	13		類	深鉢	底部	底(4.6)cm		
77	214	13		類	深鉢	底部	底(6.2)cm		
77	215	13		類	深鉢	底部	底(5.0)cm		
77	216	13		類	深鉢	底部	底(5.3)cm		
77	217	13		類	深鉢	底部	底(5.2)cm		
79	227	56		類	深鉢	□縁部			
79	228	56		類	深鉢	□縁部			
79	229	35		類	深鉢	□縁～胴部			
79	230	28	d	類	深鉢	底部			
79	231	35		類	深鉢	底部	底(5.4)cm		
79	232	23	下	類	深鉢	□縁部			
79	233	16	b	類	深鉢	□縁～胴部			
80	234	32	a	類	深鉢	□縁部			
80	235	67		類	深鉢	□縁～胴部	□(25.2)cm		
80	236	67		類	深鉢	底部	底(5.1)cm		
80	237	13		類	深鉢	□縁～胴部	□(27.4)cm		
81	238	64		類	深鉢	□縁部			
81	239	5		類	深鉢	□縁部			
81	240	5		類	深鉢	□縁部			
81	241	5		類	深鉢	□縁部			
81	242	64		類	深鉢	□縁～胴部			

Tab.7 土器観察表(2)

Fig.	図版番号	調査区	層位	類	器形	部位	径	胎土	備考
81	243	64		類	深鉢	□縁部	□(29.4)cm		
81	244	64		類	深鉢	□縁部			
81	245	64		類	深鉢	□縁～胴部	□(26.8)cm		
81	246	64		類	深鉢	□縁部			
82	247	13		類	深鉢	□縁部			
82	248	25南		類	深鉢	□縁～胴部	□(28.0)cm		
82	249	10		類	深鉢	□縁～胴部			
82	250	39		類	深鉢?	□縁部	□(30.4)cm	滑石	
83	251	49		類	深鉢	□縁～胴部		滑石	
83	252	64		類	深鉢	□縁部			
83	253	45		類	深鉢	□縁部	□(29.5)cm		
83	254	45		類	深鉢	□縁部			
83	255	31	a	類	深鉢	□縁部		滑石	
83	256	39		類	深鉢	胴部		滑石	
83	257	10		類	深鉢	□縁～胴部			
83	258	36	下	類	深鉢	胴部			
83	259	36	下	類	深鉢	胴部			
84	260	30	a	類	鉢	□縁～胴部	□(26.8)cm		
84	261	42	c	類	深鉢	胴部			
84	262	13		類	深鉢	□縁部	□(37.4)cm		
85	263	42		類	深鉢	□縁～胴部			
85	264	64		類	深鉢	□縁～胴部			

Tab.8 土器観察表(3)

第3節 石の本遺跡群周辺の層位

Fig.	図版番号	調査区	層位	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
3	1	38南		台形様石器	安山岩	3.20	3.00	1.20	9.86	
6	2	22	a	エンドスクレーパー	黒曜石	3.05	3.58	1.78	28.23	
6	3	22	a	楔形石器	黒曜石	2.05	1.90		3.31	接合資料
6	4	22	a	剥片	黒曜石	1.05	1.56	0.28	0.48	
6	5	22	b	石核	チャート	4.60	5.30		97.19	接合資料
6	6	22	a	剥片	チャート	1.70	3.60	1.40	6.14	接合資料
6	7	22	a	剥片	チャート	3.95	4.75	1.30	30.70	接合資料
7	8	20		ナイフ形石器	黒曜石	2.30	1.70	0.89	3.07	
7	9	20		剥片	黒曜石	1.55	1.46	0.37	1.03	
7	10	20		剥片	黒曜石	1.90	1.32	0.83	2.54	
7	11	20		ナイフ形石器	チャート	3.60	2.00	0.90	5.66	
7	12	20		剥片	黒曜石	1.28	1.15	0.40	0.51	
7	13	20		剥片	黒曜石	1.60	0.90	0.30	0.33	
7	14	20		ナイフ形石器	安山岩	3.80	2.05	0.70	4.80	
7	15	20		ナイフ形石器	黒曜石	2.95	1.80	0.75	3.22	
7	16	20	c	二次加工剥片	安山岩	2.63	1.51	0.67	3.19	
7	17	28		ナイフ形石器	黒曜石	2.68	1.60	1.00	2.13	
7	18	20		台形様石器	多孔質安山岩	2.02	2.55	0.82	3.51	
7	19	11		台形石器	チャート	3.20	2.90	0.50	6.69	
7	20	23		二次加工剥片	安山岩	6.25	4.40	1.10	9.80	
8	21	32		ナイフ形石器	チャート	3.72	1.70	0.65	5.77	
8	22	53		ナイフ形石器	チャート	4.25	2.00	0.70	4.76	
8	23	47	a	ナイフ形石器	チャート	4.88	1.71	1.05	6.80	
8	24	39	- 1	二次加工剥片	安山岩	3.15	3.51	1.10	8.95	
8	25	56		使用痕剥片	チャート	7.20	1.95	1.20	13.04	
8	26	53		石核	チャート	3.15	4.50	3.70	64.16	
19	42	40	A	石鏃	黒曜石	1.60	1.55	0.40	0.50	
19	43	40	A	石鏃	黒曜石	1.75	1.60	0.40	0.70	
19	44	40	A	石鏃	チャート	1.85	1.20		0.90	
19	45	40	A	石鏃	安山岩	1.65	1.45	0.40	0.30	
19	46	40	A	石鏃	安山岩	3.35	2.00	0.50	1.90	
19	47	39		石鏃	安山岩	1.50	1.65	0.40	0.66	
19	48	39		石鏃	安山岩	1.75	1.35	0.35	0.40	
19	49	39		石鏃	チャート	3.30	1.95	0.70	2.90	
19	50	39		石錘	?	4.40	5.00	1.60	44.34	
20	51	39	下	剥片	安山岩	9.35	7.95	1.90	95.00	
20	52	40	a	使用痕剥片	安山岩	3.20	5.00	0.80	12.90	
20	53	40	a	礫器	安山岩	10.10	8.10	2.40	175.60	
23	54	50		石鏃	黒曜石	2.90	2.15	0.45	1.81	
23	55	50		二次加工剥片	チャート	4.20	6.45	1.35	34.50	
34	69	17		石鏃	黒曜石	2.00	1.75	0.50	0.95	
34	70	17		スクレーパー	安山岩	4.00	3.40	0.95	14.20	
34	71	17		石匙	サヌカイト	2.80	5.30	0.60	8.90	
34	72	17		剥片	安山岩	4.10	5.00	1.60	32.00	
34	73	17		使用痕剥片	サヌカイト	5.65	6.15	1.00	29.20	
34	74	17		二次加工剥片	サヌカイト	4.50	8.70	1.00	39.10	
35	75	17		磨石	安山岩	10.40	10.10	3.00	549.00	
35	76	17		凹石	安山岩	14.60	6.20	3.90	398.00	
35	77	17		敲石	頁岩	8.50	6.50	4.20	294.00	磨石からの転用
56	90	36	上	磨石	安山岩	13.90	10.00	4.10	750.00	受熱あり
56	91	36	上	磨石	安山岩	18.10	11.50	5.90	1500.00	受熱あり
56	92	36	上	磨石	安山岩	13.80	15.15	4.10	900.00	受熱あり
56	93	36	上・下	磨石	安山岩	11.00	11.90	3.85	750.00	受熱あり
56	94	36	上	磨石	安山岩	18.20	14.10	6.10	1500.00	受熱あり
56	95	36	上	磨石	安山岩	11.65	9.10	1.90	381.07	受熱なし
56	96	36	上	磨石	安山岩	17.70	14.60	5.00	1700.00	受熱あり
56	97	36	上・下	磨石	安山岩	15.20	16.00	4.50	1400.00	受熱なし
57	98	36	上	磨石	安山岩	13.00	13.90	4.80	1150.00	受熱あり
57	99	36	上・下	磨石	安山岩	7.15	10.05	2.95	353.92	受熱あり
57	100	36	上	磨石	安山岩	9.90	12.30	2.45	372.33	炭化物が付着・受熱有り
57	101	36	・上	磨石	安山岩	13.10	10.20	4.40	431.25	受熱なし
57	102	36	上・下	敲石	安山岩	13.60	10.65	3.15	650.00	受熱なし
57	103	36	上	磨石	安山岩	12.70	13.00	3.60	700.00	受熱なし
57	104	36	上	磨石	安山岩	10.15	10.50	4.50	551.29	受熱あり
57	105	36	下	磨石	安山岩	9.55	10.90	3.55	278.48	
57	106	36	下	磨石	安山岩	10.50	11.80	2.40	431.24	全面に受熱あり

Tab.9 石器観察表(1)

Fig.	図版番号	調査区	層位	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
57	107	36	下	石皿	安山岩	12.90	9.50	1.70	214.01	
58	108	36	下	石皿	安山岩	4.40	13.10	3.40	265.86	
58	109	36	下	石皿	安山岩	11.10	11.85	2.70	422.17	受熱なし
58	110	36	下	凹石	安山岩	10.80	7.30	3.90	302.83	
58	111	36		磨石	安山岩	6.90	13.80	3.80	228.35	アクが付着・受熱なし
58	112	36		磨石	安山岩	10.00	8.60	3.05	302.59	炭化物が付着
58	113	36		磨石	安山岩	12.80	16.70	7.20	2050.00	受熱なし
58	114	36	下	凹石	安山岩	10.00	7.60	4.90	509.70	受熱あり
58	115	36	下	磨石	安山岩	13.50	8.85	4.45	515.33	炭化物が付着
58	116	36	下	石皿	安山岩	20.50	16.70	5.15	2350.00	
58	117	36		石皿	安山岩	20.50	17.80	6.40	3250.00	
59	118	36	上	磨石	安山岩	9.00	7.30	4.40	436.44	
59	119	36	上	磨石	安山岩	6.50	6.10	3.40	190.03	
59	120	36		磨石	安山岩	6.60	4.10	4.10	121.02	炭化物が付着
60	121	36		磨石	安山岩	14.30	8.30	6.65	1100.00	
60	122	36		磨石	安山岩	8.80	6.30	4.60	315.50	
60	123	36		敲石	安山岩	8.50	9.30	5.35	576.03	
60	124	36		円礫	安山岩	12.35	22.20		2250.00	
60	125	36	下	受熱礫	安山岩	10.80	7.10	4.55	433.25	受熱あり (図表示)
60	126	36	下	受熱礫	安山岩	10.95	6.95	3.70	279.44	受熱あり (図表示)
60	127	36		受熱礫	?	9.20	4.75	2.95	146.49	受熱あり (図表示)
61	128	36		敲石	安山岩	6.60	6.20	5.85	126.46	
61	129	36		磨石	安山岩	7.50	7.45	1.60	149.95	
61	130	36		受熱礫	安山岩	5.10	5.10	5.00	123.64	受熱あり (図表示)
61	131	36		磨石	?	4.35	4.35	2.70	47.81	
62	132	36		磨製石斧	チャート	19.50	8.70	4.45	917.00	
63	133	36		尖頭器	安山岩	4.80	3.35	1.45	22.06	
63	134	36	下	石匙 (縦形)	安山岩	8.50	3.80	0.95	15.15	
63	135	36	下	石匙	チャート	3.45	4.45	0.55	7.34	
63	136	36	下	スクレーパー	安山岩	4.30	5.85	0.80	21.30	
63	137	36	下	石錘	安山岩	4.40	4.30	1.00	21.23	
64	138	36		石鏟	チャート	1.80	1.25	0.25	0.35	
64	139	36		石鏟	安山岩	1.55	1.65	0.30	0.49	
64	140	36		石鏟	安山岩	2.10	1.85	0.35	0.59	
64	141	36	下	石鏟	安山岩	3.15	1.45	0.45	1.37	
64	142	36	下	石鏟	安山岩	2.60	2.10	0.40	1.47	
64	143	36		剥片	黒曜石	1.60	2.00	0.30	0.46	
64	144	36		剥片	安山岩	2.00	3.10	0.50	2.36	
64	145	36		剥片	安山岩	2.30	1.50	0.50	1.47	
64	146	36		剥片	黒曜石	1.30	2.25	0.60	0.85	
64	147	36		二次加工剥片	安山岩	2.30	2.65	0.75	4.53	
64	148	36	下	くさび形石器	黒曜石	2.00	1.30	0.65	1.71	
64	149	36		くさび形石器	黒曜石	1.40	1.70	0.75	1.40	
77	218	11		石鏟	黒曜石	2.30	2.05	0.50	1.44	
77	219	11	下	石鏟	黒曜石	2.55	1.65	0.45	0.95	
78	221	13		スクレーパー	安山岩	3.95	5.55	1.15	21.20	
78	222	13		尖頭器	安山岩	8.35	4.25	1.90	82.90	
78	223	13		スクレーパー	安山岩	6.20	4.05	1.70	34.50	
78	224	13		石匙	チャート	5.70	4.40	1.00	16.70	
78	225	13		石匙	安山岩	3.90	6.15	0.90	14.80	
78	226	13		石匙	安山岩	2.80	4.90	0.60	6.50	
85	265	16		けつ状耳飾り	軟玉?	3.35	3.65	0.90	14.60	
85	266	16		勾玉	軟玉?	2.45	0.95	0.40	0.78	

Tab.10 石器観察表(2)

第3節 石の本遺跡群周辺の層位

調査区名	遺構名 (調査時)	内 容	検出面	時 期	出土遺物 (有無)	出土遺物 土器	石 器	掲載Fig.番号	備 考
5区	SX - 01	土坑		縄文・中期	有	類	二次加工剥片	67	
13区	SX - 01	土坑		縄文・早期	有		剥片ほか	72	
17区	5号集石	集石		縄文・早期	有		磨石ほか	27	
17区	SX - 04	炉穴		縄文・早期				26	
17区	SX - 05	炉穴		縄文・早期				26	
17区	SX - 08	土坑		不明	有	類		28	
36区	集石 1	集石		縄文・早期	有	類	磨石ほか	41	
36区	集石 2	集石		縄文・早期	有		磨石ほか	41	
36区	集石 3	集石		縄文・早期	有		磨石ほか	41	
36区	集石 4	集石		縄文・早期	有		磨石ほか	42	
36区	集石 5	集石		縄文・早期	有		磨石ほか	43	
36区	集石 6	集石		縄文・早期	有		磨石ほか	43	
36区	集石 7	集石		縄文・早期	有		磨石ほか	43	
36区	集石 8	集石		縄文・早期	有		磨石ほか	43	
36区	集石 9	集石		縄文・早期	有		磨石ほか	43	
36区	集石10	集石		縄文・早期	有		磨石ほか	44	
36区	集石11	集石		縄文・早期	有		磨石ほか	44	
36区	集石12	集石		縄文・早期	有		磨石ほか	44	
36区	集石13	集石		縄文・早期	有		磨石ほか	45	
36区	集石14	集石		縄文・早期	有		磨石ほか	45	
36区	焼土坑 1	焼土坑		縄文・早期	有	類	磨石	47	
36区	焼土坑 2	焼土坑		不明				49	
39区	SX - 26	集石		縄文・早期	有		磨石ほか	11	
39区	SX - 27	集石		縄文・早期	有		磨石ほか	12	
39区	SX - 28	集石		縄文・早期	有		磨石ほか	12	
39区	SX - 29	集石		縄文・早期	有		磨石ほか	11	
39区	SX - 38	集石		縄文・早期	有		磨石ほか	13	
39区	SX - 40	集石		縄文・早期	有		磨石ほか	14	
39区	SX - 41	集石		縄文・早期	有		磨石ほか	14	
39区	SX - 42	集石		縄文・早期	有		磨石ほか	13	
39区	SX - 43	集石		縄文・早期	有		磨石ほか	13	
39区	SX - 44	集石		縄文・早期	有		磨石ほか	15	
39区	SX - 45	集石		縄文・早期	有		磨石ほか	14	
39区	SX - 47	集石		縄文・早期	有		磨石ほか	15	
40区	SX - 01	集石		縄文・早期	有		磨石ほか	16	
41区	SX - 01	地下式墳		中世				87	
42区	SX - 50	近世墓		近世				86	
50区	SX - 70	集石		縄文・早期	有		磨石ほか	22	
50区	SX - 73	集石		縄文・早期	有		磨石ほか	22	
54区	近代溝	近代溝	崩壊土	近代				88・89	

Tab.11 遺構観察表

第3節 石の本遺跡群周辺の層位

遺構名		X	Y	標高	器種	石材	重さ	接合時の重さ	受熱	受熱状況	破砕	接合	備考
集石4	9	598.446	416.353	92.036	磨石	円礫	700		×	表面・割面	一部欠損	12 11	
	10	598.548	416.513	92.039		円礫	101		×		完存		
	11	598.602	416.457	92.013		円礫	138		×		一部残存		
	12	598.623	416.568	92.035		円礫	138		×		一部残存		
	13	598.685	416.573	92.036		円礫	53				一部残存		
	14	598.654	416.501	92.034	磨石	円礫	200		×		二分の一		
	15	598.730	416.474	92.030		円礫	70		×		一部残存		
	16	598.729	416.357	92.033	敲石	円礫	500		×		完存		
	17	598.800	416.385	92.040	磨石	円礫	450		×		完存		
	18	598.855	416.316	92.007		円礫	150				一部残存		
	19	598.874	416.208	91.983		円礫	350		×		完存		
	20	598.999	416.328	92.032		円礫	750		×		完存		
	21	599.032	416.235	92.006	敲石	円礫	400		×		完存		
	22	599.025	416.103	92.008	磨石	円礫	850				表面一部 一部欠損		
集石5	1	600.590	419.925	91.943		円礫	143			表面・割面	一部残存	2361	土器
	2	600.808	420.017	91.886		角礫	1		×		一部残存		
	3	600.923	420.274	91.930		円礫	100		×		一部残存		
	4	600.817	420.404	91.884		黒曜石	16				表面		
	5	601.249	419.805	91.845		円礫	55				表面		
	6	601.423	419.774	91.993	敲石	円礫	172	355			表面		
	7	601.320	420.022	91.980		磨石	円礫		1.300				
	8	601.267	420.071	91.981		円礫	55				表面・割面		
	9	601.215	420.114	91.940		円礫	4		×		表面		
	10	601.190	420.195	91.966		円礫	28				表面		
	11	601.330	420.135	92.000	磨石	円礫	1.400		×		表面		
	12	601.463	420.072	91.915		円礫	2.100		×		表面		
	13	601.436	420.447	92.070		円礫	200		×		二分の一		
	14	601.535	420.390	91.924	石皿	円礫	6.950		×		表面		
	15	601.400	420.493	92.001		円礫	54		×		表面		
	16	601.351	420.443	92.040									
	17	601.256	420.507	91.958		円礫	92		×		表面・割面		
	18	601.359	420.563	91.967		円礫	72				表面		
	19	601.415	420.683	91.875	磨石	円礫	900				表面		
	20	601.473	420.722	91.881		円礫	31		×		表面		
	21	601.388	420.793	91.889		円礫	88				表面・割面		
	22	601.830	420.522	91.931		円礫	97				表面		
	23	601.892	420.221	91.954	磨石	円礫	1.850				表面		
	24	601.802	419.982	91.942		石皿	円礫	3.700			×		
	25	601.850	419.913	92.045	磨石	円礫	1.700				表面		
	26	601.756	419.714	91.945		円礫	496		×		表面		
	27	602.136	420.023	91.988	敲石	円礫	900		×		二分の一		
	28	602.899	420.354	92.014		円礫					×		
	29	602.910	420.313	92.037	磨石	円礫	128		×		表面		
	30	602.813	420.132	92.015		敲石	円礫	500			×		
	31	602.922	420.103	92.037	磨石	円礫	350		×		表面		
	32	602.869	420.055	92.038		円礫	144				×		
	33	602.980	419.971	92.029	剥片	角礫	13		×		表面		
	34	603.137	419.893	92.025		円礫	39		×		表面		
集石6	1	601.413	424.100	91.681		角礫	3			表面 表面	小片	10.12.14.22 20	土器
	2	601.453	424.205	91.698		円礫					表面		
	3	601.630	424.200	91.720		円礫	300				表面		
	4	601.664	424.332	91.715		角礫	4				表面		
	5	601.705	424.380	91.941		円礫	75		×		表面		
	6	601.687	424.433	91.707		角礫	2				表面		
	7	601.672	424.510	91.728		円礫	37		×		表面		
	8	601.600	424.550	91.726							表面		
	9	601.556	424.550	91.707		円礫	40				表面・割面		
	10	601.614	424.784	91.715		円礫			276		表面		
	11	601.700	424.815	91.731		円礫	23				表面		
	12	601.987	425.040	91.740		円礫			276		表面		
	13	602.090	424.743	91.715		角礫	3				表面		
	14	602.075	424.724	91.717		円礫			276		表面		
	15	602.008	424.737	91.728							表面		
	16	601.960	424.760	91.730		円礫	0.36				表面		
	17	601.983	424.772	91.730		円礫	0.57				表面		
	18	601.945	424.660	91.740		円礫	30				表面		
	19	601.875	424.710	91.771		角礫			53		表面		
	20	601.873	424.674	91.746		円礫	12				表面		
	21	601.868	424.631	91.735		角礫	5				表面		

Tab.13 36区集石観察表(2)

遺構名		X	Y	標高	器種	石材	重さ	接合時の重さ	受熱	受熱状況	破 碎	接 合	備 考
集石 6	22	601.917	424.626	91.735		円礫		276		表面	一部残存	2.10.12.14	欠番
	23	601.760	424.550	91.746		円礫	157			表面・剖面	一部残存		
	24	601.771	424.425	91.724		角礫	2				小片		
	25	601.807	424.360	91.714		角礫	1			小片			
	26	601.816	424.396	91.719		角礫	11			小片			
	27	601.829	424.451	91.718									
	28	601.832	424.480	91.712		角礫	1			小片			
	29	601.880	424.520	91.790		円礫	24		表面	一部残存			
	30	601.882	424.483	91.775		角礫	2			小片			
	31	601.908	424.445	91.771		円礫	37		表面	一部残存			
	32	601.894	424.393	91.776		角礫		53	表面	一部残存	19		
	33	601.899	424.318	91.690		角礫	1			表面		小片	
	34	601.920	424.382	91.770		円礫	20		×	一部残存	37.38		
	35	601.955	424.390	91.775		角礫	26			表面		小片	
36	601.948	424.524	91.755		円礫	107		表面・剖面	一部残存	36.38			
37	602.007	424.573	91.742		円礫	9		表面・剖面	一部残存				
38	602.018	424.513	91.760		円礫	107		表面・剖面	一部残存	36.37			
39	601.989	424.478	91.765		円礫	12		表面	一部残存				
40	601.998	424.433	91.777		円礫	63		×	一部残存	16.17.18			
41	602.057	424.413	91.734		円礫	22			表面		一部残存		
42	602.058	424.576	91.734		角礫	1			小片				
43	602.050	424.495	91.742		角礫	4			小片				
44	602.147	424.415	91.710		角礫	4			小片				
集石 7	1	603.008	424.052	91.787	敲石	円礫	350			表面	完存	3449	土器 土器
	2	603.241	424.109	91.836	-	円礫	62		×	表面	一部残存		
	3	603.333	424.141	91.879	-	円礫	450		×	表面	完存		
	4	603.546	424.115	91.750	磨石	円礫	187		×	表面	一部残存		
	5	603.475	424.276	91.815	-	円礫	550		×	表面	完存		
	6	603.585	424.410	91.851	凹石	円礫	350			表面・剖面	一部残存		
	7	603.297	424.423	91.871	-	円礫	200		×	表面	一部残存		
	8	603.488	425.070	91.810									
	9	603.567	425.019	91.810									
	10	603.693	424.643	91.836	敲石	円礫	600	794	×	表面	完存		
	11	603.775	424.508	91.845	磨石	円礫	550			×	表面		
	12	603.857	424.405	91.845	磨石	円礫	1,200		×	表面	完存		
	13	604.162	423.980	91.815	-	円礫	265		×	表面	一部残存		
集石 8	1	596.018	421.822	91.784		円礫	126			表面・剖面	二分の一		
	2	596.034	421.625	91.823	敲石	円礫	405		×	表面	二分の一		
	3	596.198	421.683	91.753		角礫	23		×	表面	一部残存		
	4	596.445	421.590	91.834		円礫	150		×	表面	一部残存		
	5	596.558	421.623	91.841	磨石	円礫	150			表面	完存		
	6	596.556	421.439	91.764	磨石	円礫	500			表面	完存		
	7	596.475	421.320	91.866	敲石	円礫	500			表面一部	完存		
集石 9	1	592.618	426.111	91.860		円礫	52			表面	一部残存		欠番
	2	592.687	426.202	91.870	磨石	円礫	600			表面・剖面	一部欠損		
	3	592.774	426.116	91.875	磨石	円礫	550		×	表面	完存		
	4	592.813	426.014	91.865	敲石	円礫	326		×	表面	完存		
	5	592.933	426.276	91.860	敲石	円礫	150		×	表面	二分の一		
	6	592.979	425.863	91.857									
	7	592.988	425.632	91.878	磨石	円礫	700		×	表面	一部残存		
	8	593.188	425.633	91.870		角礫	25		×	表面	一部残存		
	9	592.670	425.588	91.866									
	10	592.451	425.752	91.876	使用痕剥片	角礫	6		×	表面	一部残存		
	11	592.198	426.362	91.867		円礫	800		×	表面	一部残存		
集石 10	1	592.057	426.956	91.876		円礫	167			表面・剖面	一部残存		
	2	592.099	427.058	91.869		円礫	177		×	表面	二分の一		
	3	592.096	426.993	91.825		角礫	127			表面	一部残存		
	4	592.160	426.997	91.874		角礫	450		×	表面	一部残存		
	5	592.198	426.975	91.845		円礫	84			表面	一部残存		
	6	592.240	427.010	91.892		円礫	300		×	表面	一部残存		
	7	592.358	427.096	91.855		角礫	43		×	表面	一部残存		
	8	592.352	426.945	91.850		円礫	350		×	表面	一部残存		
	9	592.283	426.911	91.847		円礫	450		×	表面	一部残存		
	10	592.198	426.788	91.855		円礫	250			表面・剖面	一部残存		
集石 11	1	574.500	429.335	91.276	磨石	円礫	450		×	表面	完存		4.6 3.6
	2	574.349	429.147	91.283	磨石	円礫	431			表面	二分の一		
	3	574.456	429.119	91.289		角礫	156	374		表面	一部残存		
	4	574.492	429.088	91.273		角礫	130		374		表面		
	5	574.540	429.070	91.304	磨石	円礫	200		×	表面	一部残存		

Tab.14 36区集石観察表(3)

第3節 石の本遺跡群周辺の層位

遺構名		X	Y	標高	器種	石材	重さ	接合時の重さ	受熱	受熱状況	破砕	接合	備考
集石11	6	574.522	429.046	91.264		角礫	88	374		表面	一部残存	3.4	
	7	574.474	428.972	91.256		円礫	250		×		一部残存		
	8	574.679	429.250	91.283		円礫	200		一部残存				
	9	574.596	429.150	91.287		円礫	314	×	完存				
	10	574.638	429.113	91.327	磨石	円礫	400	×	完存				
	11	574.645	429.030	91.309	磨石	円礫	1,550	×	完存				
	12	574.557	428.981	91.298		円礫	334		表面・割面		一部残存		
	13	574.554	428.890	91.264	凹石	円礫	700	×		完存			
集石12	1	585.645	425.900	91.640		円礫	950		×	表面	一部残存		
	2	585.942	425.741	91.606		角礫	40	×	一部残存				
	3	585.920	425.880	91.650		角礫	750		完存				
	4	585.855	425.932	91.620		角礫	126	×	一部残存				
	5	585.930	425.980	91.629		角礫	48	×	一部残存				
	6	585.860	426.000	91.629		円礫	450		一部残存				
	7	585.776	425.994	91.640		角礫	244	292	×		一部残存		
	8	585.570	426.067	91.627		円礫	488	×	一部残存				
	9	585.583	426.174	91.600		円礫	315	×	一部残存				
	10	585.634	426.258	91.606	凹石	円礫	272	×	完存				
	11	585.750	426.280	91.621	磨石	円礫	400		表面・割面		一部欠損		
	12	585.810	426.226	91.640		円礫	284	×	一部残存				
	13	585.849	426.153	91.640		円礫	350	×	一部残存				
集石13	1	579.218	408.418	91.762		角礫	290		×	表面	一部残存		
	2	579.157	408.465	91.753	敲石	円礫	400		一部欠損				
	3	579.148	408.540	91.748		円礫	650	×	一部残存				
	4	579.138	408.589	91.741		角礫	194	×	一部残存				
	5	578.970	408.375	91.756	凹石	円礫	228	×	二分の一				
	6	578.893	408.346	91.752		角礫	250		一部残存				
	7	578.906	408.445	91.755		円礫	220		表面		一部残存		
	8	578.950	408.580	91.757		円礫	190	×	完存				
	9	579.150	408.502	91.767	石皿	円礫	1200	×	一部残存				
集石14	1	599.963	427.298	91.783	磨石	円礫	1300			表面 表面 表面	完存	8	
	2	600.109	427.466	91.745	磨石	円礫	119	552			一部欠損		
	3	599.838	427.351	91.805	磨石	円礫	500		完存				
	4	599.845	427.460	91.788	磨石	円礫	550	×	完存				
	5	599.842	427.575	91.770	敲石	円礫	362		表面		完存		
	6	599.970	427.481	91.717	石皿	円礫	3600		表面		完存		
	7	600.200	427.386	91.745	敲石	円礫	1350		表面		完存		
	8	600.153	427.518	91.735	磨石	円礫	433	552	表面		一部欠損		
	9	600.250	427.527	91.770		円礫	1400		表面		完存		
	10	600.284	427.645	91.744	磨石	円礫	800		表面		一部欠損		
	11	600.209	427.646	91.764	磨石	円礫	400	×	表面		完存		
	12	600.258	427.786	91.765	敲石	円礫	550		表面		完存		
	13	600.150	427.685	91.775	磨石	円礫	1250		表面		完存		
	14	600.059	427.612	91.735	石皿	円礫	2100		表面		完存		
	15	599.990	427.788	91.817	磨石	円礫	1050		表面		完存		

Tab.15 36区集石観察表(4)

番号		X座標	Y座標	標高		番号		X座標	Y座標	標高	
301	P	275.190	528.220	79.836	類	W-36	P	252.655	498.401	80.132	類 Fig.29 - 57
302	P	277.200	524.660	80.031		W-37	P	252.651	498.241	80.143	
303	P	277.980	522.970	80.201	類	W-38	P	252.684	498.079	80.135	類 Fig.29 - 57
304	P	277.500	522.620	80.213		W-39	P	252.664	498.039	80.116	類
305	P	277.100	522.400	80.209	類	W-40	S	252.671	498.130	80.140	
306	P	290.370	501.850	81.181		W-41	P	251.373	497.307	80.098	類 Fig.29 - 57
307	P	272.310	497.310	80.831	類	W-42	P	251.041	497.637	80.129	
308	P	270.890	496.970	80.746	類	W-43	P	250.680	497.356	80.105	類 Fig.29 - 57
309	P	272.310	496.530	80.869	類	W-44	P	250.968	498.094	80.103	類 Fig.29 - 57
310	P	272.400	496.580	80.721		W-45	P	250.910	498.032	80.097	類 Fig.29 - 57
311	P	272.850	496.700	80.876		W-46	P	250.742	498.115	80.106	類 Fig.29 - 57
312	P	273.420	495.900	80.876	類	W-47	P	250.612	498.062	80.087	
313	P	272.350	495.880	80.886	類	W-48	P	250.644	498.720	80.099	類 Fig.29 - 57
314	P	271.930	496.040	80.781		W-49	P	249.902	499.104	80.097	
315	P	272.160	495.580	80.758		W-50	P	249.086	498.466	80.094	
316	P	273.520	490.060	80.852	類	W-51	P	249.199	498.337	80.045	
317	P	275.650	498.050	80.934	類	W-52	P	249.239	498.142	80.034	
318	P			80.796		W-53	P	249.182	497.848	80.155	類 Fig.29 - 57
319	P	272.980	490.360	80.873		W-54	P	248.731	497.708	80.063	
320	P	286.580	499.630	81.183		W-55	P	250.028	497.780	80.102	
321	P	287.060	497.420	81.223	類	W-56	P	249.998	497.102	80.079	
322	P	281.540	492.620	81.193		W-57	P	249.310	496.648	80.065	
323	P	263.610	523.360	79.458		W-58	P	251.708	494.833	80.136	
324	P	259.480	520.100	80.113	類	W-59	P	250.599	494.735	80.100	
325	P	257.860	523.830	79.505		W-60	S	245.949	496.602	79.986	
326	P	262.600	525.200	79.715		W-61	P	247.954	496.533	80.051	
327	P	260.080	525.260	79.610		W-62	P	247.347	497.917	80.009	類 Fig.29 - 57
328	P	264.620	533.140	79.384		W-63	S	247.674	499.656	80.046	
329	P	266.100	533.490	79.430		W-64	P	245.936	499.368	80.020	
330	P	270.700	532.030	79.664	類	W-65	P	244.761	500.029	80.003	
331	P	272.610	532.750	79.690		W-66	P	243.344	500.300	79.974	
332	P	277.100	534.470	79.730		W-67	P	243.946	498.071	79.997	類
333	P	270.120	517.440	80.096		W-68	P	241.715	501.003	79.925	
334	P	270.080	510.380	80.575		W-69	P	242.209	502.915	79.986	類
335	P			81.152		W-70	P	240.435	502.696	79.909	
336	P	266.120	505.990	80.145	類 Fig.29 - 57	W-71	P	240.740	502.362	79.898	
337	P	295.210	514.580	80.615	類	W-72	S	240.869	500.230	79.884	
338	P			79.287	類	W-73	P	240.676	500.098	79.898	類
339	P			79.373		W-74	S	240.714	499.987	79.900	
340	P	273.200	520.540	79.872		W-75	P	241.121	499.464	79.914	類
W- 1	P	269.296	488.296	80.859							
W- 2	S	269.055	491.343	80.820							
W- 3	S	269.955	493.995	80.795							
W- 4	P	270.051	494.944	80.800							
W- 5	P	269.762	494.863	80.791							
W- 6	P	269.164	494.600	80.684							
W- 7	P	263.335	497.038	80.564							
W- 8	P	263.369	496.344	80.552							
W- 9	P	262.504	494.232	80.462	類						
W-10	S	261.097	494.184	80.436							
W-11	P	258.855	495.826	80.442							
W-12	S	258.661	493.942	80.427							
W-13	P	257.650	494.823	80.327							
W-14	S	256.307	493.898	80.299							
W-15	P	256.171	493.360	80.285							
W-16	P	254.324	493.441	80.313							
W-17	P	253.478	494.870	80.193	類						
W-18	P	254.789	495.905	80.245	類 Fig.29 - 57						
W-19	P	255.415	496.101	80.264							
W-20	P	255.799	495.478	80.279							
W-21	P	255.749	495.008	80.269							
W-22	P	257.173	495.601	80.282							
W-23	P	256.911	496.244	80.329							
W-24	P	256.971	496.291	80.334							
W-25	P	256.591	496.387	80.329							
W-26	P	257.282	496.578	80.329							
W-27	P	255.938	496.101	80.282							
W-28	P	255.878	496.499	80.249							
W-29	P	255.811	496.465	80.255							
W-30	P	256.331	497.798	80.277	類 Fig.29 - 57						
W-31	P	259.309	498.173	80.357							
W-32	P	255.124	498.362	80.247							
W-33	P	254.610	498.732	80.285							
W-34	P	253.841	499.859	80.228	類 Fig.29 - 57						
W-35	P	252.556	498.396	80.131	類 Fig.29 - 57						

Tab.18 17区観察表(3)

番号	X	Y	標高	器種/型式	備考	番号	X	Y	標高	器種/型式	備考
3403	S	595.94	428.70	91.575	磨石	3578	P	583.09	417.65	91.599	類
3404	S	596.25	428.00	91.655	石鏟	3580	P	582.40	416.40	91.643	類
3408	S	595.67	425.98	91.678	磨石	3582	P	586.68	417.75	91.615	類
3409	S	595.45	425.75	91.678	磨石	3587	S	587.50	411.95	91.861	剥片
3410	S	595.44	424.36	91.750	石皿	3593	S	592.23	408.23	92.005	石皿
3411	S	595.73	423.95	91.770	剥片	3594	S	590.88	407.21	91.964	磨石
3412	S	595.66	423.26	91.710	磨石	3595	S	590.85	406.96	91.947	磨製石斧
3413	S	595.65	423.03	91.757	二次加工	3596	S	591.24	405.63	91.935	磨石
3415	S	599.18	422.51	91.807	磨石	3601	S	583.64	404.52	91.928	磨石
3420	P	598.29	420.70	91.765	類	3603	S	581.00	407.76	91.795	磨石
3430	S	593.85	414.10	91.892	磨石	3604	P	580.43	407.83	91.897	類
3432	S	593.35	414.24	91.925	磨石	3606	S	579.20	409.35	91.690	磨石
3434	S	595.86	417.20	91.916	石鏟	3607	S	577.26	405.57	91.910	磨石
3435	S	594.01	416.56	91.852	受熱碟	3608	S	574.42	407.08	91.715	磨石
3441	S	595.69	419.04	91.840	磨石	3611	S	599.65	420.75	91.914	接合資料
3442	S	595.75	418.60	91.767	磨石	3612	S	599.75	420.77	91.928	磨石
3443	P	596.35	418.76	91.879	類	3613	S	599.75	420.85	91.879	接合資料
3444	S	593.40	418.50	91.654	磨石	3615	S	598.05	420.35	91.909	磨石
3445	S	593.82	418.99	91.801	磨石	3618	S	595.82	420.32	91.843	磨石
3448	S	595.13	420.80	91.662	剥片	3619	S	599.40	420.00	91.912	磨石
3449	S	595.39	420.85	91.710	敲石	3620	P	600.08	418.30	91.937	類
3453	S	593.15	421.54	91.590	磨石	3621	P	600.20	418.25	91.936	類
3454	S	594.40	424.12	91.732	磨石	3622	S	600.10	417.15	91.992	磨石
3455	S	593.65	424.95	91.670	磨石	3624	S	604.38	419.85	92.003	磨石
3457	S	593.53	425.12	91.693	磨石	3625	P	599.69	427.26	91.721	類
3461	S	595.15	426.36	91.688	磨石	3626	S	600.88	427.25	91.720	磨石
3467	S	592.14	428.16	91.605		3627	S	600.89	427.15	91.712	磨石
3468	P	591.80	427.26	91.590	類	3632	S	601.50	426.75	91.636	磨石
3471	S	592.35	426.19	91.630	磨石	3633	S	601.14	426.55	91.682	砥石
3477	P	590.10	423.25	91.716	類	3641	S	606.25	424.72	91.751	磨石
3478	S	590.80	420.46	91.740	磨石	3643	S	603.75	425.67	91.704	磨石
3482	S	592.05	419.75	91.750	磨石	3644	S	603.51	425.02	91.728	磨石
3483	P	591.17	417.63	91.806	類	3645	S	601.99	425.75	91.682	磨石
3484	S	590.47	417.55	91.833	磨石	3650	S	605.66	422.89	91.796	磨石
3485	S	590.40	417.50	91.846	磨石	3657	S	604.56	418.17	91.844	磨石
3486	S	590.48	417.86	91.788	磨石	3662	S	599.77	420.61	91.881	接合資料
3490	S	590.05	416.50	91.820	磨石	3663	S	599.83	420.80	91.886	接合資料
3494	P	589.70	415.28	91.816	類	3669	S	600.20	420.99	91.847	磨石
3495	S	590.07	414.65	91.905	二次加工	3670	S	599.89	421.86	91.779	磨石
3497	S	590.45	427.92	91.580	磨石	3671	S	599.76	422.65	91.767	磨石
3498	S	589.40	427.94	91.590	磨石	3675	S	599.95	420.62	91.813	磨石
3499	S	589.46	426.80	91.494	受熱碟	3676	S	599.88	420.85	91.844	磨石
3503	S	588.20	427.90	91.511	剥片	3678	S	600.10	421.03	91.788	剥片
3505	S	587.61	427.27	91.490	二次加工	3679	S	600.25	421.44	91.832	磨石
3508	S	586.01	427.42	91.550	磨石	3681	S	600.05	422.81	91.681	磨石
3509	S	585.97	428.30	91.515	磨石	3682	S	592.16	409.15	92.053	石皿
3512	S	585.00	428.07	91.491	剥片	3683	S	592.23	409.16	91.974	磨石
3513	P	584.93	428.09	91.540	類	3699	S	569.91	429.10	91.310	磨石
3519	S	586.91	426.75	91.535	磨石	3701	S	569.90	421.46	91.424	磨石
3521	P	586.90	426.15	91.527	類	3702	S	569.70	417.40	91.521	磨石
3522	S	587.85	425.28	91.558		3707	S	569.60	407.70	91.617	磨石
3524	S	587.78	423.75	91.641	剥片	3717	S	587.26	410.30	91.787	磨石
3529	P	587.20	423.24	91.651	類	3726	S	587.58	410.42	91.594	二次加工
3535	S	585.20	423.55	91.561	磨石						
3536	P	584.36	423.62	91.553	類						
3540	S	583.35	427.59	91.490	磨石						
3543	S	581.66	427.80	91.475	磨石						
3548	S	581.90	425.41	91.530	磨石						
3549	S	582.20	424.95	91.435	楔形						
3550	S	584.08	426.09	91.552	磨石						
3551	S	582.91	422.56	91.545	磨石						
3556	P	587.50	420.75	91.568	類						
3559	P	582.42	421.82	91.565	類						
3562	P	581.54	422.48	91.586	類						
3563	S	581.27	421.69	91.605	磨石						
3569	S	580.70	419.80	91.555	磨石						

Tab.22 36区観察表(4)

写真図版



PL. 8 遺跡遠景 3



PL. 9 遺跡遠景 4



PL.10
20区遺物出土状況



PL.11
22区東壁 1 (北から)



PL.12
22区東壁 2 (北から)

PL.13
50区遺物出土状況



PL.14
50区東壁 (北 南)



PL.15
安山岩露頭状況 1





PL.16
安山岩露頭狀況 2



PL.17
30区土層遠景 1



PL.18
30区土層遠景 2



PL.19
39区調査区遠景



PL.20
39区調査区近景



PL.21
39区北側セクション



PL.22
39区集石遺構検出状況



PL.23
39区SX - 26検出状況



PL.24
39区SX - 26



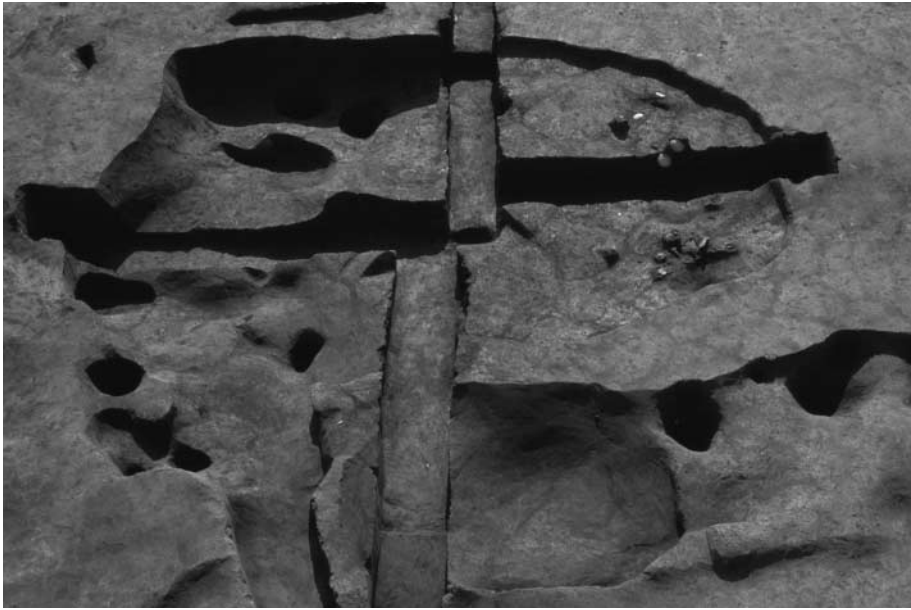
PL.25
36区調査区遠景



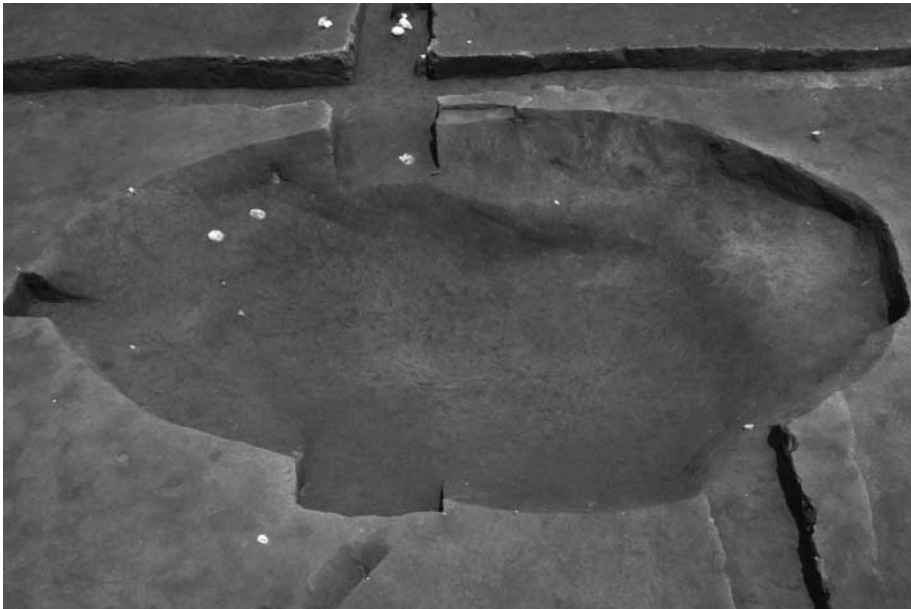
PL.26
36区調査区近景



PL.27
36区遺構検出状況



PL.28
36区焼土坑 1 検出状況



PL.29
36区焼土坑 1 完掘状況



PL.30
36区東壁セクション

PL.31
17区調査区遠景

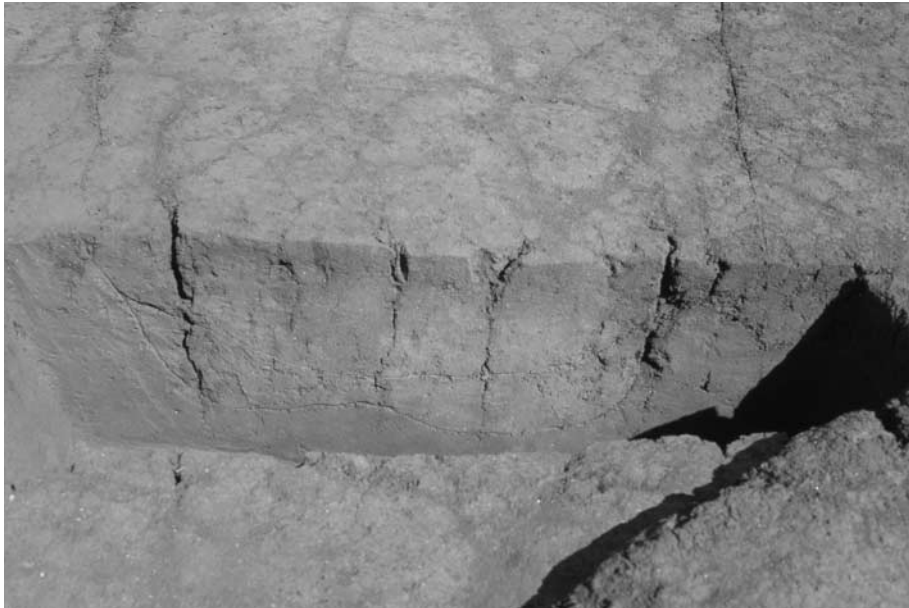


PL.32
17区調査区近景 1



PL.33
17区調査区近景 2

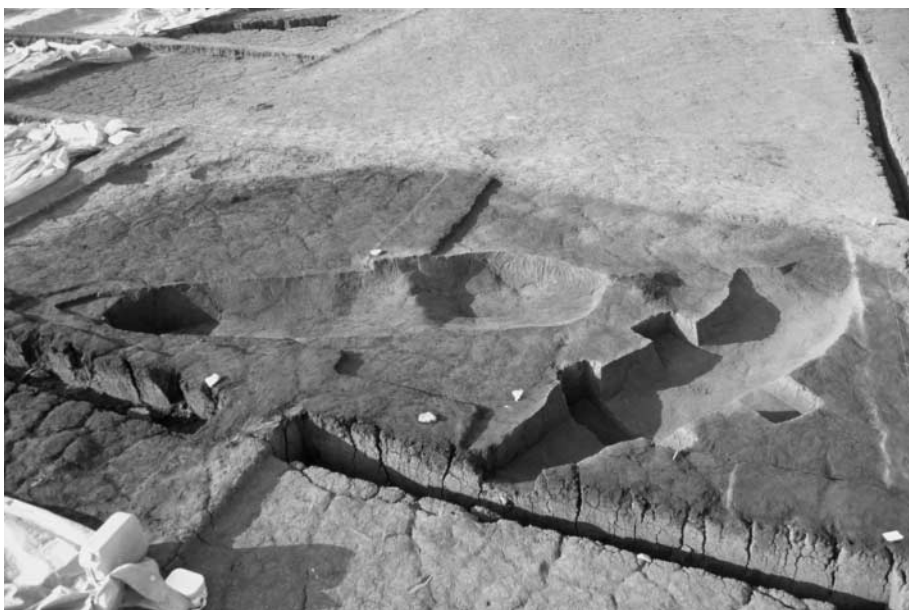




PL.34
17区SX - 04



PL.35
17区SX - 05断面



PL.36
17区SX - 05完掘状况

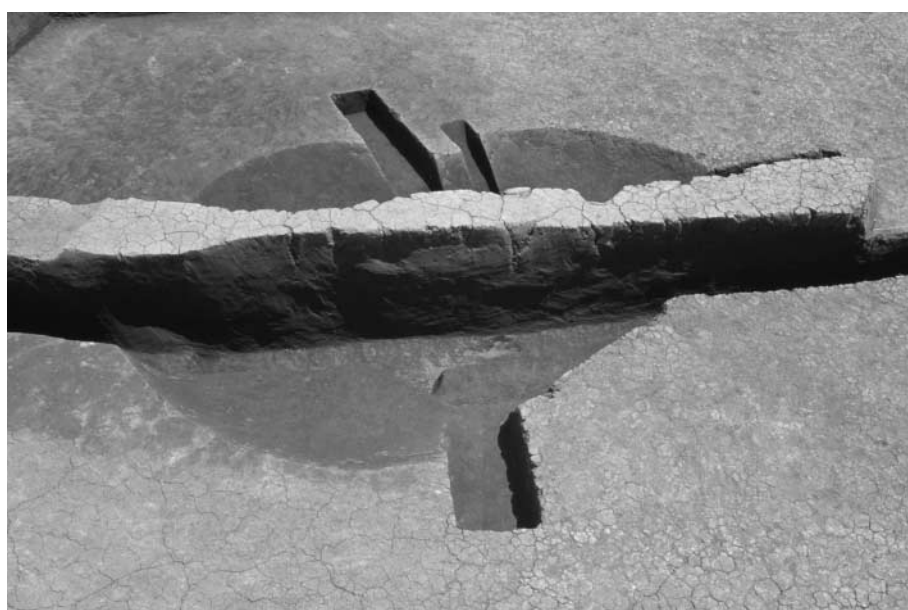
PL.37
5区調査区遠景

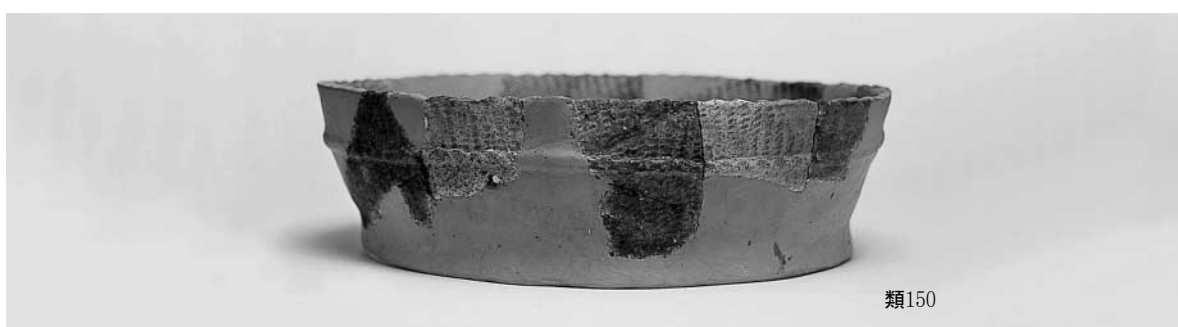


PL.38
5区調査区近景



PL.39
5区SX - 01







類84



類248



類260



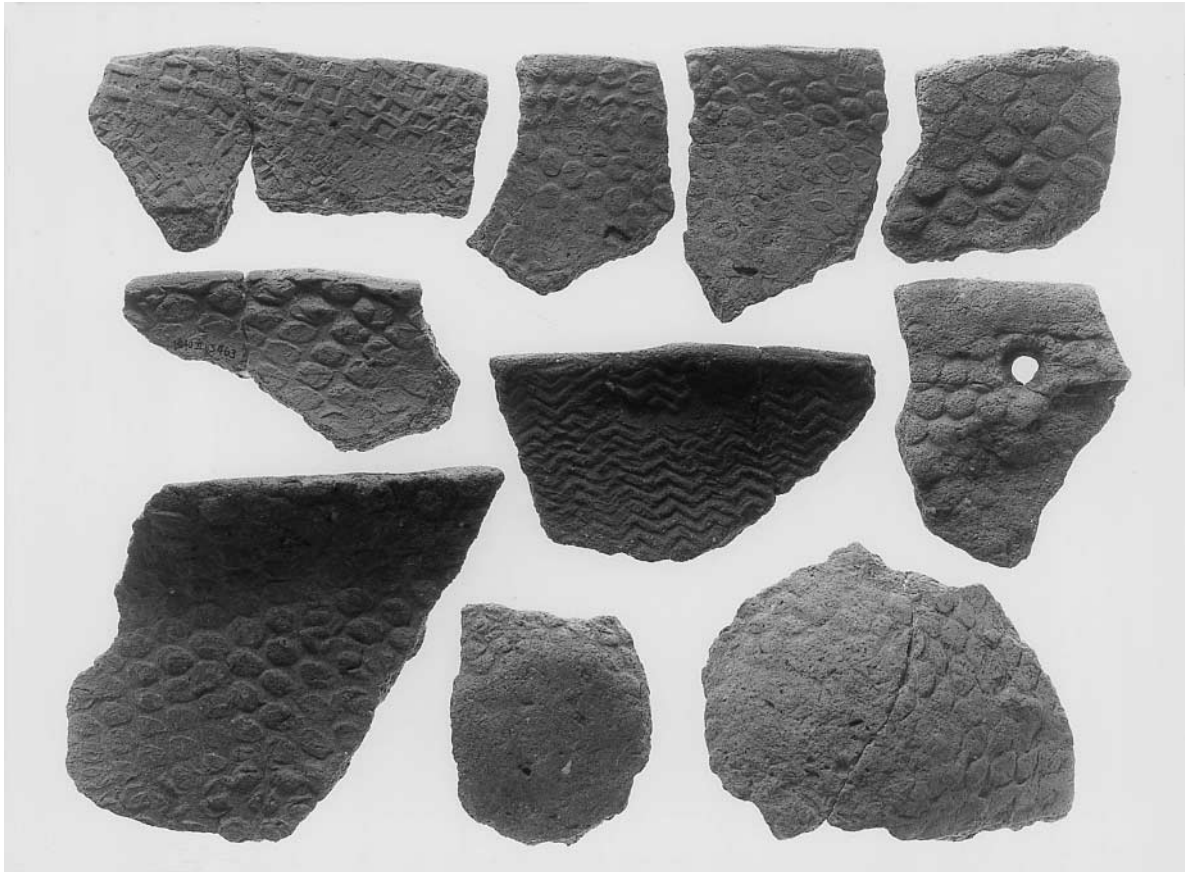
PL.42 旧石器 1 (14・11・18・16・17・19・1・22・21・23)



PL.43 旧石器 2 (20・25・24・26)



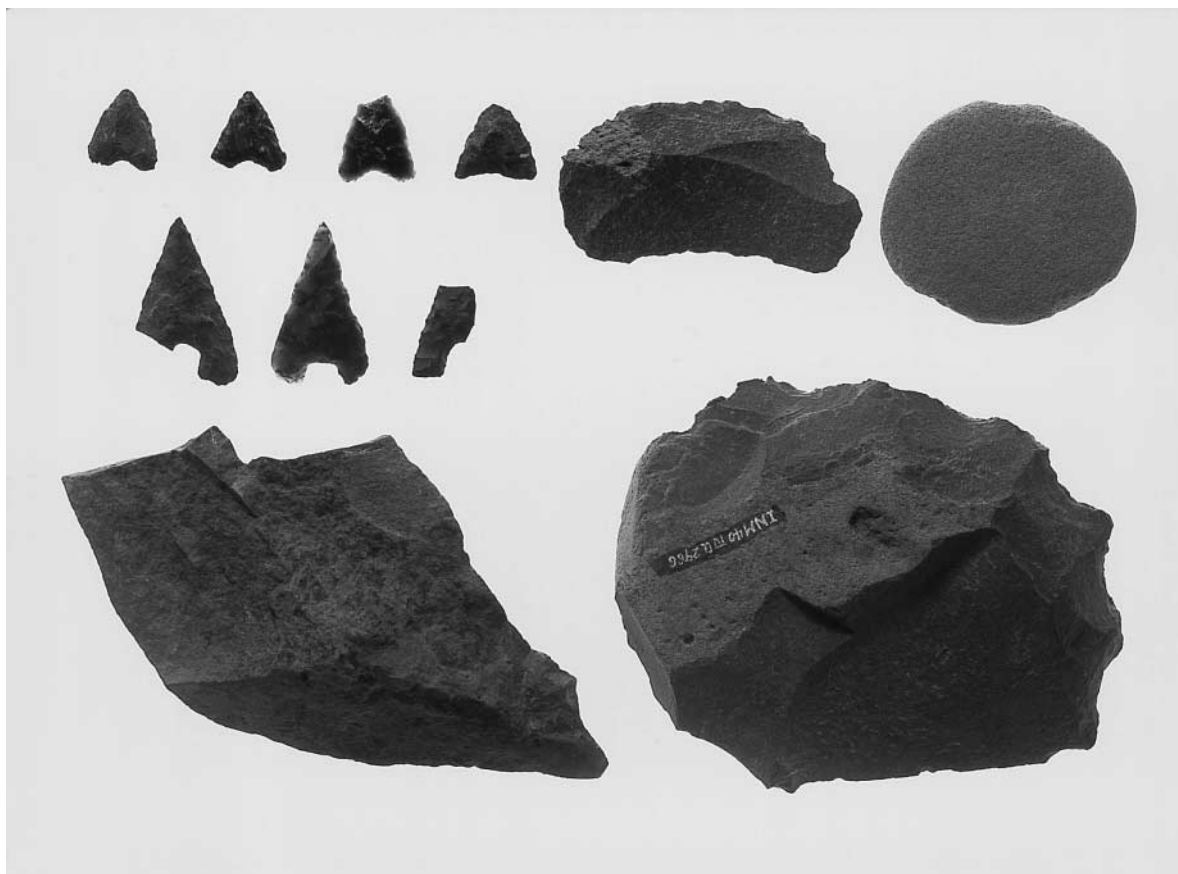
PL.44 旧石器3 (15・8・10・9・12, 4・3・2, 6・7・5)



PL.45 40区 類土器 1 (27・34・29・30・35・31・33・32)



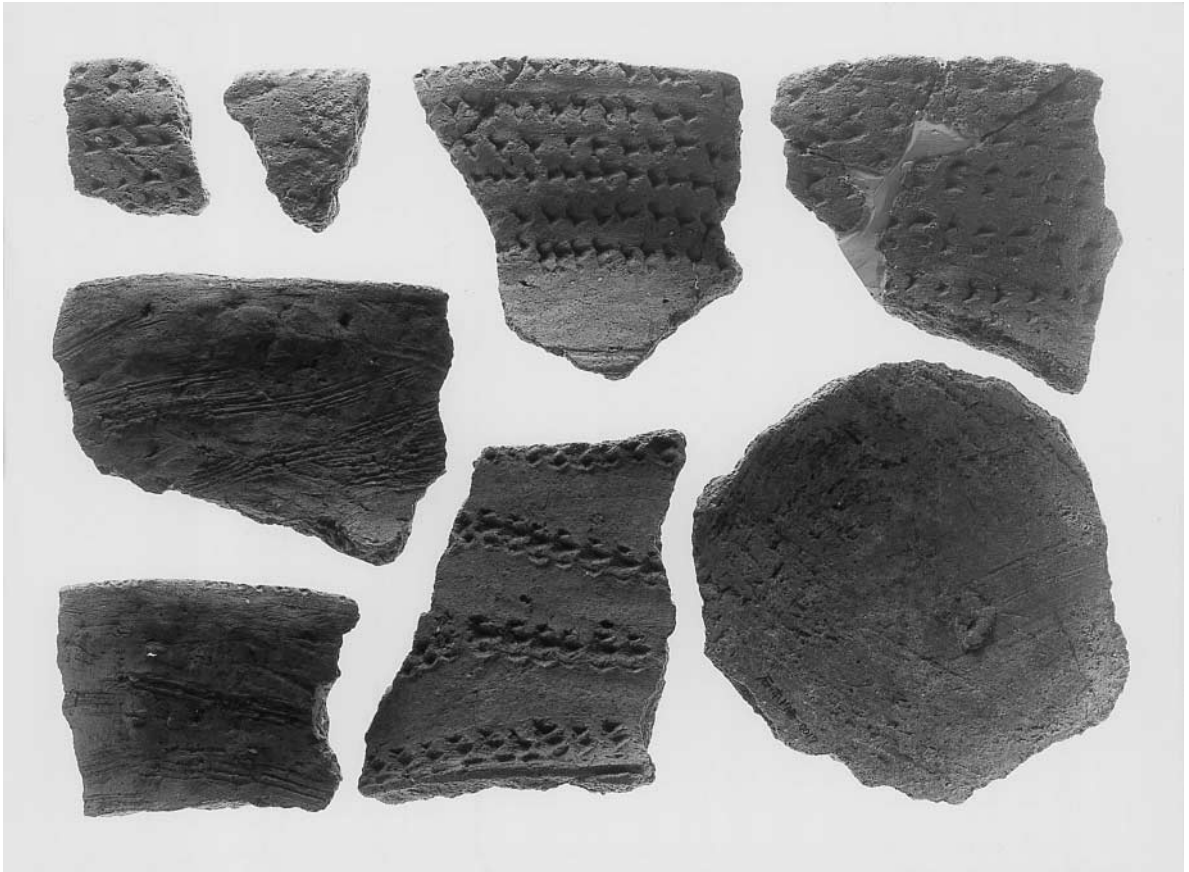
PL.46 40区 類土器 2 (39・38・41・40)



PL.47 39·40区石器 (45·42·43·47·52·50·46·49·44·51·53)



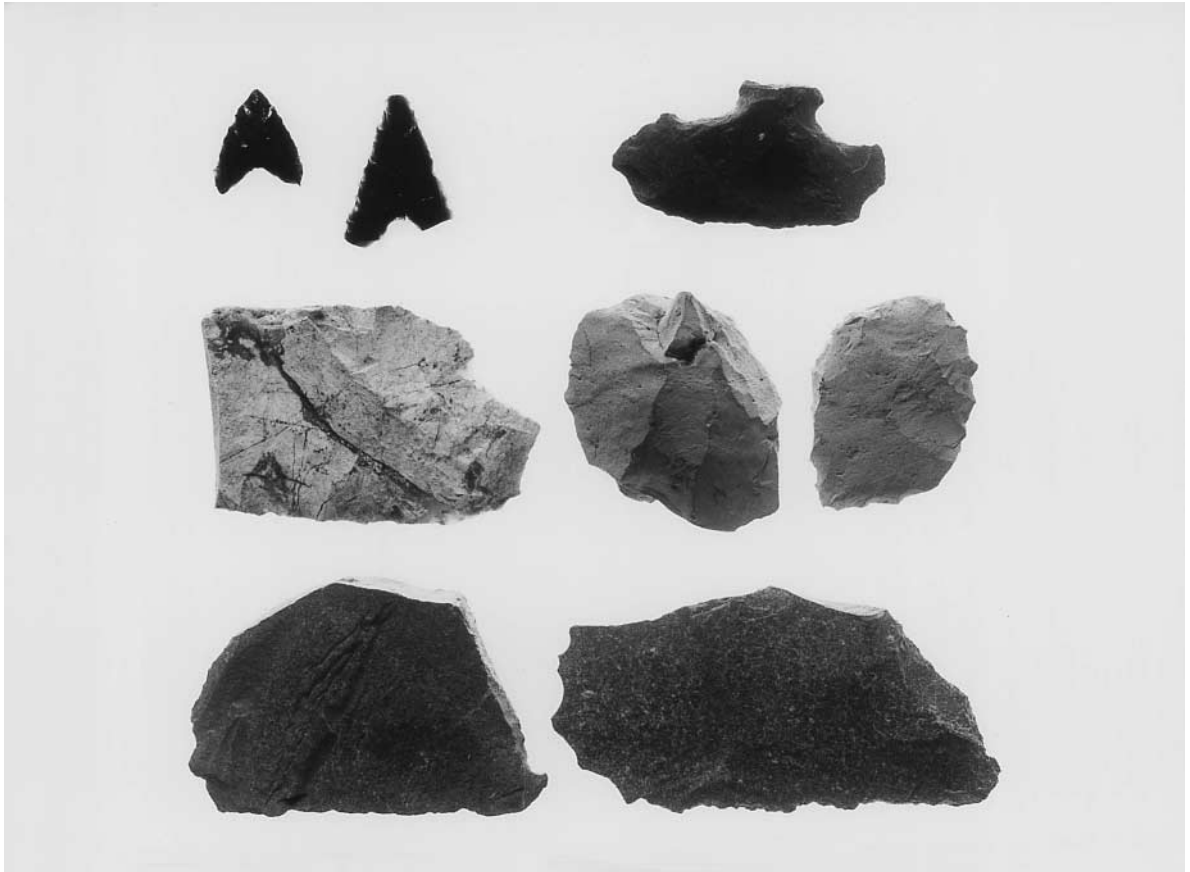
PL.48 39区集石



PL.49 17区 類土器 (65・64・67・59・63・58・66・60)



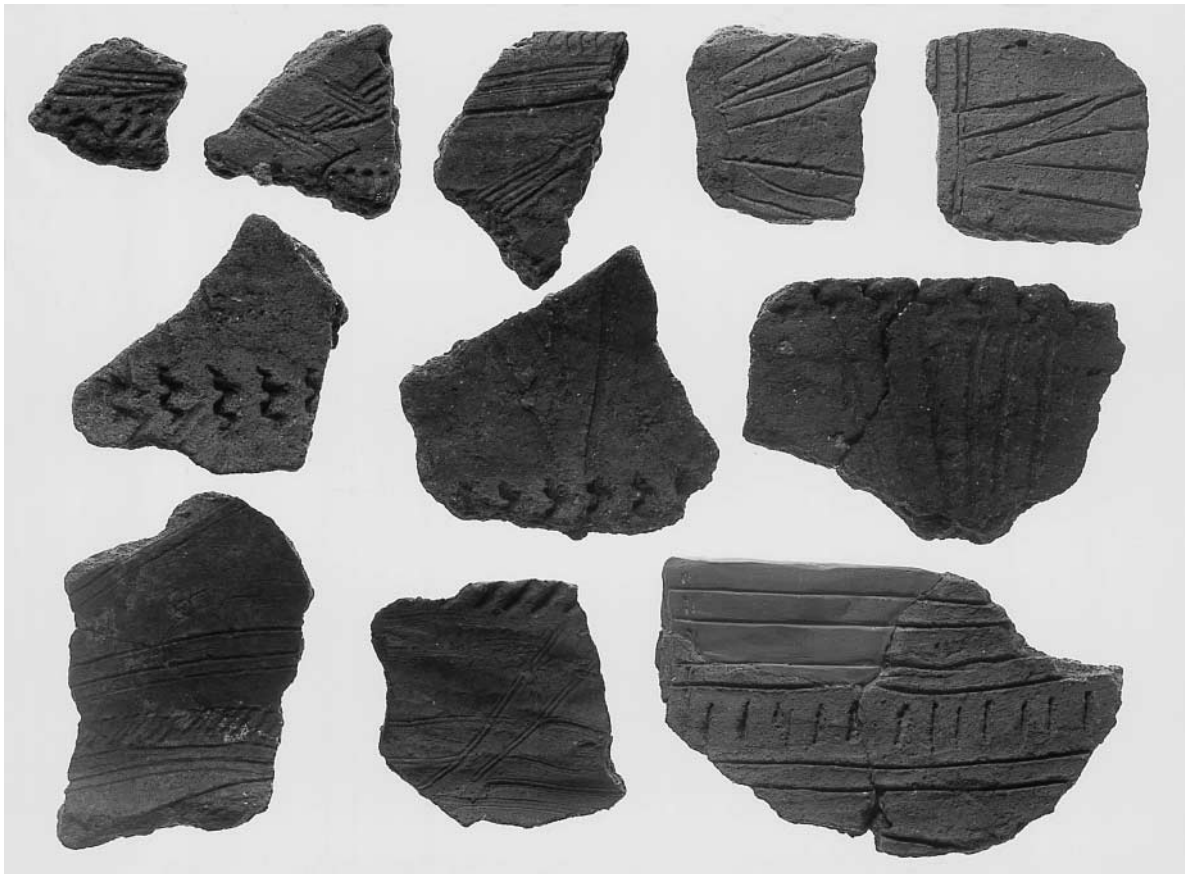
PL.50 17区石器 (75・77・76)



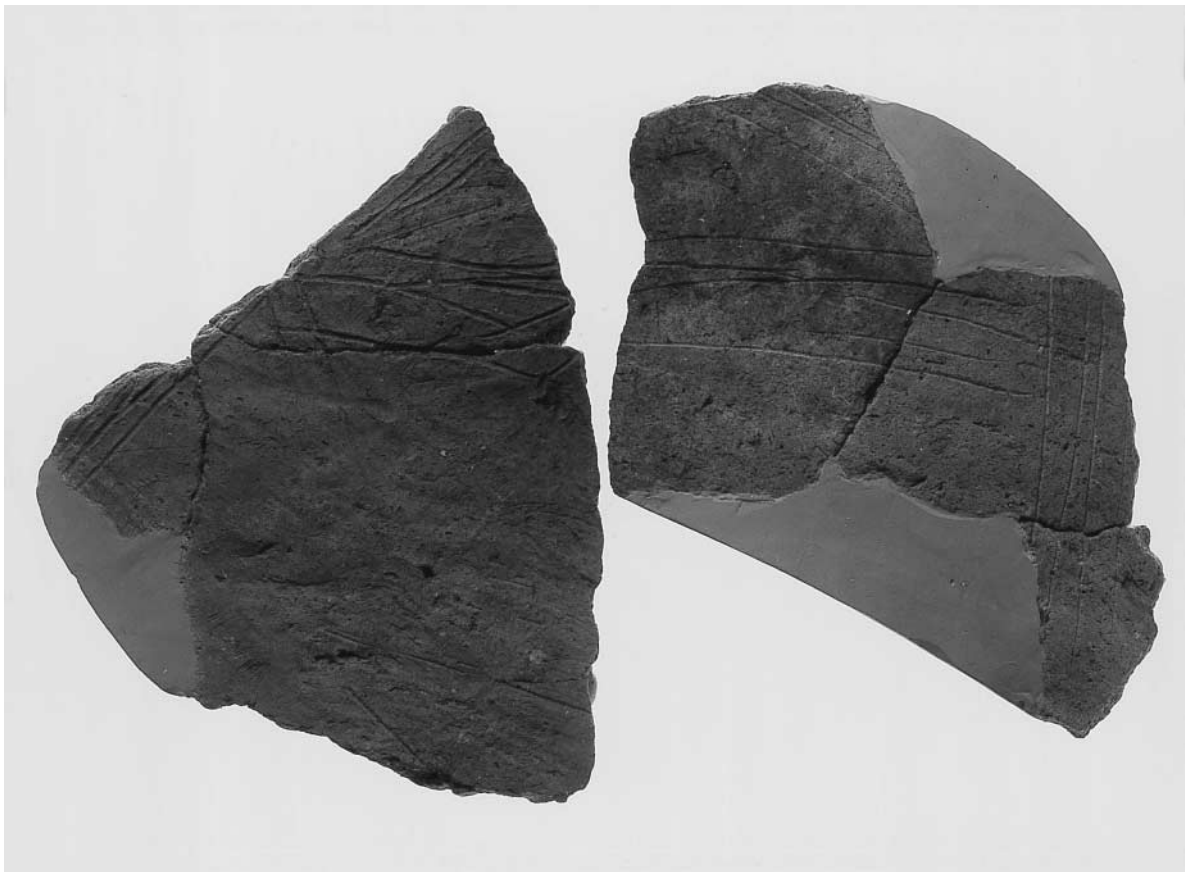
PL.51 50·17区石器 (69·54·71·55·72·70·73·74)



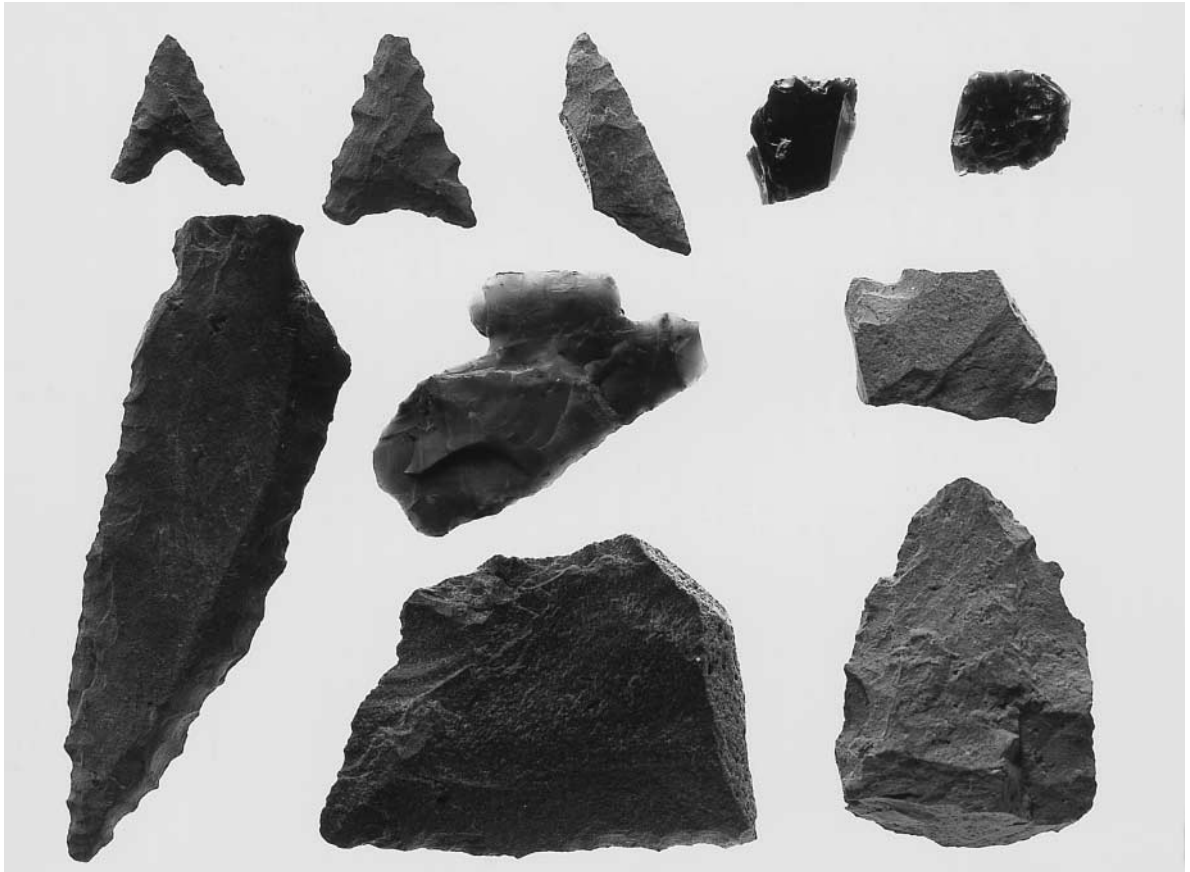
PL.52 17区集石



PL.53 36区 類土器 1 (80・82・79・83)



PL.54 36区 類土器 2



PL.55 36区石器 (140・142・141・148・149・134・135・147・136・133)



PL.56 36区集石 1



PL.57 36区集石 2



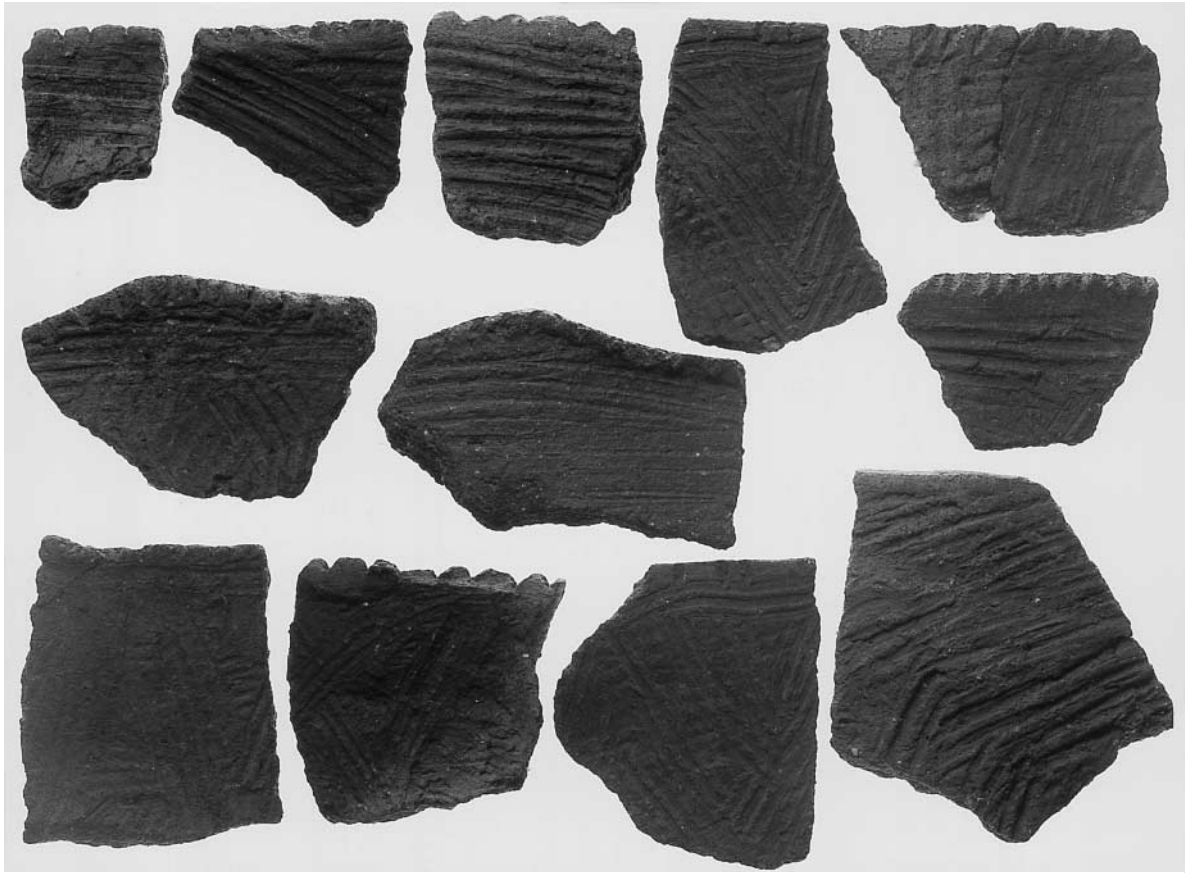
PL.58 5区焼成粘土塊 (159・160)



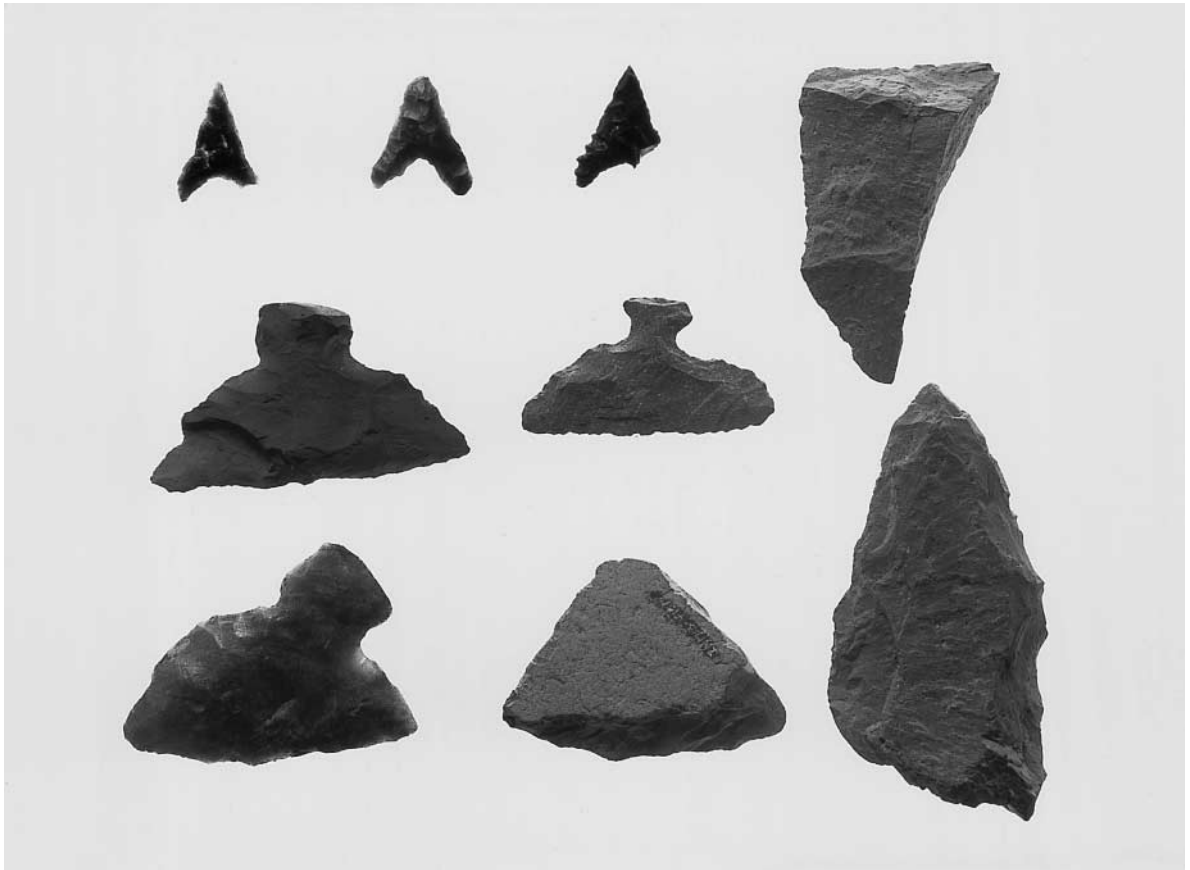
PL.59 10・11・13区 類土器 (189・182・185・180・187・197・175・173・178・199・196・202)



PL.60 類土器底部 (208・209・207・211・201・203・210・212)



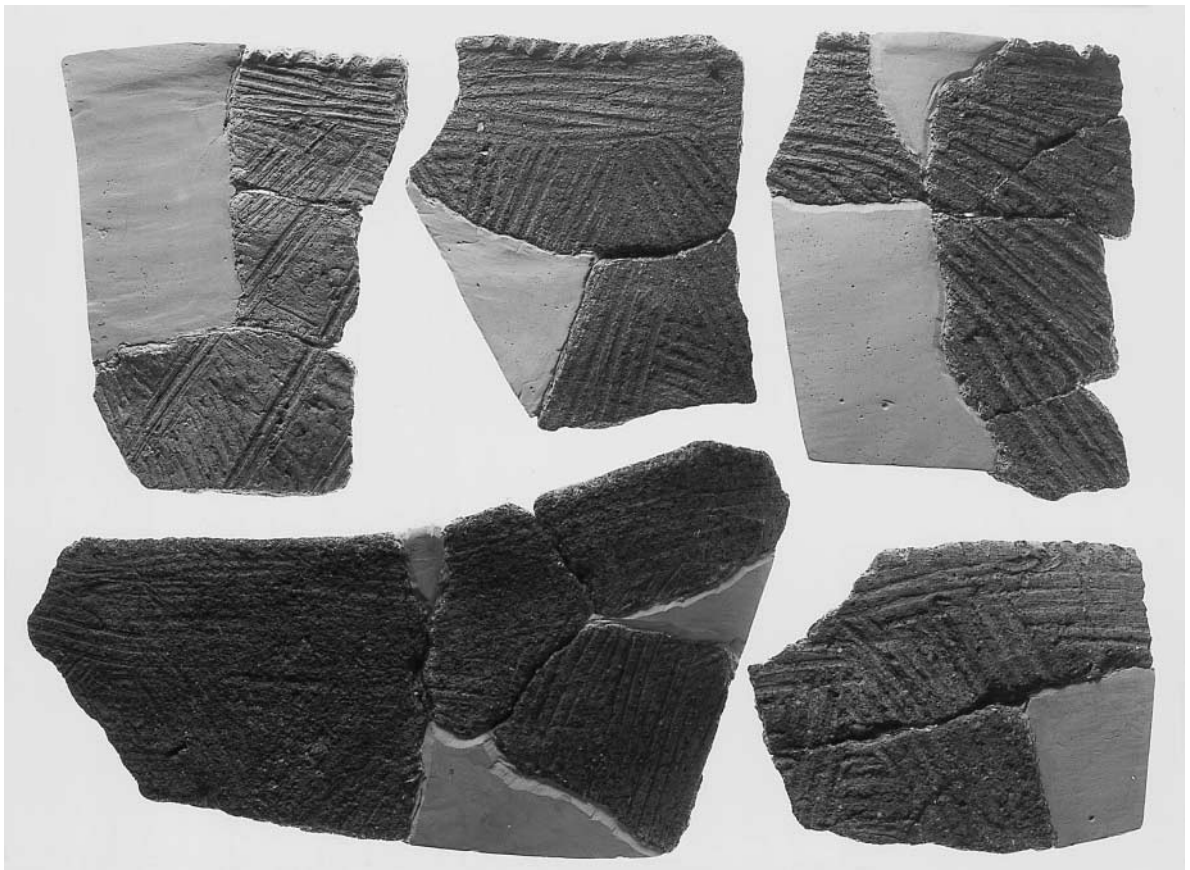
PL.61 11・13区 類土器 (190・182・193・191・165・168・188・164・172・192・195)



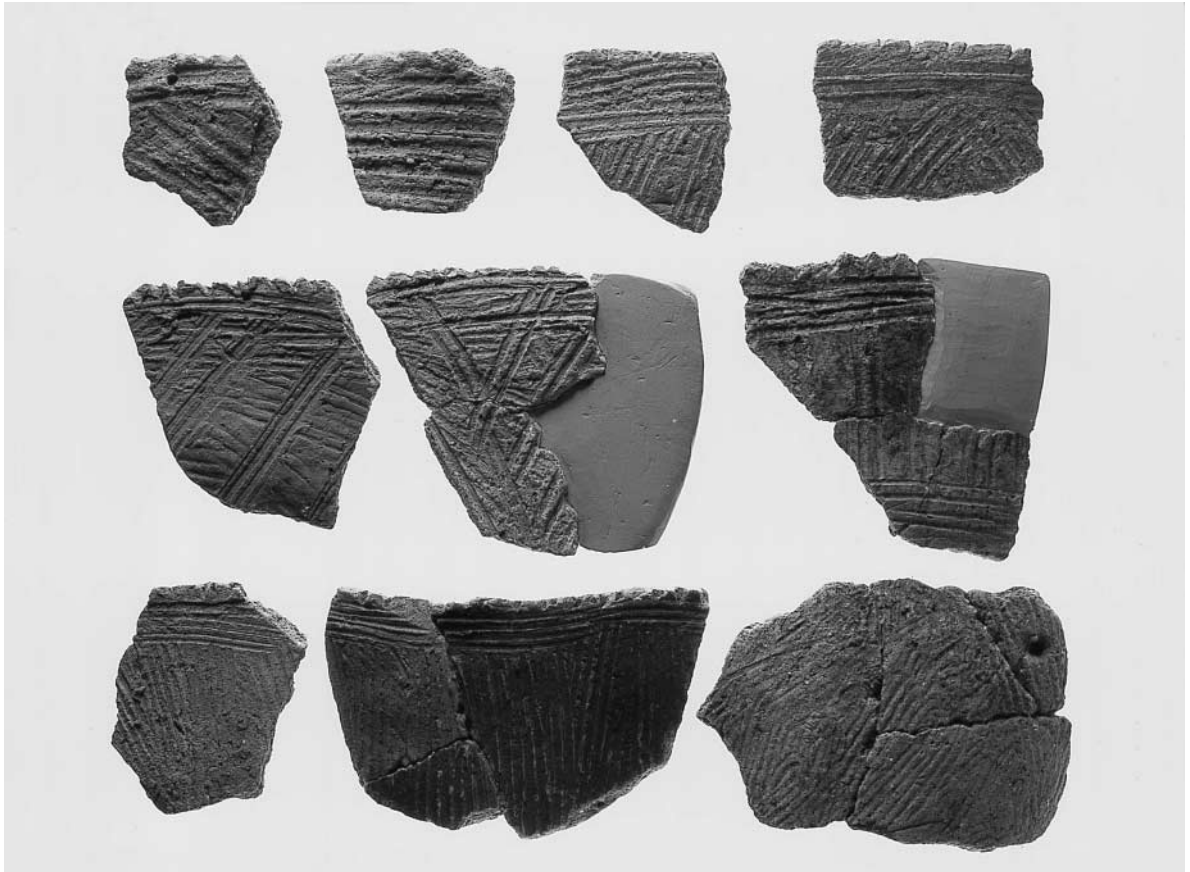
PL.62 11・13区石器 (220・218・219・223・225・226・224・221・222)



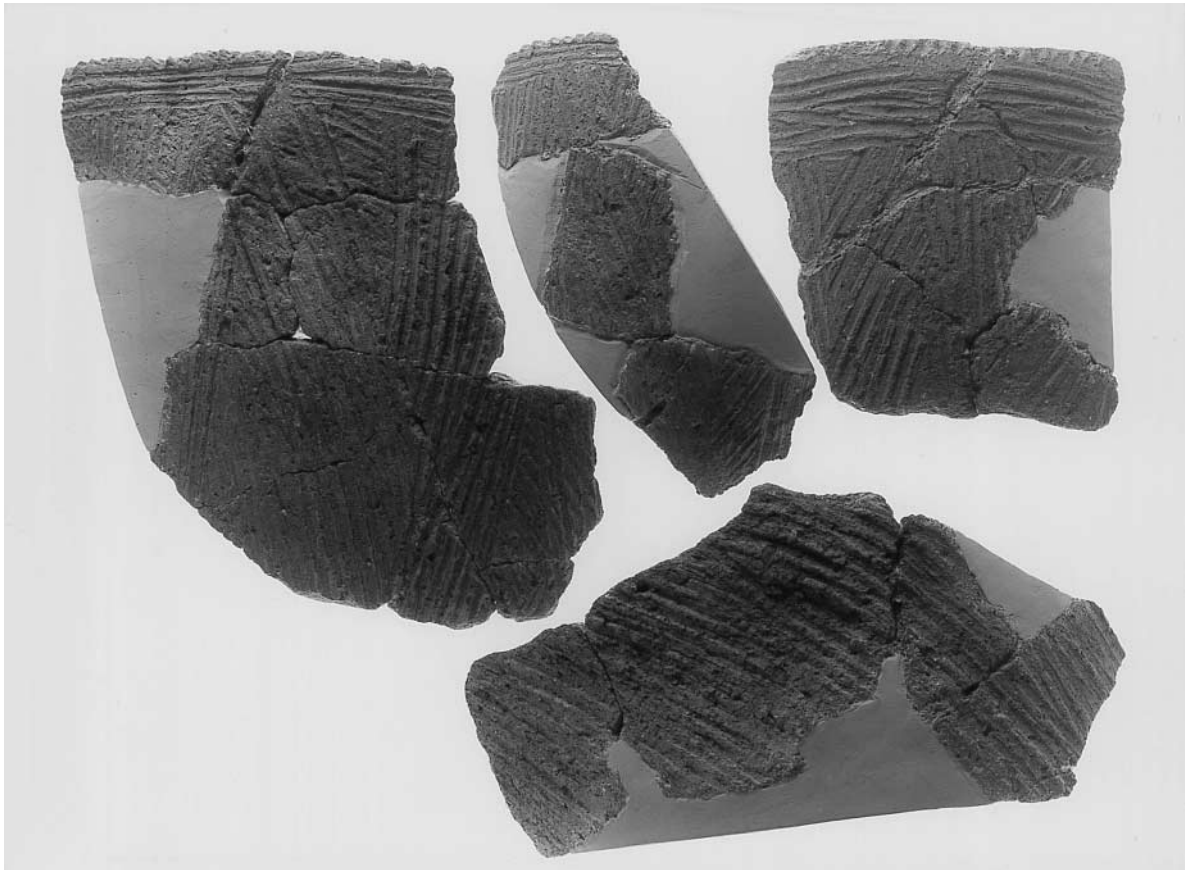
PL.63 11区 類土器 (161)



PL.64 11・13区 類土器 (170・169・198・162・167)



PL.65 10・11・13・32区 類土器 (182・183・184・186・174・176・234・194・171・200)



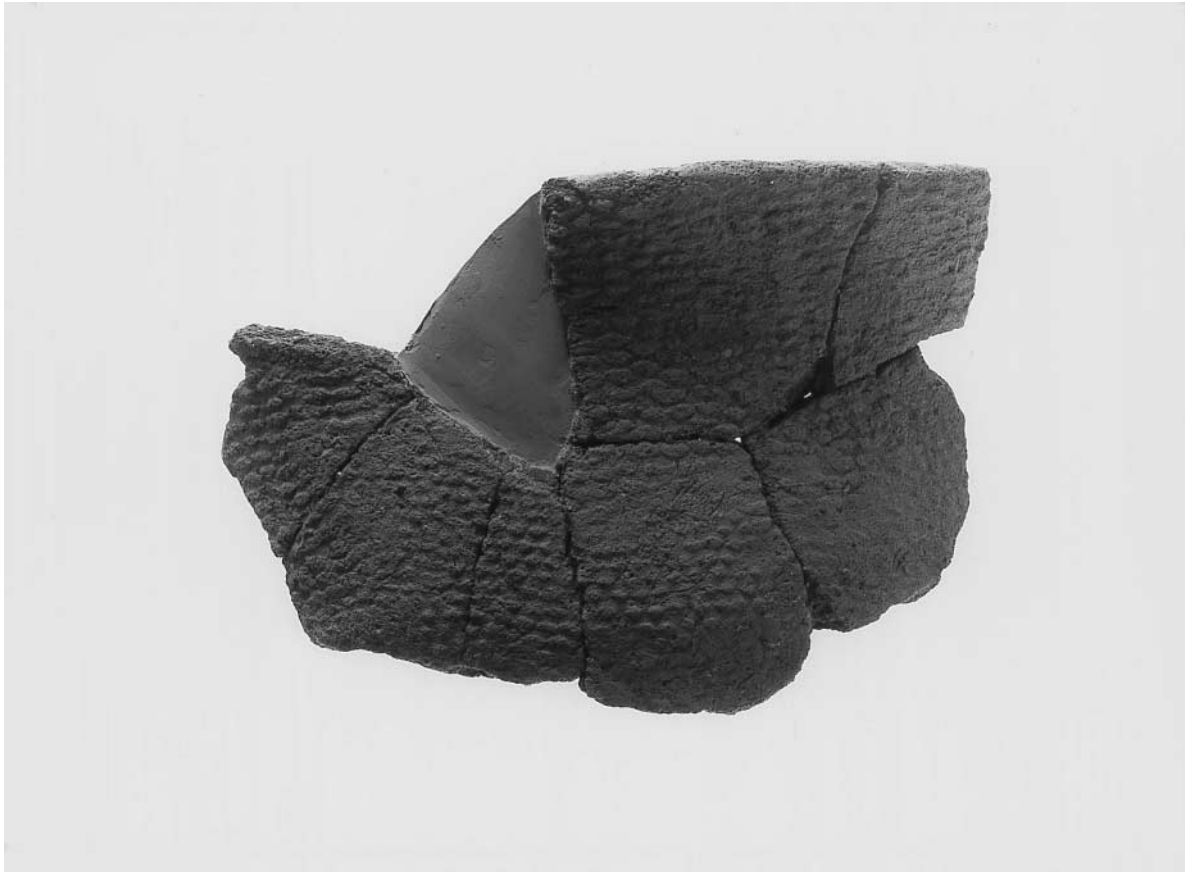
PL.66 13区 類土器 (163・165・197)



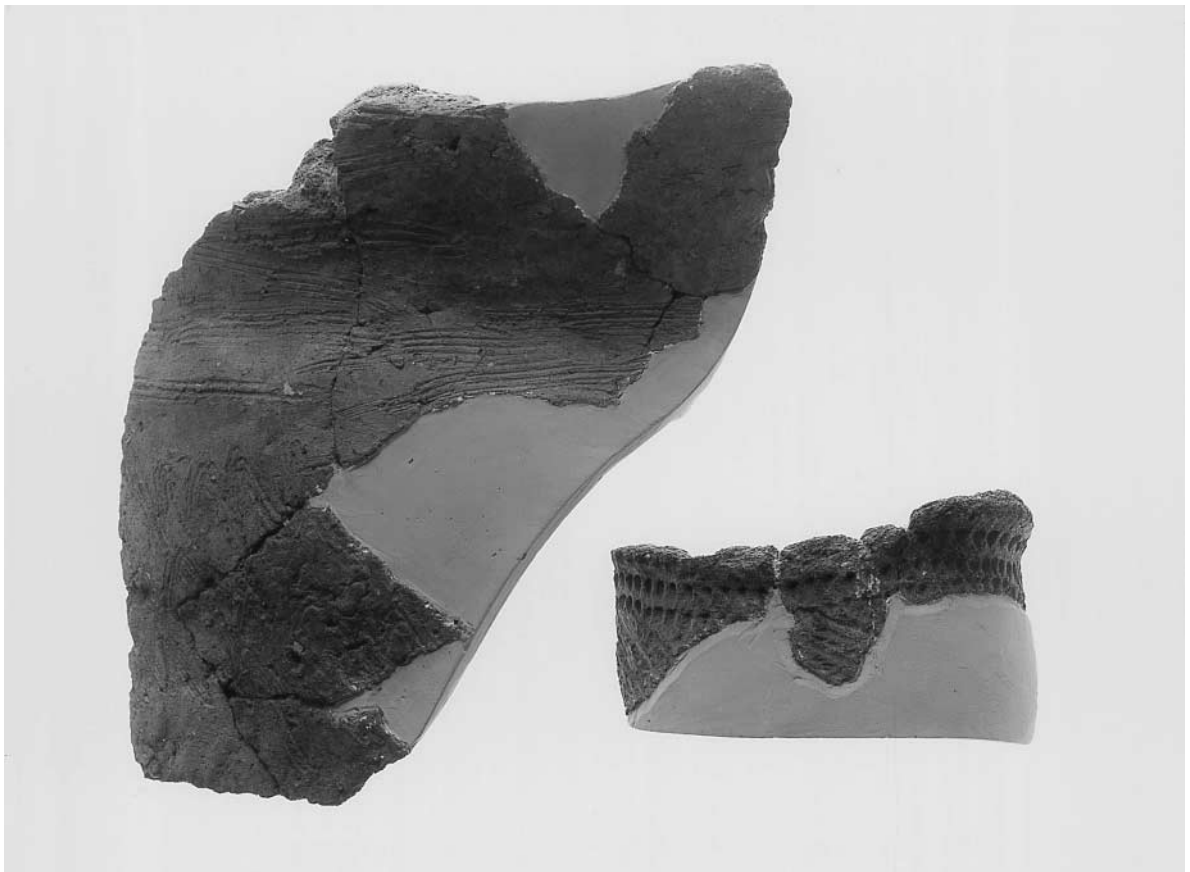
PL.67 類土器 1 (28)



PL.68 類土器 2 (230)



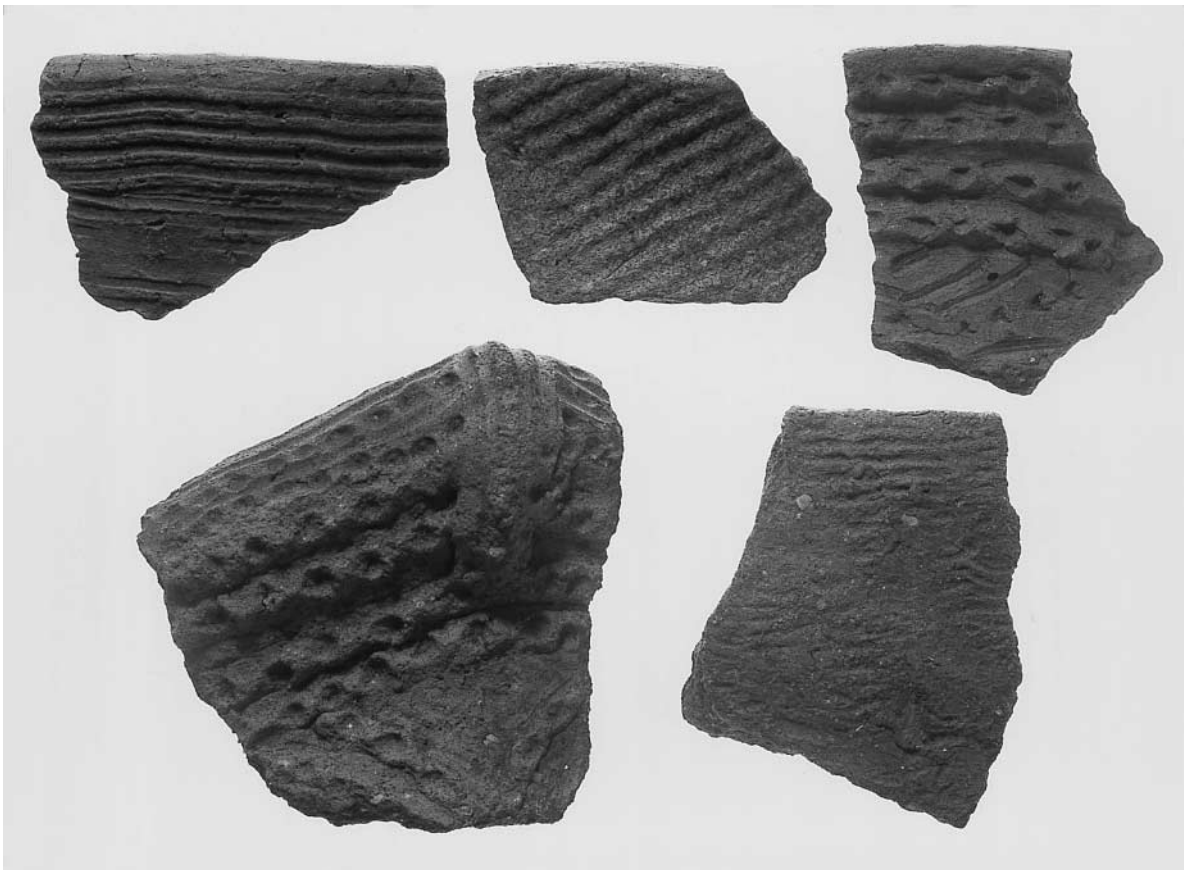
PL.69 類土器 3 (229)



PL.70 17区 類土器 (56・61)



PL.71 67区 類土器 (235)



PL.72 ・ 類土器 (228・232・233・227)



PL.73 類土器 1 (242・243)



PL.74 類土器 2 (240・246・241・244・245・238・239)



PL.75 · 類土器 (156 · 157 · 158 · 257 · 259 · 258 · 247)



PL.76 類土器 1 (249)



PL.77 類土器 2 (253・255・252・250)



PL.78 XI・XII類土器 (262・264)

8 区 付 編

石の本遺跡群 で報告した8区 層出土遺物のうち、掲載できなかった資料33点の追加報告である。器種・石材ともに、前回の報告と変わったところは無い。使用石材は、石の本遺跡群でも特に特徴的に使用された多孔質安山岩で、そのなかでも約8割を占める石質A類である。前回掲載した石器全点の観察表とあわせて利用できる。また、刃部磨製石斧片(3624)については、岡山大学稲田孝司先生から使用痕についてご教示をいただいた。先端の表側に使用による線条痕が刃こぼれ状の使用痕と共に観察され、石斧の使用を考える上で重要な視点ということから再録している。筆者の観察力の未熟さを感じる次第である。

掲載遺物の内訳は、二次加工剥片26点、石核4点、剥片3点である。剥片・二次加工剥片としたものの大部分が、折れた面を持つ(1~16)。二次加工にはバリエーションが多く、小ぶりの剥片に1、2枚程度の剥離を入れた程度のもの(1~5・8~10等)、石核と峻別が困難なもの(24・27~30)、異なる形態から別器種として分類可能なもの(12・18・21・22・23)などが含まれている。特に18・21・22は、石器の半分以上が折れて失われていると思われ、異なる器種として認識できそうである。23は両面加工を周辺に施しており、機能・形態ともに異なる。4、6は、折れている面を持つ剥片で大きさ、形状とも、この種のものが出土した石器の多数を占める。側面の折れが意図的か否かが、判断出来ないところである。折れている面が観察される石器は全体の4分の1に達するが、折れ面が2面以上数えられるものも存在する。複数折れ面を持っているものの中には、意図的な折断が含まれるかもしれないが、一度の衝撃で4片以上に複雑に折れた事例も接合資料にあり(実測図未掲載、石の本遺跡群 ・写真図版PL91・92参照)、2面以上折れていてもその全てが剥離時の衝撃によるものもあって、識別には注意を要する。折れ面を有する剥片は、その形状や折断による加工の可能性も決して無視できないことから、通常剥片としての図の掲載を行わなかった。明らかに偶発的な折れの場合を除き、それ以外のものは意図的と考えて図示してある。

周辺の同時期の遺跡で、微細剥離痕・使用痕にまで詳細に識別できる状況の資料の蓄積を待ち、再評価の機会と図の訂正を検討したい。

多孔質安山岩を利用している状況は、石の本遺跡群では点在して見られる(38区南・39区・50区)。その出土層位も 層中であるが、構成される遺物が全く異なり、Toolが1点のみの遺跡(38区南・39区)や剥片剥離作業を小規模に行っているものの石核等が残されていない遺跡(50区)とるようにバリエーションがある。このように多孔質安山岩の単独または主要な石器の石材としての利用は石の本遺跡群内で認められる。

その一方で、別冊に報告される54区・55区でも、 層中に異なる遺跡が各々検出されている。詳細は別冊の報告書で示すが、こちらは多孔質安山岩の利用に限ってみれば非常に客観的で、主要な石器群には利用されていない。一部で剥片剥離作業を行いつつも、目立つTool類が認められない。またAT上位で検出された遺跡からも多孔質安山岩が含まれている(54区・20区)が、こちらでの利用も主要な石器にはほとんど使用されていない。その後の縄文時代の遺物でも稀に見られるが、やはりその使用頻度は低そうである。少なくとも縄文時代早期でToolの利用は管見する限りごく一部である。

何れにせよ、8区を代表とする遺跡の評価は、多孔質安山岩が同時代の主体的な利用石材であったのか、原産地に近い故に特異な利用を示すのかが、大きな鍵を握っており、抽出された石器の評価に多く関わることであろう。

なお、調査区間同士の地点間接合作業も一部試みたが、多孔質安山岩でも、他の石材でもこれによる接合資料は得られなかったことを付記しておく。

参考文献

・熊本県文化財調査報告第178集1999「石の本遺跡群」熊本県教育委員会

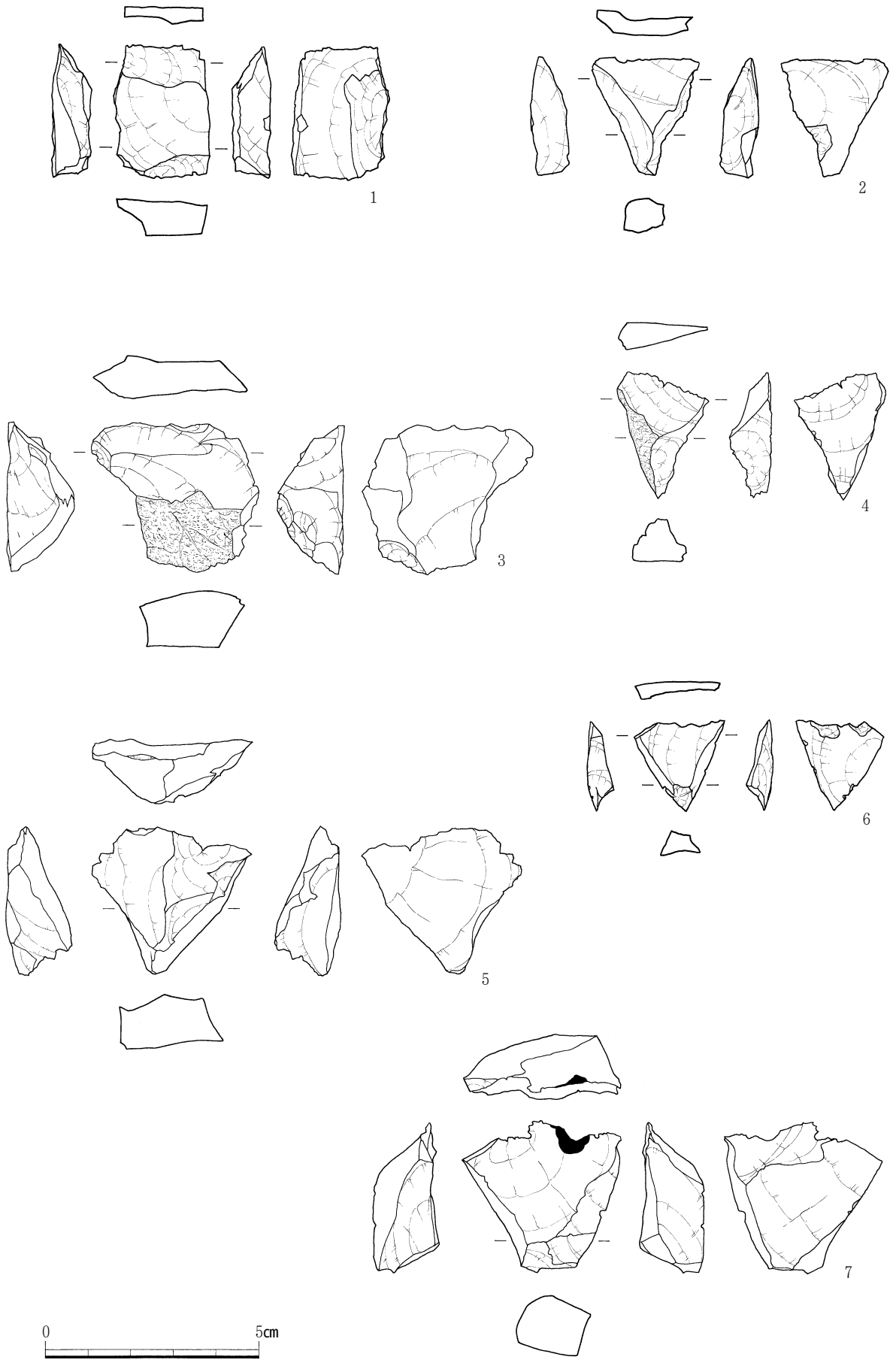


Fig. 1 8区出土石器实测图(1)

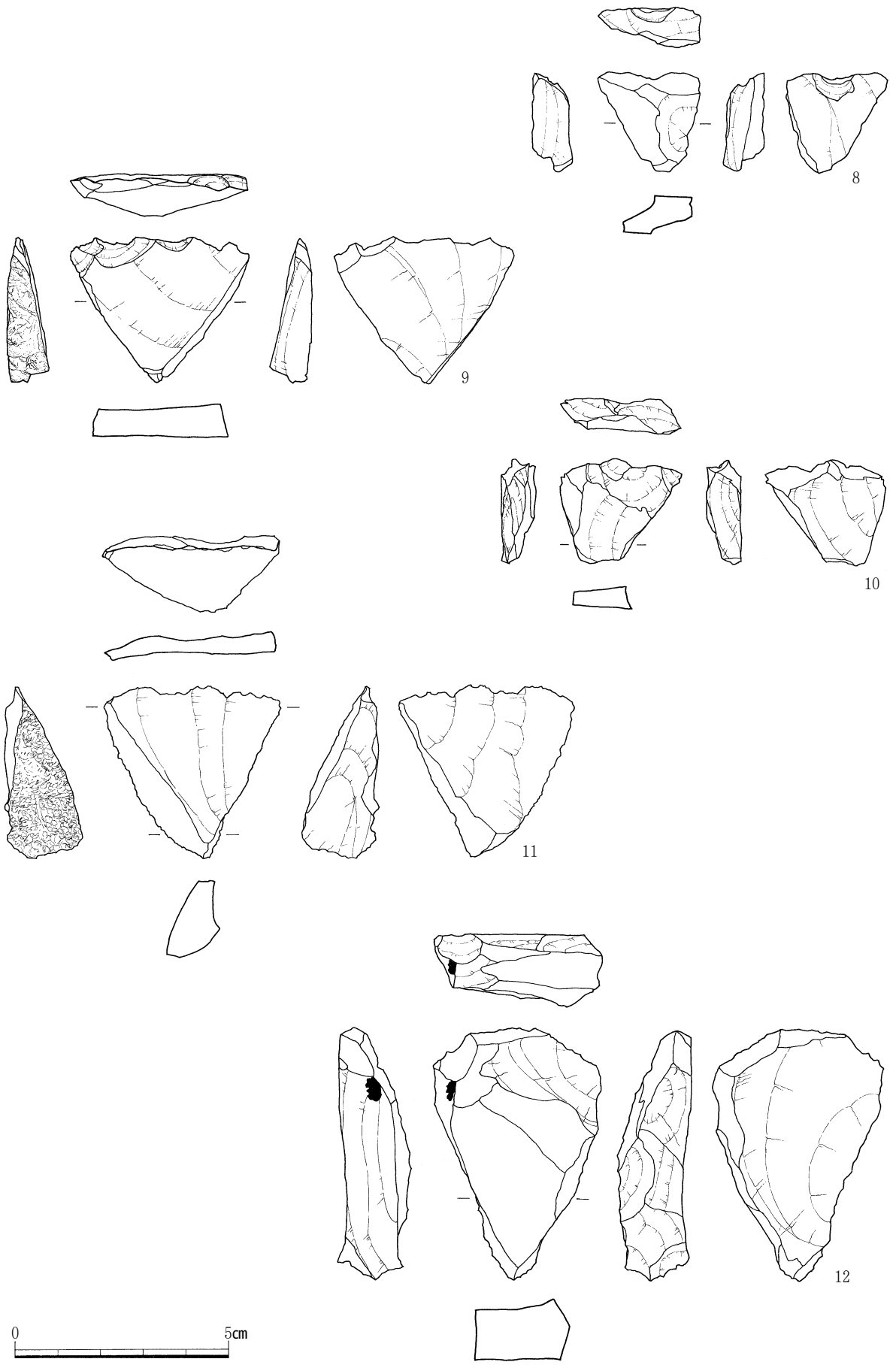


Fig. 2 8区出土石器实测图(2)



Fig. 3 8区出土石器实测图(3)

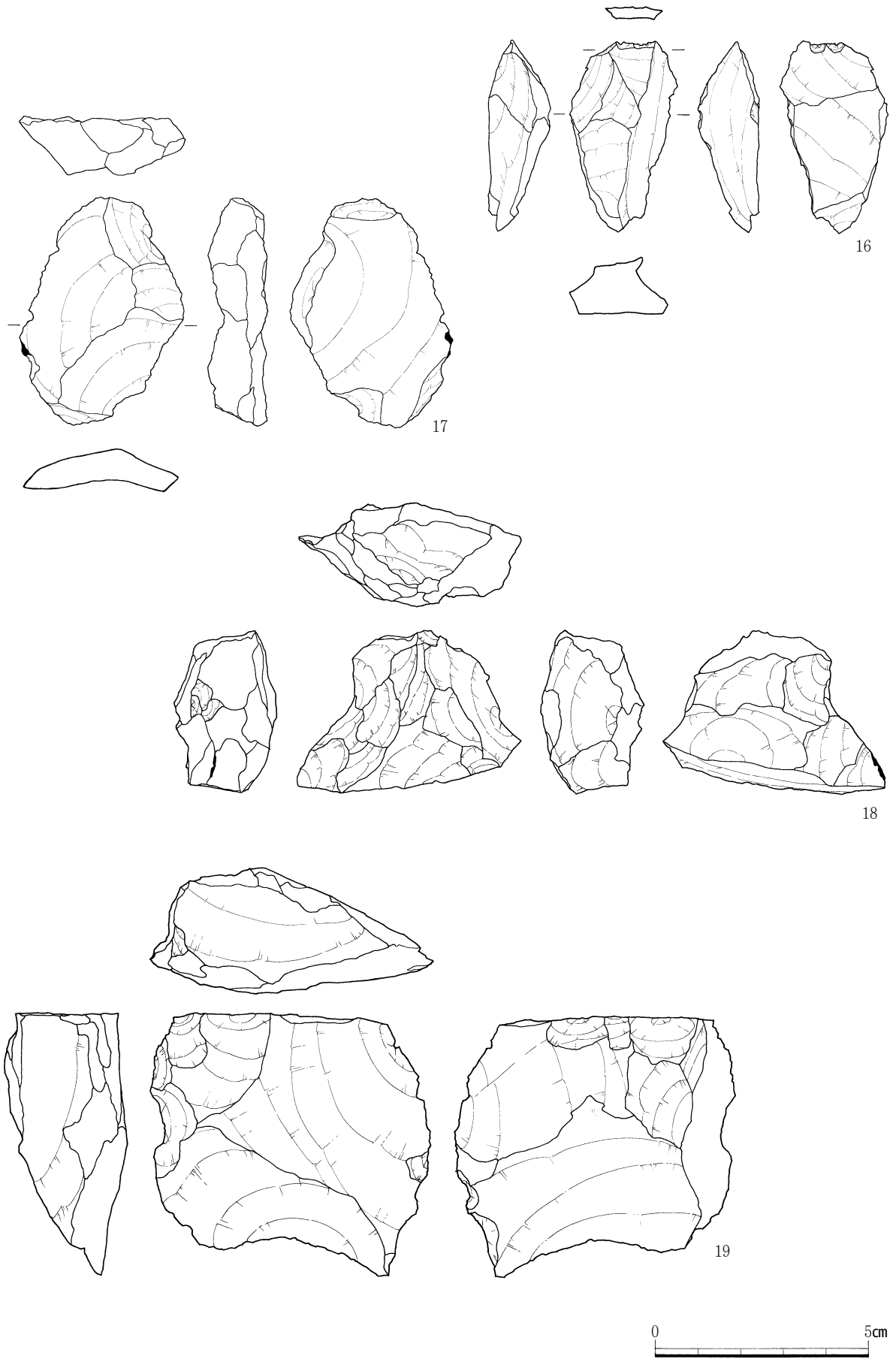


Fig. 4 8区出土石器实测图(4)

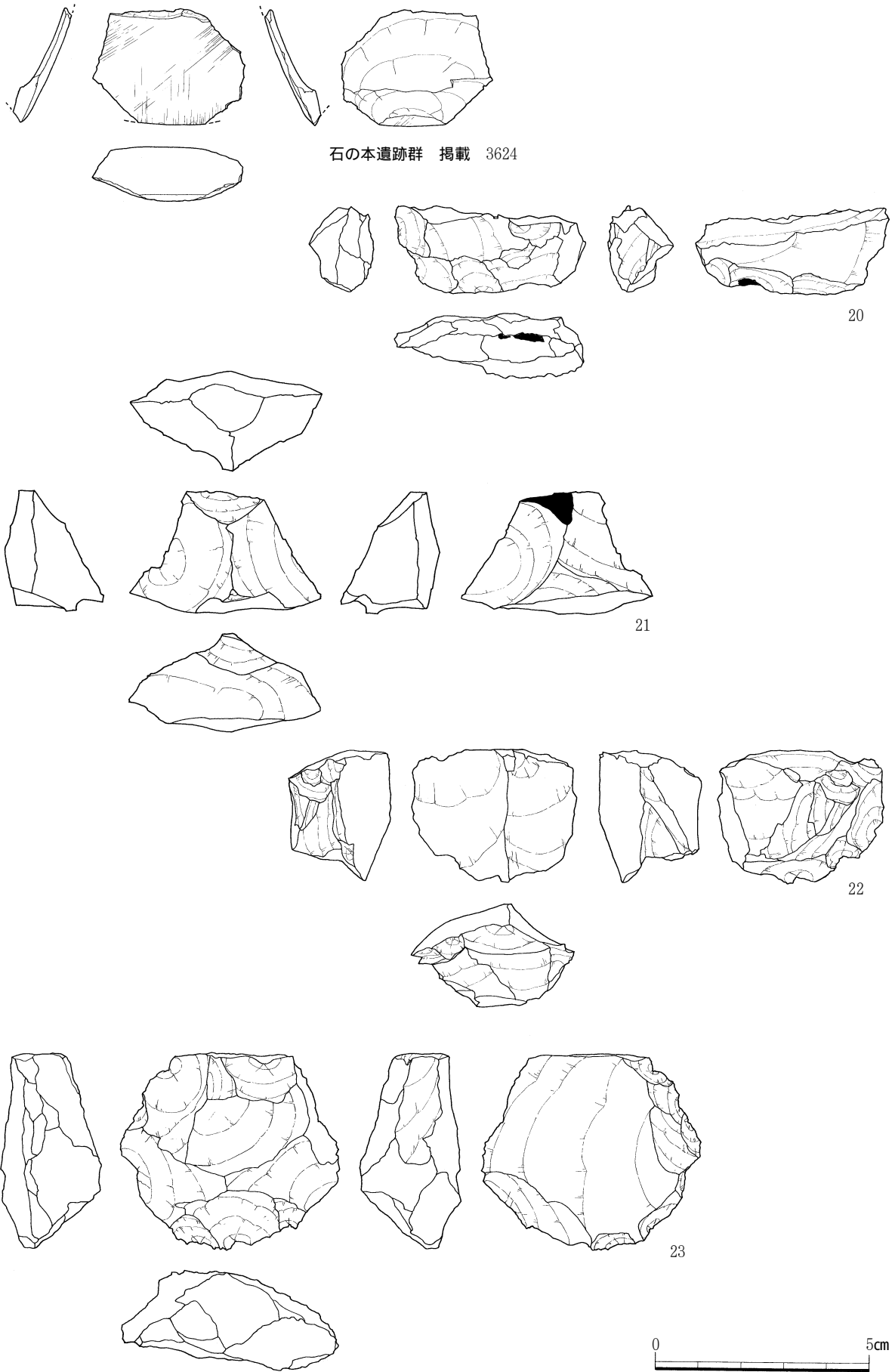


Fig. 5 8区出土石器実測図(5)

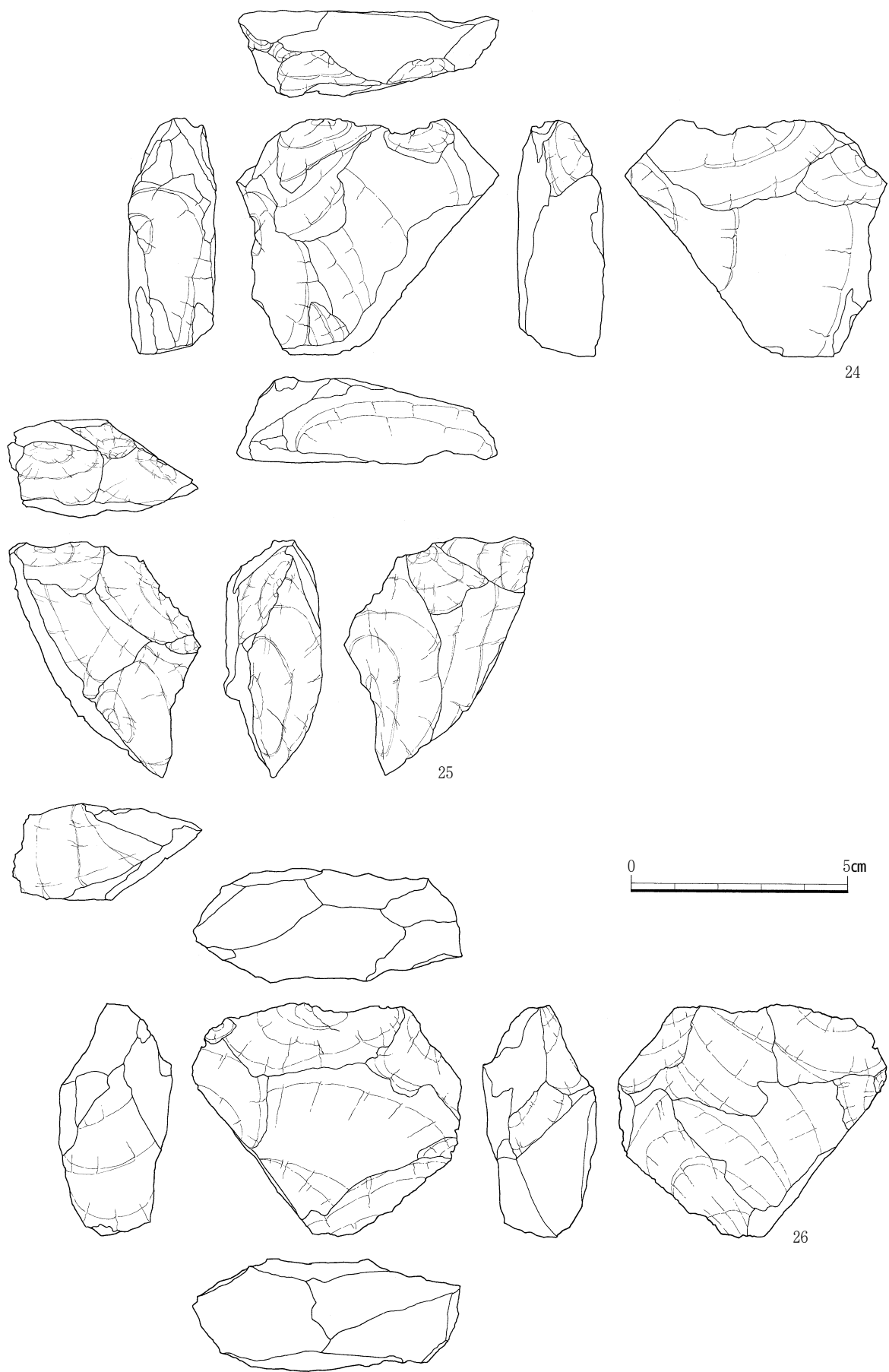


Fig. 6 8区出土石器实测图(6)

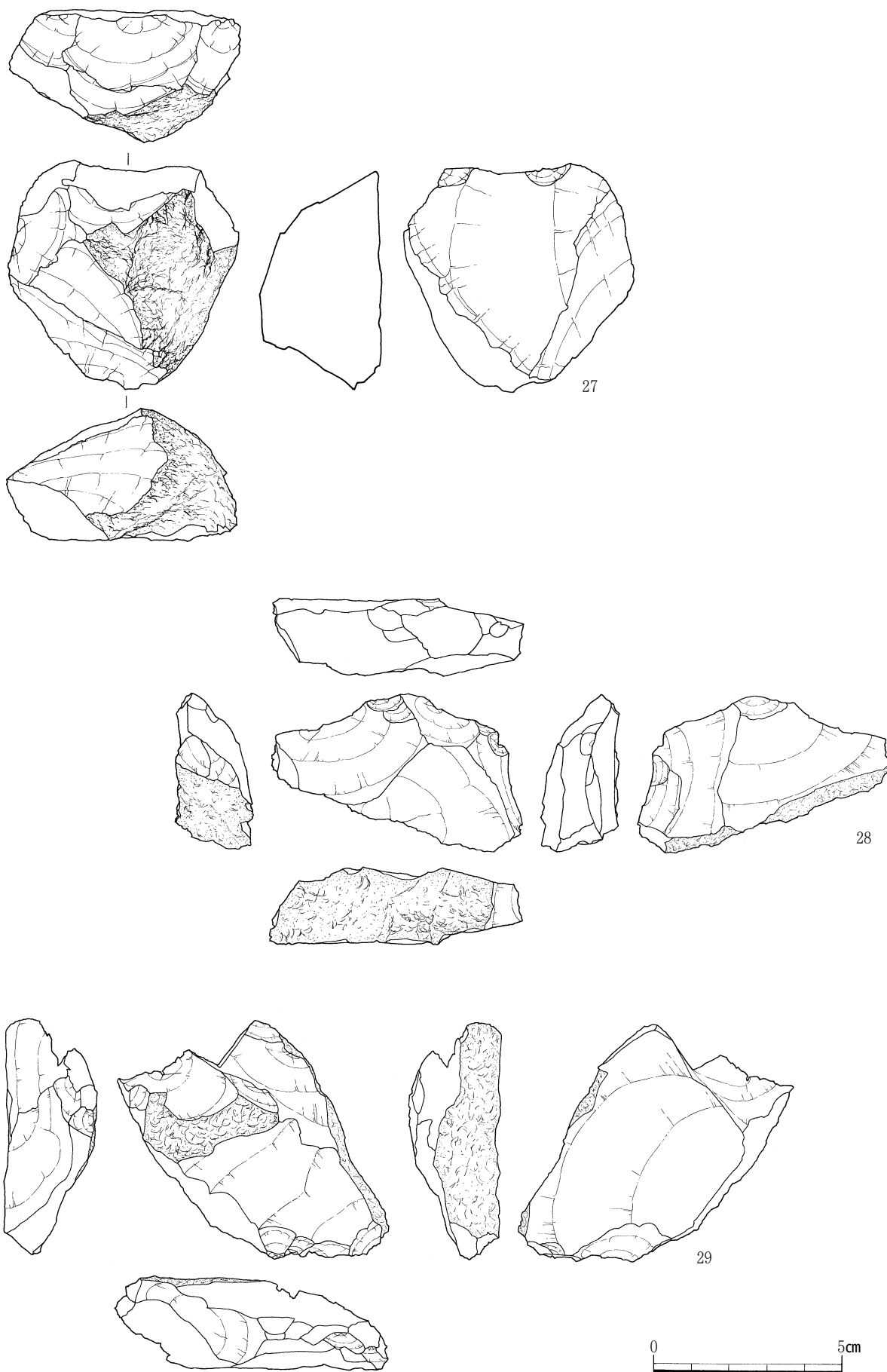


Fig. 7 8区出土石器实测图(7)

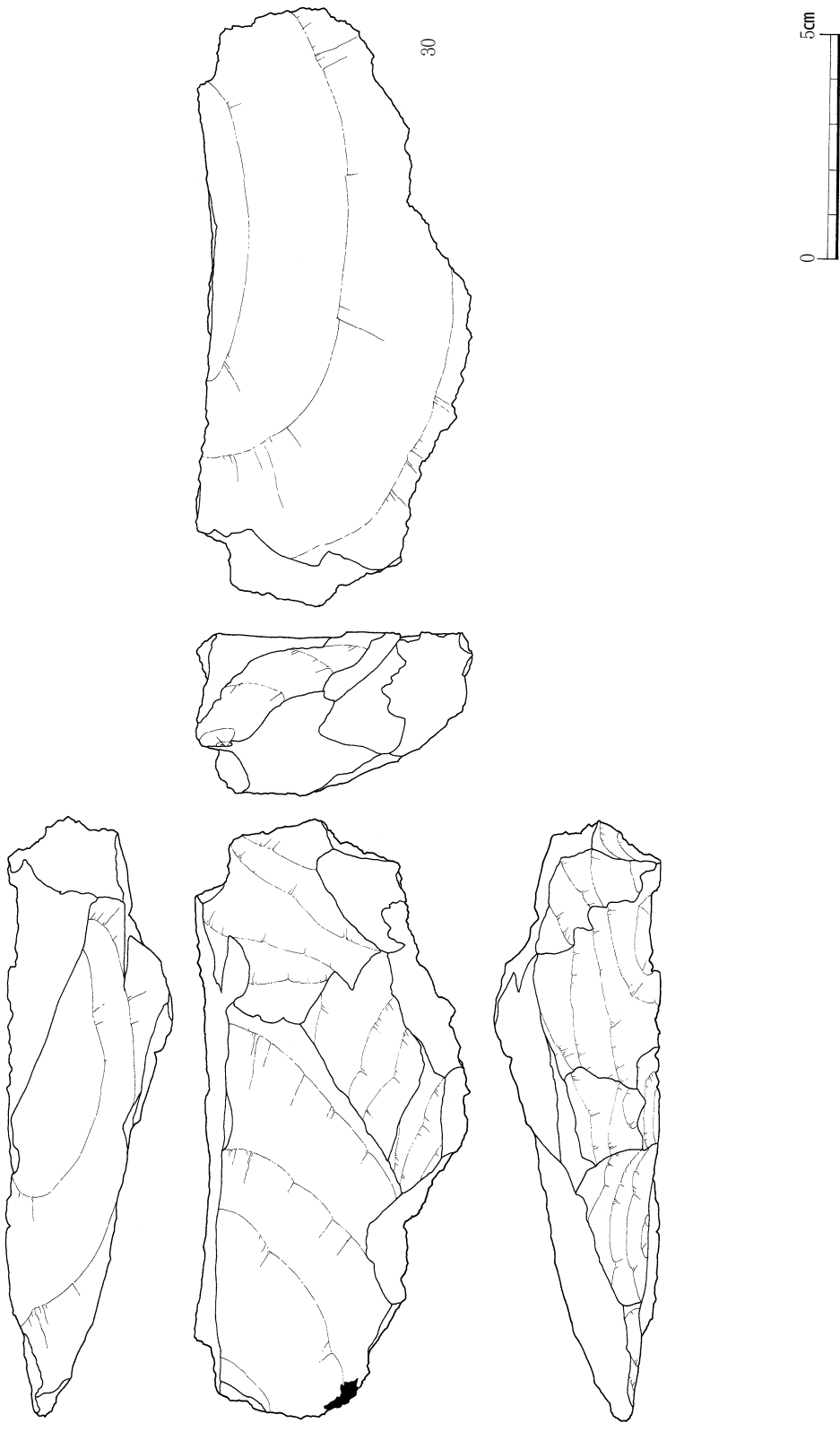


Fig. 8 8区出土石器实测图(8)

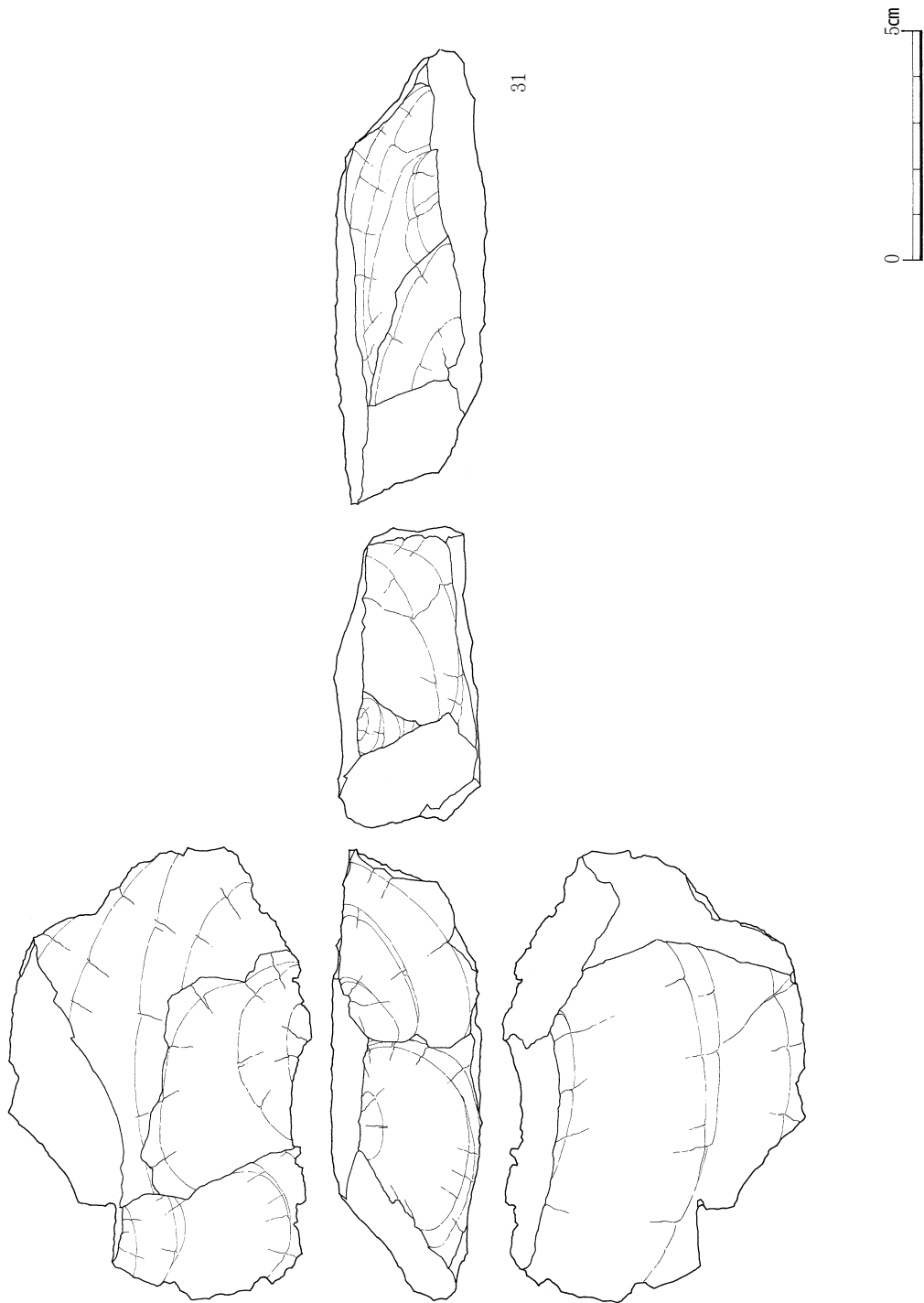


Fig. 9 8区出土石器实测图(9)

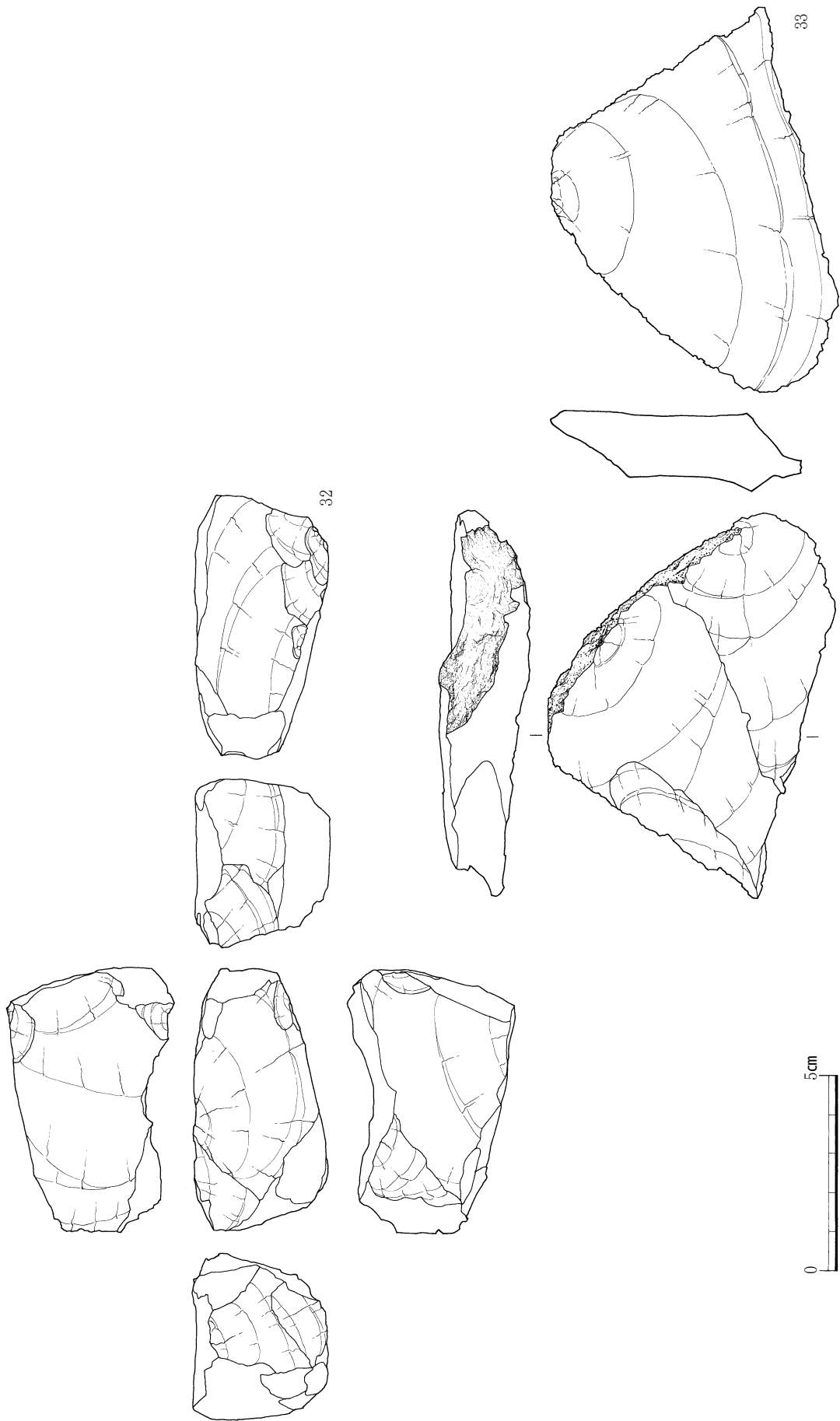


Fig.10 8区出土石器实测图(10)

Fig.	番号	取上げ番号	X座標	Y座標	標高	層位	器種	石材	石質	長さ	幅	厚み	重さ
1	1	1898	90.543	488.279	75.354	b	二次加工剥片	安山岩	A	3.03	2.18	0.78	7.7
	2	一括210				b	二次加工剥片	安山岩	A	2.55	2.09	0.83	4.4
	3	769	105.542	496.931	75.577	b	二次加工剥片	安山岩	A	3.22	2.56	1.34	17.4
	4	429	94.696	488.300	75.392	b	剥片	安山岩	A	2.11	1.97	0.98	3.6
	5	2844	92.890	492.430	75.380	a	二次加工剥片	安山岩	A	3.36	3.67	1.34	11.6
	6	一括225				b	剥片	安山岩	A	2.05	1.76	0.40	1.8
2	7	477	90.024	496.143	75.263	b	二次加工剥片	安山岩	A	3.44	3.30	1.37	13.7
	8	958	81.454	485.996	75.238	a	二次加工剥片	安山岩	A	1.91	2.30	0.90	4.2
	9	2164	92.523	487.701	75.393	b	二次加工剥片	安山岩	A	3.24	4.00	0.65	10.8
	10	794	100.366	501.04	75.419	a	二次加工剥片	安山岩	A	2.36	2.65	0.77	5.0
	11	812	99.629	487.754	75.649	a	二次加工剥片	安山岩	A	3.96	4.00	1.60	18.0
	12	1609	96.371	490.793	75.373	b	二次加工剥片	安山岩	A	5.82	3.89	1.52	36.3
3	13	2652	91.600	499.450	75.358		二次加工剥片	安山岩	A	3.96	3.66	1.29	18.0
	14	516	84.523	490.398	75.196	b	二次加工剥片	安山岩	A	2.53	7.10	1.66	41.5
	15	1657	86.197	496.039	75.097	b	二次加工剥片	安山岩	A	5.11	5.34	1.61	44.4
4	16	一括40					二次加工剥片	安山岩	A	4.34	2.24	1.23	12.0
	17	一括402				b	二次加工剥片	安山岩	A	3.58	3.95	0.90	23.3
	18	1255	85.621	484.131	75.367	b	二次加工剥片	安山岩	A	3.49	5.25	2.26	38.5
	19	844	90.675	489.475	75.335	b	二次加工剥片	安山岩	A	5.33	5.80	2.48	110.1
5	20	1920	90.927	480.782	75.434	b	二次加工剥片	安山岩	A	1.72	4.44	1.43	13.7
	21	1959	95.181	498.348	75.327	b	二次加工剥片	安山岩	A	2.49	4.42	2.27	17.1
	22	一括148				b	二次加工剥片	安山岩	A	3.08	3.76	2.32	25.6
	23	3446	96.550	506.770	75.278	a	二次加工剥片	安山岩	A	4.52	4.68	2.03	48.8
6	24	777	100.204	491.419	75.465	b	二次加工剥片	安山岩	A	5.61	5.62	2.00	67.1
	25	1682	88.831	494.315	75.217	b	石核A	安山岩	A	5.48	3.23	1.96	38.9
7	26	2009	88.314	488.152	75.332	b	石核A	安山岩	A	5.85	4.08	2.45	86.8
	27	一括413				b	二次加工剥片	安山岩	A	5.35	5.34	3.07	120.1
	28	555	86.281	494.771	75.167	b	二次加工剥片	安山岩	A	2.43	6.73	1.69	43.4
8	29	1946	111.824	471.959	75.360	b	二次加工剥片	安山岩	A	7.02	4.73	2.14	83.3
	30	1235	84.016	491.818	75.157	b	二次加工剥片	安山岩	A	12.08	5.75	3.38	266.7
9	31	1847	98.763	487.542	75.525	b	石核C	安山岩	A	2.25	4.87	8.68	223.1
	32	49	101.141	488.289	75.433	b	石核C	安山岩	A	3.13	5.65	2.99	117.7
10	95	98.828	495.129	75.429	b	剥片	安山岩	A	6.46	8.94	2.09	125.8	

Tab.1 8区石器観察表

あ と が き

石の本遺跡群の調査終了から、4年が経とうとしています。調査期間を含めると7年間費やしたことになります。異なる時代ごとの分冊計画は、決して良いとは考えていません。その土地の人々の残した足跡を、どうして寸断して記録保存することが許されるでしょう。効率的な報告書の刊行が指摘される中での苦渋の選択でした。

既に報告された報告書では様々なご指摘をいただきました。それを参考にしながら、本来ありえない一つの遺跡報告の繕いを本書でしてきた次第です。どうか個々の報告書のみならず、全5冊が刊行された暁には一通り見ていただいて、そして初めて「これが石の本遺跡群の様相だったのか。」と思ってくれれば幸いです。

7年間となると早いもので、発掘調査から整理報告にまで関わっていただいた人のなかには、既に故人となった方もおられます。本当に多くの方々が力一杯頑張ってくれました。遺物の実測委託が恒常的になるなかで、可能なかぎり作業に来てくれた方々に遺物実測を無理にお願いしてしまいました。発掘作業のみならず、そうした整理作業にまで従事し公私ともに支えてくれた方々、本当にありがとうございました。最後に、お名前と作業して頂いた年度、主な作業内容を付したいと思います。

宮田 日文 (H6～H11、現場作業、現場実測、土器接合、礫接合、整理全般調整)

小山 正子 (H6～、現場作業、現場実測、土器接合、拓本、石器接合、整理全般調整)

塚本 博子 (H6～H11、現場作業、現場実測、土器接合、拓本、遺構図作成、整理全般調整)

平井 和子 (H8、H11、土器接合)

松本 直枝 (H8、土器接合)

山田 友子 (H8～、土器接合、石器実測、土器実測)

永山 邦子 (H7～H11、現場作業、現場実測、土器接合、遺構図作成)

木村 雅子 (H7～H11、現場作業、土器接合、拓本、石器接合)

貞苅美津子 (H7～、現場作業、現場実測、土器接合、石器実測、土器実測、拓本)

古閑 満代 (H7～H8、現場作業、土器接合)

青山 玲子 (H7～H10、現場作業、現場実測、土器接合)

内藤 直美 (H6～H10、現場作業、現場実測、土器接合)

中島ひろみ (H7～H10、現場作業、現場実測、土器接合)

金子美代子 (H7～H11、現場作業、現場実測、土器接合、拓本、石器接合)

浪床せい子 (H7～H8、現場作業、現場実測、土器接合)

野崎千枝子 (H6～H11、現場作業、現場実測、土器接合、礫接合、遺構図作成)

濱崎 清子 (H7～、現場作業、現場実測、土器接合、石器実測、トレース、構成)

木場 敬子 (H8、土器接合)

宮崎 典子 (H7～、現場作業、現場実測、土器接合、石器接合、土器実測、石器実測)

磯崎 智子 (H7～H8、現場作業、現場実測、土器接合)

片山アツ子 (H6～H10、現場作業、土器接合)

渡辺いわず (H8～、現場作業、現場実測、土器接合、石器接合、石器実測、土器実測)

古閑 知子 (H7～H8、H11、現場作業、現場実測、土器接合)

田中知恵美 (H6～H8、現場作業、現場実測、土器接合)
富田 知子 (H6～H8、現場作業、現場実測、土器接合)
平川恵理子 (H6～H8、現場作業、現場実測、土器接合)
津留 雅子 (H8～H10、現場作業、現場実測、土器実測、石器実測)
森崎 潔子 (H8～、石器接合、データ入力、データ編集、石器実測)
福山由美子 (H8～H11、石器接合、データ入力、石器実測)
田崎よし子 (H8～H11、石器接合、データ入力、石器実測)
井島 秀子 (H7～H8、現場作業、現場実測、土器接合)
澤田まり子 (H8、現場作業、土器接合)
原 かおる (H7～H8、H11、土器接合)
福島 敬子 (H7～、現場作業、現場実測、土器接合、石器実測、土器実測)
松本 裕子 (H7～、現場作業、現場実測、土器接合、石器実測、土器実測)
河原 京子 (H9～、土器接合、石器実測、遺構図作成、トレース、構成)
佐藤 淳子 (H9～、土器接合、石器実測、遺構図作成、トレース、構成)
井上 裕美 (H7～、現場作業、現場実測、土器接合、石器接合、石器実測、土器実測)

(順不同・敬称略)

報 告 書 抄 録

ふりがな	いしのもといせきぐん							
書名	石の本遺跡群							
副書名	第54回国民体育大会秋季主会場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	熊本県文化財調査報告書							
シリーズ番号	194集							
編集者名	池田朋生							
編集機関	熊本県教育委員会							
所在地	〒862 - 0950 熊本県熊本市水前寺 6 - 18 - 1							
発行年月日	2001年 3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査面積	調 査 原 因
		市町村	遺跡番号					
いしのもといせきぐん 石の本遺跡群	くまもとけん 熊本県	43201	121	32 ° 50	130 ° 48	940510 ~	13,549,600	国体主会場建設
	くまもとし 熊本市 ひらやままち 平山町 あざいしのもと 字石の本 あざやまいちのくち 字山一の口 あざつばさき 字鋳先							
所収遺跡名	種 別	主 な 時 代		主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項
石の本遺跡群	集落	縄文時代早期		焼土坑 集石遺構		甕 A 式 玦状耳飾り		甕 A 式の完形資料

熊本県文化財調査報告 第194集

石の本遺跡群

平成 13 年 3 月 31 日

編集 熊本県教育委員会
発行 〒862 - 0950 熊本市水前寺 6 丁目18番 1 号

印刷 白木メディア株式会社
〒862 - 0976 熊本市九品寺 5 丁目 9 番35号

